

久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2) 西ノ上遺跡・上郷A遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

2004

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2) 西ノ上遺跡・上郷A遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

2004

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



久々戸遺跡 2号掘立柱建物漆器出土状況



中棚Ⅱ遺跡 調査区全景（南から）



西ノ上遺跡 調査区全景（南西から）



上郷A遺跡 調査区全景（東から）

序

首都圏の水源として建設が進む八ッ場ダムの建設に伴い、平成14年および15年度に調査を行いました長野原町の久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・西ノ上遺跡および吾妻町所在の上郷A遺跡の発掘調査報告書がこのたび刊行することとなりました。

これらの遺跡では天明3年の浅間山噴火に伴い発生した泥流によって埋没した当時の畑や建物跡、さらには縄文時代終末期の遺物などが発見されました。また上郷A遺跡では陥し穴群が発見され、当時の土地利用の一端を窺わせています。

これら4遺跡については、平成16年1月より整理作業を実施し、このたび刊行の運びとなりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会、群馬県教育委員会並びに地元関係者の方々から種々、ご指導を賜りました。今回、本報告書を上梓するに際し、関係者のみなさまに心より感謝を表し、併せて本報告書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で広く活用されることを願い序といたします。

平成17年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴い事前調査された久々戸遺跡、中棚Ⅱ遺跡、西ノ上遺跡、上郷A遺跡の発掘調査報告書である。久々戸遺跡は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第240集で報告の長野原久々戸遺跡と調査区が隣接する同一遺跡であるが、平成14年3月に遺跡名変更が行われたため遺跡名称が異なる。また、同第319集で報告の久々戸遺跡と同一遺跡である。中棚Ⅱ遺跡も同第319集で報告された中棚Ⅱ遺跡と同一遺跡である。

2. 久々戸遺跡の所在地は群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字久々戸1327-14、1328-2、1330、1331、乙1335、甲1336、1336-3、1336-4、1336-5、1336-6、1336-10、1336-11、1336-12、甲1342、中棚Ⅱ遺跡の所在地は群馬県吾妻郡長野原町大字林228-1、229-1、230-1、230-2、西ノ上遺跡の所在地は群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯337-1、340-1、341、343-1、343-2、344-1、344-7、上郷A遺跡の所在地は群馬県吾妻郡吾妻町大字三島字武田井6610、6612、6613、6614、6615、6618、6624である。

3. 各遺跡の発掘調査は、国土交通省の委託を受けた、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査期間

久々戸遺跡 平成15年4月1日～平成15年6月10日

中棚Ⅱ遺跡 平成15年5月12日～平成15年6月10日

西ノ上遺跡 平成14年6月3日～平成14年8月30日

上郷A遺跡 平成15年6月7日～平成15年6月30日

5. 発掘調査組織は以下の通りである。

(1) 発掘調査担当者

久々戸遺跡 主任調査研究員 阿久津聡 調査研究員 石田真

中棚Ⅱ遺跡 専門員 小野和之 瀧川仲男

西ノ上遺跡 専門員 池田政志 調査研究員 石田真

上郷A遺跡 専門員 杉山秀宏 篠原正洋 主任調査研究員 石川雅俊

(2) 事務担当者

平成14年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田豊 事業局長 神保侑史 八ッ場ダム調査事務所長 水田稔
調査研究部長 津金澤吉茂 調査研究課長 下城正 庶務係長 野口富太郎 主事 矢嶋知恵子

平成15年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史 八ッ場ダム調査事務所長 水田稔
調査研究部長 津金澤吉茂 調査研究課長 斎藤和之 庶務係長 野口富太郎 主事 丸山知恵子

6. 整理期間は、平成16年1月1日～平成16年3月31日である。

7. 整理組織は以下の通りである。

(1) 整理担当者

専門員 小野和之 池田政志 主任調査研究員 石川雅俊 調査研究員 石田真

(2) 事務担当者

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史 八ッ場ダム調査事務所長 水田稔
調査研究部長 津金澤吉茂 調査研究課長 斎藤和之 庶務係長 野口富太郎 主事 丸山知恵子

(3)整理補助

市村富美江 片所アサ子 金子幸子 金子典子 加辺健太郎 篠原信子 篠原了子 清水鏡子
竹淵勝子 田村友紀子 角田千枝子 富澤てる子 樋田すみ子 樋田祐美子 丸山里美 水出礼子
武藤裕子 山本富美枝 吉田豊子

8. 本書作成担当

編集 小野和之 池田政志 石川雅俊 石田真
執筆 斎藤和之 序章第1節
小野和之、瀧川仲男 序章第2節(2)、第2章
池田政志 序章第2節(3)・第3節、第3章
石川雅俊 序章第2節(4)・第4節、第4章
石田真 序章第2節(1)、第1章(第3節(9)を除く)
植崎修一郎 第1章第3節(9)
株式会社パレオ・ラボ 第1章第5節
株式会社古環境研究所 第4章第4節

遺物観察 大西雅広 小野和之 石川雅俊 石田真

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

保存処理 関邦一 土橋まり子 横倉知子 小材浩一 大野容子

機械実測 富沢スミ江 伊東博子 岸弘子 廣津真希子

9. 発掘調査及び整理事業での委託関係

掘削請負 株式会社歴史の杜

遺構測量及び空中写真 株式会社測研

自然科学分析 株式会社パレオ・ラボ、株式会社古環境研究所

遺構全体図デジタル編集 株式会社測研

10. 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関・諸氏から貴重な御教示や御指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。

国土交通省関東地方建設局ハツ場ダム工事事務所、群馬県土木部特定ダム対策課、群馬県ハツ場ダム水源地域対策事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会、富田孝彦、豊田久男、丸橋幸一

凡 例

1. 平成14年3月、長野原町の遺跡名称の変更がなされた。その結果、本書の中で該当するのは、「長野原久々戸遺跡」→「久々戸遺跡」、「林中棚Ⅱ遺跡」→「中棚Ⅱ遺跡」である。
2. 遺構図及び遺物図には該当個所に縮率を掲載しているのので、それぞれ図中で確認頂きたい。
写真図版中の遺物の縮率は概ね遺物実測図と同縮尺とした。
3. 畑及び平坦面の面積計測は、縮率1:100及び1:40の平面図を原則として用い、プランメーターで3回計測し、その平均値を示した。また、山間地の傾斜畑であることを考慮し、傾斜角度から斜面積も算出した。算出にあたって畑の範囲は一部推定により確定したものが含まれる。
4. 遺物観察表では、全体を計測できず推定によるものは（ ）で表した。土器・陶磁器類の色調は、農林水産技術会議事務局監修／（財）日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』による。
5. 第1章の土層断面図には原則として、As-A軽石（天明三年浅間山噴火に伴う降下テフラ）は黒塗で、天明泥流は網掛けで表現し、土層注記はしていない。
第3章中での土層番号は原則として基本土層と共通であり、基本土層と異なる層についてのみ注記を記した。
6. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
7. 畑の断面図では、補助的に△や▼を用いて畝の単位を示した。
8. 本書の中では、史料に基づく旧暦を漢数字で、新暦に換算したものを算用数字で記している。
9. 遺構名称は原則的に調査時の遺構名称を用いている。しかし整理過程において、既報告分との整合を図るため、遺構番号の振り替えを行ったものがある。また、境木について検出順に番号を付したものを検出位置順に振り替えを行った。また、整理途中で、新たに名称を付したものもある。久々戸遺跡においては章末に遺構番号振り替え一覧表を示す。なお、整理作業終了後も、遺物の注記、実測原図内の個別名称等では旧名称のままである。なお、中棚Ⅱ遺跡においては、遺構名称は中棚Ⅱ遺跡に順じ、各遺構番号についても続き番号を付与した。畑名称に関しても中棚Ⅱ遺跡に準拠している。畑は「単位畑」の集合で構成されており、各単位畑には多くの場合（円形）平坦面を伴っていることから単位畑に所在する平坦面として名称を付している。N26畑に関しては中棚Ⅱ遺跡において調査した畑の続きであることから、単位畑N26-14から付与した。また今次の調査において新たに検出された畑については、中棚Ⅱ遺跡において既にN38畑まで番号が付与してあるので、重複を避けるためにN39畑から使用した。
10. 第4章においての土坑の計測位置については、本文中に模式図を示した。主軸方向とは、長径が北から西又は東への傾きを計測したものである。主軸の傾斜に対する傾きとは、傾斜方向を0°とし、これに対する長径の右又は左への傾きを計測したもので、右に60°傾いていれば「右60°」と表示した。
11. 第3章の遺構図中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は今回報告した遺物の出土位置を表している。図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。遺構図中の▲は植物痕跡が検出された位置を表している。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

序章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 調査の方法	4
第4節 地理的環境と歴史的環境	6

第1章 久々戸遺跡

第1節 調査の概要	8
第2節 基本土層	8
第3節 泥流面の遺構と遺物	
(1) 畑の全体構造	11
(2) 畑	12
(3) 掘立柱建物	21
(4) ヤックラ	25
(5) 道	25
(6) 石垣	29
(7) その他の遺構	32
(8) 出土遺物	35
(9) 久々戸遺跡出土獣骨	42
(10) 泥流の流下痕跡について	43
第4節 泥流面以外の遺構と遺物	
(1) 遺構	44
(2) 遺物	44
第5節 自然科学分析	
(1) 畑耕作地跡から出土した植物遺体	47
(2) 久々戸遺跡出土木材の樹種	50
(3) 久々戸遺跡から出土した大型植物化石	56

第2章 中棚Ⅱ遺跡

第1節 調査の概要	58
第2節 基本土層	58
第3節 検出された遺構と遺物	
(1) 畑	61
(2) 道	62
(3) ヤックラ	62
(4) 円形平坦面	71
(5) 出土遺物	71
第4節 まとめ	72

第3章 西ノ上遺跡

第1節 調査の概要	73
第2節 基本土層	76
第3節 検出された遺構と遺物	
(1) 畑	77
(2) 道	90
(3) 植物痕跡	91
(4) 遺物	92

第4章 上郷A遺跡

第1節 調査の概要	94
第2節 基本土層	94
第3節 検出された遺構	
(1) 土坑	98
(2) 遺物	103
第4節 自然科学分析	117
第5節 まとめ	123

写真図版
抄録

付図 久々戸遺跡 29区 泥流面 全体図 (1/250)
西ノ上遺跡 39区 全体図 (1/200)

挿図目次

序章

- 図1 遺跡位置図
- 図2 周辺遺跡位置図

第1章 久々戸遺跡

- 図3 グリッド設定図
- 図4 遺跡位置図
- 図5 IX区 基本土層図及びトレンチ配置図
- 図6 IX区 K 19号畑
- 図7 IX区 K 20～23号畑(1)
- 図8 IX区 K 20～23号畑(2)
- 図9 IX区 K 24・25号畑(1)
- 図10 IX区 K 24・25号畑(2)
- 図11 IX区 K 25号畑耕作具痕
- 図12 IX区 K 26号畑
- 図13 IX区 K 27～29号畑
- 図14 IX区 1号掘立柱建物
- 図15 IX区 2号掘立柱建物(1)
- 図16 IX区 2号掘立柱建物(2)
- 図17 IX区 2号掘立柱建物(3)
- 図18 IX区 28～30号ヤックラ
- 図19 IX区 31・32号ヤックラ
- 図20 IX区 1・3～5号道
- 図21 IX区 5・6号石垣
- 図22 IX区 7号石垣
- 図23 IX区 1・2号遺構
- 図24 IX区 境木 1～46
- 図25 IX区 境木 根の圧痕
- 図26 IX区 出土遺物(1)
- 図27 IX区 出土遺物(2)
- 図28 IX区 出土遺物(3)
- 図29 IX区 出土遺物(4)
- 図30 IX区 出土遺物(5)
- 図31 IX区 泥流中の石による攪乱
- 図32 IX区 1号自然流路
- 図33 IX区 出土遺物(6)

第2章 中棚Ⅱ遺跡

- 図34 基本土層図
- 図35 調査区域図
- 図36 グリッド設定図
- 図37 調査区全体図
- 図38 N 26-14・15畑
- 図39 N 26-16・17畑
- 図40 N 26-18畑・10号道
- 図41 N 39畑
- 図42 N 40・41畑・70号ヤックラ
- 図43 N 26-15・N 26-17・N 26-18 円形平坦面
- 図44 出土遺物

第3章 西ノ上遺跡

- 図45 遺跡位置図
- 図46 グリッド設定図
- 図47 基本土層図
- 図48 1～3号畑(1)・1～3号道
- 図49 1～3号畑(2)
- 図50 4号畑
- 図51 5号畑(1)
- 図52 5号畑(2)
- 図53 6・7号畑(1)
- 図54 6・7号畑(2)

- 図55 7号畑
- 図56 8～10号畑(1)
- 図57 8～10号畑(2)
- 図58 11号畑(1)
- 図59 11号畑(2)
- 図60 1・2号道
- 図61 3号道
- 図62 植物痕跡
- 図63 出土遺物

第4章 上郷A遺跡

- 図64 遺跡位置図
- 図65 グリッド設定図、基本土層図
- 図66 調査区全体図
- 図67 土坑の名称
- 図68 23区1・10号、22区1号土坑
- 図69 22区14・15号土坑
- 図70 22区11号、23区9号土坑
- 図71 22区21・16号土坑
- 図72 22区12・13・20号土坑
- 図73 22区17・18・19号土坑
- 図74 22区2号、23区11号土坑
- 図75 22区4・5号土坑
- 図76 23区2・5・8号土坑
- 図77 22区3・9・7・8号土坑
- 図78 22区6・10号、23区3・4号土坑
- 図79 23区6・7号土坑
- 図80 22区9号土坑出土遺物
- 図81 第1基本土層、22区10・11号土坑土層柱状図
- 図82 I・II・III・IV類土坑分布図
- 図83 V・VI・VII・VIII類土坑分布図

表目次

序章

- 表1 周辺遺跡一覧表

第1章 久々戸遺跡

- 表2 IX区 畑計測値等一覧表
- 表3 IX区 平坦面計測値等一覧表
- 表4 IX区 1号掘立柱建物計測値等一覧表
- 表5 IX区 2号掘立柱建物計測値等一覧表
- 表6 IX区 ヤックラ計測値等一覧表
- 表7 IX区 道計測値等一覧表
- 表8 IX区 石垣計測値等一覧表
- 表9 IX区 境木計測値等一覧表
- 表10 IX区 遺物観察表(1)
- 表11 IX区 遺物観察表(2)
- 表12 IX区 遺物観察表(3)
- 表13 IX区 土器・石器出土点数
- 表14 IX区 新旧遺構番号振替表

第2章 中棚Ⅱ遺跡

- 表15 畑計測値等一覧表
- 表16 遺物観察表

第3章 西ノ上遺跡

- 表17 畑計測表
- 表18 遺物観察表

第4章 上郷A遺跡

- 表19 出土遺物観察表
- 表20 遺構一覧表

写真図版目次

久々戸遺跡

- PL 1 1. 遺跡遠景（東から）
2. 遺跡遠景（北東から）
- PL 2 1. IXA区全景（垂直）
2. IXA区南半全景（東から）
3. IXA区K19号畑全景（東から）
4. IXA区K19号畑畝断面 a-a'（南から）
5. IXA区K19-1号円形平坦面（東から）
- PL 3 1. IXA区北半全景（東から）
2. IXA区K21号畑全景（東から）
3. IXA区K22号畑全景（東から）
4. IXA区K23号畑全景（東から）
5. IXA区K23-1号円形平坦面（北東から）
6. IXA区K23-2号円形平坦面（北東から）
7. IXA区K23号畑作物痕検出状況（北東から）
8. IXA区K23号畑作物痕断面近接（南西から）
- PL 4 1. IXA区K23号畑遺物出土状況（北から）
2. IXA区K23号畑獣骨出土状況（北西から）
3. IxB区全景（南から）
4. IxB区K24号畑全景（南から）
5. IxB区K24号畑畝断面 a-a'（南から）
6. IxB区K25号畑全景（南から）
7. IxB区K25号畑畝断面 a-a'（東から）
- PL 5 1. IxB区K25号畑耕具痕検出状況（南から）
2. IxB区K25号畑耕具痕近接（南から）
3. IxC区全景（北から）
4. IxC区K26号畑全景（南東から）
5. 1号トレンチK27号畑断面（東から）
6. 1号トレンチK27号畑断面近接（東から）
7. 盛土下畑断面（北東から）
8. 盛土下K28号畑全景（北西から）
- PL 6 1. 盛土下K28号畑全景（北西から）
2. 盛土下K29号畑全景（南西から）
3. IXA区1号道全景（北東から）
4. IXA区1号道全景（北東から）
5. IXA区3号道全景（東から）
6. IXA区3号道全景（北から）
7. IXA区3号道分岐点（東から）
8. IxB区4号道全景（東から）
- PL 7 1. IXA区28号ヤックラ全景（南東から）
2. IXA区29号ヤックラ全景（南東から）
3. IXA区30号ヤックラ全景（北から）
4. IXA区31号ヤックラ全景（北から）
5. IXA区31号ヤックラ根石全景（北東から）
6. IXA区32号ヤックラ全景（東から）
7. IXA区1号掘立柱建物断面A（柱穴2）（南東から）
8. IXA区1号掘立柱建物断面B（南東から）
- PL 8 1. IXA区2号掘立柱建物全景（北東から）
2. IXA区2号掘立柱建物柱穴1全景（北東から）
3. IXA区2号掘立柱建物柱穴2全景（南東から）
4. IXA区2号掘立柱建物柱穴2断面（東から）
5. IXA区2号掘立柱建物柱穴6断面（南東から）
- PL 9 1. IXA区2号掘立柱建物焼土炭化物範囲（南西から）
2. IXA区2号掘立柱建物焼土炭化物範囲（南西から）
3. IXA区2号掘立柱建物-1出土状況（北東から）
4. IXA区2号掘立柱建物-2出土状況（東から）
5. IXA区2号掘立柱建物-3出土状況（南西から）
6. IXA区2号掘立柱建物-4出土状況（北東から）
7. IXA区2号掘立柱建物-5出土状況（北東から）
8. IXA区2号掘立柱建物-6出土状況（北東から）

- PL 10 1. IXA区5号石垣全景（北東から）
2. IXA区5号石垣断面（東から）
3. IXA区6号石垣全景（北東から）
4. IXA区6号石垣全景（北東から）
5. IXA区6号石垣断面（東から）
6. IXA区7号石垣その1全景（東から）
7. IXA区7号石垣その2全景（東から）
8. IXA区7号石垣その2南端部（北東から）
- PL 11 1. IXA区7号石垣断面（南東から）
2. IXA区1・2号遺構全景（北東から）
3. IXA区境木43全景（北東から）
4. IXA区境木43断面（北西から）
5. IXA区境木46検出状況（南から）
6. IXA区境木46断面（南東から）
7. IxB区泥流中の石による攪乱1全景（西から）
8. IxB区泥流中の石による攪乱2全景（南から）
- PL 12 1. IXA区泥流堆積状況（南から）
2. IxB区泥流中の石（北から）
3. IxB区1号自然流路全景（南から）
4. IxB区1号自然流路全景（南東から）
5. IxB区10～14号トレンチ全景（南から）
6. IxB区表土掘削風景（東から）
7. IXA区K19号畑調査風景（東から）
8. 調査後の工事風景（南東から）
- PL 13 出土遺物(1)
- PL 14 出土遺物(2)
- PL 15 出土遺物(3)

中棚Ⅱ遺跡

- PL 16 1. 調査前風景（北東から）
2. 調査区遠景（吾妻川対岸から）
- PL 17 1. N26・39畑全景（東から）
2. N26・39畑全景 軽石除去後（西から）
- PL 18 1. N26畑西壁セクション北側（東から）
2. N26畑西壁セクション南側（東から）
3. N26畑西壁セクション近景（東から）
4. N26畑南端部崩落状況（南から）
5. N26畑南端部崩落状況（東から）
6. N26畑南端崩落部セクション 近撮
7. N26-15円形平坦面（西から）
8. N26-17円形平坦面（南から）
- PL 19 1. N26-17円形平坦面軽石除去後（南から）
2. N26-18円形平坦面（東から）
3. N26-16畑北側延長部（南から）
4. N26畑遺物出土状況
5. N39畑全景（西から）
- PL 20 1. N39畑断ち割りセクション（南から）
2. N39畑軽石集積部分セクション（北から）
3. N26-18畑および10号道（南から）
4. 10号道セクション（南から）
5. N40・41畑全景（東から）
6. N40・41畑全景（南から）
7. 70号ヤックラ断ち割りセクション（南から）
8. 出土遺物

西ノ上遺跡

- PL 21 1. 調査区全景（南上空から）
2. 調査区東半部（南上空から）
- PL 22 1. 調査区西半部（南上空から）
2. 調査区全景（西上空から）
3. 遺跡遠景（北から）
4. 遺跡遠景（北東から）
5. 畑検出作業風景（南西から）

- P L 23 1. 1号畑全景（西から）
2. 2号畑全景（北から）
3. 3号畑全景（北から）
4. 3号畑断面F（西から）
5. 3号畑、3号道、4号畑検出状況（西から）
6. 4、5、6号畑全景（東から）
7. 4号畑と5号畑の境界（北から）
8. 4号畑1号円形平坦面全景（北から）
- P L 24 1. 5-1号畑ウネサク近撮（西から）
2. 5-1号畑軽石除去後の耕作具痕跡（東から）
3. 5号畑1号円形平坦面全景（東から）
4. 5-1号畑断面J（西から）
5. 5号畑2号円形平坦面（東から）
6. 5-2号畑と5-4号畑の境界（東から）
7. 5-3号畑全景（西から）
8. 5-1号畑北側トレンチ（南から）
- P L 25 1. 6号畑全景（西から）
2. 6号畑と7号畑の境界（西から）
3. 7-1号畑ウネサク近撮（西から）
4. 7号畑と8号畑の境界（北から）
5. 7号畑ウネ中の火山灰（西から）
6. 8-1号畑と8-2号畑の境界（西から）
7. 8号畑断面O（西から）
8. 8号畑と9号畑の境界（西から）
- P L 26 1. 9号畑全景（西から）
2. 10-1号畑全景（南から）
3. 10-2号畑全景（西から）
4. 10号畑と11号畑の境界（北から）
5. 11、12号畑全景（東から）
6. 11号畑全景（西から）
7. 11号畑北側の非耕作部（東から）
8. 12号畑全景（東から）
- P L 27 1. 1号道全景（南から）
2. 2号道全景（南から）
3. 3号道全景（北から）
4. 3号道近撮（北から）
5. 植物痕跡近撮（西から）
6. 植物痕跡近撮（北から）
7. 追加調査区全景（西から）
- P L 28 出土遺物

上郷A遺跡

- P L 29 1. 調査区全景（西から）
2. 基本土層1（北から）
3. トレンチ1（南から）
4. トレンチ2（南から）
- P L 30 1. 23区1号土坑（南から）
2. 23区1号土坑セクション（東から）
3. 23区10号土坑（北東から）
4. 23区10号土坑セクション（南東から）
5. 22区1号土坑（西から）
6. 22区1号土坑セクション（南から）
7. 22区14号土坑（北東から）
8. 22区14号土坑セクション（南から）
- P L 31 1. 22区15号土坑（南から）
2. 22区15号土坑セクション（南から）
3. 22区11号土坑（南から）
4. 22区11号土坑セクション（北西から）
5. 23区9号土坑（南から）
6. 23区9号土坑セクション（東から）
7. 22区21号土坑（西から）
8. 22区21号土坑セクション（南から）

- P L 32 1. 22区16号土坑（南から）
2. 22区16号土坑セクション（南東から）
3. 22区12号土坑（南から）
4. 22区12号土坑セクション（東から）
5. 22区13号土坑（東から）
6. 22区13号土坑セクション（北西から）
7. 22区20号土坑（南から）
8. 22区20号土坑セクション（西から）
- P L 33 1. 22区17号土坑（南から）
2. 22区17号土坑セクション（北から）
3. 22区18号土坑（南から）
4. 22区18号土坑セクション（南から）
5. 22区19号土坑（南から）
6. 22区19号土坑セクション（南から）
7. 22区2号土坑（北東から）
8. 22区2号土坑セクション（南東から）
- P L 34 1. 23区11号土坑（南から）
2. 23区11号土坑セクション（南西から）
3. 22区4号土坑（南から）
4. 22区4号土坑セクション（西から）
5. 22区5号土坑（西から）
6. 22区5号土坑セクション（北西から）
7. 23区2号土坑（北西から）
8. 23区2号土坑セクション（北東から）
- P L 35 1. 23区5号土坑（北西から）
2. 23区5号土坑セクション（北東から）
3. 23区8号土坑（南から）
4. 23区8号土坑セクション（西から）
5. 22区3号土坑（西から）
6. 22区3号土坑セクション（南から）
7. 22区9号土坑（西から）
8. 22区9号土坑セクション（南から）
- P L 36 1. 22区7号土坑（南西から）
2. 22区7号土坑セクション（南東から）
3. 22区8号土坑（南西から）
4. 22区8号土坑セクション（東から）
5. 22区6号土坑（南西から）
6. 22区6号土坑セクション（南東から）
7. 22区10号土坑（南から）
8. 22区10号土坑セクション（東から）
- P L 37 1. 23区3号土坑（西から）
2. 23区3号土坑セクション（南から）
3. 23区4号土坑（西から）
4. 23区4号土坑セクション（南から）
5. 23区6号土坑（西から）
6. 23区6号土坑セクション（南から）
7. 23区7号土坑（南東から）
8. 23区7号土坑セクション（南西から）
- P L 38 1. 22区1号土坑逆茂木痕（北から）
2. 22区11号土坑逆茂木痕（南から）
3. 23区9号土坑逆茂木痕（南から）
4. 22区16号土坑逆茂木痕（南から）
5. 22区9号土坑遺物出土状況（北から）
6. 調査区南側の電流柵（東から）
7. 22区9号土坑出土遺物
8. 遺構外出土遺物

序章

第1節 調査にいたる経緯

ハツ場ダムは、国土交通省による洪水調節・都市用水・水道用水・工業用水の供給等を目的とした多目的ダム建設事業である。ハツ場ダム建設にいたる経緯については、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第287集「長野原一本松遺跡(1)」ハツ場ダム建設地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集(2002年刊行)第1章に詳しく記載されているので、参照していただきたい。

本格的な着工に先立ち、昭和61年7月にはダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定が行われ、これに基づいて長野原町教育委員会による「民俗」「石造文化財」「自然」に関する調査が行われ、これと併行して埋蔵文化財の詳細分布調査が実施された。この結果は、『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—』(平成2年・長野原町教育委員会)にまとめられているが、このうち、ダム建設に係る5地区(川原畑・川原湯・横壁・林・長野原)の埋蔵文化財包蔵地は79、その調査対象面積は約57万㎡とされた。その後、平成14年3月に長野原町教育委員会により包蔵地範囲と遺跡の名称の変更等がなされた結果、合計89遺跡、調査対象面積約105万㎡に増加している。

また、下流の吾妻町松谷、三島地区などでもダム建設に伴う工事が進められており、この地域についても、群馬県教育委員会の『群馬県遺跡地図』(昭和48年)で、埋蔵文化財包蔵地の存在が確認されている。

こうした状況を踏まえ、建設省関東地方建設局(当時)、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会及び吾妻町教育委員会の4者により、ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議が行われ、これに基づいて平成6年3月18日、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に

関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実実施計画が決定した。実施計画に示された調査組織は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

さらに、平成11年4月1日、同協定の一部が変更され、同年以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制にいたっている。この間、平成10年度からは、発掘調査と併行して整理作業も開始され、発掘調査及び整理作業とも現在も継続中である。

なお、建設省及び関東地方建設局は、平成13年1月より、国土交通省、関東地方整備局に変更となっている。

各遺跡の調査経過について

ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査については、個々の工事工程や、用地買収状況、地上権設定の進捗状況等の調整により、長期間にわたっており、同一遺跡であっても調査が複数年度にわたることが珍しくない。また、本報告書に記載された遺跡についても、既に一部整理報告書に記載されているものや、また、調査の進展にともなって別途報告されるもの等がある。

このためやや煩雑にわたる部分もあるが、以下では、今回調査報告書に記載されることとなった遺跡の調査の原因と経過について簡単に記述する。

久々戸遺跡

久々戸遺跡については、平成7年県道長野原草津口停車場線道路建設に伴う調査を手始めとして、その後ハツ場ダム建設に伴い平成9～11年にわたって調査を実施している。その内容については『長野原久々戸遺跡』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第240集、1998年)及び『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』(ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第3集、2003年)として報告されているところである。

今回の調査対象となったのは、既に調査された部分に隣接する場所で、平成15年3月ハツ場ダム工事事務所より、長野原(久々戸)地区護岸工事実施

序章

にあたり、用地買収が終了したので埋蔵文化財調査実施後早期に工事に着手したい旨協議がなされた。当該部分は周知の遺跡、久々戸遺跡の一部であり、これまでの調査で天明泥流下の畑遺構が明瞭に残っていることが予想されたため、本調査を実施することとし、当該工事が護岸工事であり、増水期である秋までに工事自体を終了させる必要のあることから、八ッ場ダム工事事務所、文化課及び当事業団で調査実施について調整した結果、同年4月7日より調査に着手することとなったものである。

中棚Ⅱ遺跡

中棚Ⅱ遺跡は、楡木沢工事用進入路及び下田残土置場整備工事にともなって、平成11年より13年までの3年間にわたって調査されており、その内容については既に、『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』（八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 2003年刊行）として報告されている。しかし、この時の調査では、遺跡の東側の一部の土地の買収が終了しておらず、調査を実施することが出来なかったものである。

この部分について、平成16年4月八ッ場ダム調査工事事務所より文化課に、当該部分の土地について用地買収が終了したため、早期に調査に着手してほしい旨の要請があった。

このため、その取扱いについて協議が行われた結果、当初の調査計画にはなかったのであるが、急遽調査を実施することとなり、同年5月12日より本事業団で調査に着手することとなった。

西ノ上遺跡

西ノ上遺跡は、千歳橋下部工事事業に伴う発掘調査である。平成14年4月、当該工事ににかかわって、国土交通省八ッ場ダム工事事務所より試掘依頼があり、同4月26日、事業用地内で試掘調査を行ったところ、江戸時代後期の良好な畑跡の遺構が検出されたため、本調査が必要と判断し、その旨八ッ場ダム工事事務所あて回答した。

この結果、八ッ場ダム工事事務所、文化課、当事業団でその調査の取り扱いが協議され、6月より調

査に着手することになった。

上郷A遺跡

上郷A遺跡（吾妻郡吾妻町大字三島地内）は、県道林吾妻線土運搬路工事事業に伴う発掘調査である。平成16年4月、当該工事ににかかわって、八ッ場ダム工事事務所より当該地区の埋蔵文化財の有無について、県教育委員会文化課あて問い合わせがあった。これについて文化課ではその一部が周知の遺跡である上郷A遺跡にかかる旨回答し、その取扱いを協議することとなった。これについて八ッ場ダム工事事務所では、本工事が緊急を要すること、また、その大部分については仮設の土運搬路であることから軽度の盛土を行って地下の遺構を損なわないようにすることとしたが、構造上どうしても掘削の及ぶ一部について、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとなった。

これにともなって、文化課では5月8日及び12日の2日間にわたって試掘調査を行った結果、縄文～古代にわたる陥し穴と思われる土坑数基を確認したため、本調査が必要と判断し、その旨八ッ場ダム工事事務所あて回答した。

この結果、八ッ場ダム工事事務所、文化課、当事業団でその調査の取扱いが協議され、本工事が緊急を要すると判断されたため、当初の調査計画にはなかったが、隣接する上郷岡原遺跡の調査とあわせ、6月7日より調査に着手することとなった。

第2節 調査の経過

(1) 久々戸遺跡

久々戸遺跡の調査は平成9年から継続しており、平成13年度分までについては、群埋文第319集（関2003）にて報告を行っている。今回の報告分は平成15年度に実施した7次調査分であり、IX区とした。また、調査工程上の都合から、IXA区、IXB区、IXC区と便宜的に地区分けし、順次調査を実施した。

本調査区は八ッ場ダム建設工事における長野原（久々戸）地区護岸工事に伴う調査である。平成15年3月5・12日に県教育委員会文化課が試掘調査を実施し、工事予定範囲に江戸時代の畑跡が検出されたため、発掘調査が必要とされ、当事業団で調査を実施した。調査対象範囲は6,330㎡である。

調査では、国土交通省との協議により、工事中の進入路にあたる範囲を優先的に調査し、その後、護岸工事部分の調査を実施することとなった。そのため平成15年4月7日に、進入路部に1・2号トレンチを設定し試掘を行ったが、トレンチは湧水量が多く、地盤が非常に軟弱であり、遺構が存在しても平面的な検出は困難な状況であった。よって、この部分については、トレンチ調査で対応することとした。しかし、トレンチ調査では、1号トレンチの断面に、かろうじて畑を確認するに留まった。

その後4月11日よりIXA区の表土掘削を開始し、順次IXB区、IXC区の調査を実施した。各調査区では、天明三年の泥流で埋没した江戸時代の畑・掘立柱建物等を検出した。天明泥流下畑の調査終了後、各調査区ともトレンチを設定し下面の確認を行ったが遺構はなく、6月10日をもって調査を終了した。

またその間、予定範囲外であったが、吾妻川の崖断面に天明泥流の堆積を確認し、一部トレンチ調査を実施し、同時代の畑を確認した。

(2) 中棚Ⅱ遺跡

発掘調査は平成15年5月16日より開始。調査区は終了している中棚Ⅱ遺跡V区の東端側から表土の除去を行い、地続きのAS-A畑面の検出を行った。

北側はかなりの急勾配で立ち上がる崖になっていたが、できうる限り畑の広がりを追うことに努めた。また、調査区は大きく上下3段に分けられ、調査は下から上段の畑へと進めた。

畑の面はサクに溜まったAS-A軽石を残し、天明三年8月5日の状態を露呈させた後、写真撮影。さらに軽石除去後に円形平坦面、断面等の写真および図面を順次作成した。

(3) 西ノ上遺跡

発掘調査は、平成14年6月3日から調査準備を行い、翌4日から表土掘削を開始した。5日からは作業員による畑面の精査を始めた。同11日は植物痕跡を初めて確認した。本遺跡のある川原湯地区においては、事業団による調査が初めてであったため、24日から4日間、現場の公開を行い、地元の方々に現場を見学していただいた。（来跡者35名）

6月28日には泥流下畑面の精査がほぼ終了したので、空中写真実測、撮影を行った。

7月2日から泥流下畑の下面の確認調査を開始した。また、調査区内にあった車庫の移転が遅れていたため、全体の調査終了後の8月28日にこの車庫の下の追加調査を行い、同日中に実測、写真撮影を行って全ての調査を終了した。

(4) 上郷A遺跡

発掘調査は、平成15年6月10日から重機による表土掘削を開始し、同時に作業員による遺構確認を始めた。6月12日には、表土掘削が終了し、継続して遺構確認、確認された遺構から調査を開始した。翌13日に32基の土坑を検出し、遺構確認を終了。6月26日には、調査区内に4m×4mの旧石器試掘範囲を2箇所設定し、試掘を開始した。

6月30日、全ての土坑の調査を終了し、調査区全景写真を撮影した。旧石器の試掘調査も同時に終了。旧石器に関する遺構・遺物は検出されなかった。その後、速やかに調査区を埋め戻し、全ての調査を終了した。

第3節 調査の方法

平成6年度から始まったハッ場ダム建設に伴う発掘調査では、遺跡名称の略号やグリッドの設定など「ハッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき調査が進められてきた。以下、本書でもそれに準拠し必要部分について掲載する。

①調査における遺跡番号は、ハッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）に番号を付し、ハッ場ダムの略号（YD）に続けた。ハイフン以下、各地区内に所在する遺跡に対して調査順の通し番号を遺跡番号とした。遺物に対する注記及び資料整理にはこの遺跡番号を用いている。この基準に基づき、久々戸遺跡の遺跡番号は「YD5-03」中棚Ⅱ遺跡は「YD4-07」西ノ上遺跡は「YD2-02」となる。なお、この遺跡番号は長野原町内の遺跡を対象としているため、上郷A遺跡を初めとする吾妻町内に位置する遺跡に対しては、遺跡番号が未設定である。

②基準座標は、国家座標（2002年4月改正以前の旧日本測地系）に基づく日本平面直角座標第Ⅸ系を使用し、吾妻町大柏木付近を原点（座標値 $X = +58000.0$ 、 $Y = -97000.0$ ）とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。

③1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。さらに、100m方眼内を4m方眼で625区画に分割し、4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを用い、南北には1～25までの算用数字を用いて、南東隅を基点としグリッドを呼称する。詳細は『長野原一本松遺跡（1）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」を参照されたい。

現場での遺構測量については調査担当者、作業員及び委託した測量業者がおこなった。

遺構平面図は原則として縮率1：20割付図で作成し、断面図等もそれに準じた。全体図については、原則的には、1：100ないしは1：200の縮率を用いた。

遺構実測にあたっては、3次元のデジタルデータを用いた現場実測を導入しており、空中測量図などと併せて、従来からの実測図とデジタル作成図が混在している。

遺構写真撮影は、地上写真は現場担当者がおこない、空中写真撮影については委託業者がおこなった。撮影には35mm版白黒フィルムとカラースライドフィルムを用いた。必要に応じて、6×7版白黒フィルムを使用した。また、撮影対象に応じて高所作業車を用いた。

各遺跡の発掘調査においては、バックフォーによる表土掘削をおこない、作業員の手による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。遺跡では急斜面なども多く、調査には作業を進める上での工夫が要求された。



図1 遺跡位置図

第4節 地理的環境と歴史的環境

長野原町に所在する久々戸、中棚Ⅱ、西ノ上遺跡に関しては、『長野原一本松遺跡(1)』『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』・『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』に詳細に記載されているのでそちらを参照していただきたい。ここでは吾妻町に所在する上郷A遺跡についてのみ記述することにする。

(1) 地理的環境

上郷A遺跡の所在する吾妻町は、群馬県の北西部吾妻郡のほぼ中央に位置し、東は東村、西は長野原町及び六合村、南は榛名町及び倉淵村、そして北は中之条町と境を接している。

上郷A遺跡は、吾妻町大字三島に所在し、利根川水系である吾妻川中流の右岸河岸段丘上に位置している。吾妻川は、長野県との県境に位置する浅間山山麓を源流としており、渋川市阿久津付近で利根川に注ぐ全長約74kmの一級河川である。流域全域が山地地帯であり、両岸に小規模な河岸段丘をいくつも形成しながら溪谷を刻んでいる。町は、四ヶ町村の合併により昭和31年に誕生し、市街地となっている原町地区、榛名山北麓の太田地区、吾妻川上流域の岩島地区、吾妻川支流温川上流域の坂上地区の大きく四つの地区としてその名残を残している。

遺跡近くの吾妻川は、上流で吾妻溪谷により極端に狭くなった川幅が、右に急激に曲がりながら広がっている箇所である。両岸に2から3段の河岸段丘を発達させている。上郷A遺跡は、これらのうち上位の段丘上にあり、吾妻川との標高差は約55mである。遺跡南側背後には、坂上地区とを隔てる山々が横たわっていて、そこからの湧水が随所に見られ小規模河川となって段丘面を開削・分断している。遺跡の存在している上位の段丘面は、ロームと黒ボク土によって厚く覆われ、上層黒ボク土中に浅間山の火山性噴出物の堆積を部分的に確認できる。ローム下には浅間草津黄色軽石(As-YPk)の堆積が顕

著である。また、さらに下には応桑泥流起源のものと思われる礫層が存在していることが、調査において確認されている。

(2) 歴史的環境

縄文時代 前期の集落跡が、原町にある念仏塚遺跡において確認されている。

また、郷原遺跡は、昭和19年、国道改修工事の際後期のハート形土偶が出土したのを契機に、山崎義男によって発掘調査が行われた。更に昭和59年、ガソリンスタンド建設に伴って発掘調査が行われ、中期の集落が発見されている。ハート型土偶については、後期に該当すると考えられる。

唐掘遺跡では、昭和55年の緊急調査において後期から晩期の遺物が出土している。散布地も含めると、前期では河岸段丘に臨む台地上や山間部の平坦地に遺跡が分布し、後期から晩期にかけて遺跡数は増加し河岸段丘上にも広く分布するようである。

弥生時代 中期の遺跡としては、再葬墓で有名な岩櫃山鷹の巣遺跡がある。岩櫃山鷹の巣遺跡は、郷土史家金澤佐平により注目され、昭和13から14年にかけて明治大学杉原壮介らによって調査されたもので、後に弥生中期土器編年の標式遺跡となっている。そして近年、再葬墓の可能性が指摘されている遺構が前畑遺跡でも確認されている。

古墳時代 県指定史跡である姉山のカマド跡は、本格的調査はされていないものの、集落の存在を確実なものとして認識されている。古墳は四戸古墳群、机古墳があり6世紀代が主体である。

奈良・平安時代 近隣の上郷岡原遺跡、上郷B遺跡から9世紀後半から10世紀にかけての小規模な集落が検出されている。また、前畑遺跡からは、7世紀から11世紀にかけての集落が検出されている。

中世 周辺には岩櫃城を初めとして、郷原城、岩下城、根小屋城などの諸城がかなりの密度で存在する。吾妻郡の中世は、上杉・武田両氏の争いや真田氏などの動きの中で複雑な動きを示しており、これらの城もその動きの中で築かれたものである。

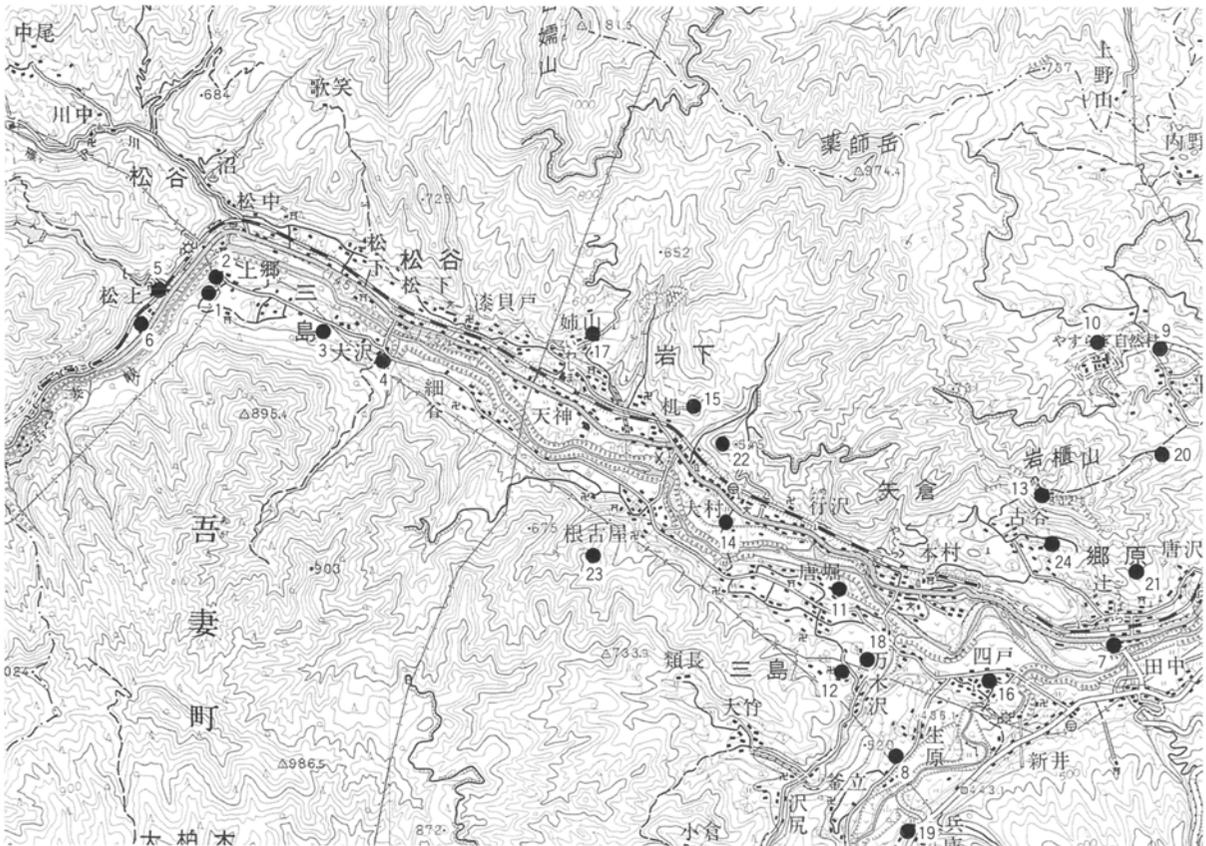


図2 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1/50000 地形図「草津」「中之条」使用)

表1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	備考
1	上郷A遺跡	吾妻町大字三島	縄文~平安	土坑(陥し穴)群
2	上郷岡原遺跡	吾妻町大字三島	縄文・弥生・平安・中世・近世	集落、土坑、掘立柱建物、天明三年浅間山の 大噴火に伴う泥流に埋もれた礎石建物、畑、 水田等
3	上郷B遺跡	吾妻町大字三島	縄文・平安	土坑群・住居
4	三島大島遺跡	吾妻町大字三島	近世	平成8年試掘で天明3年泥流堆積物確認
5	雁ヶ沢城(雁の沢砦)	吾妻町大字松谷	中世	城館跡
6	松谷前田遺跡	吾妻町大字松谷	近世	平成8年試掘で天明3年泥流堆積物下で建物 跡確認
7	郷原遺跡	吾妻町大字郷原	縄文・平安	包含層
8	生原遺跡	吾妻町大字三島	古墳	古墳群
9	念仏塚遺跡	吾妻町大字原町	縄文・平安・中世	包含層
10	岩櫃城跡北側遺構群遺跡	吾妻町大字原町	縄文・中世	包含層・城館跡
11	唐掘遺跡	吾妻町大字三島	縄文	包含層
12	上反遺跡	吾妻町大字三島	縄文	包含層
13	鷹の巣遺跡	吾妻町大字原町	弥生	墳墓
14	前畑遺跡	吾妻町大字岩下	弥生・古墳・平安	包含層・水田跡
15	机古墳	吾妻町大字岩下	古墳	墳墓
16	四戸古墳群	吾妻町大字三島	古墳	墳墓
17	姉山の石組みかまど	吾妻町大字岩下	古墳	住居跡
18	万木沢遺跡	吾妻町大字三島	古墳	包含層
19	平遺跡	吾妻町大字大戸	古墳	包含層
20	岩櫃城	吾妻町大字原町	戦国	城館跡
21	郷原城	吾妻町大字郷原	戦国	城館跡
22	岩下城	吾妻町大字岩下	戦国	城館跡
23	根古屋城	吾妻町大字三島	戦国	城館跡
24	潜龍院跡	吾妻町大字郷原	戦国	城館跡

参考文献

- 1 「岩櫃城跡北側遺構群遺跡」吾妻町教育委員会1994
- 2 「念仏塚遺跡」吾妻町教育委員会1994
- 3 「生原遺跡」吾妻町教育委員会1998
- 4 「郷原遺跡」吾妻町教育委員会1998
- 5 「前畑遺跡」吾妻町教育委員会1998
- 6 「町内遺跡1」(小泉宮戸遺跡)吾妻町教育委員会2003
- 7 「原町誌」原町誌編集委員会1960

第1章 久々戸遺跡

第1節 調査の概要

久々戸遺跡は、県道長野原草津口停車場線（橋梁）建設に伴い平成7年度に発掘調査が行われた長野原久々戸遺跡と同一遺跡である。また、本遺跡は平成9年度の1次調査から平成11年度の6次調査にかけてⅠ区～Ⅷ区の調査が実施され、報告書が刊行されている（関 2003）。本調査は7次調査にあたり、その調査区をⅨ区と呼称し、さらに調査工程上の理由から調査順にA・B・Cを付した（図3）。Ⅸ区は29地区65・66・76・77区に位置する。

今回の調査では、これまでの調査と同じく、天明泥流下の畑の調査が主体である。遺跡は吾妻川により形成された河岸段丘上に立地するため、調査区内に多くの崖・段を含む複雑な地形を呈している。天明泥流はそのほぼ全面を被覆しており、その厚さは薄い地点で0.5 m、厚い地点では3 m以上堆積している。

調査では、表土及び天明泥流を重機により掘削除去し、その後、遺構確認を行った。その結果、天明泥流直下より畑11枚、掘立柱建物2棟、ヤックラ5基、石垣3基、道5条等を検出した。これらは、個々に独立した存在ではなく、有機的に関連をもつものであり、江戸時代後期の生産域の状況を良好に残しているといえる。

畑は、畝幅の違いから3種に大別される。これらは、畑作物の差に起因するものと考えられ、これまでの調査により、畝幅が1 m前後と広い畑ではサトイモ等のイモ類、45～60 cm程の畑ではヒエやキビ等の雑穀類や豆類、そして35 cm前後と狭い畑では麻が栽培されていたものと想定されている。本調査では、畝幅の広い畑及び中程の畑では、作物を推定する有力な手がかりは得られなかったが、狭い畑からは作物の根と思われる植物遺存体が残存していた。この植物遺存体の自然科学分析を実施したところ、麻である可能性が高い（第5節（1）参照）。今後、

同種の畑が検出された場合、その作物推定の基準となるものである。

また、本調査では掘立柱建物の検出が特筆される。2号掘立柱建物は、1号掘立柱建物及び平成7年度の調査で検出されたA区1号掘立柱建物（大西1998）と比較し、規模も大きく、造成や石垣を伴うなど構造も複雑である。未報告であるが、麻畑と推定される畑を検出した吾妻町上郷岡原遺跡においても、同規模の掘立柱建物が検出されており、非常に管理的な栽培を必要とする麻と、この種の掘立柱建物の関連性を示すものとして注目されよう。

天明泥流直下の調査終了後、トレンチを設定し（図5）、下面の遺構確認を行った。トレンチでは、畑耕作土及び下位の黒色土中から古代、弥生時代及び縄文時代の遺物が少量出土した程度であり、遺構は確認されなかった。

第2節 基本土層

久々戸遺跡Ⅸ区は、吾妻川により形成された段丘上に立地している。そのため、調査区内は平坦ではなく多くの段が存在し、局所的な土砂崩れ堆積物等も見られ、地点ごとに土層の差異が非常に大きい。そのため、各地点の土層を完全には対比できず、ここでは基本的な土層を扱った。個別の地点については、各断面図を参照されたい。

第Ⅰ層 表土

第Ⅱ層 暗褐色土（天明泥流堆積物）

第Ⅲ層 As-A軽石

第Ⅳ層 黒色土～暗褐色土

泥流被災前の表土に相当し、基本的に畑の耕作土である。地点により下位の土層の状況が異なるため、地点ごとにその様相は大きく異なる。

第Ⅴ層 黒褐色土～暗褐色土

第Ⅵ層 黒色土

第Ⅶ層 にぶい黄褐色砂質土

第Ⅷ層 黄褐色砂層

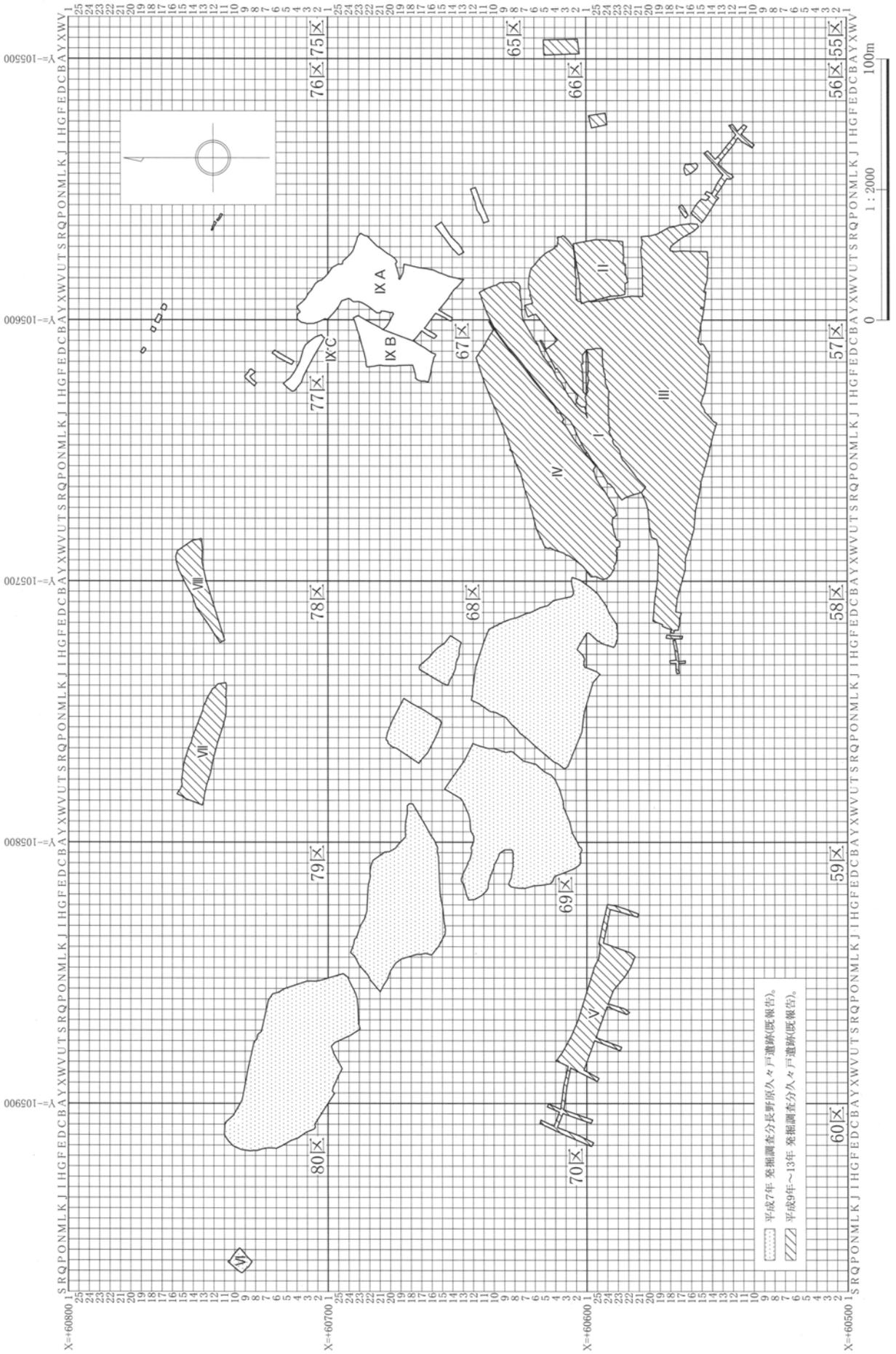


図3 グリッド設定図

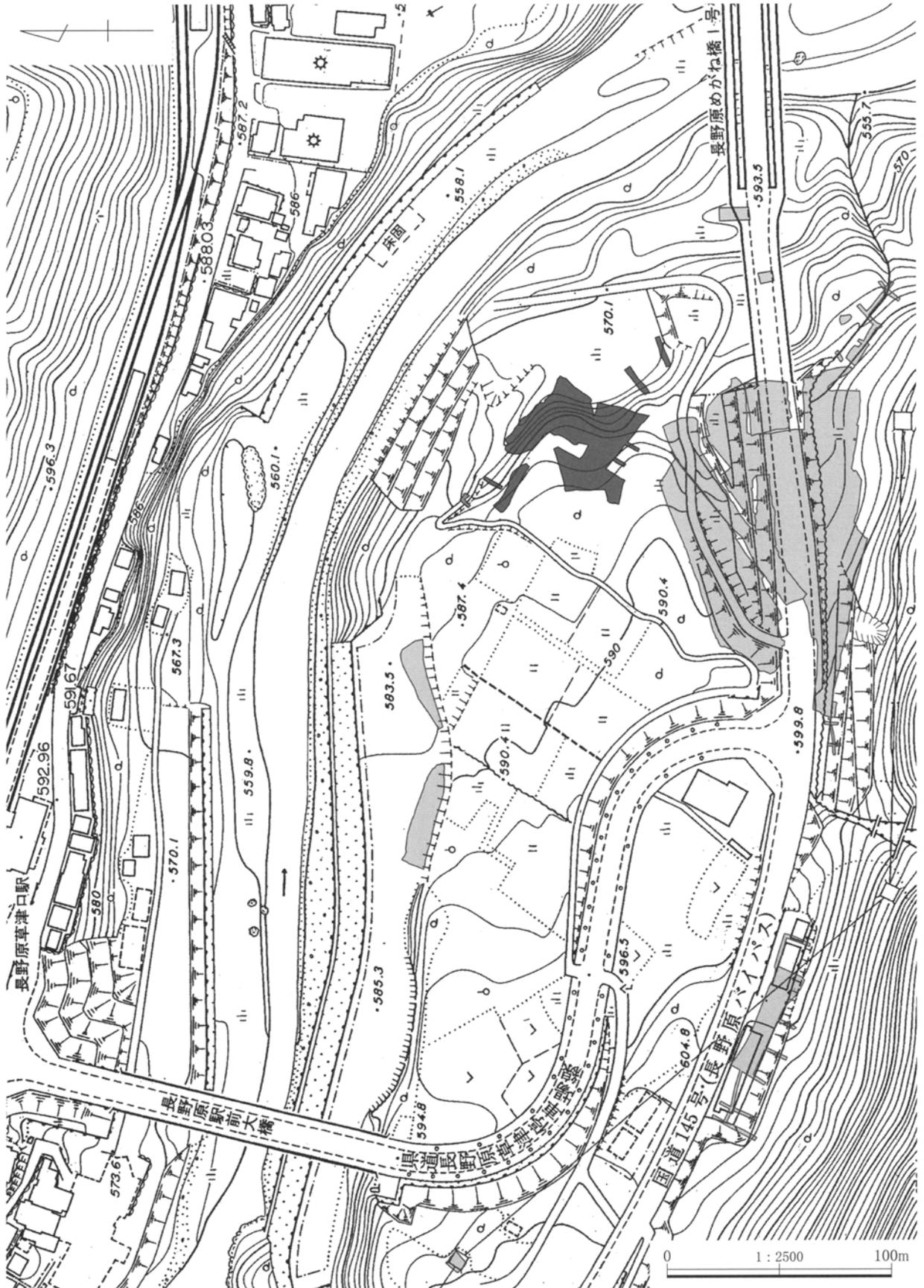


図4 久々戸遺跡 位置図 (1:2,500『長野原町都市計画図』を使用)

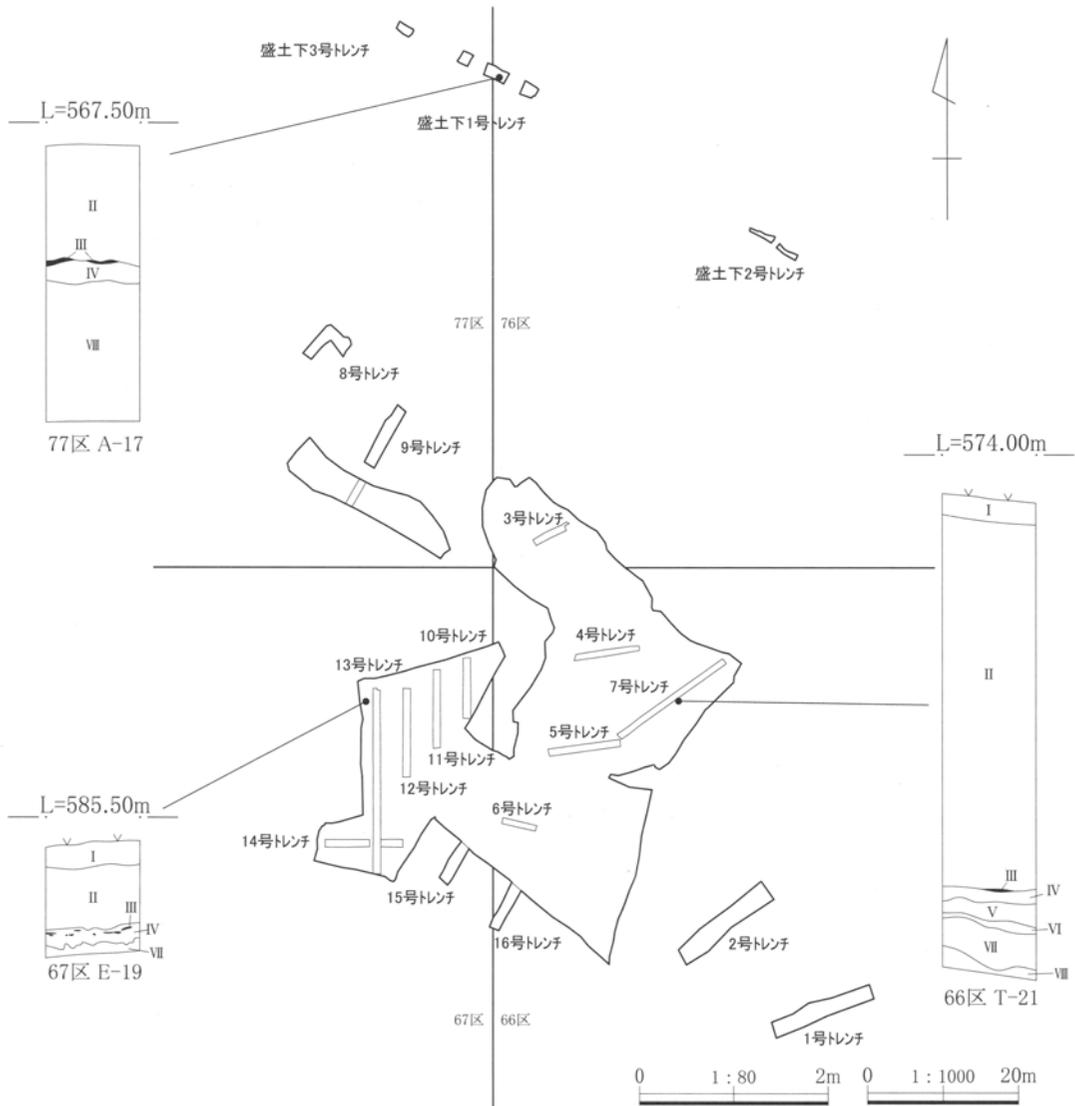


図5 IX区 基本土層図及びトレンチ配置図

第3節 泥流面の遺構と遺物

(1) 畑の全体構造

天明泥流堆積物の直下から検出された畑跡は、合計11枚であり、そのうち8枚がIX区で検出された。

IX区は崖及び段により、概ね4段に分けられ、これを上から、上・中・下・最下段とすると、上段にK24・25・26号畑、中段にK19号畑、下段にK20・21・22号畑、最下段にK23号畑が位置する。それぞれの畑は、多少なりとも傾斜を有する畑であり、最大で斜度23度に及ぶ傾斜をもっている。畝サクの走行はこの傾斜に対し、直交あるいはやや斜行するものが多い。ただし畝幅の広いK22号畑は平行

している。作物の差が、畝立てにも影響しているものと考えられよう。

耕作土は他の層と比較し、礫の量が少なく、畑中の不要な石を取り除いているものと理解される。この取り除いた石を集積したものを現在地元では、「ヤックラ」あるいは「イシヤックラ」と呼称している。本報告でも、同様な遺構をヤックラと呼んでいる。ヤックラは5基検出され、それぞれ近くの畑内の不要な石を集積したものと捉えられる。

また、平坦面の存在や耕作状況の差異により、K21・23号畑はそれぞれ2枚の単位畑として捉えた。単位畑を含めた畑の区画全体を検出できたものは少

第1章 久々戸遺跡

ないが、その面積は100㎡前後であり、これまでの調査例と比較して、狭小である。これは、段による地形的な制約が大きいと考えられる。

K27～29号畑は各トレンチの断面あるいは極めて狭い範囲における平面的な確認であるが、吾妻川の至近距離まで、畑が広がっていたことが確認できた。

畑遺構及び平坦面に関する計測値等については表2・3に掲載する。

(2) 畑

K19号畑

中段に位置する。現況では、荒地となっており、畑の存在は予想せず、また湧水が見られたため、泥流下にも水に関連する遺構が存在することを予想していた地点である。

畑は、一部湧水により攪乱を受けるが、ほぼ畑の区画全面が調査された。畝サクの走向方向は南北方向であり、等高線に対し斜行している。中央付近のK19-1号平坦面を境として、畝サクの走行方向が若干ずれるが、面積的に狭いため同一の単位畑として

捉えた。畝の断面形状は高低差が非常にはっきりしており、畝上はフタコブ状になっている。2番ザクまで終了した後にAs-A軽石が降下した畑と考えられる。

K19-1号平坦面 K19号畑のほぼ中央にて検出した。東側の約3分の1は湧水により攪乱を受けおり検出できなかった。周囲に幅15cm程の浅い溝を巡らし、内部は平坦となる。As-A軽石は周囲の溝にやや厚く約2cm程堆積し、内部は薄く均等に約1cm程堆積している。

K20号畑

IXA区の最も北に検出した。西側は、段丘崖の岩盤に沿ってほぼ南北に走る2号道により区画され、最北端に1号掘立柱建物がある。東側は段になり落ち込み、調査区外になるため検出しきれっていないが3号道によって区画されているものと想定される。また、その境界には、境木が1列存在する(第3節(7)参照)。また、南側はK21号畑に接しており、

表2 久々戸遺跡IX区 畑計測値等一覧表

畑名	単位畑名	畝幅		単位畑面積					畑面積	
		m	相当尺寸	図上面積	畝・歩	斜度	傾斜面積	畝・歩	傾斜面積	畝・歩
K19号畑		0.45	1.36	118	1・5	7	119	1・6	119	1・6
K20号畑		0.52	1.56	81	・24	16	85	・2	85	・25
K21号畑	K21-1号畑	0.51	1.54	78	・23	19	83	・25	125	1・7
	K21-2号畑	0.59	1.78	39	・11	23	42	・12		
K22号畑		1.02	3.09	(71)	・21	19	(71)	・21	(71)	・21
K23号畑	K23-1号畑	0.36	1.08	(76)	・28	8	(76)	・28	(76)	・28
	K23-2号畑	0.35	1.06							
K24号畑		0.47	1.41	(37)	・11	3	(37)	・11	(37)	・11
K25号畑		—	—	(107)	1・2	10	(109)	1・3	(109)	1・3
K26号畑		0.45	0.37	—	・	8	—	・	—	・
K27号畑		—	—	—	・	—	—	・	—	・
K28号畑		0.49	1.47	—	・	—	—	・	—	・
K29号畑		0.52	1.58	—	・	—	—	・	—	・

*尺換算は曲尺：1尺=10/33mを用いた。面積の単位は㎡。

表3 久々戸遺跡IX区 平坦面計測値等一覧表

平坦面名称	平坦部分			溝		平坦部内窪み		比高	備考
	直径(m)	面積(㎡)	形状	有無	幅(cm)	有無	形状		
K19-1号平坦面	1.40	1.33以上	円形	有	15	無	—	畝より低い	
K23-1号平坦面	1.35	1.39	円形	有	20	無	—	畝より低い	
K23-2号平坦面	1.32	1.40	円形	無	—	無	—	畝より低い	

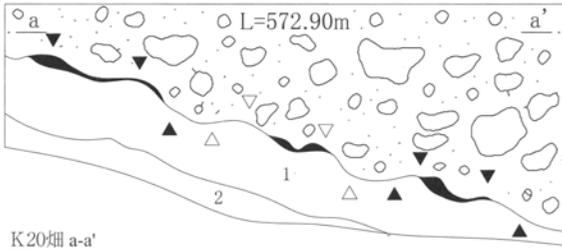


図6 IX区 K19号畑

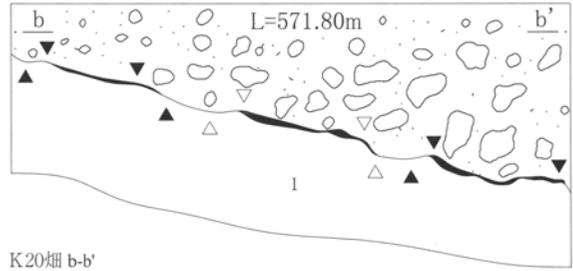


図7 IX区 K20~23号畑(1)

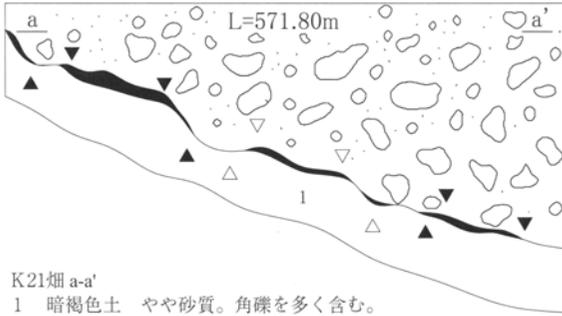
第3節 泥流面の遺構と遺物



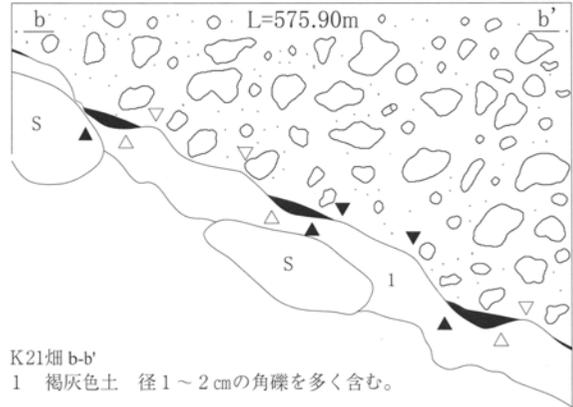
K20畑 a-a'
1 暗褐色土 やや砂質。径1～3cmの角礫を多く含む。
2 黒褐色土 やや砂質。径1～5cmの角礫を非常に多く含む。



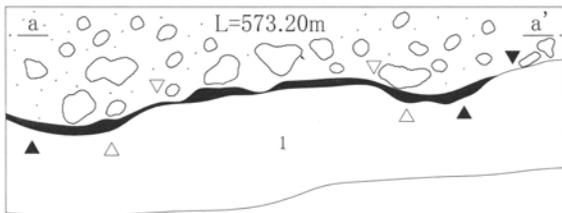
K20畑 b-b'
1 暗褐色土 やや砂質。径0.5～3cmの角礫を非常に多く含む。



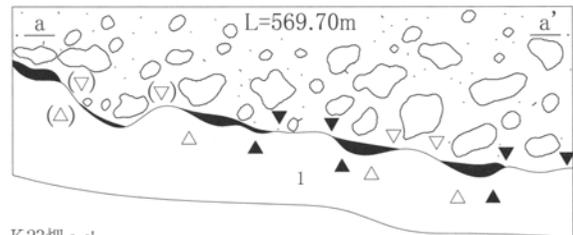
K21畑 a-a'
1 暗褐色土 やや砂質。角礫を多く含む。



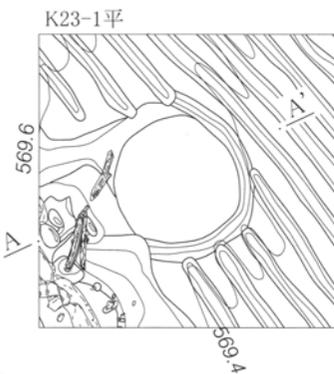
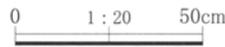
K21畑 b-b'
1 褐灰色土 径1～2cmの角礫を多く含む。



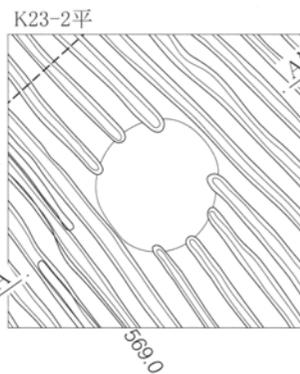
K22畑 a-a'
1 褐灰色土 径1～2cmの角礫を多く含む。



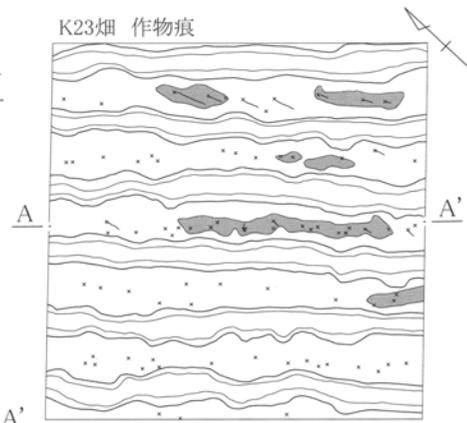
K23畑 a-a'
1 黒色土 やや砂質。径1～3cmの角礫をやや多く含む。



A L=569.80m



A' A L=569.70m



A' A L=569.20m

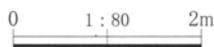


図8 IX区 K20～23号畑(2)

第1章 久々戸遺跡

その境界には境木46が存在する。当初は、畑の境界杭と考えたが、断ち割ったところ、立木の跡であることが判明し、境木として扱った。K20号畑とK21号畑の畝サクの境界は、一部食い違う個所も見られるが、分離できない個所もあり、その境界は明瞭でない。あるいは耕作時には、同一畑として扱っていたことも予想される。畝サクの状況もK21・22号畑で大きな差異は認められない。畝サクは等高線に斜行して走行する。

畝サクの状況は、傾斜地であるため、あまり明瞭でないが、断面形状では畝上はフタコブ状になっている。As-A軽石は、サク内には堆積せず、畝上のみ堆積している状況が観察される。しかし、畝上のAs-A軽石の上に耕作土とみられる土は存在しない。土寄せを行う時にサク内のAs-A軽石のみを寄せる程度の土寄せを行ったか、あるいはサク内のAs-A軽石だけを除去した可能性が考えられよう。

K21号畑

K20号畑の南側、2号道と3号道により区画される。3号道からは分岐した道が段を切り、枝道が延びる。先述のようにK20号畑と同一畑の可能性もある。平坦面はないが、畝サクの形状等からK21-1号畑とK21-2号畑の単位畑に分けた。

K21-1号畑は畝サクの走向は等高線と斜行しほぼ南北方向である。畝サクの状況は、あまり明瞭でないが、畝上はフタコブ状になっている。As-A軽石は、サク内には極少量堆積し、畝上にやや厚く堆積している状況が観察される。また、畝上のAs-A軽石の上に耕作土とみられる土は存在しない。土寄せ時にサク内のAs-A軽石のみを寄せる程度の土寄せを行ったか、あるいはサク内のAs-A軽石だけを除去した可能性が考えられる。

K21-2号畑はK21-1号畑と畝サクは連続しているが、K22号畑との位置関係及びAs-A軽石の堆積状況の差異から、別の単位畑として認識した。畝サクの走行はほぼ南北であり、As-A軽石はK21-1号畑と異なり、畝上ではなくサク内に堆積し

ている。畝の断面形状はK21-1号畑と同一であり、作業の段階が若干異なるものと考えられよう。

K22号畑

下段のK21-2号畑と2号掘立柱建物の上に位置する。畝幅が平均102cmと他と比較して広い畑である。畝サクは等高線に直交するように走行する。畝の断面形状はかまぼこ状をなし、全面にAs-A軽石が堆積していた。サク内は若干厚く堆積している。西ノ上遺跡に比較すると、サクの幅が若干広い。

北端のサクはK21-1号畑の畝サクと切り合っているように見える。K21-1号畑とK22号畑の境界溝を兼ねている可能性もある。

南端は、湧水により調査できず明らかでない。ただし湧水状況から考えると、それほど離れていない位置に端があったと思われる。

また、5号石垣と接する個所においては石垣と平行するように、2本のサクが認められる。1畝だけ異なる作物を植えたものであろうか。畝幅は通常のものと同じ程度である。あるいは根切り溝の可能性も考えられよう。

K23号畑

IXA区の最下段である。泥流はこの地点が最も厚く約3.5m堆積している。5・6号石垣によって区画される。北・東は調査区外のため範囲不明。畝サクは、等高線に沿って南東-北西方向に走る。畝幅は約35cmと狭く、他の畑とは異なる。麻畑の可能性が考えられる。作物の根が遺存しており、後述するように、形状から麻の根の可能性が高い。

畝サクは明瞭であり、サク内にAs-A軽石が堆積し、畝頂部にもAs-A軽石が若干堆積する。ただし、畝幅が狭いため、明瞭なフタコブ状にはなっていないが、一部にフタコブ状になっている様子が確認される(図8)。

平坦面は2基検出した。K23-1号平坦面は6号石垣に接するように、K23号畑の最南端中央に検出した。境木36とした立木のため形態は若干歪んでい

るが、ほぼ円形である。周囲に幅20cm程の溝を巡らし、内部は平坦である。K23-2号平坦面は、K23-1号平坦面の約5m北東に検出した。形状はあまり明瞭でなく、畝サクが途切れているため平坦面と認定した。周囲の溝は認められない。内部には軽石がなく、おそらく表土剥ぎ時に多少削ってしまったものと思われる。K23-1号畑とK23-2号畑の畝サクは連続しているが、おそらく、この平坦面の南側に単位畑境があるものと考えられる。

また、K23号畑では、一部に作物と考えられる植物遺存体が検出された。残りの良い部分を選びAs-A軽石を除去し精査した(図8)。図中の「×」が作物の根が残る位置、そして「~」がその根から伸びる茎である。畑の断面形状は、泥流による攪乱のため不明瞭な部分も多いが、両側から土寄せされ、畝中央が若干凹んでいる。図ではトーンで示した。すべての根が遺存しているわけではなく、空洞になっているところもあり、図示した以上の根があったものと考えられる。断面は、根の位置に沿って断ち割ったため厳密には見通しである。それによれば、5cm程の間隔で植えられている。

根の形状は長さ10cm程、太さ0.5~1cm程の直根であり、先端に行くに従い、徐々に細くなる(PL15中央上)。また、まばらにヒゲ根が伸びている。茎は、中心に空洞のある管状である。これらの形状は、麻の現生標本(PL15右上)と類似しており、おそらく麻と考えられる。自然科学分析では麻の可能性が高いが、断定できないとの結果である。分析結果は第5節に示してある。

また、断面では根の上部3~5cm程は南東方向に傾いている。これは茎が泥流により倒れる時に、一緒に傾いたか、あるいは耕作土自体が泥流により引きずられ移動したものと考えられる。

遺物は耕作土中から陶磁器片(図26-3)、漆器片(図26-30・31)、植物遺存体(図30-32)、動物骨(第3節(9)参照)等が出土している。遺物については第3節(8)を参照。

K24号畑

上段のIXB区とした地点である。IXA区より一段高い位置にあり、K10号畑(関2003)のある段より一段低い。南側は段差となっており、その境に4号道が東西に延びる。北側は、1号自然流路により壊されているが、1号道が延びてきていたものと予想される。東側は、傾斜が急になるため、それほど続かないと考えられる。西側は調査区外のため不明である。

畝サクは、等高線に沿ってほぼ南北方向に走向し、畝幅は約47cmである。泥流中の石による攪乱が激しく検出は部分的である。一部に「ヒコザク」となりそうなサクも認められ、単位畑に分けられる可能性もあるが、攪乱により判然としないため、その可能性を指摘するに留めておく。As-A軽石はサク内には堆積せず、畝上に認められる。またAs-A軽石の上に黒色土が乗る部分も認められ、As-A軽石降下後に土寄せがされた畑である。土寄せは、西側のサクつまり傾斜の高い側から寄せられたものであり、2番ザクの可能性が高い(関2003 P.359参照)。

K25号畑

IXB区の北側において検出した。東・北側は5号道により区画される。南側のK24号畑でも触れたように、1号道の延長により区画されていたと考えられる。西側については調査区外のため不明である。

畑面は、泥流中の石による攪乱が著しく、凹凸が激しい。また、泥流中の石が畑面に食い込んでいるものも他の畑に比べ多く認められる。畝サクは認められない。As-A軽石は表面には堆積せず、耕作土中に鋤き込まれている。鋤き込み直後のため、耕作土の表面が柔かく、泥流による攪乱を強く受けたとも考えられる。

また、K25号畑内の12号トレンチで耕作土下を確認したところ、耕作土と地山の境界において耕作具の跡と見られる痕跡を検出した(図11)。旧地表面から15cm程下位にあたる。にぶい黄褐色の地山が北側に行くほど高くなっており検出できた。検出さ

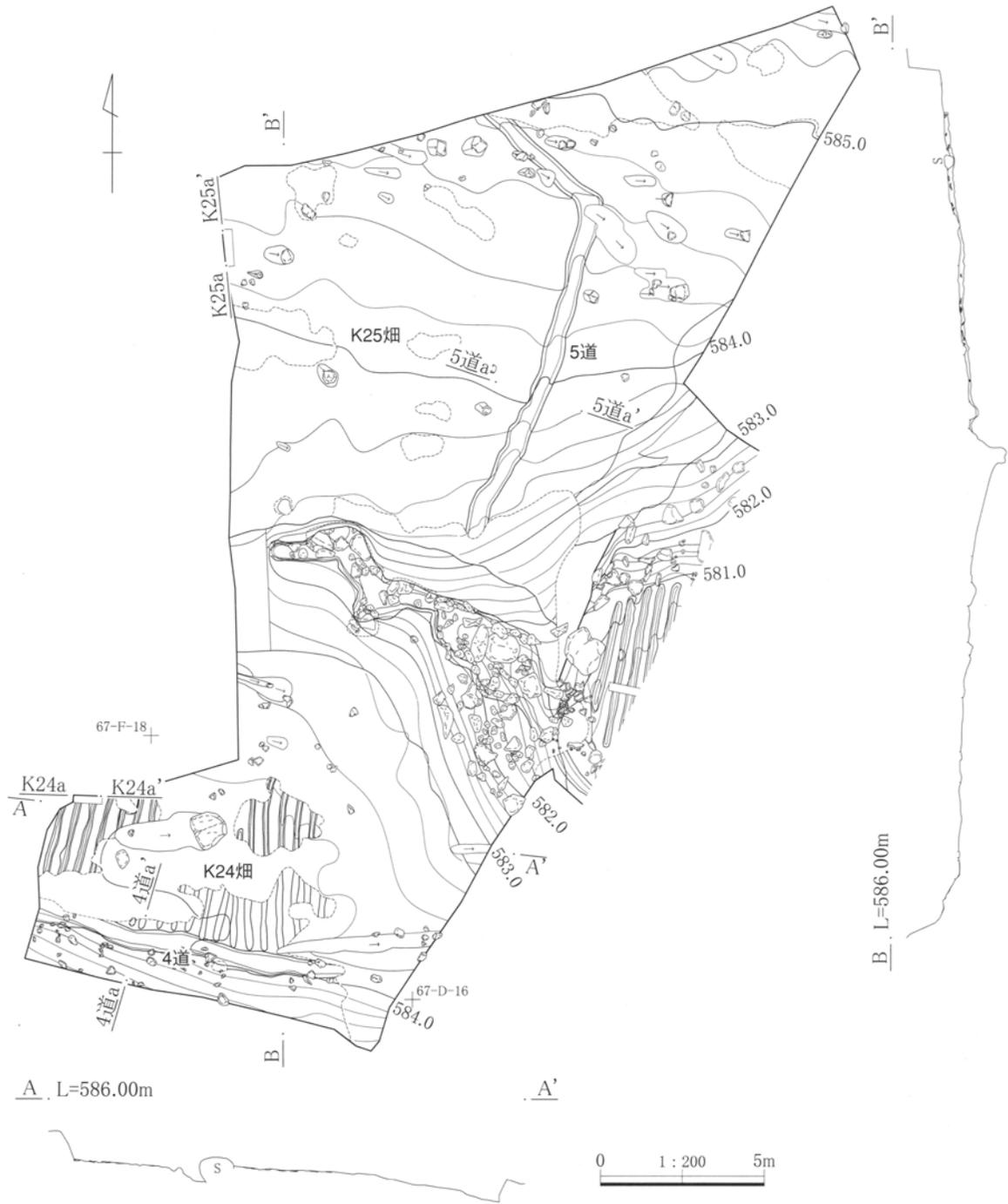
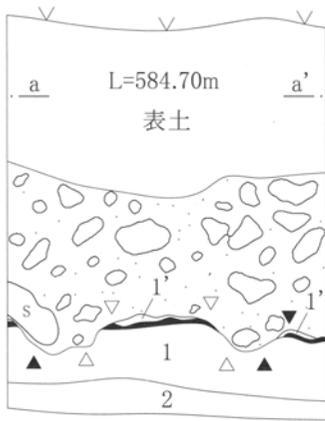


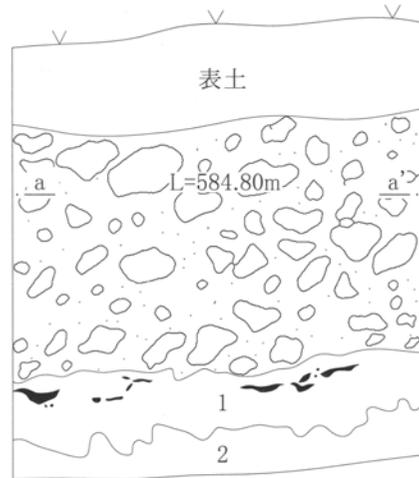
図9 IX区 K24・25号畑(1)

れた耕作具痕は直角三角形を呈しており、直角をなす一辺が耕作具の進行方向、もう一辺が刃先のあたりを示すものと考えられる。刃先は傾いて進入しており、刃先の幅を測定できるものは少ないが、幅がわかるものでは18cmである。刃先の進入角度は浅く、エンガ等の耕作具が想定され、畑開墾時等の深

耕の名残りと考えられる。



K 24 畑 a-a'
 1 黒褐色土 径0.1 cm程の白色・赤色粒子を少量含む。
 1' 1層の培土
 2 黒色土 径0.1 cm程の白色粒子を少量含む。



K 25 畑 a-a'
 1 黒褐色土 やや砂質。径0.1 cm程の白色粒子をやや多く含む。炭化物を少量含む。
 2 にぶい黄褐色土 やや砂質。1層をブロックで含む。

図10 IX区 K24・25号畑(2)

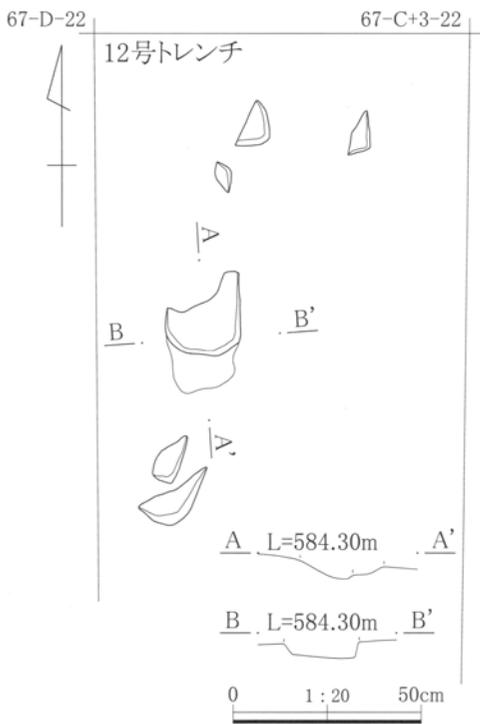


図11 IX区 K25号畑耕作具痕

K 26号畑

IX C 区の西端で確認した。泥流による攪乱が激しく、一部が確認できたに過ぎない。IX C 区の東半は傾斜が急になり、畑はなかったものと考えられる。攪乱のため区画溝は確認されていないが、K26号

畑の南東側は、やや溝状に凹んでおり、そこに区画溝があった可能性も考えられる。調査区外のより西側に畑が広がっていたと思われる。

畝サクは、北西-南東方向で等高線に沿っている。畝幅は約45 cmである。攪乱が著しく明瞭でないが、As-A軽石はサク内になく、畝上に堆積していた。また、畝上のAs-A軽石の上には一部に黒色土の堆積が見られた。As-A軽石降下後の培土がなされたものと考えたい。

K 27号畑

1号トレンチの断面観察から、畑と認定した。1号トレンチは湧水量が多く、平面的な確認は困難であった。断面では、As-A軽石が黒色土の中含まれており、As-A軽石が降下した後に、K25号畑と同様に鋤き込みが行なわれた畑と考えられる。範囲等は不明である。また、畑の北東側は段になっており、その落ち際に立木が2本検出されている。

K 28・29号畑

吾妻川の崖面に天明泥流堆積物とAs-A軽石の堆積を確認したため、調査を実施した。工事による盛土がすでに厚く盛られており、地すべり状に崩れ

第1章 久々戸遺跡

だしているため、部分的にトレンチを設定し、平面的に調査した。断面では、長さ70m以上にわたり、畑と考えられる、畝サク状の凹凸を確認した。畑境等は断面観察では不明である。K28・29号畑だけでなくより多くの畑に分けられるものと考えられる。しかし、ここではトレンチ調査を実施できた、この2畑のみ遺構名称を付した。

K28号畑は盛土下1号トレンチにおいて検出し

た。畝サクの断面形状は非常にしっかりしており、明瞭なフタコブ状をしている。As-A軽石はサク内と畝上の窪みに堆積している。

K29号畑は盛土下2号トレンチでの検出である。盛土下1号トレンチと比較して泥流の影響と考えられる攪乱が著しく、As-A軽石はサク内に少量堆積するのみである。

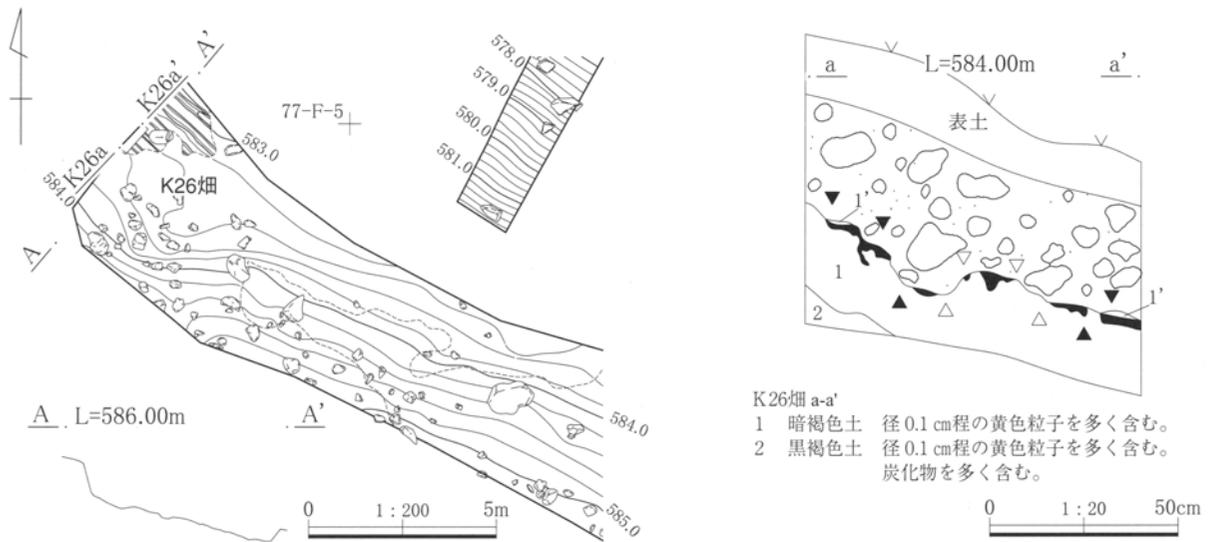


図12 IX区 K26号畑

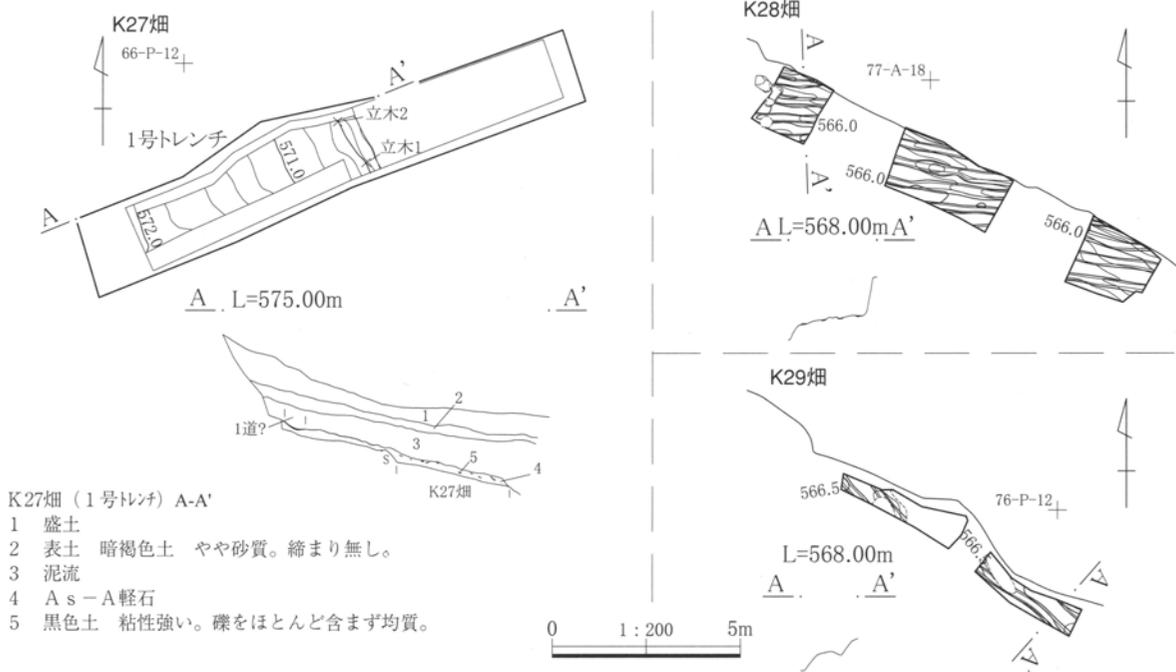


図13 IX区 K27~29号畑

(3) 掘立柱建物

1号掘立柱建物

IX A区の最北部、K20号畑の北に検出した。2号道が取り付く。As-A軽石の堆積がなく（図14点線範囲）、床は硬く締まる。As-A軽石は、北側の段下付近に厚く堆積し、北側が低い片流れの屋根であったと想定される。柱は4本柱であり、やや不整な台形状をしている。断面からは、丸太材の先端を加工し杭状にしたものを打ち込んでいる様子が観察される。柱穴1・4には泥流がつまり、柱穴2・3は空洞となっていた。柱穴2・3は泥流堆積後、木質が腐朽し空洞となったと考えられる。中央より若干柱穴1よりの位置に炭化物が薄く堆積する範囲が認められた。掘り込みは認められず、床上で直接火を焚いたものと思われる。壁の有無については不明である。ただし整地した様子はなく、傾斜地にそのまま構築しているため、壁のない雨よけ程度のものと考えられる。遺物は出土していない。

2号掘立柱建物

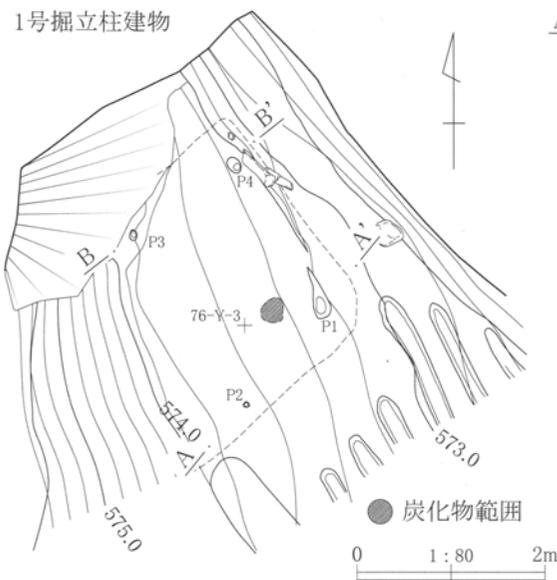
K22号畑とK23号畑の間に検出した2×3間の掘立柱建物である。K22号畑とは5号石垣で、K23号畑とは6号石垣で区画され、3号道が北から延びてきて接続する。柱穴は、柱が腐朽し空洞のもの、木質が腐らずに残るもの、泥流が入るものがみられる。

柱穴1と柱穴2の間、柱穴2と柱穴3の間にはそれぞれ建築部材と考えられる木材1・2が据えられている。1は若干ずれているが、泥流の影響と考えられよう。As-A軽石は、内部には堆積せず、周囲に厚く堆積している。5号石垣との間には、幅30cm程の浅い溝がめぐり、排水溝となっていたようである。特に5号石垣との間の溝には厚くAs-A軽石が堆積していた。東側は、6号石垣の裏込め石が露出しているため、泥流の影響により多少削られてしまったものと考えられる。As-A軽石の残りは悪い。建物の北西側及び南東側にはAs-A軽石は厚さ1cm

表4 久々戸遺跡IX区 1号掘立柱建物計測値等一覧表

建物全体の規模	1×1間	面積	2.5㎡	主軸方向	N-37-W	屋根型式	片流れ?
桁・梁行の規模(m)	平均柱間	柱穴番号	規模(cm)			次柱穴との間隔(m)	備考
	桁・梁行(m)÷間数		直径	深さ	柱径		
南東辺(1.28)		P1	18	39	—	1.28	打ち込みか。
南西辺(2.15)		P2	7	70	7	2.15	打ち込み。
北西辺(1.32)		P3	11	54	9	1.32	打ち込み。
北東辺(1.75)		P4	18	23	—	1.75	打ち込みか。

1号掘立柱建物



A L=574.50m A' B' L=574.50m B'



1号掘立柱建物

- 1 暗褐色土 径1cm程の角礫を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 径1～2cm程の角礫を多く含む。
- 3 にぶい黄褐色土 径1～5cm程の角礫を非常に多く含む。
- 4 黒褐色土 径1～5cm程の角礫を多く含む。
- 4' 黒褐色土 径1～3cm程の角礫を多く、径10cm程の角礫を少量含む。
- 5 にぶい黄褐色土 径1～5cm程の角礫を非常に多く含む。
- 6 暗褐色土 径1～3cm程の角礫をやや多く含む。

図14 IX区 1号掘立柱建物

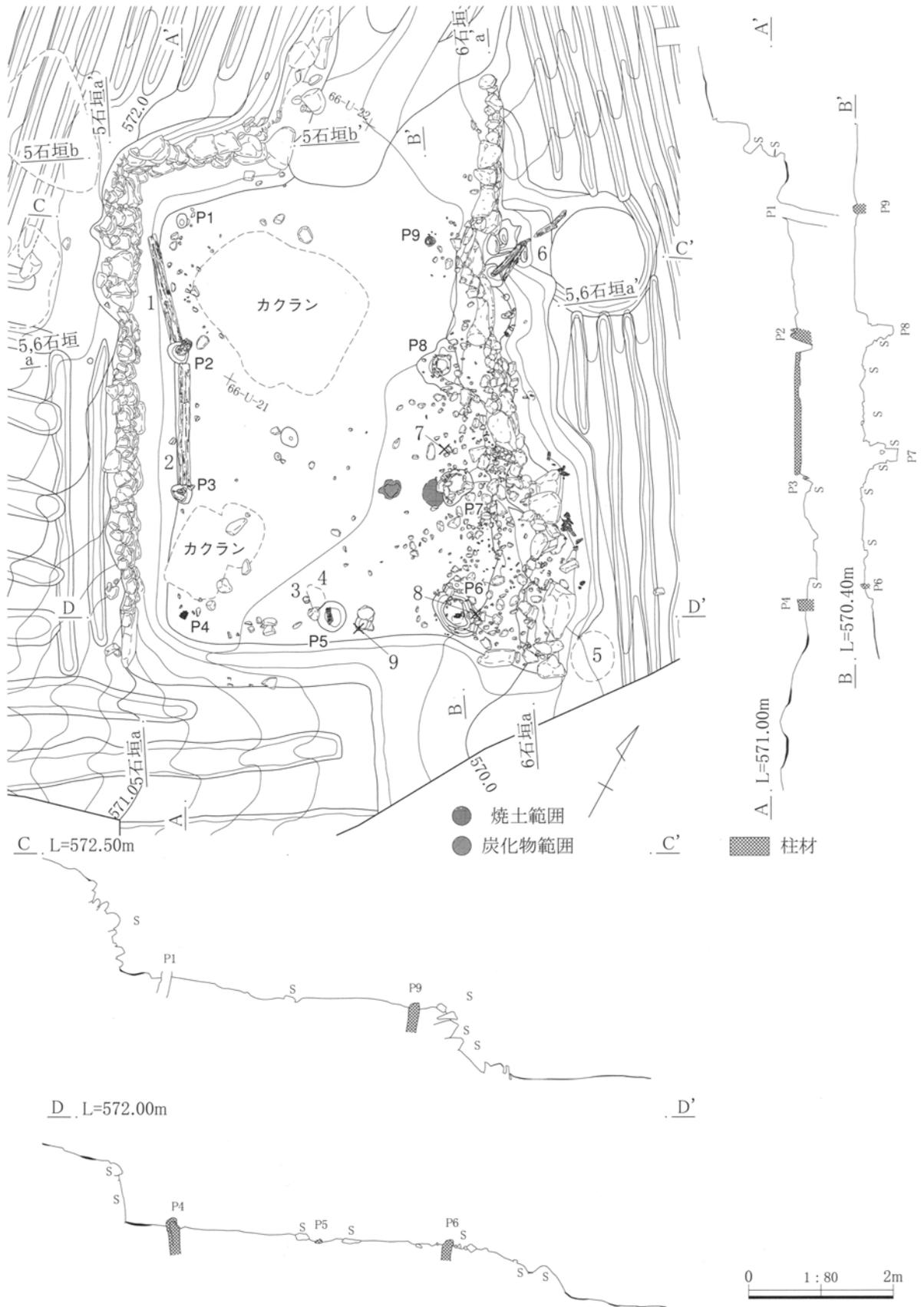
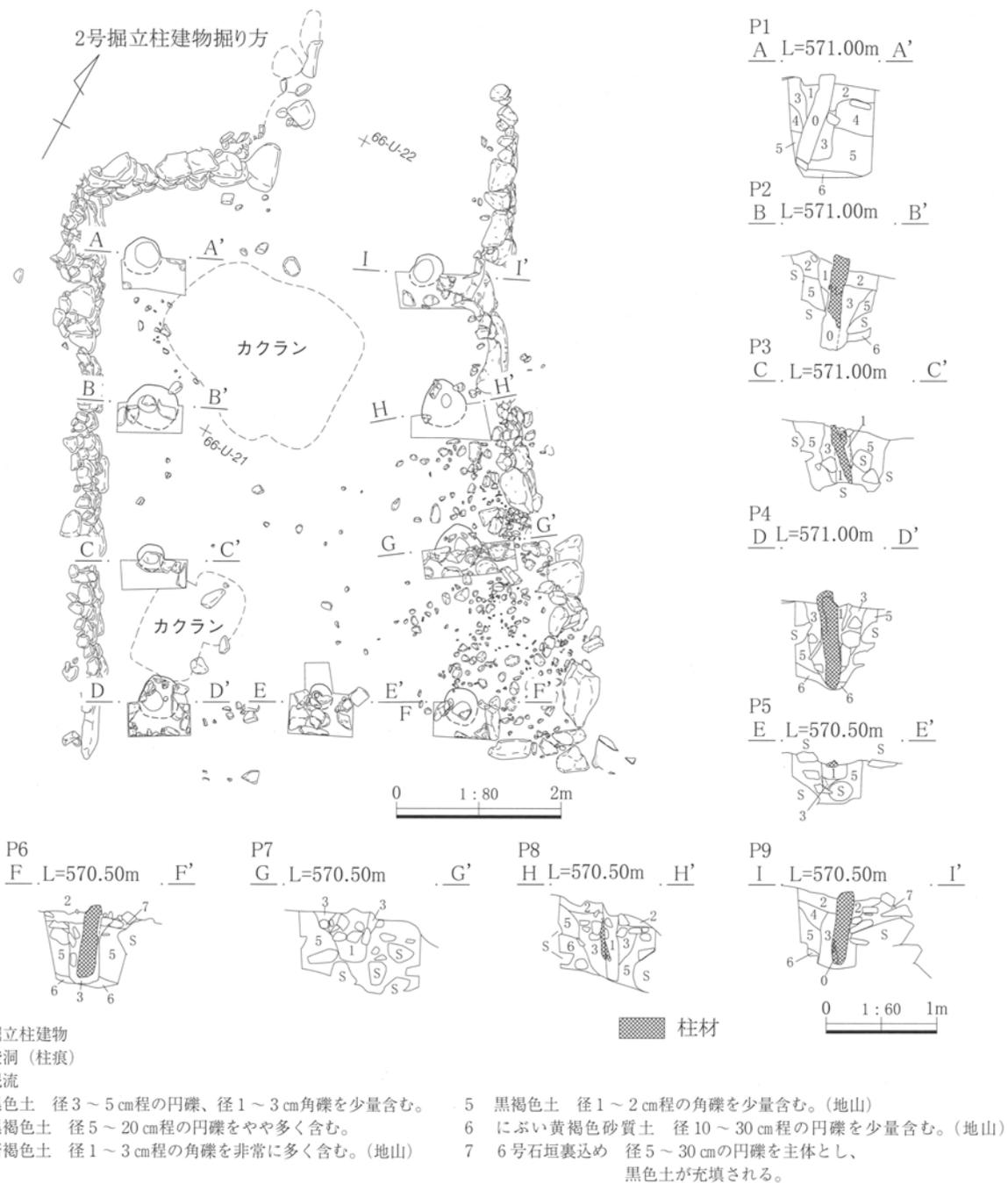


図15 IX区 2号掘立柱建物(1)

第3節 泥流面の遺構と遺物



2号掘立柱建物焼土・炭化物範囲

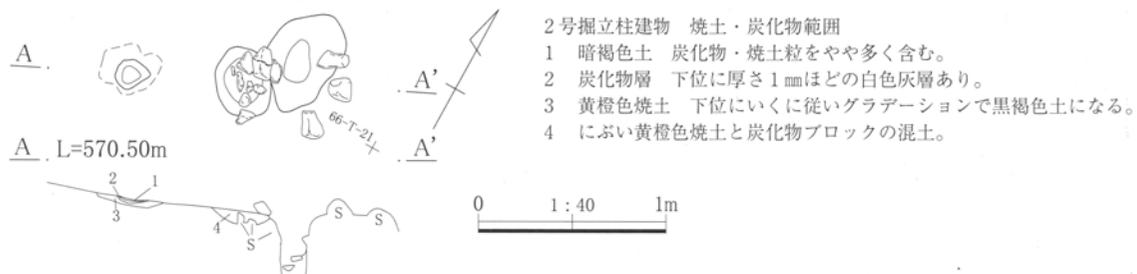


図16 IX区 2号掘立柱建物(2)

第1章 久々戸遺跡

程堆積しており、平均的なものである。以上より考えると上屋構造は、切妻屋根あるいは南西側の低い片流れの屋根であったと想定される。

また、建物内部の南東隅よりの地点に焼土と炭化物の分布を確認した。焼土は径24cm程の円形を呈し、若干掘り凹め火を焚いている。焼土は、地山が焼けたものであり、その上に薄い灰層、炭化物層が

堆積している。炭化物範囲は柱穴7に接し、炭化物と焼土ブロックが混土となって堆積している。ここで、直接火を焚いたものではなく、別地点で燃やしたものを移動したものと考えられる。

遺物は建築部材(図29-1・2)や陶磁器片(図26-7~9)、漆器等の木製品(図26-3)が出土している。遺物については第3節(8)を参照。

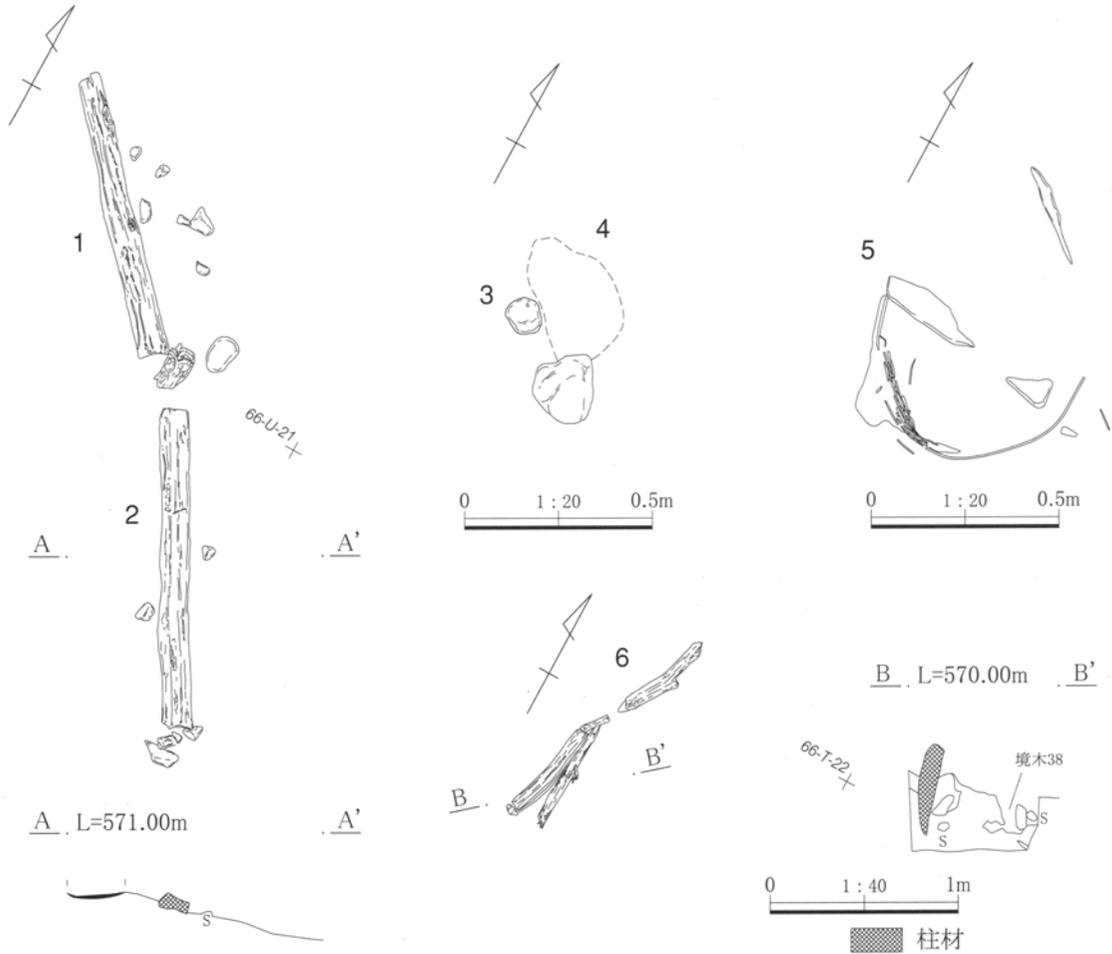


図17 IX区 2号掘立柱建物(3)

表5 久々戸遺跡IX区 2号掘立柱建物計測値等一覧表

建物全体の規模	2×3間	面積	19.3m ²	主軸方向	N-29-W'	屋根型式	切妻あるいは片流れ
桁・梁行の規模(m)	平均柱間	柱穴 番号	規模(cm)			次柱穴との 間隔(m)	備考
	桁・梁行(m)÷間数		直径	深さ	柱径		
西辺(5.45)	P1~P4	P1	42	67	16	1.82	
	5.45÷3=1.82	P2	60	75	16	1.85	柱材残存。
南辺(3.72)	P4~P6	P3	30	48	15	1.78	柱材残存。
	3.72÷2=1.86	P4	49	76	19	1.96	柱材残存。
東辺(5.32)	P6~P9	P5	28	22	-	1.76	柱材残存。
	5.32÷3=1.77	P6	41	65	20	1.91	柱材残存。
北辺(3.38)	P9~P1	P7	55	50	-	1.81	
	3.38÷2=1.69	P8	54	59	15	1.60	柱材残存。
		P9	40	63	16	3.38	柱材残存。

(4) ヤックラ

28号ヤックラ

中段のK19号畑と上段のK25号畑の間の段に検出した。K19号畑と段の間には根切り溝があり、斜面の途中に、径5～20cmの円礫を主体とした礫が集積されている。段差の斜面は地山の礫が多く露出し、特に区画された様子もないため、ヤックラの範囲は明瞭でない。密集している部分をヤックラとして捉えた。位置関係から、K19号畑の耕作時に不要な石を集めたものと考えられる。

29号ヤックラ

K19号畑とK25号畑のある面の間の段に28号ヤックラと並び検出した。段の傾斜がやや緩くなっている地点に、径10～30cmの円礫を主体とした礫が集積されている。段差の斜面は地山の礫が多く露出し、特に区画された様子もないため、ヤックラの範囲は不明瞭であるが、密集している部分をヤックラとして捉えた。位置関係から、K19号畑の耕作時に不要な石を集めたものと考えられる。

30号ヤックラ

1号道の南側に接し、IV区とIX区との間の段丘崖斜面に検出された。1号道側(斜面の下側)に径50cm前後の大きめの円礫を配し、その上に径5～30cm程の円礫を人為的に集積している。位置関係から、K19号畑の耕作時に不要な石を集めたものと考えられる。

31号ヤックラ

K22号畑の南側の斜面において検出された。この斜面は、地山に円礫を多く含む段丘崖に相当するも

のと考えられ、円礫が表面に露出し、自然の円礫の部分とヤックラの範囲があいまいである。しかし、ヤックラの北東側(斜面に対して下側)は径60cm程の扁平な円礫を立て半円形に小口に並べており、明らかに範囲を区画している。この根石状に区画した範囲に、K22号畑で不要な礫を集めたものと考えられる。礫は5～50cm程で円礫が主体である。

32号ヤックラ

K21-2号畑とK25号畑のある面の間の段の斜面に検出した。K21-2号畑と斜面の間には2号道があり、その道に接し、径50～70cmの円礫を並べ、その上方に径5～20cmの円礫を主体とした礫が集積されている。規模は小さく集められた石も他のヤックラに比して少量である。位置関係から、K21-2号畑の耕作時に不要な石を集めたものと考えられる。

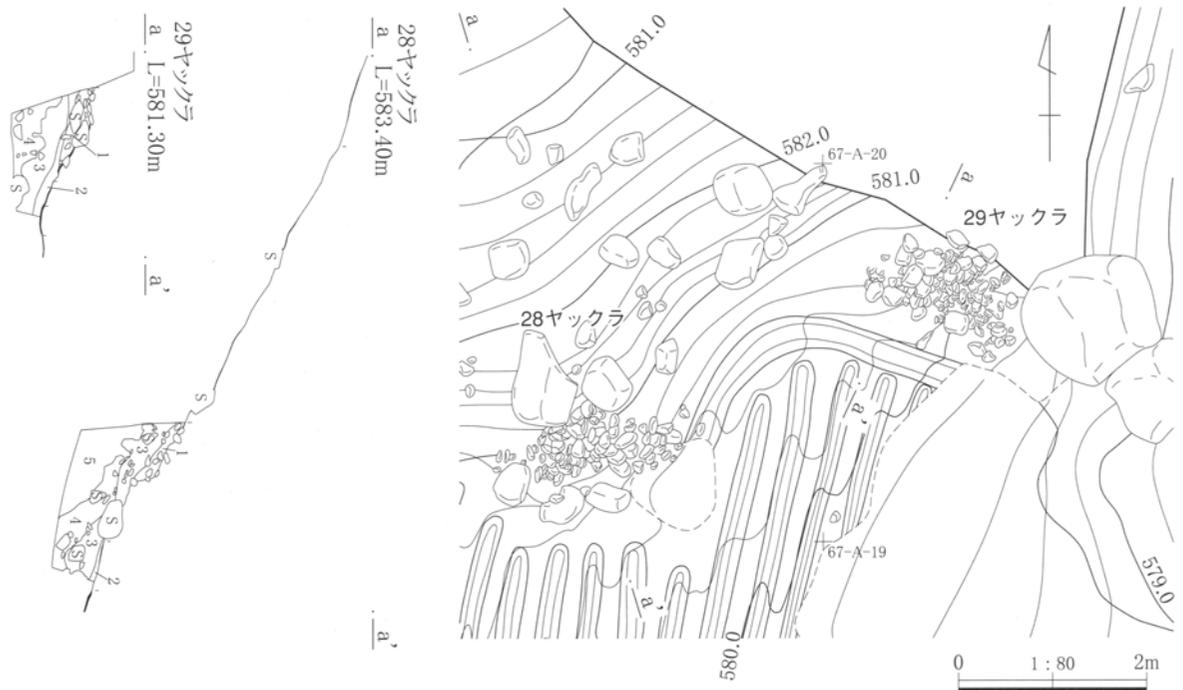
(5) 道

1号道

IX区とI・IV区との間の段丘崖の斜面下で検出した。西北西から東南東に走行する。幅50cm程で、長さ25.5mを検出した。東は、1号トレンチの断面(図13)に不明瞭ながら若干凹みAs-A軽石が厚く堆積する部分が観察され、この道の延長と考えられる。西側は、1号自然流路のため攪乱され不明である。おそらくK24号畑とK25号畑の間を西に向け延びていたものと考えられる。検出された部分では、K19号畑との間には、標高差20cm程の小段があり、径10～30cm程の円礫が1列に並べられている。そして、その上をやや高く土手状にし、道部分は若干凹んでいる。他の地点と比較し、道の面はやや硬く締まっている。

表6 久々戸遺跡IX区 ヤックラ計測値等一覧表

遺構名称	位置	長径 (m)	短径 (m)	厚さ (m)	形態	平面形状	礫最大径 (cm)	備考
28号ヤックラ	67区A-19	2.1	0.7	0.17	乱雑積上	不整形	31	K19号畑に隣接。
29号ヤックラ	66区Y-19	1.8	1.0	0.28	乱雑積上	不整形	36	K19号畑に隣接。
30号ヤックラ	66区Y-15	2.4	1.8	0.48	乱雑積上	不整形	102	K19号畑に隣接。
31号ヤックラ	66区U-16	3.0	2.4	0.35	乱雑積上	不整形	70	K22号畑に隣接。
32号ヤックラ	66区X-20	2.1	0.7	0.34	乱雑積上	不整形	41	K21-2号畑に隣接。

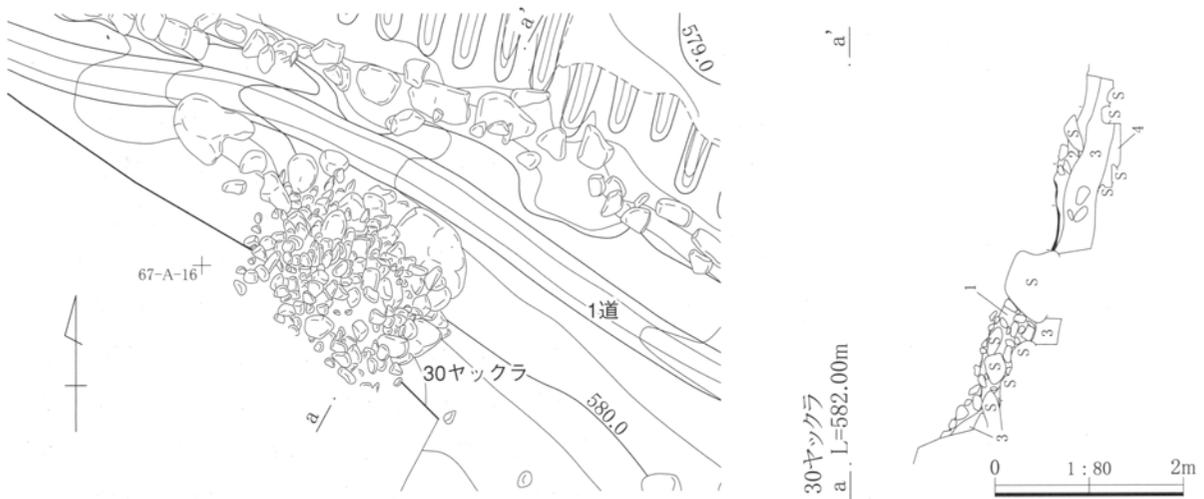


28号ヤックラ a-a'

- 1 28号ヤックラ 径5～20 cmの円礫を主体とし、黒褐色土が隙間に入る。
- 2 黒褐色土 やや砂質。径1～2 cm程の円礫を極少量含む。
- 3 黒色土 粒子細かく、やや粘性あり。径5～10 cm程の円礫を少量含む。
- 4 におい黄褐色土 径5～20 cmの円礫を少量含む。
- 5 黄色岩盤 風化著しく、砕くと砂状になる。

29号ヤックラ a-a'

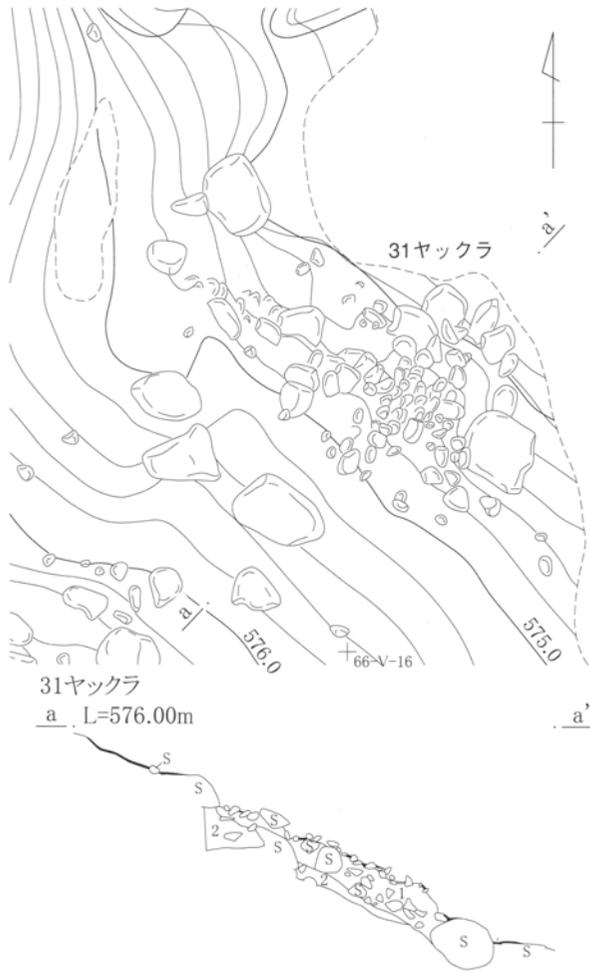
- 1 29号ヤックラ 径10～30 cmの円礫を主体とし、黒色土が隙間に入る。
- 2 黒褐色土 やや砂質。径1～2 cmの円礫を極少量含む。
- 3 黒褐色土 におい黄褐色土ブロックを多く含む。
- 4 におい黄褐色土 径1～2 cmの円礫を少量含む。



30号ヤックラ a-a'

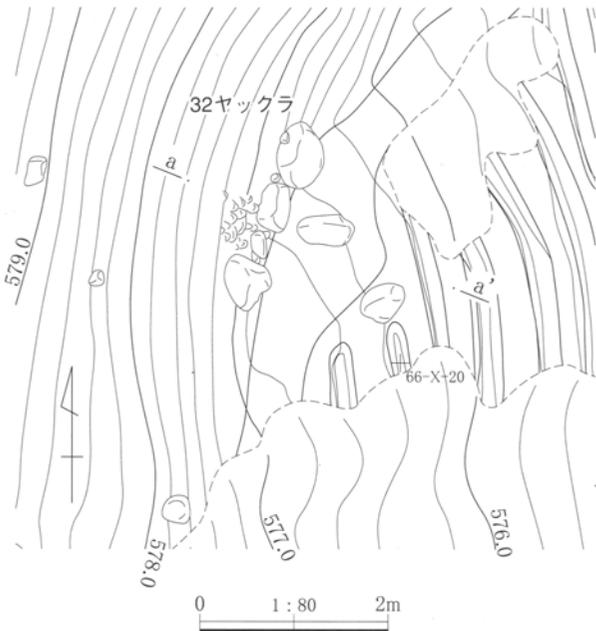
- 1 30号ヤックラ 径5～30 cmの円礫を主体とし、黒色土が隙間に入る。
- 2 黒褐色土 やや粘性あり。径3～5 cmの円礫を少量含む。
- 3 黒色土 やや粘性あり。径0.1～0.2 cmの黄色粒子をやや多く、径5～20 cmの円礫をやや多く含む。
- 4 におい黄褐色土 径3～5 cmの円礫をやや多く含む。

図18 久々戸遺跡 IX区 28～30号ヤックラ



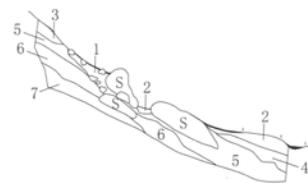
31号ヤックラ

- 1 31号ヤックラ 径5～50cmの円礫を主体とし、黒褐色土が隙間に入る。
- 2 黒褐色土 やや粘性あり。径5～20cmの円礫をやや多く含む。



32号ヤックラ

a L=578.00m



32号ヤックラ

- 1 32号ヤックラ 径5～70cmの円礫を主体とし、黒褐色土が隙間に入る。
- 2 暗褐色土 径1～5cmの円礫を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色土 径3～5cmの円礫を少量含む。二次堆積？
- 4 3層と同質
- 5 黒褐色土 炭化物を少量、径1cm程の角礫をやや多く、径1～2cmの円礫を少量含む。
- 6 暗褐色土 径1～3cm程の角礫をやや多く、径5cm程の円礫を少量含む。
- 7 にぶい黄褐色土 径1～3cmの角礫をやや多く含む。

図19 久々戸遺跡 IX区 31・32号ヤックラ

2号道

K20・21号畑の西側を段丘崖下に沿って延びる道である。幅40cm程の狭いものであり、長さ約36.3m検出した。この道の北端に1号掘立柱建物が位置し、南端に1・2号遺構が位置している。

3号道

K21号畑とK23号畑の間に位置し、K21号畑側は斜面になりその上部に境木が植えられている。K23号

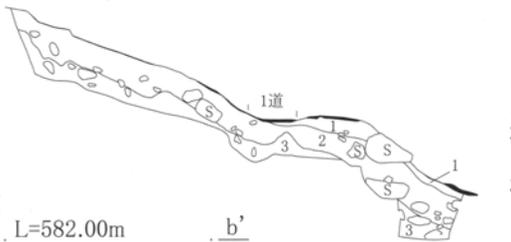
畑側には7号石垣が構築されている。道幅は約70cm程であり、硬く締まっている。調査区の北側で切れているが、K20号畑の北東側の段に沿って延びるものと想定される。検出された長さは約17.4mである。南側は、2号掘立柱建物に接続し、掘立柱建物の手前で、K21・23号畑に方向に「→」状に分岐している。K21号畑に延びる道は、多少傾いているが段を切るようにフラットな面が形成されている。段を昇降するためのものであろう。

1号道

a L=580.00m

1号道

b L=582.00m



1号道 a-a'

- 1 黒色土 粒子細かくやや粘性あり。径1～5cm程の円礫を少量含む。
- 2 黒褐色土 炭化物をやや多く、径5～20cm程の円礫を多く、径0.1～0.2cm程の黄色粒子をやや多く含む。
- 3 におい黄褐色砂礫層 径5～30cm程の円礫を非常に多く含む。

1号道 b-b'

- 1 黒褐色土 やや砂質。径1～2cmの円礫を極少量含む。
- 2 黒色土 粒子細かく、やや粘性あり。径1～5cmの円礫を少量含む。
- 3 黒褐色土 炭化物をやや多く含む。径0.1～0.2cmの黄色粒子をやや多く含む。
- 4 におい黄褐色土 径1～2cmの円礫を少量含む。

3号道

a L=572.00m

4号道

a L=585.00m

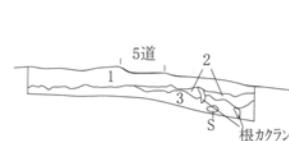


3号道 a-a'

- 1 におい黄褐色土 径0.5～3cmの角礫を非常に多く含む。
- 2 暗灰色土 径1～3cmの角礫を多く含む。
- 3 におい黄褐色土 径0.5～3cmの角礫を非常に多く含む。1層よりやや明るい。
- 4 黒色土 径0.5～3cmの角礫を非常に多く含む。グライ化。
- 5 黒褐色土 径1～5cmの角礫を非常に多く含む。
- 6 7号石垣裏込め 径5～15cmの円礫を主体とし、黒褐色土が充填される。

5号道

a L=585.00m



5号道 a-a'

- 1 褐灰色土 径0.1cm程の黄色・白色粒子をやや多く含む。
- 2 暗褐色土 径0.1cm程の黄色粒子をやや多く含む。
- 3層ブロックを少量含む。
- 3 におい黄褐色土 締まり強い。径0.1cm程の黄色粒子を多く含む。

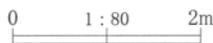


図20 久々戸遺跡 IX区 1・3～5号道

第3節 泥流面の遺構と遺物

K23号畑に延びる道は、K23号畑に向かい緩く傾斜するスロープ状になっている。また、この3号道は現道をトレースしているものと想定されたため、8・9号トレンチを設定し調査を行った。しかし、トレンチ範囲内では、泥流下の道を検出することはできなかった。

4号道

K24号畑の南の段下を東西に走行する。幅約60cm、長さ9.5mを検出した。As-A軽石がやや厚く堆積し、若干凹む程度であり、道というよりは畑の根切り溝的な存在である。K24号畑の東を囲み、1号道に合流したものと考えられるが、泥流及び1号自然流路による攪乱のため不明である。

5号道

K25号畑の東側・北側を区画するように検出した。幅60cm程で、南北方向に10.4m、東西方向に4mの計14.4mを検出した。南側は1号道に合流したものと想定されるが攪乱により不明である。泥流による攪乱が著しく不明瞭であるが、As-A軽石がやや厚く堆積し、全体としてみた場合、若干凹んでいる。道というよりは畑の根切り溝的な機能が強いものと考えられる。また、K25号畑はAs-A軽石降下後に鋤き込まれた畑であるため、K25号畑との境界

は地表面におけるAs-A軽石の有無で分けられる。5号道より、東・北側はAs-A軽石がほぼ全面に堆積し、畝サクは認められない。段丘崖が迫るため、非耕作地であったものと推定される。

(6) 石垣

5号石垣

2号掘立柱建物の北西側・南西側を区画する石垣であり、ほぼ直角の角を有する。2号掘立柱建物を建てるために切り盛りをし、用地造成をしている。その切った側にあたる部分に5号石垣を、盛った側に6号石垣を築いている。

石の積み方では、南端の径1m程の大石を基点とし、順次、下から上、南から北へと積んでいる。また、図のA-A'とB-B'では、その接合部に隙間があり、石同士が噛み合っていない。A部分を積んだ後、B部分を積んだものと考えられる。

石垣の構成礫は、円礫・亜円礫を主体とし、角礫は少ない。大形の礫は横長に使い、小型・中型の礫は、小口を見せ積み上げている。礫は、円礫・角礫ともに地山に含まれるものを使用したと考えられる。

6号石垣

2号掘立柱建物の北東側を区画する石垣である。2号掘立柱建物を建てるために切り盛りをし、用地

表7 久々戸遺跡Ⅸ区 道計測値等一覧表

遺構名称	位置	長さ(m)	幅(m)	備考
1号道	66区U-21~67区B-17	25.5	0.3~0.7	平面図・断面ポイントは図6。石列を伴なう。
2号道	66区X-19~76区Y-2	36.3	0.3~1.2	平面図・断面ポイントは図7。根切り溝的。
3号道	66区U-21~76区U-1	17.4	0.4~0.9	平面図・断面ポイントは図7。
4号道	67区D-16~67区E-16	9.5	0.5~0.7	平面図・断面ポイントは図9。根切り溝的
5号道	67区C-19~67区C-22	14.4	0.4~0.8	平面図・断面ポイントは図9。根切り溝的。

表8 久々戸遺跡Ⅸ区 石垣計測値等一覧表

遺構名称	位置	長さ(m)	高さ(m)	段数	積み方	築石の特徴	礫最大径(cm)	備考	
5号石垣	(A部分)	66区T-20~66区U-21	6.51	1.18	10段	野面積乱積	円礫主体	90	平面図・断面ポイントは図15。
	(B部分)	66区U-21~66区U-21	2.50	1.04	8段	野面積乱積	円礫主体	48	
6号石垣	66区S-20~66区T-22	8.35	0.80	4段	野面積乱積	円礫主体	80	平面図・断面ポイントは図15。	
7号石垣	(その1)	66区T-22~66区U-25	(12.08)	1.01	6段	野面積乱積	円礫主体	76	
	(その2)		(8.97)	0.63	9段	野面積乱積	円礫主体		

第1章 久々戸遺跡

5石垣

a. L=573.00m

a' b. L=573.00m

b'



6石垣

a. L=571.00m

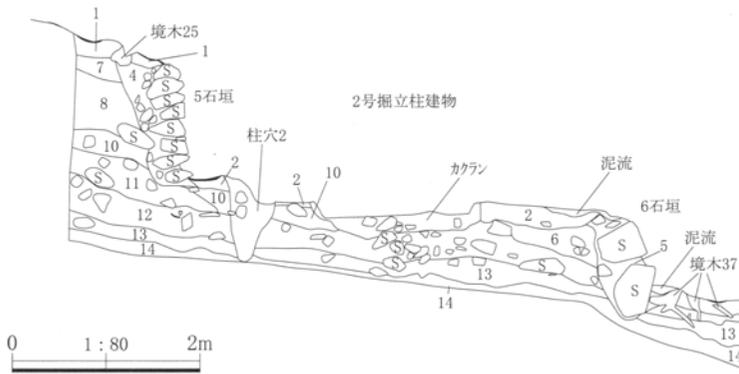
a'



5,6石垣

a. L=573.00m

a'



5・6号石垣 a-a'

- | | |
|--|---|
| <p>1 褐灰色土 径1~2cmの角礫を少量含む。</p> <p>2 褐灰色土 径1~2cmの角礫をやや多く含む。
1層よりやや明るい。</p> <p>3 灰黒色土 グライ化。径1~2cmの角礫を少量、
径1~5cmの円礫を少量含む。</p> <p>4 5号石垣裏込め 径10~30cmの円礫を主体とし、
暗褐色土が充填される。</p> <p>5 6号石垣裏込め 径10~20cmの円礫を主体とし、
黒色土が充填される。</p> <p>6 黒色土 径5~20cmの円礫をやや多く含む。</p> | <p>7 黒色土 炭化物を少量、径5~10cmの円礫を少量、
径1~2cmの角礫をやや多く含む。</p> <p>8 黒色土 径1~2cmの角礫を少量含む。</p> <p>9 黒色土 径5~30cmの円礫を少量、径1~2cmの角礫を少量含む。</p> <p>10 黒褐色土 径1~5cmの角礫を非常に多く含む。</p> <p>11 暗褐色土 径5~30cmの円礫を少量、
径1~5cmの角礫を非常に多く含む。</p> <p>12 黒色土 径5~20cmの円礫を多く含む。</p> <p>13 にぶい褐色砂質土 径5~10cmの円礫を少量含む。
黄褐色砂層 部分的に砂礫層(径10~30cmの円礫を含む)。</p> |
|--|---|

図21 IX区 5・6号石垣

造成をし、その盛土側にあたる段差部分に構築している。北から3分の2程は石積みが整然としているが、南側の3分の1程はK23号畑側にせり出し、ヤツクラ状になっている。おそらく、石垣が崩れたものと考えられる。ただし、石垣前面に境木が並んでい

ることから、その崩落は泥流によるものではなく、それ以前であると考えられる。

石垣の構成礫は、円礫・亜円礫を主体とし、角礫は極少量である。大形の礫は横長に用い、小型・中型の礫は、小口を見せ積み上げている。ただし、5

号石垣と比較すると、その積み方は、若干雑な印象を受ける。礫は、円礫・角礫ともに地山に含まれるものを使用したと考えられる。

7号石垣

3号道の東側、K22号畑との境に築かれている。石垣の構成礫は、10～40 cm程の円礫で構成され、角礫は極少量である。乱石積みであるが、小口を見せて、比較的しっかりと構築されている。

泥流下の面で境木を断ち割ったところ、石垣の石積みが、さらに下に続くことが判明したため、掘り

下げた。石垣はさらに30 cm以上埋もれていた。断面の観察では、局所的な土砂崩れにより、埋没した可能性が考えられる。

石の積み方も、下は礫が大きく、安定した積み方であるのに対して、上方に行くほど礫は小さく、乱雑な積み方である。上方の一部は、土砂崩れ以降に積み足された可能性もある。

立面図その2では、6号石垣と7号石垣のつながりが読みとれる。7号石垣と6号石垣の間には、隙間が存在し連続していない。また、6号石垣は泥流下面でほとんどが露出していたのに対し、7号石垣

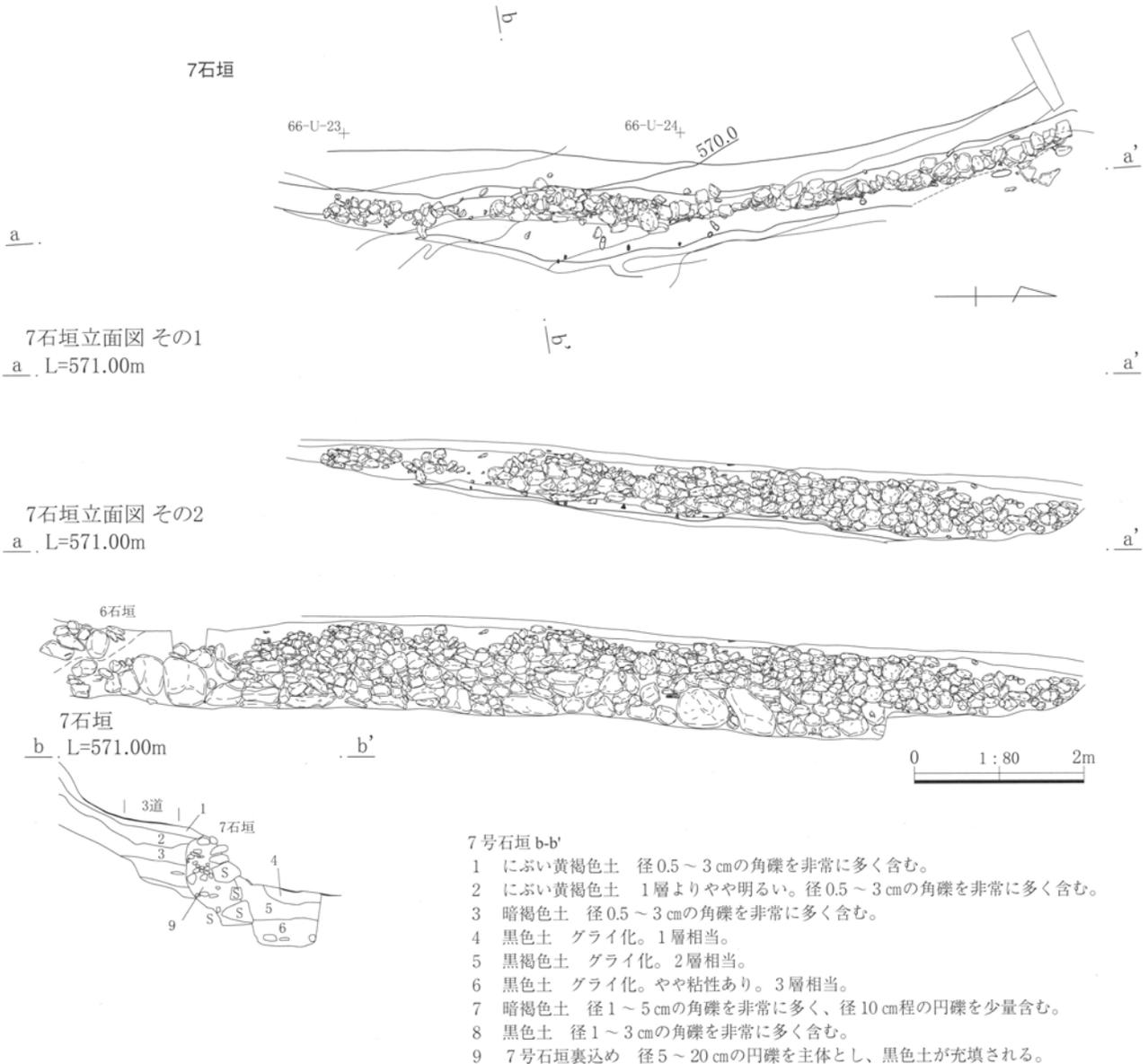


図22 IX区 7号石垣

第1章 久々戸遺跡

部はすべて埋没していた。これは、7号石垣の下部が土砂崩れにより埋没した後に、6号石垣が構築されたことを示すものであろう。よって、7号石垣が古い構築であり、6号石垣については2号掘立柱建物がそれに続く時期の構築と考えられよう。

(7) その他の遺構

1号遺構

K22号畑の西側に検出した。K19号畑とK22号畑の間の段の斜面下に、長軸1.92m×短軸1.26mの楕円形に掘り込まれた遺構である。ほぼ全面にAs-A軽石が堆積するが、斜面側にやや厚く堆積している。

斜面から転がり落ちた分が余計に堆積したものであろう。全面に堆積していることから、上屋はなかったものと考えられる。断面図中の▼から下位の斜面は、地山と考えられる褐色粘土層が露出し、直接As-A軽石に覆われている。また、傾斜角度も急になっているため、斜面下位は人為的に切られていると考えられる。また、この斜面の途中からは少量の湧水が認められ、泥流被災前にも湧水していた可能性がある。水溜め用の施設の可能性があると考えられる。ただし、この遺構から排水溝等は認められず、湧水は極少量であったと思われる。用途については、次の2号遺構とも合わせて検討されるべきものである。

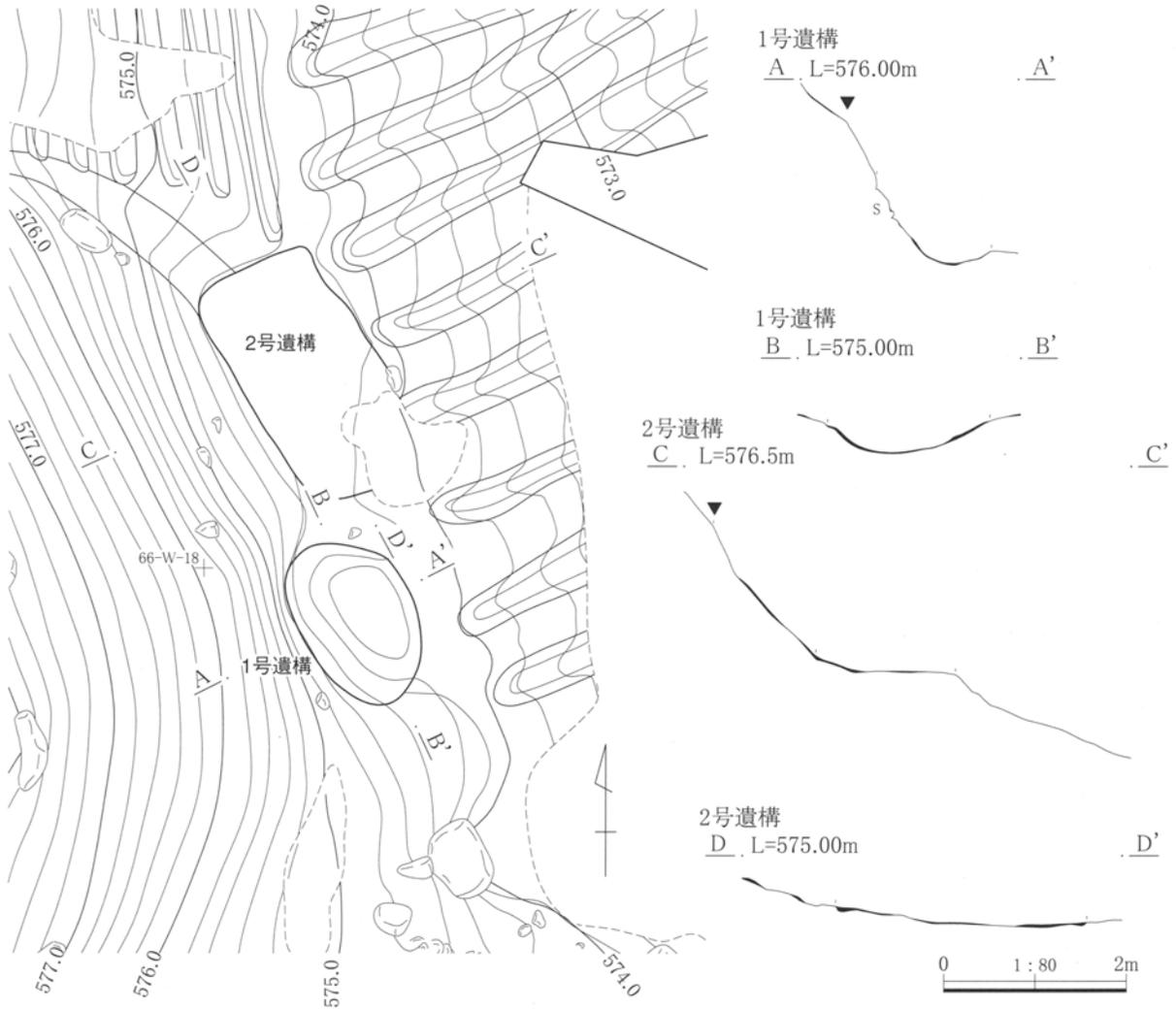


図23 IX区 1・2号遺構

2号遺構

K22号畑の東側に検出した。K19号畑とK22号畑の間の段の斜面下に、長辺2.72 m×短辺1.48 mの長方形の平坦な範囲である。ほぼ全面にAs-A軽石が堆積するが、斜面側にやや厚く堆積している。斜面から転がり落ちた分が余計に堆積したものであろう。全面に堆積していることから、上屋はもたなかったものと考えられる。柱穴等は確認されていない。図中の▼から下位の斜面は、地山と考えられる褐色粘土層が露出し、直接As-A軽石に覆われている。また、傾斜角度もやや急になっているため、斜面下位は人為的に切られていると考えられる。また、平坦な部分とK22号畑の境も20 cm程の段差が認められ、多少切り盛りを行い平坦面を構築したと思われる。用途は不明であるが、農作業に伴う作業スペースあるいは、道具の置き場等が想定される。

境木

K20・21号畑と3号道の境(境木1～25の25本)、K23号畑と7号石垣の境(境木26～35の10本)、K23号畑と6号石垣の境(境木37～45の9本)に

列をなす境木、そして、K20号畑とK21号畑の境に単独の境木1本(境木46)、1号トレンチ(図13)においてK27号畑の東端に2本(立木1・2)の計47本の境木を検出した。境木36は切り株と考えられるものであり、便宜的に境木の名称を使用した。境木には数えていない。

K20・21号畑と3号道の境(境木1～25)では、泥流を剥いだ時点で、ほとんどが空洞として確認された。残りの良い穴では、その表面を観察すると、根穴の表面に皮目状の文様が観察でき、おそらく桑の根と思われる(南澤1976)。一定の間隔を置いて並ぶため、人為的に植えられたものであろう。

K23号畑と7号石垣の境(境木26～35)では、1条の根切り溝がめぐり、その溝と石垣の間に、幅20 cm程の一段高いフラットな面がある。そこに一列の境木が検出された。境木は一部木質が残るものと、完全に朽ちて空洞になっているものがある。他の境木同様、桑と考えられる。

7号石垣の記述でも触れたが、この石垣は土砂崩れと考えられる土層で、石垣下位が埋もれていた。同様に、この境木列も、断面で判断する限り、土砂

表9 久々戸遺跡Ⅹ区 境木計測値等一覧表

遺構名称	位置	確認面		備考
		標高(m)	直径(cm)	
境木1	76区 W-2	572.07	20.0	
境木2	76区 W-2	571.97	17.0	
境木3	76区 W-2	571.60	4.0	
境木4	76区 V-2	571.51	9.0	
境木5	76区 V-1	571.29	7.0	
境木6	76区 V-1	571.28	12.0	
境木7	76区 V-1	571.08	4.0	
境木8	76区 V-1	571.13	7.0	
境木9	66区 V-25	570.95	7.0	
境木10	66区 V-25	570.91	12.0	
境木11	66区 U-25	570.69	9.0	
境木12	66区 U-25	570.78	8.0	
境木13	66区 U-24	570.91	6.0	
境木14	66区 U-24	570.83	6.0	
境木15	66区 U-24	570.68	11.0	
境木16	66区 U-23	570.94	15.0	
境木17	66区 U-23	570.93	5.0	
境木18	66区 U-23	571.11	13.0	
境木19	66区 U-23	571.20	(4.0)	
境木20	66区 U-23	571.20	(5.0)	
境木21	66区 U-22	571.20	(3.0)	
境木22	66区 U-22	571.30	(4.0)	
境木23	66区 U-21	570.80	(4.0)	

遺構名称	位置	確認面		備考
		標高(m)	直径(cm)	
境木24	66区 U-21	572.20	(7.0)	
境木25	66区 U-20	572.15	13.0	
境木26	66区 T-24	568.97	(4.0)	
境木27	66区 T-24	569.02	(7.0)	
境木28	66区 T-24	569.11	8.5	
境木29	66区 T-24	569.28	6.5	
境木30	66区 T-24	569.02	(5.0)	
境木31	66区 T-24	569.26	3.5	木質遺存。
境木32	66区 T-23	569.36	5.0	木質遺存。
境木33	66区 T-23	569.39	8.0	
境木34	66区 T-23	569.43	7.0	木質遺存。
境木35	66区 T-23	569.61	0.0	木質遺存。
境木36	66区 T-21	570.00	(29.0)	木質遺存。切り株。
境木37	66区 T-21	569.53	9.0	
境木38	66区 T-21	570.10	(6.5)	
境木39	66区 T-21	569.53	5.0	木質遺存。
境木40	66区 T-21	569.47	8.0	木質遺存。
境木41	66区 S-21	569.57	4.5	木質遺存。切断痕。
境木42	66区 S-21	569.46	9.0	木質遺存。切断痕。
境木43	66区 S-21	569.51	13.5	木質遺存。
境木44	66区 S-21	569.50	9.0	木質遺存。
境木45	66区 S-20	569.56	7.5	木質遺存。
境木46	66区 V-24	571.95	6.0	K21-22号畑境。

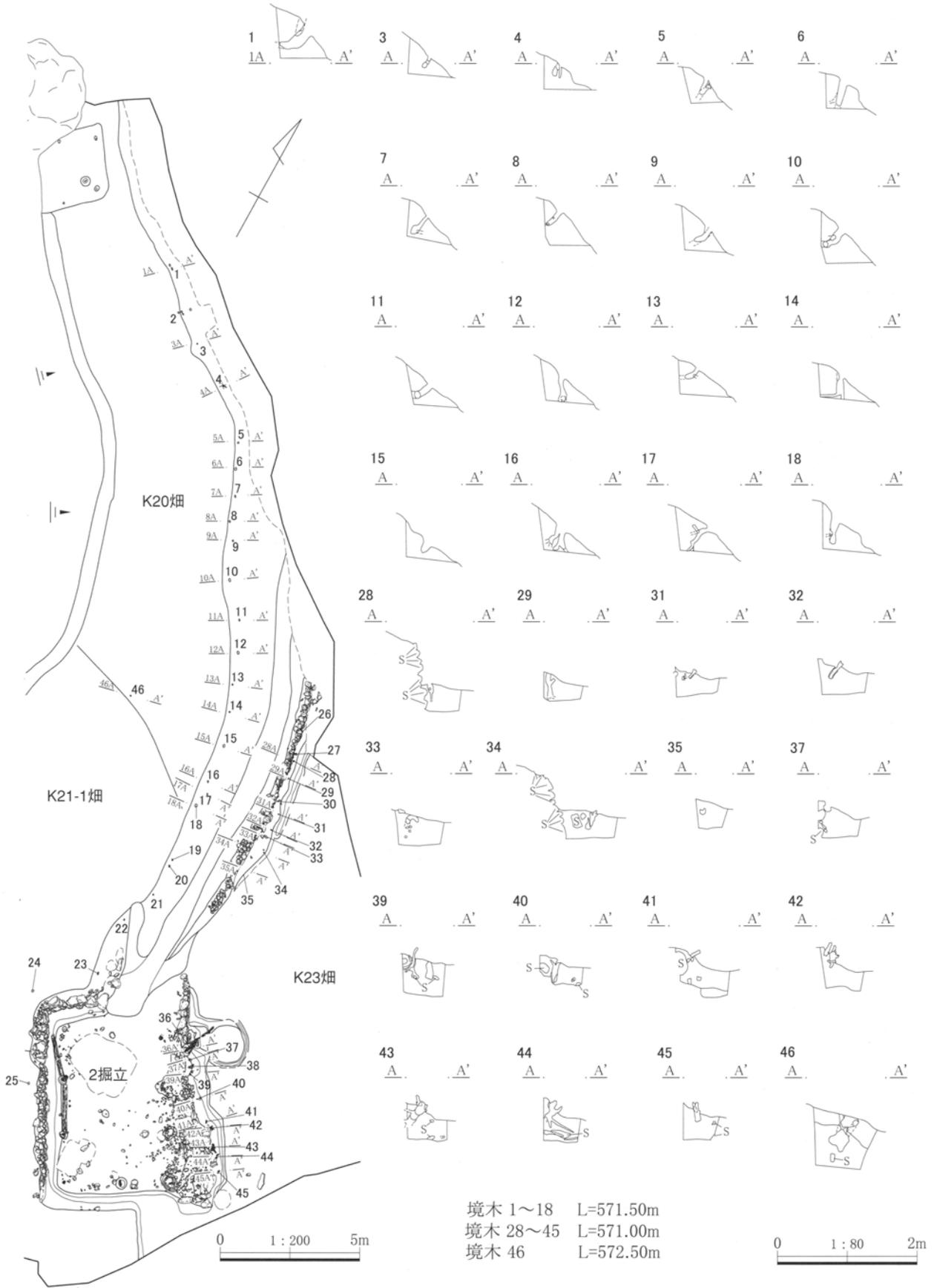


図24 久々戸遺跡 IX区 境木1~46

崩れ以前に植えられたものようである。断面で見ると、明らかに地中で枝分かれを開始しているものが認められ、根にあたる部分が地表より30cm以上も下位にあるものがある。土砂崩れ以前に植えられたものが、土砂崩れの被害を受けても、生き延び、その後も生育していたものと考えたい。また明らかに幹の径が細く、根が上位にあるものも認められ、土砂崩れ後に、枯れた位置に新しく植え直したのものもあると考えられる。

このことは、泥流下のK23号畑の下位に、土砂崩れにより埋没した畑のある可能性が高い。しかし、7号トレンチにより、下位の確認を行ったが、明瞭な畑遺構は捉えられなかった。畑がこの土砂崩れ以前から作られていた可能性が高いという指摘に留めておきたい。

K23号畑と6号石垣の境では、根切り溝が存在し、その溝の石垣側法面に境木列(境木37~45)が確認された。境木37・38は空洞のみ、境木39~45は木質が残存する部位と空洞として確認した。境木40・44・45では穴の表面に、桑の根に特徴的な皮目の跡が残り、これらの境木は桑と推定される(図25)。

また、境木41・43の地上にでている幹・枝には、一部にノコギリによると思われる切断面が残存していた(PL15左上)。

境木36は残りは非常に悪いが、木質が残存していた。直径が30cm程あり他の境木とは異なるものであるが、便宜的に境木として扱った。残存する木質の上面にも、As-A軽石が堆積し、おそらく木の切り株と考えられる。樹積はキリである。

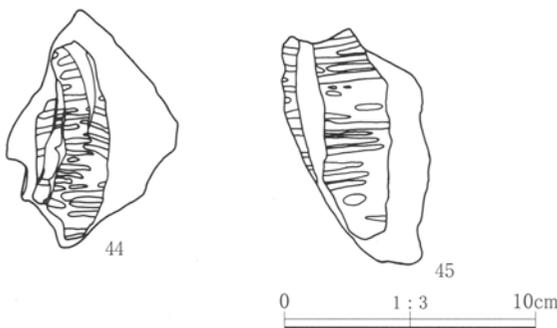


図25 久々戸遺跡 IX区 境木 根の圧痕

(8) 出土遺物

ここでは、天明泥流下の遺構及び、それに伴うと考えられる遺物について扱う。一部に中世等の古い陶磁器も含むが、陶磁器として一括し、ここで扱う。また、2号掘立柱建物の出土遺物のみ独立で扱い、その他の畑等の遺構及びトレンチ出土遺物は一括して通し番号を付した。

2号掘立柱建物

1・2(図29)は、柱穴1と柱穴2、柱穴2と柱穴3の間からそれぞれ出土した。栗材を半割し、表面を削り加工している。壁の土台として用いられていたものと考えられる。その他の柱穴間には、同様な木材は検出されなかったが、もともと存在しなかったか、腐朽してしまったものかは不明である。

3(図29)・4(図30)は、柱穴7の北東側で出土した、3は漆器の椀である。やや厚手のつくりであり、下位に屈曲を有し、高台をもつ。口縁を上にし、やや傾いた状態で出土した。底面には黒漆で文字が書かれているが、判読できない。4は幅3mm程の蔓や茎等の植物質で作られた、敷物あるいは、ザルやカゴのようなものと思われる。非常にもろく取り上げられないため、石膏による型取りを試みたが、成功しなかった。かろうじて型取りできた部分を図化した。

5(図30)はK23号畑の南端で出土したが、2号掘立柱建物に近接した位置にあり、2号掘立柱建物の遺物として扱った。畑の耕作土上にあり、As-A軽石に覆われていた。泥流による移動は考えられず、As-A軽石降下前からその場にあったものと考えられる。上向きに出土し、竹製の箕状の製品である。

6(図30)は6号石垣の北側で泥流中に横倒しの状態で確認された。K23号畑の表面から20cm程上位の泥流中からの出土し、当初は2号掘立柱建物の部材の可能性のあるものとして取り上げた。しかし、調査が進むにつれ、その南端は折れて垂直に旧地表面に刺さっていることが判明した。その先端は鋭く加工されており、杭状になっている。断面からも打ち込まれたものであることが観察される(図17)。K



図26 IX区 出土遺物(1)

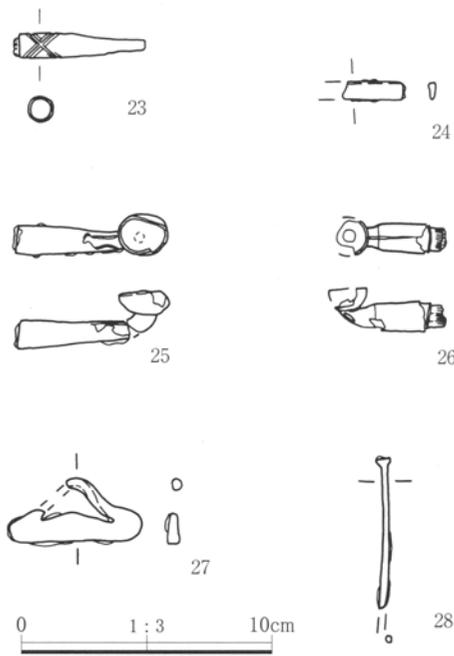


図27 IX区 出土遺物(2)

23-1号垣面と2号掘立柱建物の上に位置し、どちらに属するものか、また、その用途は不明である。倒伏方向は、北北東であり、泥流の押し寄せた方向を示すものと考えられる。

7・8・9(図26)は陶磁器片である。すべて破片であり、完形品はない。18世紀の肥前、瀬戸美濃産である。他に未掲載の陶磁器が2点ある。

その他の遺構

陶磁器は畑の耕作土及びトレンチ等から、28点出土した。そのうち20点を図化した(図26-1~20)。ほとんどが細片であり、17世紀から18世紀の肥前産あるいは瀬戸美濃系の陶磁器である。10・12は中世の青磁、21・22は古代の灰釉陶器である。

金属器(図27)は6点を図化した。23・24はIX区の出土であり、25~28は1995年に調査した長野原久々戸遺跡での出土である。23は泥流中より出土したキセルの吸口で、「×」状の装飾が施されている。24は鉄製品であり、断面形状から刀子等の茎と考えられるものである。25・26はキセルの雁首、27は火打ち金、28は釘である。

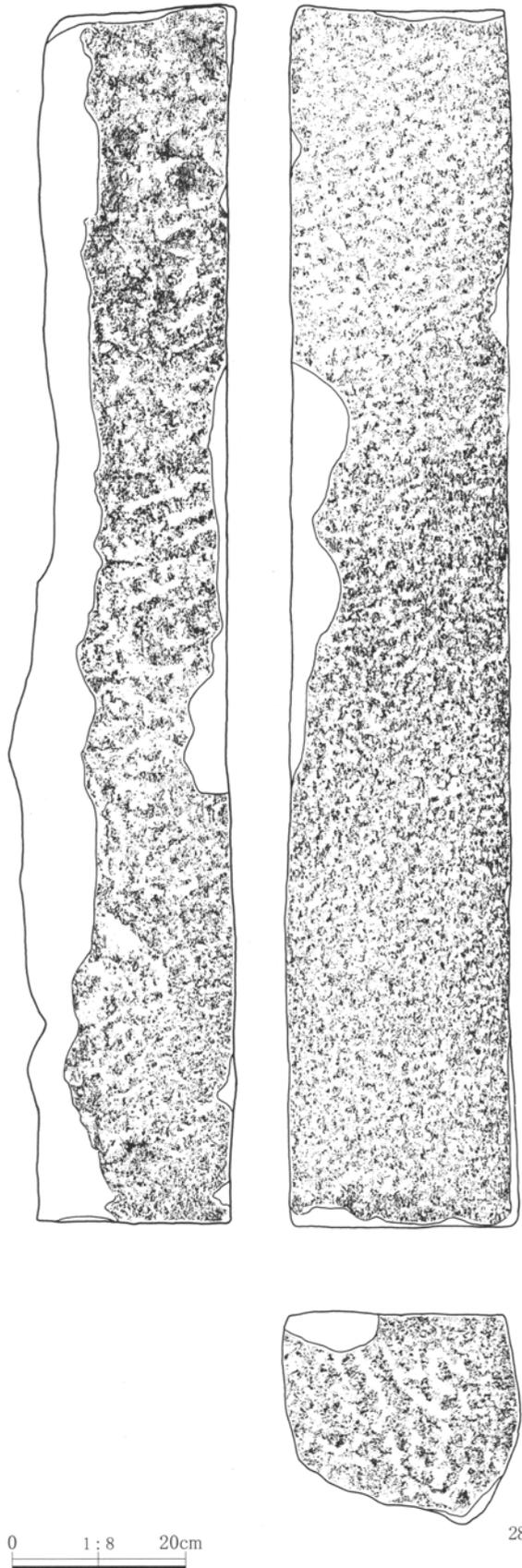


図28 IX区 出土遺物(3)

第1章 久々戸遺跡

石器は、29 (図 28) の切石が泥流中より1点出土した。蔵等の建物の基礎として使用されていたものが、泥流により流されてきたものであろう。

木器・植物遺存体としては3点出土している。30・31はK23号畑の耕作土中より出土した漆器の破片である。耕作によると思われる損傷が著しく遺存状態は悪い。32は縄状をした植物質遺存体である。材質はシュロである。同じくK23号畑から出土した。

周囲には、植物質遺存体が折り重なるように存在し、下にはAs-A軽石があるため泥流により流されてきた可能性もある。

また、K23号畑の耕作土中より獣骨が1点出土した。周囲に他の骨はなく単独の出土である。原因は不明であるが、畑の耕作時に、紛れ込んだものであろう。詳細は第3節(9)参照。

表10 久々戸遺跡Ⅰ区 遺物観察表(1)

陶磁器											単位:mm	
番号	出土位置	種類	器種	口径	器高	底径	台形	残存部位	釉の特徴	胎土とその他の特徴	生産地等	時期など
2号掘立柱建物7		磁器	碗				34	底部	透明。	灰色。	肥前	江戸(18C)
2号掘立柱建物8		陶器	碗					口縁部	内面~口縁灰釉、外面口縁部下鉄釉。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸(18C)
2号掘立柱建物9		陶器	不詳					胴部	灰釉。	灰色。	不詳	江戸
1	K19号畑	陶器	皿					口縁部	灰釉。	灰白色。鉄絵。	瀬戸美濃	江戸(17C)
2	K19号畑	陶器	菊皿					口縁部	灰釉、口縁部銅緑釉。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸(17C)
3	K23号畑	磁器	仏飯器	63	54	20	38	口縁~台部	透明。	灰白色。	肥前(波佐見)	江戸(18C)
4	K23号畑	陶器	天目碗					胴部	黒褐色。	灰色。	瀬戸美濃	不詳
5	K23号畑	陶器	碗					口縁部	透明。	灰色。陶胎染付。	肥前	江戸(18C)
6	K23号畑	陶器	碗					口縁部	灰釉。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸
7	K23号畑	陶器	不詳				56	底部	透明。	灰白色。	関西系?	江戸
8	K25号畑	陶器	皿					口縁部	長石釉。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸(17C)
9	5号トレンチ	陶器	碗?					胴部	透明。	浅黄色。白土。	肥前	江戸
10	6号トレンチ	青磁	碗?					胴部	明緑灰色。	灰白色。	中国	中世
11	7号トレンチ	磁器	小杯				36	底部	透明。	灰色。高台側面・体部下端に各1条の圈線。	肥前(波佐見)	江戸(18C)
12	7号トレンチ	青磁	碗					胴部	灰オリーブ色。	灰色。片切りによる蓮弁文。	中国・龍泉窯系	中世(13~14C)
13	13号トレンチ	磁器	不詳					口縁部	透明。	灰色。口縁部外面に四方襷文。	肥前	江戸
14	13号トレンチ	陶器	不詳					口縁部	透明。	灰色。	不詳	不詳
15	13号トレンチ	陶器	碗					口縁部	焼成不良。	灰色。	瀬戸美濃	江戸(18C)
16	13号トレンチ	陶器	皿				(56)	底部	灰釉。	灰色。	瀬戸美濃	16C末
17	14号トレンチ	陶器	播鉢					胴部	褐色。錆釉。	淡黄色。	瀬戸美濃	江戸
18	15号トレンチ	陶器	皿					口縁部	長石釉。	灰色。	瀬戸美濃	江戸(17C)
19	表採	陶器	不詳					胴部	暗褐色。錆釉。	灰色。	不詳	江戸
20	泥流中	磁器	御神酒德利?					頸部	透明。	灰色。	肥前	江戸
21	7号トレンチ	灰釉陶器						口縁部	灰釉。	灰白色。		古代
22	7号トレンチ	灰釉陶器						口縁部	灰釉。	灰白色。		古代

金属器

単位:mm

番号	出土位置	種類	器種	長さ・幅 (径)・厚さ	残存状況	特徴
23	泥流中	銅製品	キセル吸口	49・9・吸口径4	完形	羅宇竹残存。「×」状毛彫り文様。
24	13号トレンチ	鉄製品	茎?	(24)・8・3	欠損	刀子の茎?
25	68区 No75	銅製品	キセル雁首	63・11・火皿径(17)	全体に損傷	
26	79区 No134	鉄製品	火打金	53・25・5	一部欠損	両腕を折り曲げ、螺旋状にねじる。使用部わずかに括れる。
27	80区 No148	鉄製品	釘	59・5・3	完形	
28	80区 No149	銅製品	キセル雁首	37・11・火皿径(16)	一部欠損	羅宇竹残存。羅宇との接合部に噛ませ物あり。羅宇内径5。挿入部分20。



図29 IX区 出土遺物(4)

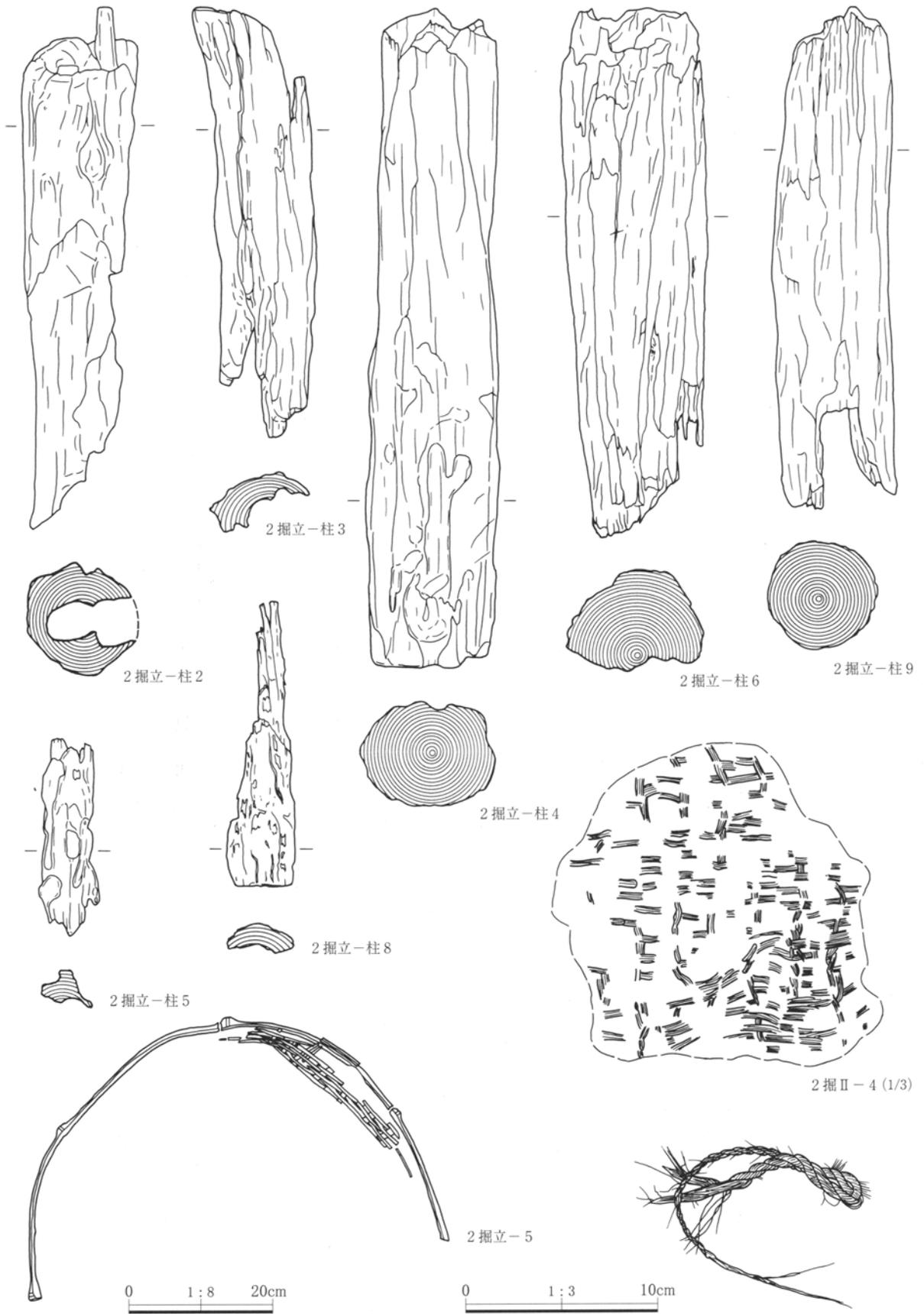


図30 IX区 出土遺物(5)

32(1/3)

第3節 泥流面の遺構と遺物

表11 久々戸遺跡 IX区 遺物観察表(2)

石器

単位:cm

番号	出土位置	種類	石材	長さ・幅・厚さ	残存状況	特徴
29	泥流中	切石	粗粒輝石安山岩	138.0・25.4・25.0	完形	直方体の5面は鑿による整形。下面は荒削りのみ。

木器

単位:cm

番号	出土位置	種別	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	長さ×幅×厚さ、φ	備考 縮尺
2号掘立柱建物 1		建築部材	半割材 クリ	丸太材を半割し使用。表面は加工痕不明瞭ながら若干平坦に削り加工。側面は加工の有無は不明だが樹皮は残存しない。断面は半円から台形状をなす。上下端部とも、ほぼ垂直に切断。	156.3×17.1×8.0	分析1 S=1/8
2号掘立柱建物 2		建築部材	半割材 クリ	丸太材を半割し使用。表面・側面は加工痕不明瞭ながら平坦に削り加工。断面は長方形から台形状をなす。上下端部ともほぼ垂直に切断。	171.6×16.9×7.6	分析2 S=1/8
2号掘立柱建物 3		漆器・椀	横木取り ブナ属	口縁部・台部を欠損。内外面ともに朱漆を施し、底部高台内に黒漆で縦書きする文字があるが判読できない。	残存高5.5×φ(11.6)	分析3 S=1/3
2号掘立柱建物 4		植物遺存体		植物の茎または蔓による編み物。約2cm程の間隔の経糸に緯糸を密に交互に潜らせている。	(16.4)×(16.0)×	S=1/3
2号掘立柱建物 5		竹製品		竹製の箕状の製品。遺存状態は悪い。	35.4×58.4×	S=1/8
2号掘立柱建物 6		建築部材 (杭・柱?)	丸太材 クリ	自然木を利用し、下端部を鋭く尖らせてる。片面は腐朽し残存しないが2面以上の削りにより形成される。上部は端部で加工不明。枝が落とされ、又状の部分あり。	167.6×φ8.0	分析4 S=1/8
2号掘立柱建物 柱2		柱材	丸太材 クリ	丸太材を利用する。樹皮は残存しないが加工の有無不明。下端は腐朽し残存しない。上部は欠損。	(71.7)×φ15.7	分析5 S=1/8
2号掘立柱建物 柱3		柱材	丸太材? クリ	腐朽が著しく判然としないが、丸太材と考えられる。下端部腐朽。上部は欠損。	(59.0)×	分析6 S=1/8
2号掘立柱建物 柱4		柱材	丸太材 クリ	丸太材を利用する。樹皮は残存しないが加工の有無不明。下端はほぼ垂直に切断。上部は欠損。	(90.6)×φ18.6	分析7 S=1/8
2号掘立柱建物 柱5		柱材	丸太材? クリ	ほとんど腐朽し残片のみ。丸太材と考えられる。加工不明。	(27.3)×	分析8 S=1/8
2号掘立柱建物 柱6		柱材	丸太材 クリ	丸太材を利用する。樹皮は残存しないが加工の有無不明。下端は腐朽し残存しない。上部は欠損。	(72.4)×φ19.8	分析9 S=1/8
2号掘立柱建物 柱8		柱材	丸太材? クリ	ほとんど腐朽し残片のみ。丸太材と考えられる。下端はほぼ垂直に切断。	(39.2)×	分析10 S=1/8
2号掘立柱建物 柱9		柱材	丸太材 クリ	丸太材を利用する。樹皮は残存しないが加工の有無不明。下端は腐朽し残存しない。上部は欠損。	(68.9)×φ16.2	分析11 S=1/8
30	K23号畑	漆器・椀	横木取り ブナ属	畑耕作により破損著しい。破片。内外面ともに朱漆塗り。		分析12 S=1/3
31	K23号畑	漆器・椀?	横木取り トチノキ	畑耕作により破損著しい。破片。内外面ともに朱漆塗り。		分析13 S=1/3
32	K23号畑	縄?	シュロ	2本をより合わせ、一段の縄状にしている。太さ不均質。用途不明。	伸ばした時の長さ (23.4)	分析 S=1/3

(9) 久々戸遺跡出土獣骨

楢崎修一郎

はじめに

久々戸遺跡は、群馬県長野原町大字長野原字久々戸に位置する。八ッ場ダム建設工事に伴い、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が2003(平成15)年4月1日～同年6月10日まで行われた。この内、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流〔浅間A〕に埋もれたⅨ区K-23(旧5)号畑にて、鹿骨が発見されたので以下に報告する。

(1) 出土状況

鹿骨は、K-23(旧5)号畑の耕作土中から出土している。恐らく、野生に生息していた鹿が、浅間A泥流に巻き込まれたと推定される。ちなみに、カット・マークや肉食獣による噛み跡は認められなかった。

(2) 出土部位

ニホンジカ (*Cervus nippon*) の左中手骨が出土している。全長約19cmで、ほぼ完形であるが、近位端及び遠位端は一部破損しているため、計測はできなかった。

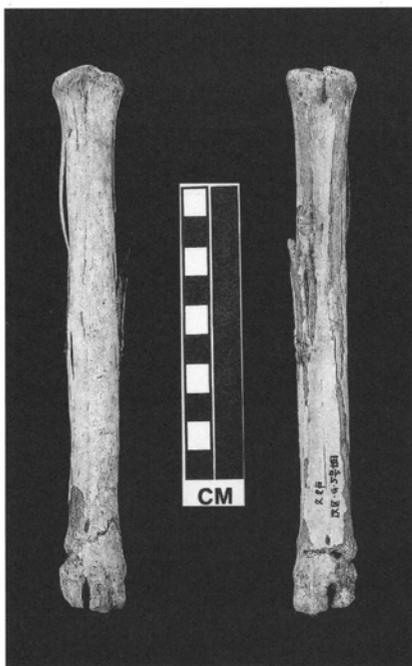


写真1. 久々戸遺跡Ⅸ区K-23号畑出土鹿の左中手骨 [左: 前面観、右: 後面観]

(3) 個体数

当初は、2点出土していたが、接合して1点になった。したがって、個体数は1個体である。

(4) 性別

性別は、不明である。

(5) 死亡年齢

骨端は癒合しているため、成体と推定される。

謝辞

本出土獣骨に関する考古学的情報を与えていただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の池田政志氏に感謝いたします。また、本出土獣骨を記載する機会を与えていただいた、元群馬県立利根実業高等学校の石田 真氏に感謝いたします。

参考文献

八谷 昇・大泰司紀之 1994 『骨格標本製作法』、北海道大学図書刊行会

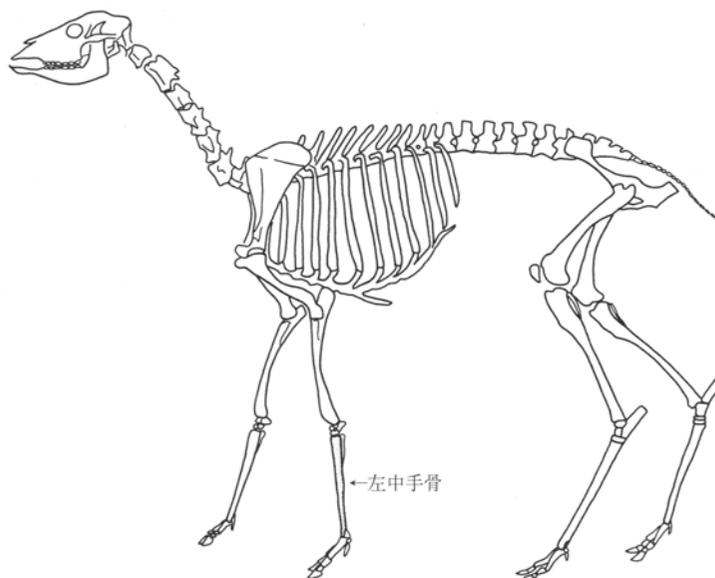


図1. 久々戸遺跡Ⅸ区K-23号畑出土鹿〔シカ〕骨出土部位図 全身骨格図〔鹿の雌〕は、八谷・大泰司(1994)を改変

(10) 泥流の流下痕跡について

本調査区は、最下段で標高569 m、上段では585 mとその標高差が大きいことに特徴がある。ここでは、調査区に残る泥流の流下に伴う痕跡、特にその流下方向を示すと考えられる痕跡について若干触れておきたい。最下段から順次検討していく。

最下段では、K23号畑の記述で触れたように、作物痕の倒伏方向及び、旧表土直下の根の傾きから、吾妻川の流れに対し、ほぼ順方向の北から南に向けてと考えられる(図8右下)。泥流中の石による表面の攪乱は比較的少ない。

下段では、1号掘立柱建物の柱穴に見られる。柱穴1・4は泥流被災時に柱が抜けてしまったと考えられる柱穴であるが、その方向は、柱穴1の平面形状より、吾妻川の流下方向に対して逆方向の南南東から北北西に向けてであったと推測される(図14)。

2号掘立柱建物の遺物6の倒伏方向も、泥流の流下方向を示すものと考えられる(図17)。杭状の根本は地中に突き刺さり、その地上部が北北東に折れて倒れていた。川の流れとは逆方向である。また、柱穴1・2等も北北東に柱が傾いていることが確認された。

同じく泥流中の石による攪乱は比較的少ない。

中段は、地形的な影響もあるかもしれないが、泥流中の石による攪乱が最も少ない。ほぼ、無傷で泥流に覆われたような状況と考えられる。

上段は泥流中の石による攪乱が最も著しい(図9・31)。多くの石が地表にめり込むように、あるいは削るように筋状の傷を残している。その方向はほぼ西から東に向けてであり、吾妻川の流れに順方向といえよう。

また、今回の調査区ではないが、より上位の段では、北東から南西へ向けての傷や作物の倒伏が確認されている(関2003)。これは、流れに対し直交方向であり、川幅を広げる方向である。

以上より、同一遺跡内においても、泥流の動きは予想以上に複雑なことが伺われる。その標高により、泥流の流下方向は単純に一方方向ではなく、時間と

ともに、その流下方向を変えながら、あるいは渦を巻きながら徐々に増水していった様子が伺える。また、泥流中の石による攪乱の多寡を考慮に入れば、その速度も一定ではなく、急激な流れ、緩やかな増水等があったもの考えられよう。

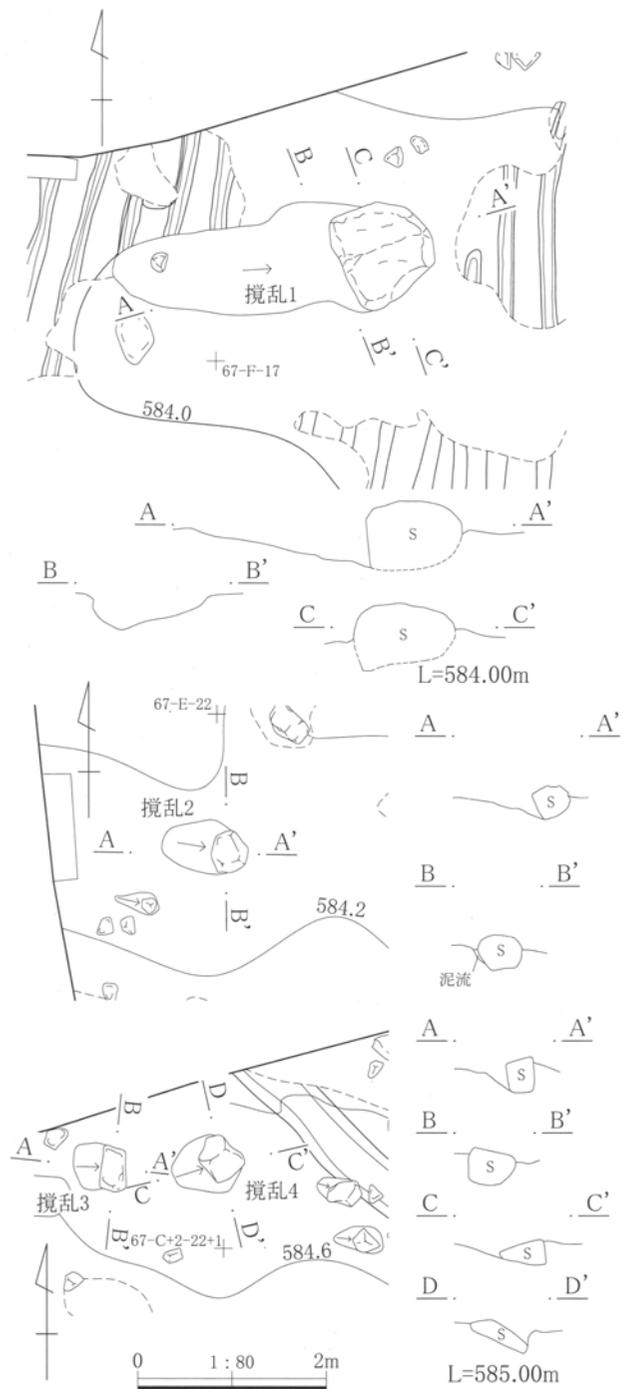


図31 IX区 泥流中の石による攪乱

第4節 泥流面以外の遺構と遺物

(1) 遺構

1号自然流路

ⅩB区のほぼ中央で検出した。幅3.5～5.5m、長さ10.5m、深さは最も深いところで1.7mである。天明泥流堆積物を削り込み沢を形成しているため、泥流以後の自然流路であるが、どこまで新しくなるかは不明である。覆土は、泥流堆積物を起源とする

黒灰色砂質土である。底面は黄褐色砂層まで達し、壁面はオーバーハングしている個所が多く認められる。急激な出水により削られ、また、オーバーハング部分が崩落してていないため比較的短期間に再埋没したものと考えられる。

遺物は、石器(図33-47・48)が出土しているが、流れ込みであろう。

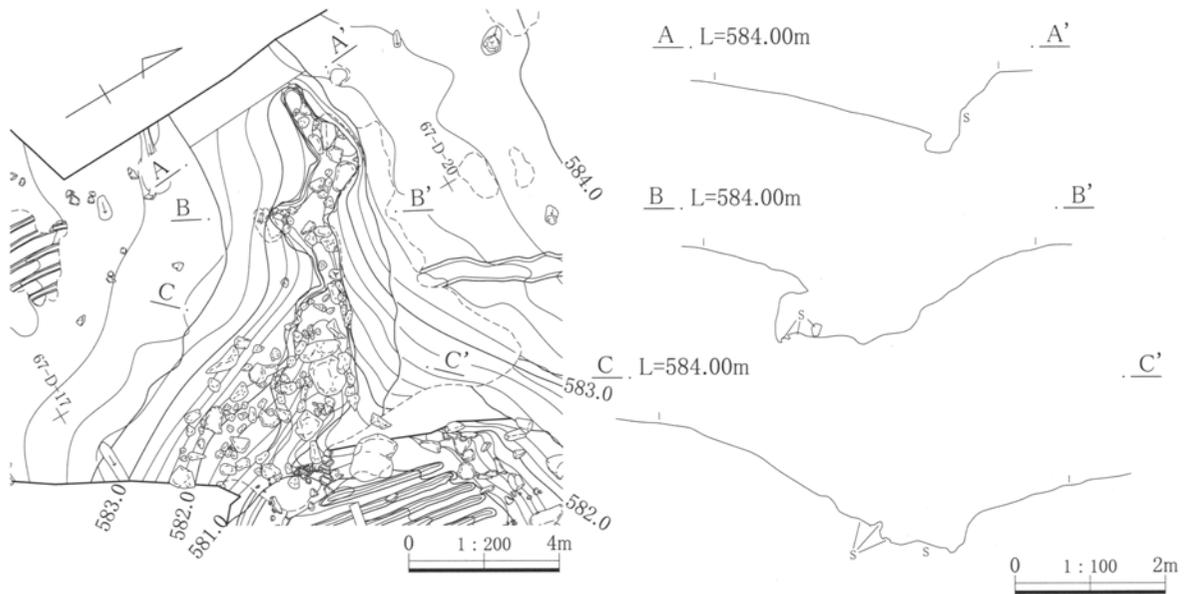


図32 Ⅹ区 1号自然流路

(2) 遺物

久々戸遺跡Ⅹ区では、弥生時代及び縄文時代の遺構は確認されていないが、天明泥流下畑の耕作土やその他の遺構、及び各トレンチ等から少量の遺物が出土している。ここでは、小破片が多く時代が不明のものも多いため、弥生時代、縄文時代一括して扱いたい。各時代の遺物出土点数は、表13に示した。

図33-33～41は弥生土器及び縄文土器である。小破片が多く時期不明のものがほとんどであり、9点のみ図化した。33は7号トレンチから出土した鉢形土器である。口縁部から底部までの3分の1程が残存し、浮線文を施す。縄文時代晩期水Ⅰ式に帰属すると思われ、長野県氷遺跡出土土器に類例が見られる(永峯1998Ⅱ-1図11)。34～37は弥生中

期前半に位置付けられる土器である。条痕を施すもの、沈線と縄文を施すものがある。41は集合沈線を施し、縄文時代前期諸磯C式である。

図33-42～49は石器である。49を除き縄文時代に帰属するものと思われる。42～45はすべて黒曜石製の無茎の石鏃である。44を除き長さ1.5cm程の小形の石鏃である。46は剥片を利用した小形の石匙である。刃部は片面加工であり、腹面側は摘部を作り出す以外は、ほとんど加工されていない。47は短冊形の打製石斧である。基部は欠損し、刃部は使用による摩滅が認められる。48は両面加工の石器である。小形の剥片を剥離した石核と考えられる。49は小形の石核あるいは火打石の可能性のある石器である。火打石であれば、近世に属するものであろう。

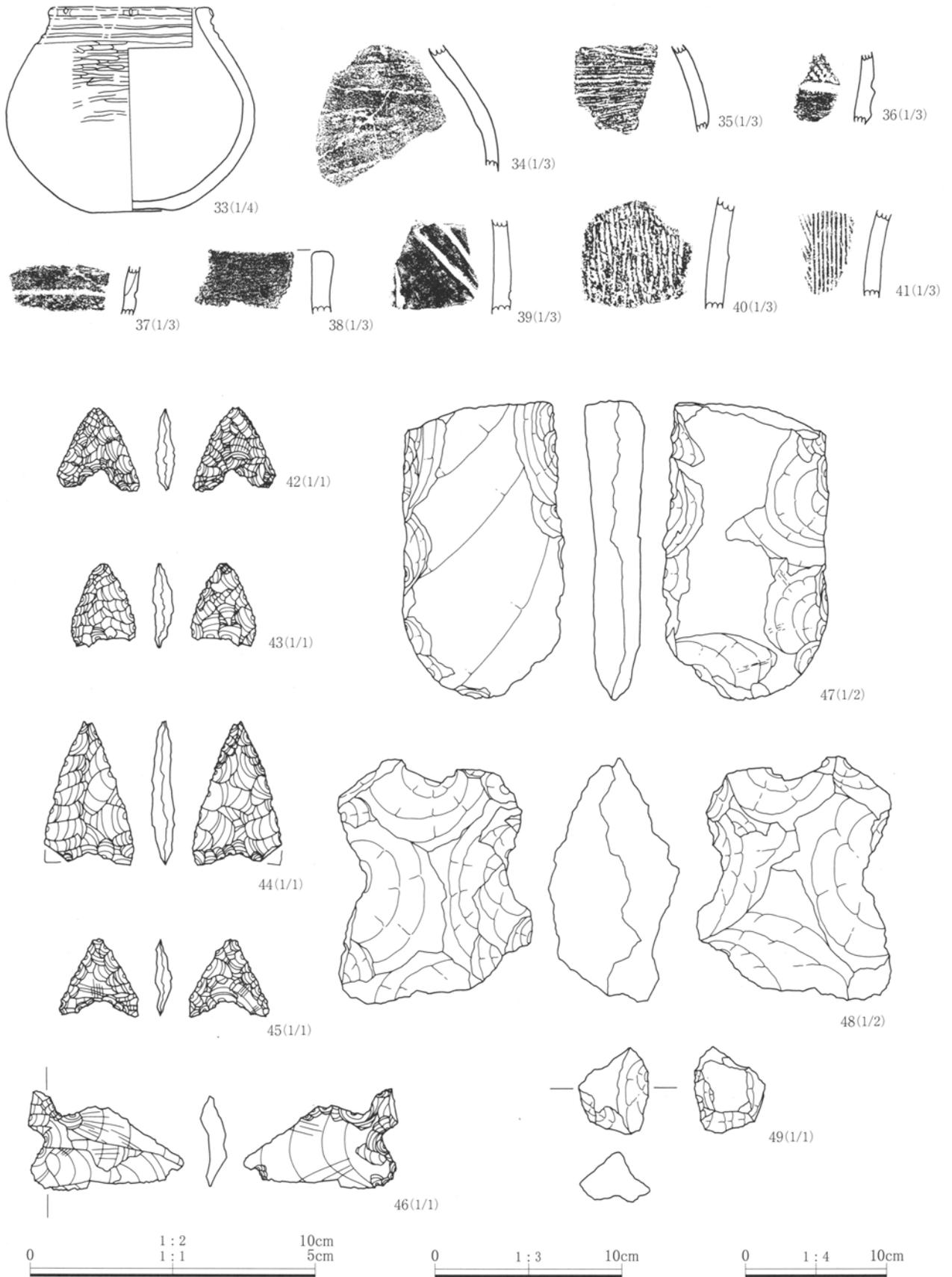


图33 IX区 出土遺物(6)

第1章 久々戸遺跡

表12 久々戸遺跡 IX区 遺物観察表(3)

土器						
番号	出土位置	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
33	7号トレンチ	鉢	1/3残存	①良好②にぶい赤褐色③砂粒を多く含む。	口外帯を有し、頸部に2状の浮線をめぐらす。胴部は丁寧な横ミガキ。底部上げ底。	縄文晩期・氷I式
34	5号トレンチ	甕	胴部	①普通②にぶい黄褐色③砂粒を多く含む。	外面斜位の条痕文。	弥生中期前半
35	12号トレンチ	甕	胴部	①普通②橙色③粗砂・片岩を多く含む。	外面横位の条痕文。	弥生中期前半
36	12号トレンチ	甕	頸部	①普通②にぶい橙色③砂粒をやや多く含む。	口縁部に1条の沈線をめぐらし、R L縄文充填。	弥生中期前半
37	14号トレンチ	甕	頸部	①やや軟質②明黄褐色③砂粒多く含む。	1条の沈線をめぐらし、L R縄文施文。	弥生中期前半
38	14号トレンチ	深鉢	胴部	①良好②橙色③砂粒を多く含む。	沈線による直線、曲線文。	縄文後期・堀之内I式
39	10号トレンチ	鉢	口縁部	①良好②にぶい赤褐色③雲母・砂粒を多く含む。	内外面ともに丁寧な横ミガキ。	縄文中期中葉
40	12号トレンチC-20	深鉢	胴部	①普通②赤褐色③雲母・石英を多く含む。	縦位の捺糸文(R右巻き)。	縄文中期中葉
41	表採	深鉢	胴部	①普通②褐色③砂粒を多く含む。	縦位・斜位の集合沈線文。	縄文前期・諸磯C式

石器

単位：cm・g

番号	出土位置	種類	石材	高・幅・厚・重	残存状況・特徴
42	K24号畑	石鏃	黒曜石	2.9・3.0・0.7・0.3	完存。基部の抉りが大きい。
43	K25号畑	石鏃	黒曜石	3.0・2.3・0.7・0.4	完存。
44	13号トレンチ	石鏃	黒曜石	(5.3)・(3.3)・0.8・1.2	先端部、基部をわずかに欠く。
45	1号自然流路	石鏃	黒曜石	2.7・2.9・0.6・0.3	完存。
46	8号トレンチ	石匙	黒曜石	3.5・5.4・2.1・1.2	完存。
47	1号自然流路	打製石斧	凝灰質泥岩	10.5・5.7・2.1・166.6	基部欠。刃部に使用による摩滅。
48	1号自然流路	石核?	珪質変質岩	8.7・6.7・4.4・187.4	
49	12号トレンチ	火打石?	石英	3.1・2.5・1.6・11.0	4カ所に使用痕が認められる。

表13 久々戸遺跡 IX区 土器・石器出土点数

遺構名	土器				石器		
	弥生	縄文	その他	不明	石器	剥片他	
K23号畑							2
K24号畑			土師器 1	1	石鏃 1(1)		
K25号畑					石鏃 1(1)		
2号掘立柱建物							4
5号道							1
5号トレンチ	3(1)	1	内耳 1	1			
7号トレンチ		1(1)	須恵器 4(2)	1			
8号トレンチ				1	石匙 1(1)		
10号トレンチ		1(1)					
12号トレンチ	2(2)	1(1)		29	火打石? 1(1)		8
13号トレンチ			土師器 2	3	石鏃 1(1)		5
14号トレンチ	1(1)	1(1)		9			1
1号自然流路					石鏃 1、打製石斧 1、石核? 1(3)		
表採・その他		1(1)		4			3
合計	6(4)	6(5)	6(2)	49	8(8)		24

()内は図化点数

引用・参考文献

群馬県教育委員会編 1978 『岩島の麻』群馬県無形文化財緊急調査報告書
 大西雅広 1998 『長野原久々戸遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第240集
 永峯光一 1998 『水遺跡発掘調査資料図譜』水遺跡発掘調査資料図譜刊行会

諸田康成 2002 『長野原一本松遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第287集
 松原孝志 2002 『ハッ場発掘調査集成(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第303集
 関 俊明 2003 『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第319集
 南澤吉三郎 1976 『栽桑学』鳴鳳社出版

第5節 自然科学分析

(1) 畑作耕地跡から出土した植物遺体

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

久々戸遺跡の調査では、天明泥流下の畑作耕地跡が検出され、栽培植物と思われる植物遺体や縄が検出された(図版)。ここでは、この植物遺体や縄の種類について、赤外分光分析計を用いて現生試料との比較検討を行った。

2. 試料と方法

分析対象とした試料は畑作耕地跡から検出された作物の茎と縄の2試料である。

上記試料から一部を採取して測定用とし、乾燥した後、手術用メスなどを用いて1mm角程度の試料片を採取した。採取した試料片は、薄く押しつぶしながら厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。

測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3. 結果および考察

図1に、各試料(黒線)と現生(淡黒線)の赤外吸収スペクトルを合わせてそれぞれ示した。なお、縦軸は透過率(%T; Transmittance)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹); カイザー)である。吸収スペクトルに示した数字は、試料の赤外吸収位置を示す。

畑作耕地跡から検出された植物遺体は、比較試料とした現生麻茎と比較した場合、6箇所(No 1、No 2、No 12、No 14、No 16、No 17、No 18)においてズレが見られる。このことから、直ちに試料が麻とは特定できない。なお、試料は組織から双子葉類であることが明らかになっている(樹種同定参照)。

縄試料は、現生のシュロと比較した場合、波数の低い側の赤外線吸収の一部で不一致部分が見られるものの、概ね一致することからシュロの葉柄の繊維と考えられ、いわゆるシュロ縄であると推察される。

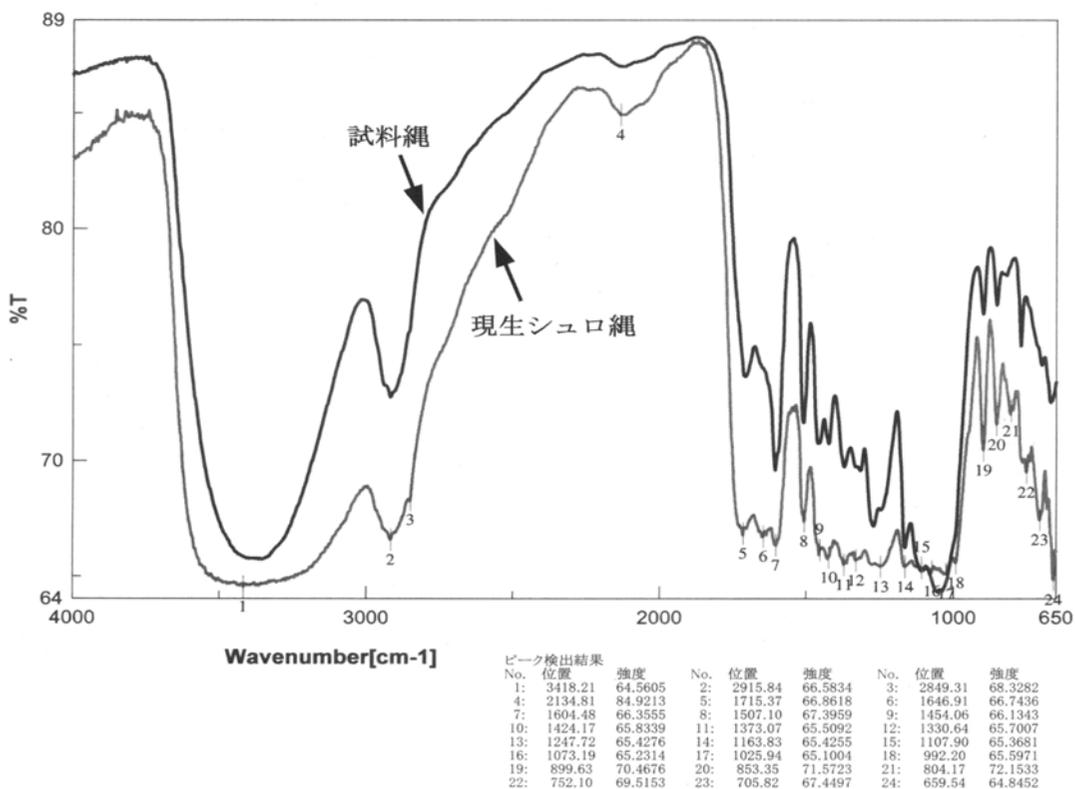
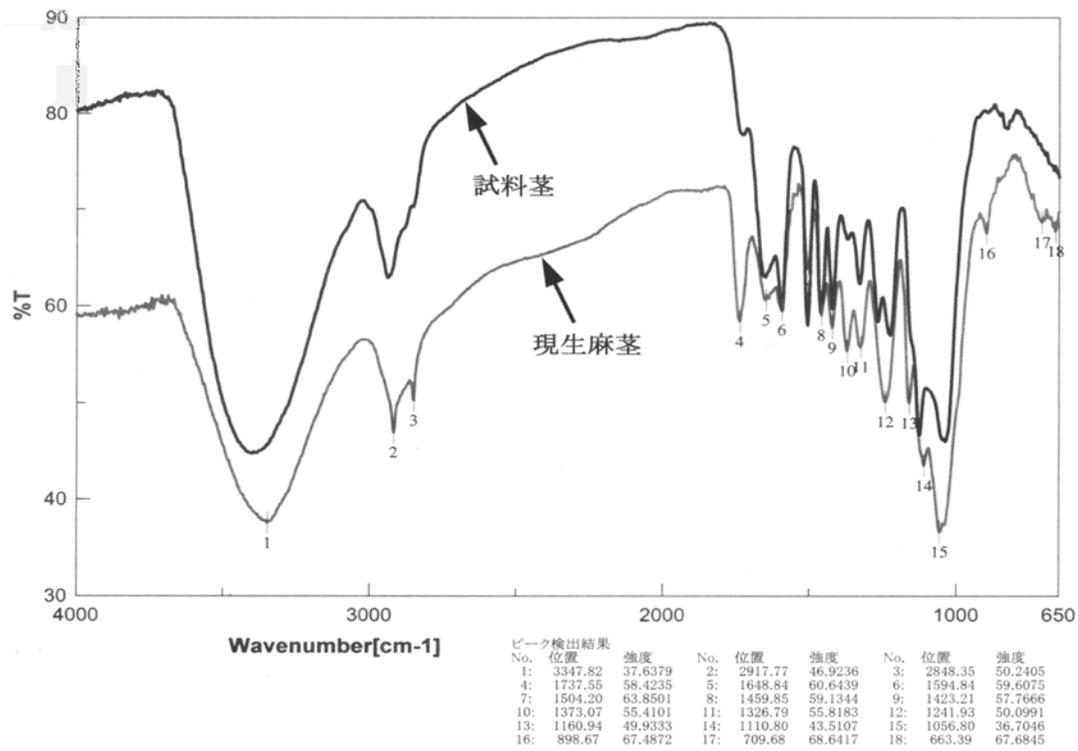
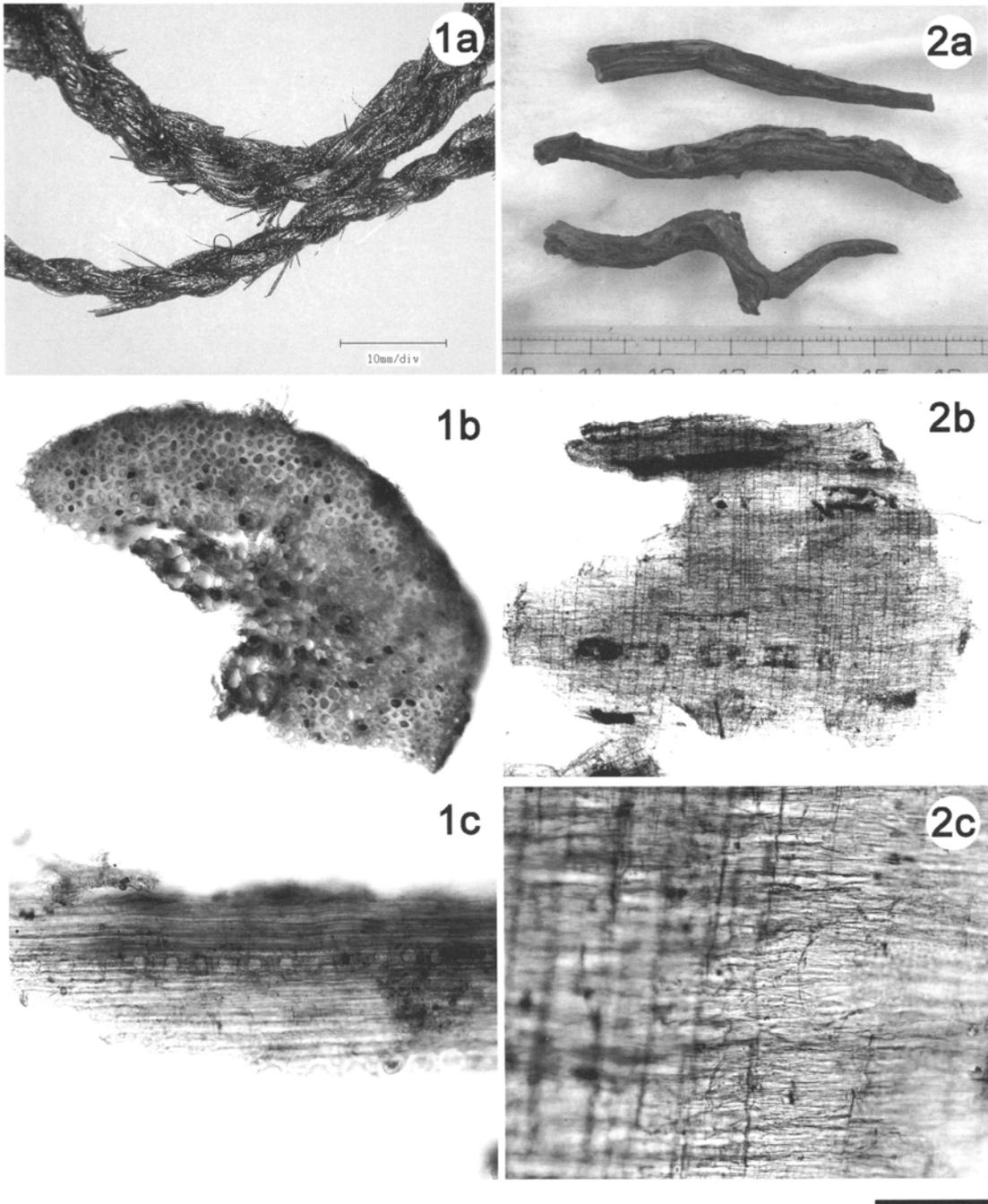


図1. 土器附着物と生漆の赤外吸収スペクトル (縦軸は透過率 %T、横軸は波数 cm-1)
 上段; 茎試料と現生麻茎、下段; 縄試料と現生シュロ縄



図版. 出土した縄および植物遺体と各切片写真
(スケール ;1b,1c,2b が $500 \mu\text{m}$ 、2c が $100 \mu\text{m}$)

- 1a. 縄試料 1b. 縄試料の横断面 1c. 縄試料の放射断面
2a. 茎試料 2b. 茎試料の放射断面 2c. 茎試料の放射断面拡大

(2) 久々戸遺跡出土木材の樹種

三村昌史 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

久々戸遺跡から出土した木材のうち、計33点の樹種同定結果を報告する。樹種同定対象の内訳は、天明3年浅間火山噴火に伴う泥流下から出土した2号堀立柱建物の柱材7点・建築部材3点・漆器計1点、K-23号畑出土の漆器3点および作物と考えられる木質の植物遺体1点、畑境界の境木(根株状)計12点、1号トレンチ出土の立木2点、その他流木4点である。ここではこれらの樹種を明らかにすることで、柱材・漆器の用材の特徴とその背景を調査するとともに、当時の畑における景観の復元を試みたい。

2. 試料と方法

プレパラートの作成は出土材から直接、横断面・放射断面・接線断面の3断面について剃刀を用いて切り取り、ガムクロラル(アラビアゴム・抱水クロラル・グリセリン・蒸留水を混合したもの)で封入して行った。これらのプレパラートは光学顕微鏡にて40~400倍で検鏡し、所有の現生標本との対照により同定を行った。同定したプレパラートは、群馬県内における遺跡のプレパラートのうち(株)パレオ・ラボ本社保管分のプレパラート試料であることを示すGNM-の頭文字と通し番号を附して保管し、比較参照に応じられる状態になっている。(GNM-2302~2334)。

3. 結果および考察

樹種同定結果の一覧を表1に、また器種別にみた樹種構成を表2に示す。全体で見出された樹種は7分類群で、ブナ属・クリ・コナラ属コナラ節・クワ属(根材含む)・トチノキ・キリ・双子葉類というようにすべて広葉樹材であった。

表1. 樹種同定結果一覧

試料No	遺構	No	層位等	器種	樹種	木取り等	GNM-	
1	2号堀立柱建物	1	泥流直下	建築部材(根太?)	クリ	半裁状	2302	
2		2	泥流直下	建築部材(根太?)	クリ	半裁状	2303	
3		3		漆器	ブナ属	横木取り	2304	
4		6	泥流直下	建築部材(杭or柱?)	クリ	芯持	2305	
5		柱2	柱穴2	柱	クリ	芯持丸木	2306	
6		柱3	柱穴3	柱	クリ	芯持丸木?	2307	
7		柱4	柱穴4	柱	クリ	芯持丸木	2308	
8		柱5	柱穴5	柱	クリ	芯持丸木?	2309	
9		柱6	柱穴6	柱	クリ	半裁	2310	
10	K-23号畑	柱8	柱穴8	柱	クリ	芯持丸木?	2311	
11		柱9	柱穴9	柱	クリ	芯持丸木	2312	
12		30		漆器	ブナ属	横木取り	2313	
13		31		漆器	トチノキ	横木取り	2314	
14			耕作土	漆器	ブナ属	横木取り	2315	
15			耕作土	作物の茎	双子葉類	芯持丸木	2316	
16		境木	31		桑?	クワ属	芯持丸木・根株状	2317
17			32		桑?	クワ属	芯持丸木	2318
18			34		桑?	クワ属	芯持丸木	2319
19	35			桑?	クワ属	芯持丸木	2320	
20	36			桑?	キリ	芯持丸木	2321	
21	39			桑?	クワ属	芯持丸木	2322	
22	40			桑?	クワ属	芯持丸木	2323	
23	41			桑?	クワ属	芯持丸木	2324	
24	42			桑?	クワ属	芯持丸木	2325	

25		43	桑?	クワ属	芯持丸木	2326
26		44	桑?	クワ属	芯持丸木・根株状	2327
27		45	桑?	クワ属	芯持丸木	2328
28	1号トレンチ	立木 1	泥流直下 桑?	クワ属(根材)	芯持丸木・根株状	2329
29		立木 2	泥流直下 桑?	クワ属	芯持丸木・根株状	2330
30	泥流中		流木	クリ	芯持丸木	2331
31			流木	コナラ節	芯持丸木	2332
32			流木	クワ属	芯持丸木	2333
33			流木	クワ属	みかん割れ	2334

表2. 器種別・種別にみた樹種構成

樹種/器種・種別	漆器	柱	建築部材	境木	立木	流木	作物の茎	計
広葉樹								
ブナ属	3	-	-	-	-	-	-	3
クリ	-	7	3	-	-	1	-	11
コナラ節	-	-	-	-	-	1	-	1
クワ属	-	-	-	11	2	2	-	15
トチノキ	1	-	-	-	-	-	-	1
キリ	-	-	-	1	-	-	-	1
双子葉類	-	-	-	-	-	-	1	1
計	3	7	3	12	2	4	1	33

次に、木製品の器種別の用材傾向とその背景について考察を加えるとともに、畑の境木・立木・栽培植物の茎について種別の樹種の特徴について述べていく。

柱材・漆碗の用材

2号堀立柱建物の柱材7点にはすべてクリが見出されており、建築部材3点にも同様にクリが用いられている。クリの材は丈夫で腐り難く、また柱材に見合う径長の材も得やすく、建築材としては適材が選択されているといえる。すべて同一の樹種であることは構築時になるべく同じ材質のもので揃えようとしたためであると類推される。

挽物である漆器にはブナ属とトチノキという材質の異なる2種類の材が見出されている。このうちブナ属の材は堅強でトチノキは軽軟という違いはあるが、いずれも均質であり回転成形に適する材が調達されて製作されているといえ、江戸時代の碗の用材に見出される樹種としても最も一般的なもののひとつである。

畑の境木・立木

畑の境木にはクワ属が12点中1点を除くすべてに見出された。材構造からクワ属に含まれる種をさらに区別することは困難であるため、栽培されるマグワであるのか、山野の湿った立地や川沿いや谷沿いにみられるヤマグワを植えていたのか定かではないが、いずれにしても果実や養蚕用飼料の採取を目的として利用されていたものとみられる。また、クワ属のほかはキリが見出されている。キリは古くからその材の利用を目的に移入されてきたとされる樹木で、出土材でも古くから報告例があるが(例えば、鈴木・能城 1997)、現在では林縁・裸地のような日当たりのよい向陽地に自生状態のものも多くみられるので、出土材が植栽されたものか自然に生育していたものかは判然としない部分がある。以上の結果から、景観的には畑の境にはクワ類が植えられ、キリもみられるなど、現在の山間部の畑と類似した様相であったと類推される。

1号トレンチ泥流直下出土の立木はいずれもクワ属で、やはり栽培あるいは自然に生育していたとみられる。また、流木にはクリ・コナラ節・クワ属が見出されている。これらは比較的遺跡の近辺にみられた

第1章 久々戸遺跡

樹種であるということが想定され、この結果から柱材に多用されていたクリは周辺に身近に生育していたことが窺える。

畑の耕作土出土植物遺体

畑の耕作土出土の植物遺体（作物の茎）は同定の結果、組織学的には双子葉類のうち木材構造を持つものであることが明らかになったが、樹木ではなく茎・根が木質化する草本性のものであることが考えられた。この植物遺体は出土状況から栽培されていた作物に由来すると想定されるが、江戸時代に栽培されていた作物・野菜類で木質化する茎・根を持つ種類には、当初から想定されているアサのほか、主にナス、トウガラシ、ワタなどがある。出土材とこれらの現生試料の木材組織を比較検討したところ、アサの木材構造に最も類似することが明らかになった。ただ、比較試料とした作物が4種類に限られているため他の何らかの作物である可能性も否定し得ない。出土植物遺体がアサである可能性は残されてはいるが、アサであると限定するには至らない結果であるといえる。

4. 分類群の記載

以下では、樹種同定の結果出土材に見出されたブナ属・クリ・コナラ属コナラ節・クワ属（根材含む）・トチノキ・キリ・双子葉類の材のほか、アサ・ワタ・トウガラシ・ナスの現生木材について組織の特徴を記載し、同定の根拠を示す。なお、アサの現生試料については群馬県埋蔵文化財調査事業団保管のものを使用させていただいた。ここに記して感謝いたします。

1) ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真図版 1a-1c

小型のやや丸い道管が、ほぼ単独時に数個複合して密に配列する散孔材。導管の直径は年輪界に向けてやや急に減少する。道管の穿孔は単一または階段状。放射組織は1-数列のものに広放射組織が混在する。

ブナ属にはブナ、イヌブナの双方があり、共に温帯上部に分布する高木性の落葉広葉樹であるが、ブナは日本海側の特に多雪地に多く、逆にイヌブナはそのような地域にはほとんど分布しない。材質は均質で堅強、韌性もあるが、保存性は悪い。江戸時代の出土材では専ら椀などの挽物の素地として用いられる。

2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真図版 2a-2c

年輪の始めに大型で丸い道管が単独で1-2列に並び、晩材部では小型でやや角張った薄壁の道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

クリは国内の温帯下部～暖温帯に広く分布する落葉広葉樹で、明るい林内や向陽地に多くみられる。材質は重硬で弾性に富むが、割裂は容易、耐朽性が高い。江戸時代の出土材では柱・杭などの土木建築材、井戸材、下駄などに用いられている。

3) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真図版 3a-3c

年輪の始めに大型の丸い道管が単独で1-2列に並び、晩材では小型でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものに大型の複合放射組織が混在する。

いわゆるナラ類の材で、温帯下部～暖温帯に分布するコナラ、温帯に分布するミズナラなどが含まれる。いずれも高木になる落葉広葉樹で優占林を形成する。材は重硬で弾性を有し、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。江戸時代の出土材では柱・杭などの土木建築材、下駄などに用いられる。

4) クワ属 *Morus* クワ科 写真図版 4a-4c, 5a-5c

〔幹・枝材〕年輪のはじめに大型で丸い道管が単独あるいは1-2個複合して1-2列並び、年輪界付近ではやや小型のやや角張った道管が数個集合して斜上状～接線状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。

放射組織は異性で1-5列ほど、上下端の直立細胞は1-2個連なり、時に不完全なさや細胞がみられる。

〔根材〕基本的な材構造は幹・枝材と同様であるが、晩材部の複合あるいは集合した道管の直径が大きく、また斜上状の傾向はほとんど認められなく、年輪が混んでいて年輪界は波打っており不鮮明である。

クワ属には温帯～暖温帯に広く分布し、谷沿い・河畔の適湿地や林縁などの向陽地に生育する落葉低木～小高木のヤマグワなど国内に自生する種のほか、中国大陸・朝鮮半島原産で果実の利用・養蚕用飼料の利用を目的として古くから世界各地に移入されてきた落葉高木のマグワといった栽培種が含まれる。マグワには多くの品種や雑種がある。材はやや重硬で強靱である。

5) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 写真図版 6a-6c

小型で丸い道管が、単独もしくは放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性、層階状に配列する。

トチノキは高木になる落葉広葉樹で、温帯の河畔や溪畔にみられる。材質は軽軟で加工・割裂は容易だが、保存性は低い。江戸時代の木製品では専ら漆器椀などの挽物素地に用いられる。

6) キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ゴマノハグサ科 写真図版 7a-7c

年輪の始めに丸い道管がほぼ単独で1-2列ならび、その後はレンズ状～連合翼状の木部柔細胞を伴った丸い道管が単独あるいは放射方向に1-数個複合してやや粗に分布する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で1-4列、紡錘形をなす。

キリは材の利用を目的に古くから植栽されてきた落葉広葉樹で、成長はきわめて早く小高木程度になる。現在では栽培されるほか、裸地や林縁、道路縁辺、河畔などに自生状態のものが人家近くから山間部まで普通にみられる。材質はきわめて軽軟で加工もきわめて容易。また割れも少なく、軽軟な材にしては珍しく狂いが少ないという特性がある。江戸時代の出土材では下駄に時に見出される。

7) 双子葉類 Dicotyledoneae 写真図版 8a-8c

やや小型で薄壁の丸みのある道管が、単独あるいは放射方向に複合してまばらに分布する。道管の直径はやや不規則に変化する。道管の穿孔は単一。放射組織は大柄で方形の細胞から構成される異性1-2列、同性に近いものも認められる。また高さはしばしば1mmを超える。木部柔細胞は周囲状。道管と放射組織との壁孔はごく小さなふるい状。

上記の特徴から維管束が輪状に配列していることがわかり、したがって維管束が散在する単子葉類ではなく、双子葉類の組織である。またかなりの2次木部が生じていることから、双子葉類の中でも木材組織をもつものであることが判断される。このような組織をもつのは木本か木質化する茎・根を持つ草本であるが、このうち所有の現生樹木標本からは該当するものがなく、木質化する草本の茎である可能性が高いと推察される。また、下に示す現生試料のうち、ナスは道管の直径や放射組織が明らかに異なり、ワタは道管の直径・配列が類似しているものの放射組織は明らかに異なる。トウガラシも同様に道管の直径・配列が類似するが、放射組織がやや異なる。残りのアサの道管の直径・配列、および放射組織などの特徴が最も近似している。

8) アサ *Cannabis sativa* L. アサ科 写真図版 9a-9c

小型で丸みのある道管が、単独あるいは放射方向を中心に1-数個複合してまばらに分布する。道管は薄壁で、また直径はやや不規則に変化する。道管の穿孔は単一。放射組織は大柄で方形の細胞から構成される異性あるが、同性に近いものも認められ、1-2列。木部柔細胞は周囲状。道管と放射組織との壁孔はごく小さなふるい状。

第1章 久々戸遺跡

アサは栽培される一年草で、種子が香辛料・薬用・飼料などとして、また茎から繊維が取られ衣類・縄として利用され、品種により花序や葉に幻覚成分を含み大麻となる。基部は木質化する。中国大陸では非常に古くから利用され、日本でも縄文時代から種子の出土例がある。

9) ワタ *Gossypium* sp. アオイ科 写真図版 10a-10c

小型でやや厚壁の丸みのある道管が、単独あるいは放射方向を中心に1- 数個複合してまばらに分布する。道管の直径はやや不規則に変化する。道管の穿孔は単一。木部柔細胞は周囲状。放射組織は大柄な細胞からなる異性で1-3列、多列部にはさや細胞が不完全に取り囲む。また高さはしばしば1mmを超え、直立細胞を介して他の放射組織と時に連絡する。道管と放射組織との壁孔は小さなふるい状~交互状。

ワタは本来多年草であるが、一年草として栽培され、綿毛を採取して木綿として利用される。茎は木質化する。ワタにはそれぞれ起源の異なる種類が数種あり、日本のものはアジアワタの系統が16世紀に中国から移入されて栽培されたとされる。江戸遺跡では花粉での検出例もある。

10) トウガラシ *Capsicum annum* L. ナス科 写真図版 11a-11c

小型でやや厚壁の丸みのある道管が、単独あるいは放射方向を中心に1- 数個複合してまばらに分布する。道管の直径はやや不規則に変化する。道管の穿孔は単一。放射組織はやや大柄な細胞からなる異性で1-2列、多列部ではしばしば1mmを超える。木部柔細胞は周囲状。道管と放射組織との壁孔は小さなふるい状。

トウガラシは食用を目的に栽培される多年草で、一年草として栽培される。基部は木質化する。日本に移入されたのがいつ頃なのかははっきりとはしないが、江戸時代には一般的に広まっていたとされ、江戸の遺跡においても種子の検出例がある。

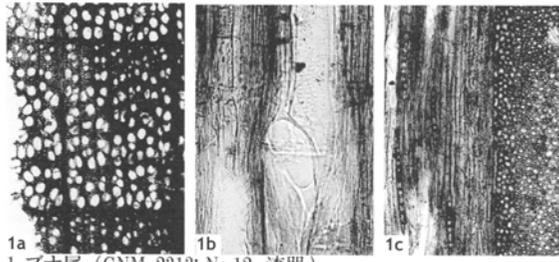
11) ナス *Solanum melongena* L. ナス科 写真図版 12a-12c

中型~やや小型で厚壁の丸みのある道管が、単独あるいは放射方向・接線方向に1- 数個複合してまばらに分布する。まれに極小型の道管を伴う。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で1-3列、構成細胞は小型で丸みを帯びており、高さもほとんど1mm以下で、5mm前後のものが大半である。木部柔細胞は周囲状。道管と放射組織との壁孔は小さなふるい状。

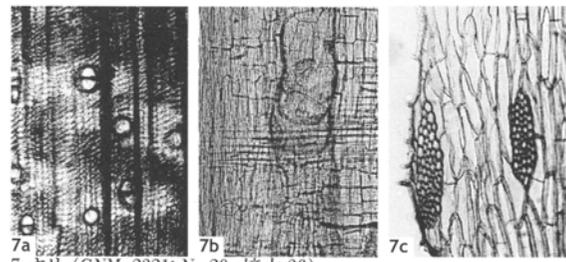
ナスは食用を目的に栽培される一年草で、基部は木質化する。インド原産といわれ、熱帯では多年草となる。奈良時代には食用にされていたといわれ、正倉院文書にはすでに「茄子」としての献上記述がある。江戸時代には一般的に広まっていたとされる。

引用文献：

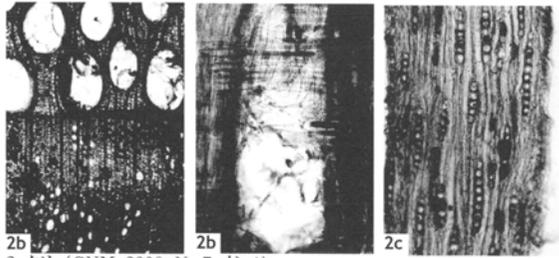
能城修一・鈴木三男（1997）石川条里遺跡出土木製品の樹種，「（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 - 長野市その3 - 石川条里遺跡 第3分冊」日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター，68-138



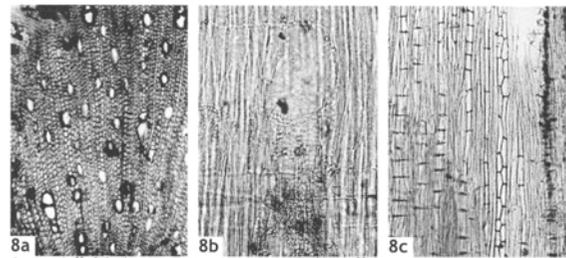
1. プナ属 (GNM-2313; No.12 漆器)



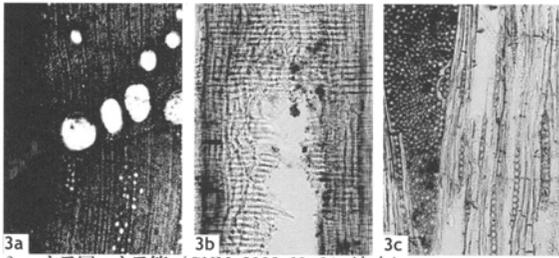
7. キリ (GNM-2321; No.20 境木 36)



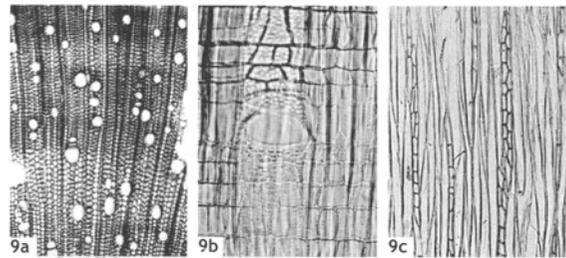
2. クリ (GNM-2308; No.7 柱 4)



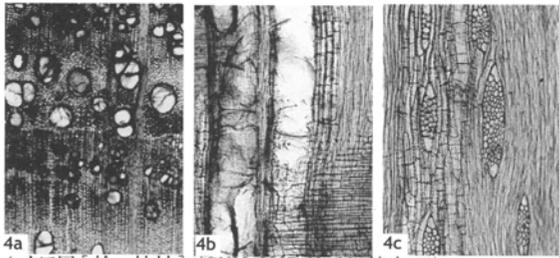
8. 双子葉類 (GNM-2316; No.15 作物の茎)



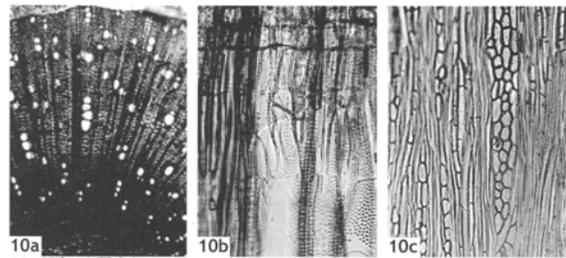
3. コナラ属コナラ節 (GNM-2332; No.31 流木)



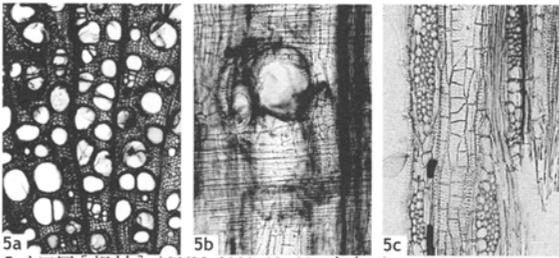
9. アサ (現生)



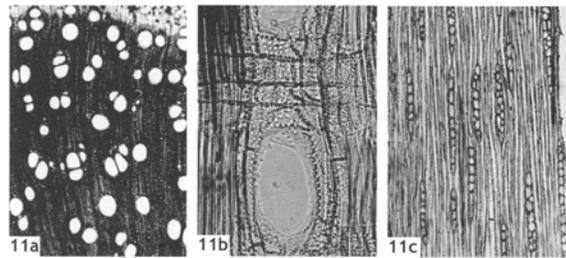
4. クワ属〔幹・枝材〕 (GNM-2327; No.26 境木 44)



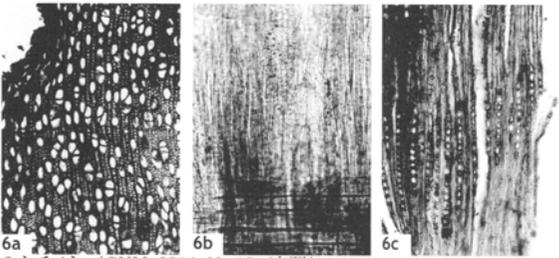
10. ワタ (現生)



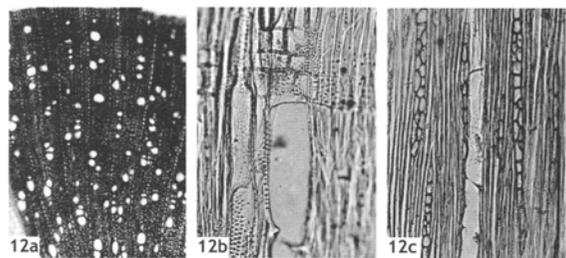
5. クワ属〔根材〕 (GNM-2329; No.28 立木 1)



11. ナサ (現生)



6. トチノキ (GNM-2314; No.13 漆器)



12. トウガラシ (現生)

scale bar 1,6,8-12: a-1.0mm, b-0.2mm, c-0.4mm
2-4,7: a-1.0mm, b-0.4mm, c-0.4mm

* No. は試料 No. を示す
a: 横断面 b: 放射断面 c: 接線断面

写真図版： 出土材／現生木材・木材組織光学顕微鏡写真

(3) 久々戸遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

大型植物化石の検討は、近世のK 23号畑(7号トレンチ)耕作土および2号掘立柱建物(柱穴6)覆土より出土した合計2試料について行った。試料は、既に抽出済みであり、プラスチックケースに乾燥保存されていた。同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

2. 出土した大型植物化石

同定されたのは、木本のモモ核であった。以下に各試料の詳細を記載する。

K 23号畑(7号トレンチ)耕作土：縫合線に沿って半分(1/2片)に割れたものが2個であった。

2号掘立柱建物(柱穴6)覆土：破片が合計4個であり、縫合線に沿って半分に割れたものが3個(うち1個は下端が欠損)、小さな破片(縫合線部か)が1個であった。

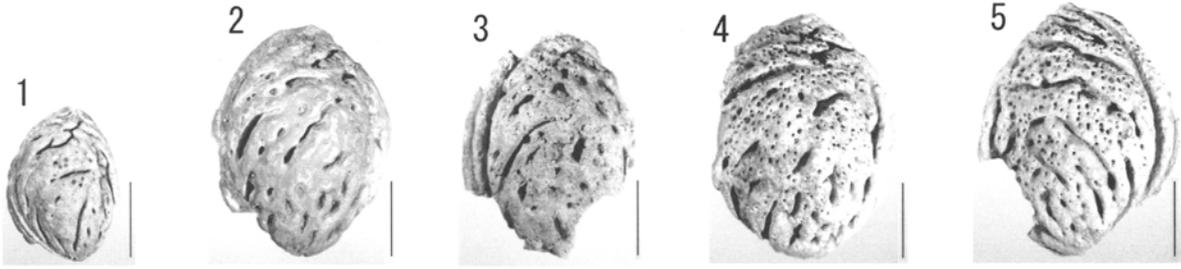
3. 考察

検討した結果、いずれの試料も同定されたのは栽培植物のモモであった。K 23号畑から出土した核は、栽培されていたものが埋積した可能性が考えられ、2号掘立柱建物から出土した核は、生活の場で廃棄されたものが埋積した可能性が考えられる。

4. 形態記載

モモ *Prunus persica* Batsch 核

側面観は卵形ないし楕円形で先端はやや尖り気味。上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と穴がある。K 23号畑から出土した核は、長さ20mmと30mm程度、2号掘立柱建物の核は、長さ32mm、33mm、29mm以上(下端欠損)である。K 23号畑の核は、2号掘立柱建物の核より小さく、20mmという小さい核も含む。2号掘立柱建物の核は、いずれも30mmを超し、表面に小孔が多数あり(K 23号畑の核には小孔はない)、現在のモモにやや近い形態である。このように、K 23号畑と2号掘立柱建物の核とでは、形態に差異があり、品種の異なる可能性がある。



図版1 出土した大型植物化石（スケールは1cm）

1、2.モモ、核、K 23号畑（7号トレンチ）耕作土 3～5.モモ、核、2号掘立柱建物（柱穴6）覆土

表14 久々戸遺跡 IX区新旧遺構番号振替表

掲載遺構名	調査時遺構名
畑	
K 19号畑	1号畑
K 20号畑	2号畑
K 21号畑	K21-1号畑
	K21-2号畑
K 22号畑	3号畑
K 23号畑	4号畑
	K23-1号畑
	K23-2号畑
K 24号畑	5号畑
K 25号畑	6号畑
K 26号畑	7号畑
K 27号畑	8号畑
K 28号畑	1号トレンチ畑
K 29号畑	盛土下1トレンチ畑
K 29号畑	盛土下2トレンチ畑
平坦面	
K19-1号平坦面	1号畑1号平坦面
K23-1号平坦面	5号畑1号平坦面
K23-2号平坦面	5号畑1号平坦面
ヤックラ	
28号ヤックラ	1号ヤックラ
29号ヤックラ	2号ヤックラ
30号ヤックラ	3号ヤックラ
31号ヤックラ	4号ヤックラ
32号ヤックラ	5号ヤックラ
石垣	
5号石垣	1号石垣
6号石垣	2号石垣
7号石垣	3号石垣

掲載遺構名	調査時遺構名
境木	
境木 1	境木 15
境木 2	境木 16
境木 3	境木 17
境木 4	境木 23
境木 5	境木 1
境木 6	境木 2
境木 7	境木 3
境木 8	境木 4
境木 9	境木 5
境木 10	境木 6
境木 11	境木 7
境木 12	境木 8
境木 13	境木 9
境木 14	境木 10
境木 15	境木 11
境木 16	境木 12
境木 17	境木 13
境木 18	境木 14
境木 19	境木 18
境木 20	境木 19
境木 21	境木 20
境木 22	境木 21
境木 23	境木 22
境木 24	境木 24
境木 25	境木 25
境木 26	境木 45
境木 27	境木 44

掲載遺構名	調査時遺構名
境木	
境木 28	境木 26
境木 29	境木 27
境木 30	境木 43
境木 31	境木 28
境木 32	境木 29
境木 33	境木 42
境木 34	境木 30
境木 35	境木 31
境木 36	境木 41
境木 37	境木 40
境木 38	境木 39
境木 39	境木 38
境木 40	境木 37
境木 41	境木 36
境木 42	境木 35
境木 43	境木 34
境木 44	境木 33
境木 45	境木 32
境木 46	2-3号畑境木

第2章 中棚Ⅱ遺跡

第1節 遺跡の概要

検出された畑は吾妻川左岸の下位段丘面に位置する。最も面積の広い畑は、平成13年度に調査された中棚Ⅱ遺跡の東側からの続きで、東西の畝、および円形平坦面等が検出された。

この畑は北側から南の吾妻川に向かって緩やかな傾斜を持ち、北側は崖の直下まで延びていたようであるが、江戸時代以降に築かれたと思われる石垣や近年の攪乱（土取りによるものか）で大きく壊された状況が見られた。

吾妻川に面した畑の南側については泥流によって押し流され、崩落したと思われる畑の南端部分を検出した。さらに畑の東側には一段下がった、細く南に下る道が検出されている。

この道を境に東側は一段高くなっており、面を違えて畑を1面確認した。この畑はAs-A軽石が鋤きこまれており、軽石降下後、泥流に覆われる直前に耕作（天地返し）が行われた状況が確認されている。

最も上の面では狭い範囲であったが、南北に走るヤックラを境に2面の畑が確認された、遺構を覆う表土が浅く、遺存状況は極めて悪かった。

第2節 基本土層

基本土層は最も堆積状態の良好な調査区内、N26畑部分の西壁を元に作成した。堆積土の層序は大きくI～Ⅷ層に分けることができる。なお、中棚Ⅱ遺跡（2003）の基本土層とは色調、粒子の説明において若干異なっていることを断っておく。また、挿図中の土層説明についてはこの基本土層I～Ⅷ層を基本に説明を行っている。

I層 表土である、近年まで畑として使われていたもので、やや粒子の粗い黒色の砂礫質の土である、厚さはおよそ20～30cmを測る。

II層 泥流層である。天明三（1783）年に浅間山の

噴火に伴って発生したもので、吾妻川流域に甚大な被害をもたらした。厚さは吾妻川寄りには1.2m程で、山側に向かって徐々に薄くなっている。混入物は火山成因の礫および川原石を含み、土質はやや間隙の見られる土であるが締まりは比較的良い。下層部分はやや黒味が見られ礫の混入が少なくなっている。

III層 径数mmの暗黄褐色砂礫層である。厚さは2から3cmで均一面として把握される。逆級化現象による堆積層。

IV層 III層と同様の逆級化現象による堆積層、粒子はさらに細粒でAs-A軽石の直上に部分的に途切れる状況で観察される。

V層 As-A軽石層である。軽石粒は、径数mmから1cm程で発泡度はあまり良くない。色は灰白色でやや締まった状態を示す。サク部分での厚さは2から3cm程である。

VI層 畑耕作土である。暗褐色土、やや砂質で少量の礫含む、粘性は少ない。比較的締まりがあり、部分的に薄い鉄分の凝集層が断続的に観察される。

VII層 黒褐色土でVIよりもやや明るい色調である。酸化鉄分は少なく、礫の混入がやや多い。締まりがあり、やや粘性も見られる。

VIII層 砂質の黄褐色土で細粒砂土を主体とする。締まり粘性ともに少ない。

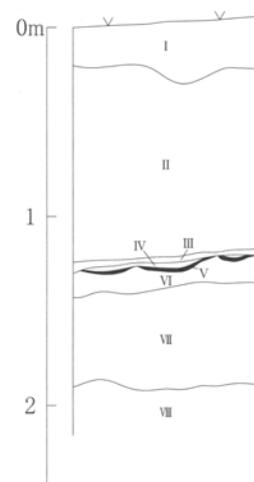


図34 基本土層図

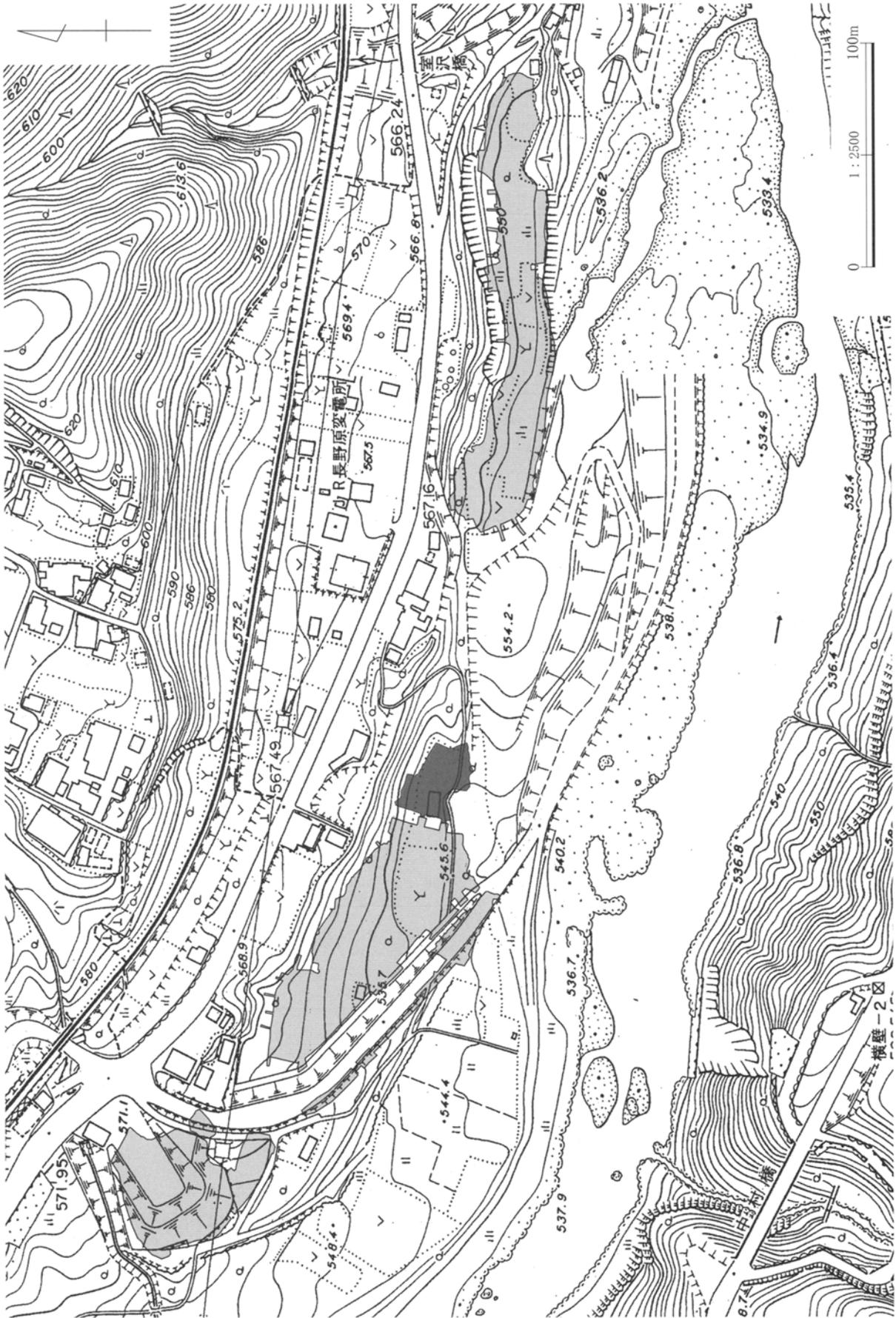


図35 調査区域図

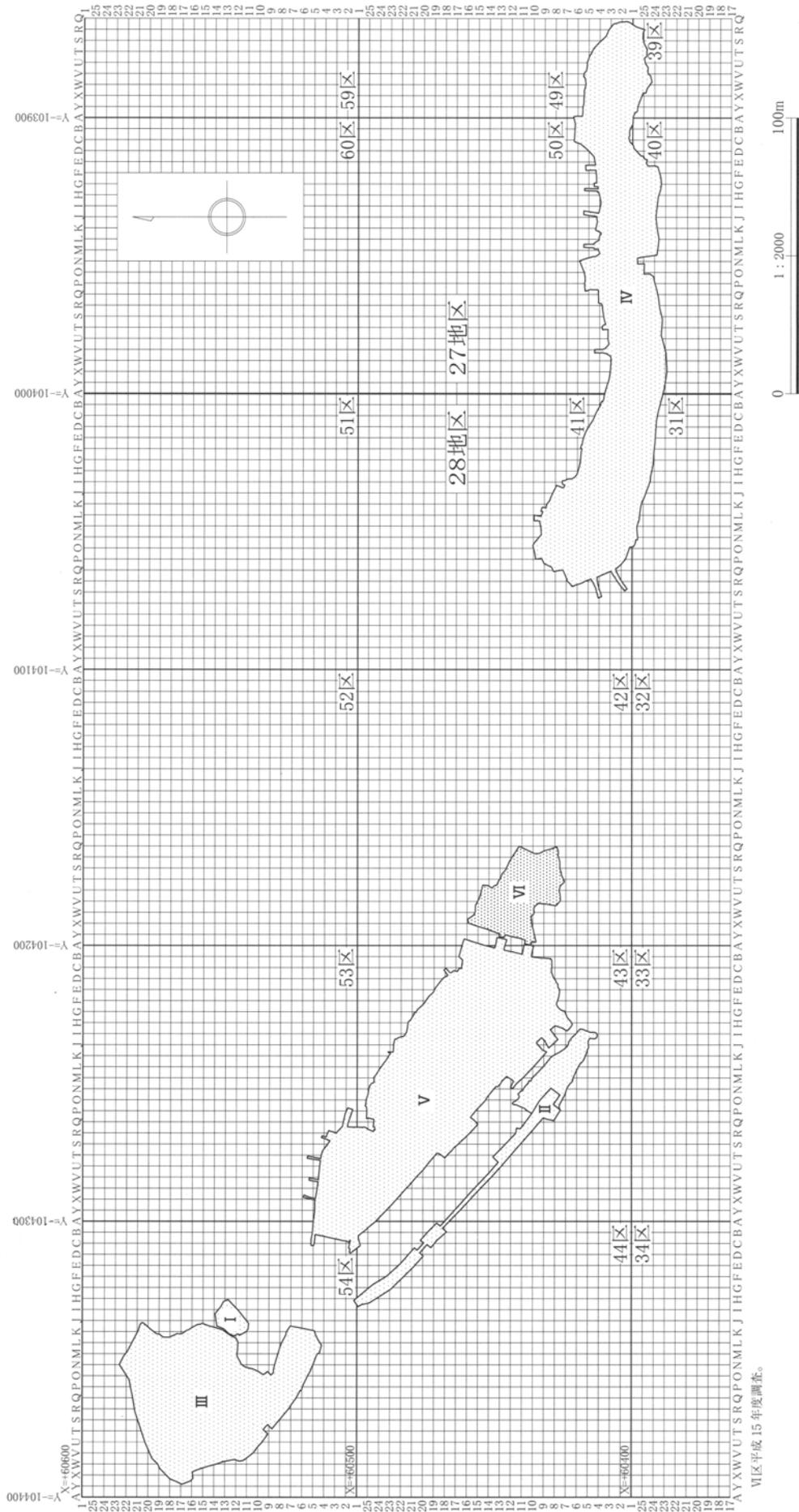


図36 グリッド設定図

第3節 検出された遺構と遺物

(1) 畑

AS-A下畑は高さの異なる3面が検出された。中棚Ⅱ遺跡で調査されたN-26畑の続き、その東に一段高い位置にN-39畑が、さらにその北側上段にN-40・41畑が確認された。最も広い面積が検出されたN-26畑には3箇所(北側崖よりも痕跡が確認されている)の円形平坦面が確認されている。

・ N 26 - 14・15 畑

中棚Ⅱ遺跡の東端に検出されていた畑の続きである。面積は(162.8) m²で、東西に走る畝は長さ、およそ8.1 mで、調査では50条を確認検出した。畝幅は約45cm、高さはおよそ10cmである。軽石の降下前に培土(土寄せ)が行われたことが確認された。畑は南にやや傾斜しているが、ほぼ中央で変換が見られ、下側は約4°であるのに対し、北側は約6°と大きくなっている。また北端部分はかなり削平されており、畝が荒れた状態で検出された。南側も途中で切れた状態で調査区外となる。円形平坦面はほぼ中央に一基が検出されている、北側にも存在した可能性もあるが確認できなかった。

畑を埋めている土層の断面は図38のようである。畑の面から現表土面までの高さはおよそ1.4～1.0 mで、南側が厚くなっている。表土下に天明泥流が堆積する、泥流は比較的締まりがあり、砂礫(火山成因の礫を多く混入している。)AS-A軽石直上には灰褐色の砂層が見られ、その上には小さい礫を含む砂礫層が堆積しており、逆級化現象が認められた。

畑の耕土は少量の小礫を含み、黒色土で締まり、粘性ともにある。薄い赤褐色の鉄分層が部分的に観察されている。表面は比較的状态が良かったが、泥流中の石による攪乱坑も見られる。

・ N 26 - 16・17 畑

N 26 - 14・15畑の東側に位置する。平面形状は

ほぼ長方形で、面積は(143.8) m²である。畝方向は東西で長さは9.0～8.2 mである。北に行く程やや長くなっている。確認できた条数は48条であるが、北端部分は荒れており、南側は途切れた状態で調査区外となっている。畝幅は約40 cmで、高さは約10 cmである。N 26 - 14.15畑とはややずれて作られている。畑面は南に緩く傾斜しておりその角度は約4°である。円形平坦面は南端に1基、北西端に不明瞭であったが1基を検出した。また泥流による攪乱坑がいくつか確認されており、大きいものでは長さ約2 m、幅60～80 cmを測る。さらに形状から足跡と見られるものも検出されているが断定はできなかった。

・ N 26 - 18 畑

N 26畑の東端に作られている。東側は10号道になる。畑の形は北側を頂点とする三角形を呈し、南側は泥流によって削られ、崩落した状況である。畑の面積は(100.4) m²で、畝は東西に走り北側が短くなっている。北端で1.4 m、南端で約10 mである。畝幅43 cm、高さは約10 cmである。確認された条数は41条である。ほぼ中央に円形平坦面が検出されている。また、この畑の南端部において畑面の崩落が確認されている。崩落状況は畑面が吾妻川に向かって階段状に落ち込んでいる状況でその段差は25～30 cmである。断面の観察では、2箇所の左斜め上から右下に向かう地割れ状の亀裂が見られ、天明泥流土を主体とした土が入り込んでいた。

・ N 39 畑

N 26畑の東側、10号道を挟み一段高くなった場所に位置する。北側は後世の攪乱で削られている。畑面は10号道から約1 m程高くなっており、西に向かって緩く傾斜を持つ。また南には巨大な石が露出している。畑面には畝は見られず軽石がブロック状に点在していたことから、軽石降下後に天地返しが行われた畑と判断された。確認トレンチ断面の見、また畑の東端に南北に細長く軽石が残っている

第2章 中棚Ⅱ遺跡

ことから、畝は南北方向に作られていたものと思われる。検出された面積は(64.0) m²である。

・ N 40 畑

調査区東端の狭い平坦部分において検出された。N 39 畑よりも約4 m高い位置に作られている。検出された面積はわずかであるが、東側には70号ヤックラが作られている。畑面が荒れていたために畝の形状本数、畝幅の計測などは明確にできなかったが、畝の走行は東西ないしは南東→北西か、検出した面積は(14.0) m²である。

・ N 41 畑

N 40 畑の東側70号ヤックラを挟んで位置する。南北に細長く検出したが北および東側は調査区外となる。畑は南に向かって傾斜を持ち、畝はほぼ東西方向に走り、確認された条数は30程である。畝幅は約45 cmで高さは8 cm程である。畑面は荒れており畝も途切れた状態のものが多かった。検出した面積は(35.2) m²である。

(2) 道

10号道

N 26 - 18 畑とN 39 畑との間にあって一段低くなっている。当初排水用の溝と思われたが、底面が

赤褐色に硬化していることから道とした。南北に走り、北側は攪乱が見られ切れている。また南側についても調査区外となっているため全容は不明である。検出した長さはおよそ18 mで上幅は80 cmから1 mで、南側が広がっている。南に向かって下がっており、検出した部分での高低差は約1 mを測る。底部には厚さ2～3 cmのAs-Aが堆積する。また、東側の法面には比較的大形の石が露出していた、かなり崩落した状況であったが石垣状になっていた可能性も考えられる。

(3) ヤックラ

最上段に1基が検出された。

70号ヤックラ

N 40 畑、N 41 畑の境に作られている。北と南が切れているために検出した長さは約10 mで幅は最大で2 m程で石が乱雑に検出された。南に傾斜しており、南側が広がっている。

畑面からは30 cm程高まっており、南北方向に礫が集中して見られる。礫は20～30 cm程度の大きさのものを中心とするが、大きいものは1 m近い大きさである。表面に露出した石はあまり多くはないが、断面の観察では埋まっているものも多く見られる。下部に見られるものはかなり整然と並んでいるものも確認されている。

表15 畑計測値一覧表

畑名	単位畑名	畑面積 (m ²)	反・畝・歩	斜度	斜面面積 (m ²)	反・畝・歩	畑面積 (m ²)	反・畝・歩
26	26-14	163	1・19	5°	164	1・19	407	・4・
	4°							
	26-16	144	1・13	4°	145			
	4°							
	26-18			100		1・		
39	—	64	・19		65	・19	64	・19
40	—	14	・4		15	・4	14	・4
41	—	35	・11		36	・11	35	・11



42-P-16



43-A-6

42-P-6

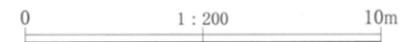


図 37 調査区全体図

A L=549.00m

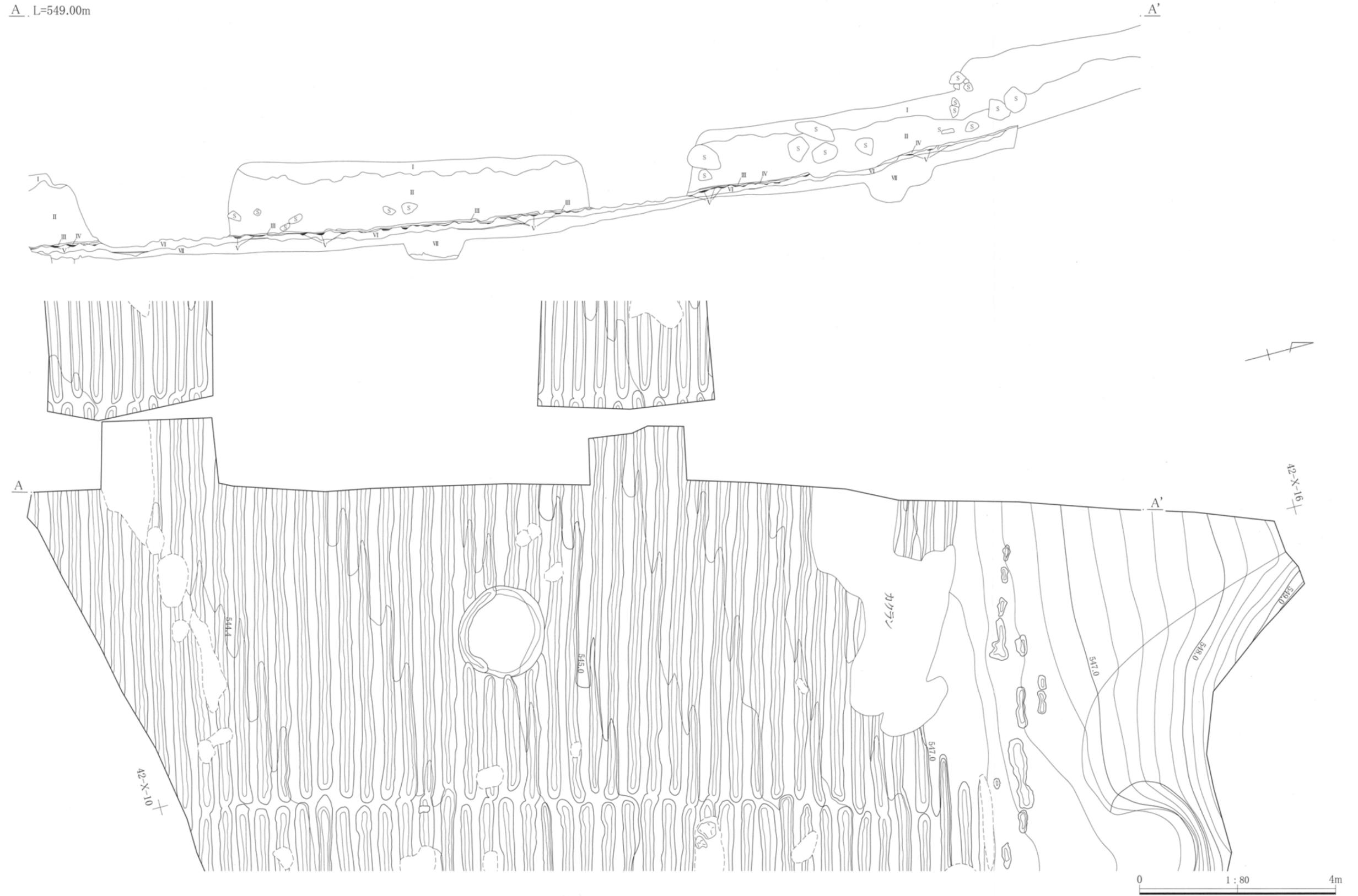


図38 N 26-14・15畑

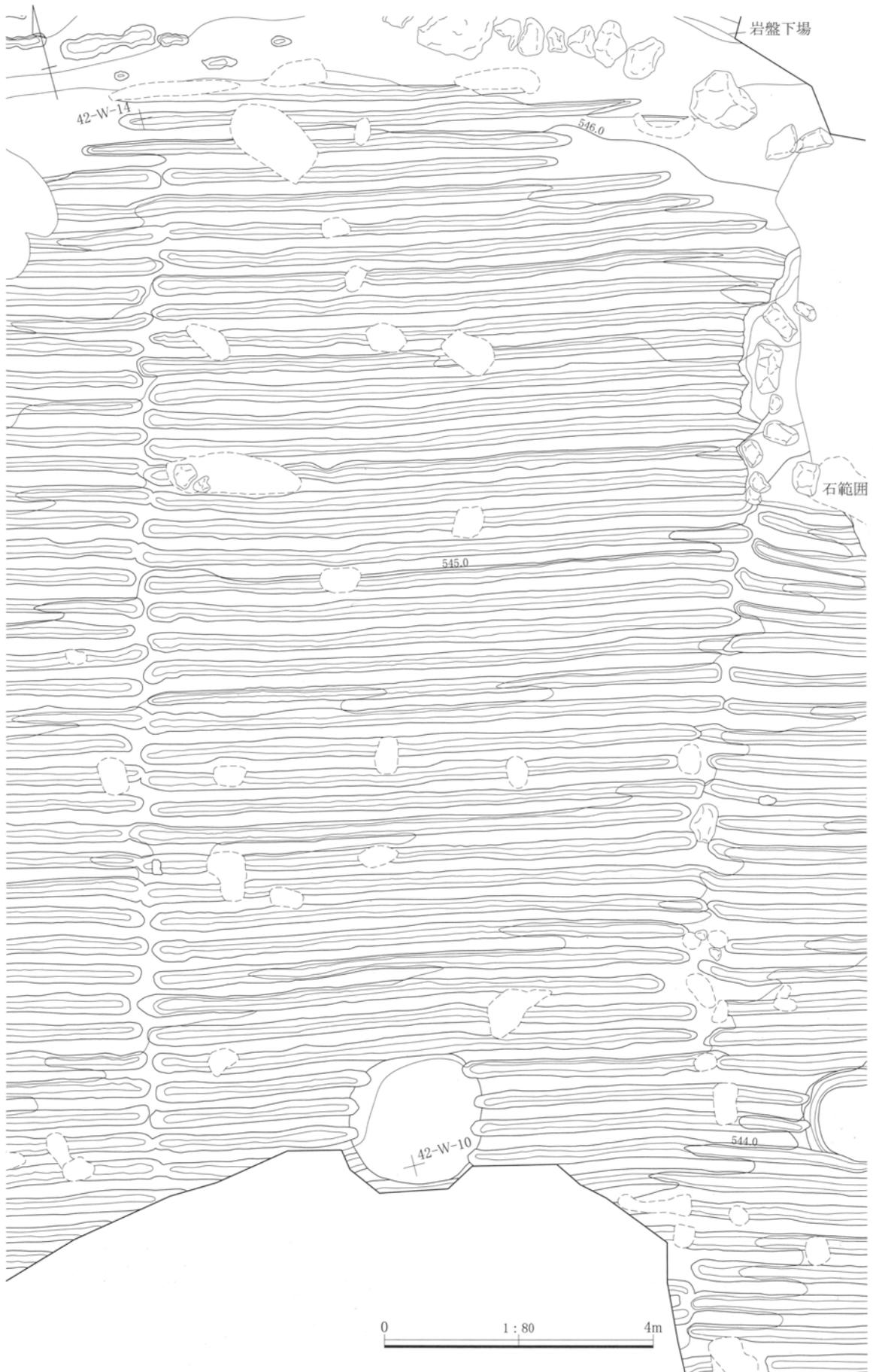


図39 N 26-16・17畑



図40 N 26-18 畑・10号道

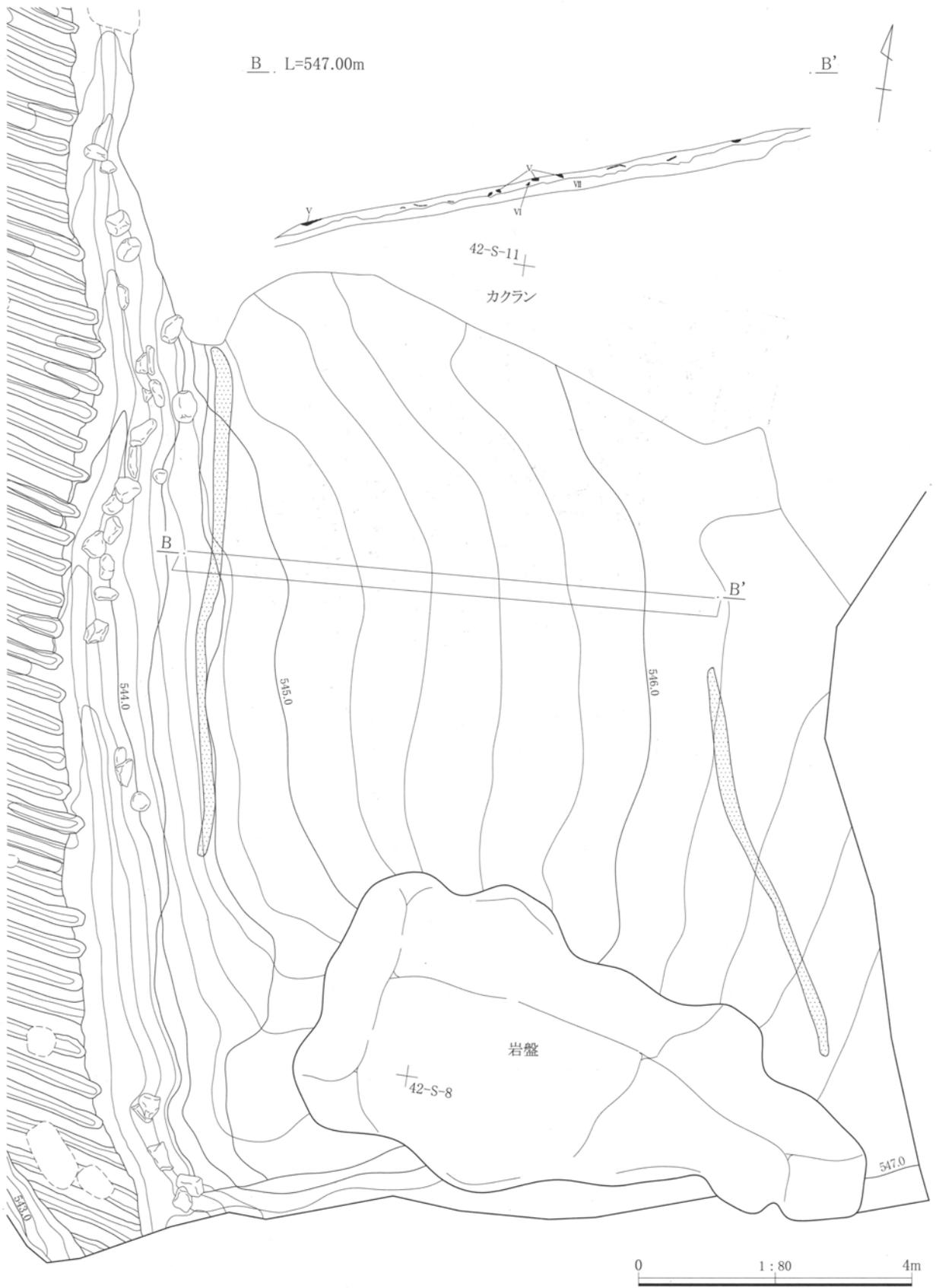


図41 N 39 畑

42-O-13



図42 N 40・41畑・70号ヤックラ

(4) 円形平坦面

調査区内で4箇所検出されているが内1つは、ほとんど削られていた状況で図示することができなかった。また、N 26 - 14 畑についても北側に存在していた可能性が高いが、削平されていたために明確には確認ができなかった。

・ N 26 - 15 円形平坦面

円形で径 1.8 m で面積は 2.54 m² である。北側にわずかな高まりが廻り、南側は浅い落ち込みが見られる。中は平坦で比較的締まった状態である。南にやや傾斜を持つ。

・ N 26 - 17 円形平坦面

円形で径 1.9 m、面積は 2.83 m² である。調査区の南端に検出されている。北側はサクに接しておりラインが直線的になっており、東西はサクの端部が切っているような状況が見られる。中は平坦で締まりが見られる。

・ N 26 - 18 円形平坦面

円形で径約 1.5 m、面積は 1.77 m² である。確認された中では最も小さい。西側は形状に沿って弧状に浅く落ち込んでいるが、東側はほぼ平坦で畑と連続する。中は平坦で締まりがある。南にやや傾斜している。

(5) 出土遺物

遺物は泥流中、畑面、耕作土および表土中から陶磁器、須恵器、銅製品、鉄製品など8点である。須恵器は坏の底部片で平安時代、他は江戸および近現代に比定されるものである。金属製品は煙管と釘が出土している。

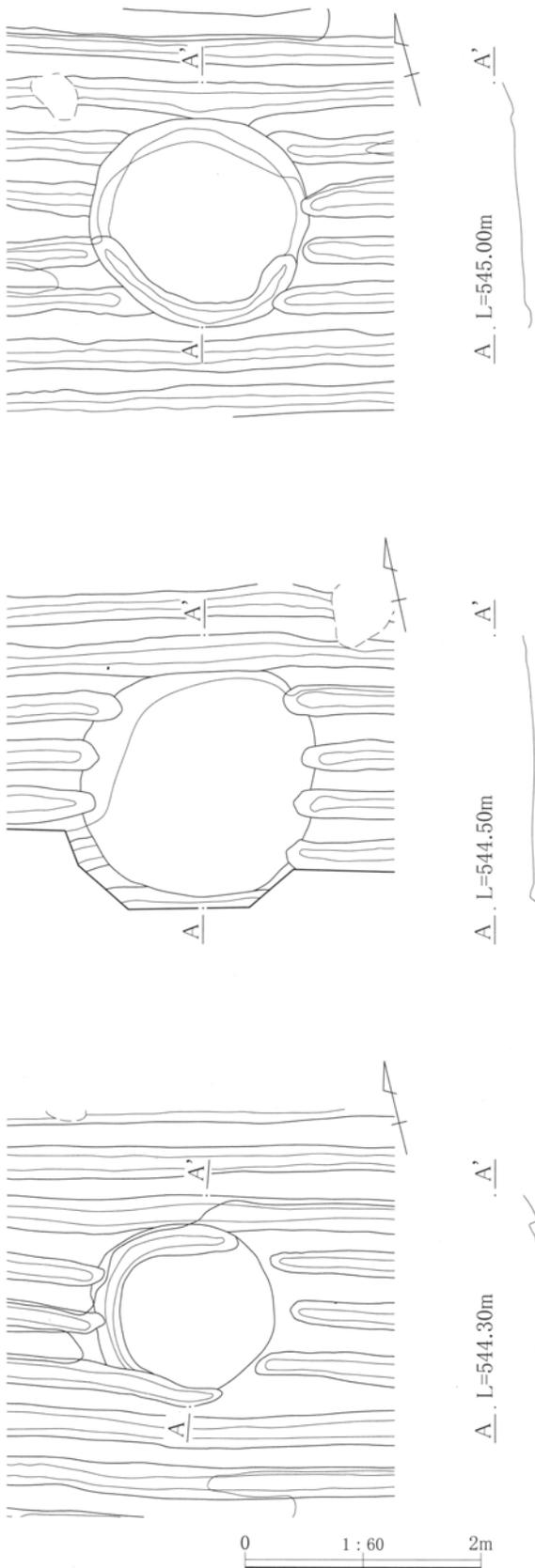


図43 N 26-15・N 26-17・N 26-18 円形平坦面

第2章 中棚Ⅱ遺跡

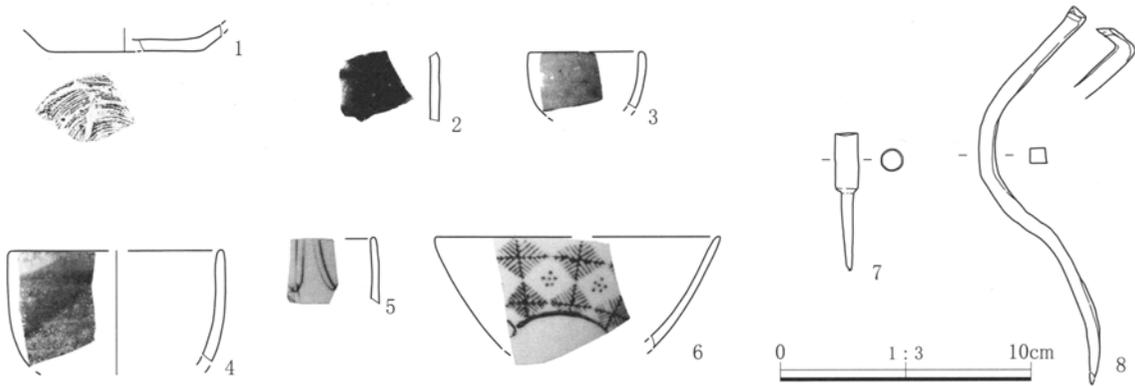


図44 出土遺物

表16 出土遺物観察表

番号	出土位置	種類	計測値			残存部位	釉の特徴	胎土とその特徴	生産地等	時期等
			口径	器高	底径					
1	As-A下畑	須恵器杯	-	-	6.0	低部片		灰白色、底部回転糸切(右)		9 C後半
2	As-A下畑	陶器碗(天目)	-	-	-	胴部片	鉄釉 黒褐色		瀬戸・美濃	中世～江戸
3	天明泥流中	陶器小碗	(4.5)	-	-	口縁部片	灰釉		瀬戸・美濃	18～19C
4	表土	陶器碗	(8.5)	-	-	口縁部片	飴釉、口縁部にうのふ釉を流す		瀬戸・美濃	18C中～後
5	表土	磁器碗	-	-	-	口縁部片	二重網目文		肥前・波佐見	18C
6	表採	磁器碗	(11.4)	-	-	口縁部片	ゴム印判		瀬戸・美濃	昭和
7	N26-17畑	銅製品煙管(吸い口)	長さ5.5	径0.9		ほぼ完形	肩部に段を持ち吸い口部に向かってやや細くなる。			18C
8	天明泥流中	鉄製品釘	長さ15.0	一辺0.6		ほぼ完形	頭は短く折れて端部やや欠損、大きくS状に曲がり先端部僅かに欠損。断面方形。			

第4節 まとめ

中棚Ⅱ(2)遺跡において検出されたAs-A下畑は、中棚Ⅱ遺跡のN26畑の東部分である。

吾妻川寄りについては、未調査部分もあるが、一部崩落状況を確認することができた。検出されたN-26畑は軽石降下前に培土されており、このことは西側の中棚Ⅱ遺跡と同様である。また作物に関しては今回検出した畑については、その痕跡等についても確認できなかった。

なお、N26畑の詳細な検討については中棚Ⅱ遺跡(2003)を参照願いたい。10号道に関しては検出した長さが10mと短かく、さらに北および南側(検出範囲内では東に向かうようである)が途切れているために詳細は不明である。底面の硬化状況等から道と判断した。おそらく段差を持つ畑を繋ぐものとして機能していたのであろう。

今回の調査区内においては三段の高さの異なる畑が検出されているが、最上段の畑(N40・41畑)に関しては検出面積が狭かったうえに、畑面の状態も極めて悪いものであった。中段に作られたN39畑は面積は広くないが、唯一軽石降下後に天地返しが行われており、耕作面下に軽石がブロック状に鋤きこまれていた。なお東と西端にAs-A軽石が溝状に集中して残っている部分が見られた、これは両端のサク部分が鋤き込まれずに残されたものと見られる。

第3章 西ノ上遺跡

第1節 調査の概要

今回の調査では、天明泥流下の畑の調査が主体となった。調査区はほぼ全面に天明泥流が堆積しており、その厚さは、薄い地点で60cm、最も厚い地点で1.2mを測っている。これは、地形によるもので、調査区の中央付近が標高では最も高く、両端部に向かって標高が低くなるとともに、天明泥流の厚さも厚くなる傾向が見られた。

天明泥流の大部分を重機で除去したのち、ウネサクの検出を開始した。その結果、調査区のほぼ全域で天明泥流に覆われた畑を検出した。これらの畑は区画の状況、形状などから12の畑に分けることが出来た。そして、これらの畑の中で、平坦面の存在やウネサクのずれ、断絶などで区画はできるが、1つの畑として考えられるものについては、畑番号に枝番号を付した。5号畑、7号畑、8号畑、10号畑が該当する。ただし、今回の調査は、道路幅のみの狭い調査区であったため、畑の区画全体を調査できた畑が無かったため、畑構造を解明する手掛かりは少なかつたといわざるを得ない。

今回調査された畑は、ウネの規模から2種類に大別することができる。ウネ幅が50～60cmの畑と、90～120cmの畑である。各畑の記述の中でふれているが、これらの差は畑の作物によるものと推定されるが、ウネ幅の広い畑からは作物を特定できるような資料を得ることはできなかった。ウネ幅の狭い畑からは後述するように、イネ科と思われる植物の痕跡が認められており、雑穀類が耕作されていたと考えられる。

円形平坦面は3基が検出された。円形平坦面を持つ単位畑全体が調査できていないため、資料不足であるが、円形平坦面自体がやや小さめであることは川原湯地区の畑構造が、他地区と異なることを示していることが推定される。また、畑耕作面には泥流中の石による攪乱の跡が多く認められた。そのほとんどは同一方向を示しており、泥流の流下の方向が一定であったことが確認できた。

天明泥流直下の畑の調査終了後、トレンチを設定し畑の下面での遺構確認を行った。遺構は確認できなかったが、調査区の南側（山側）には、畑耕作土の下位に黒色土の堆積が認められ、少量の縄文土器片、黒曜石が包含されていた。今後、本調査区の南側では縄文時代の遺構の存在も想定される。

表17 畑計測値一覧表

畑名	調査面積(m ²) ^{*1}	ウネ幅(m) ^{*2}	尺相当(尺)	斜度(度)	ウネの走向方向(度) ^{*3}	備考
1号畑	30.7			11.9		ウネサク検出できず
2号畑	120.1			8.3		ウネサク検出できず
3号畑	76.9	0.52	1.58	8.8	N-40-E	
4号畑	221.8	0.53	1.61	5.9	N-42-E	
5-1号畑	72.5	0.56	1.7	7.3	N-48-E	
5-2号畑	112.9	0.53	1.61	3.2	N-50-E	
5-3号畑	20.4			7.3		ウネサク検出できず
5-4号畑	26.5	0.59	1.79	1.9	N-49-E	
6号畑	76.3	0.91	2.76	3.6	N-60-E	
7-1号畑	30.3	0.86	2.61	2.6	N-53-E	
7-2号畑	14.6	0.50	1.52	3.4	N-57-E	
8-1号畑	80	0.55	1.67	1.9	N-72-E	
8-2号畑	38.6	0.55	1.67	2.4	N-74-E	
9号畑	80.7	0.49	1.48	1.7	N-77-E	
10-1号畑	9.9	0.96	2.91	3.1	N-156-E	
10-2号畑	39.9	1.23	3.73	4.3	N-54-E	
11号畑	112.7	0.51	1.55	5.3	N-70-E	
12号畑	61.5	0.50	1.52	6.2	N-65-E	

*1 調査面積は1/40の平面図上で、デジタルプランメーターによって3回計測した平均値を用いた。

*2 ウネ幅は概ねウネに直交するラインを設定し、この長さをこの直線にかかるウネ数によって割り戻した数値を用いた。

*3 ウネの走向方向は1/40の平面図上で畑内のウネ3本の計測値の平均値を用いた。

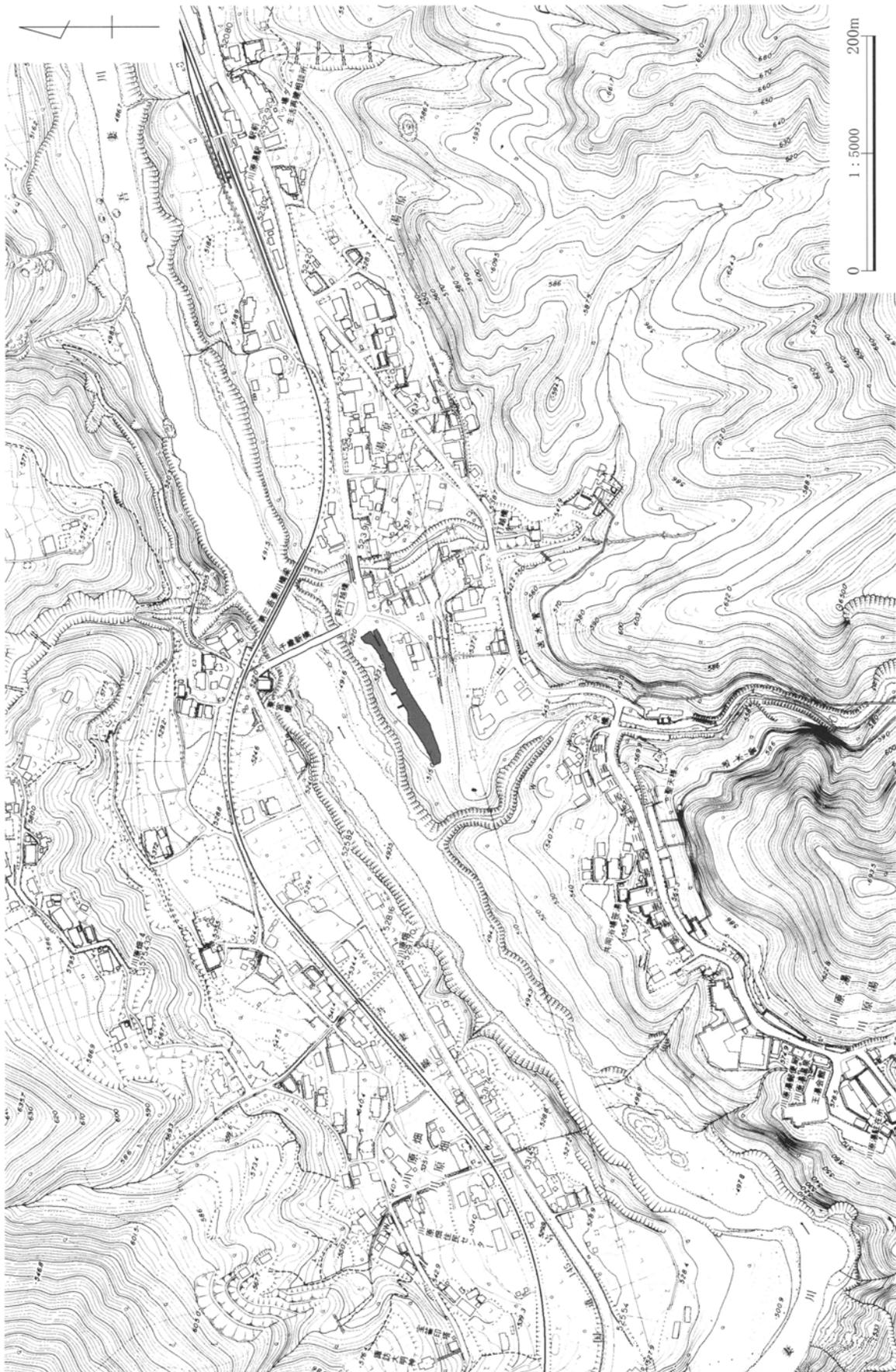


图 45 遺跡位置图

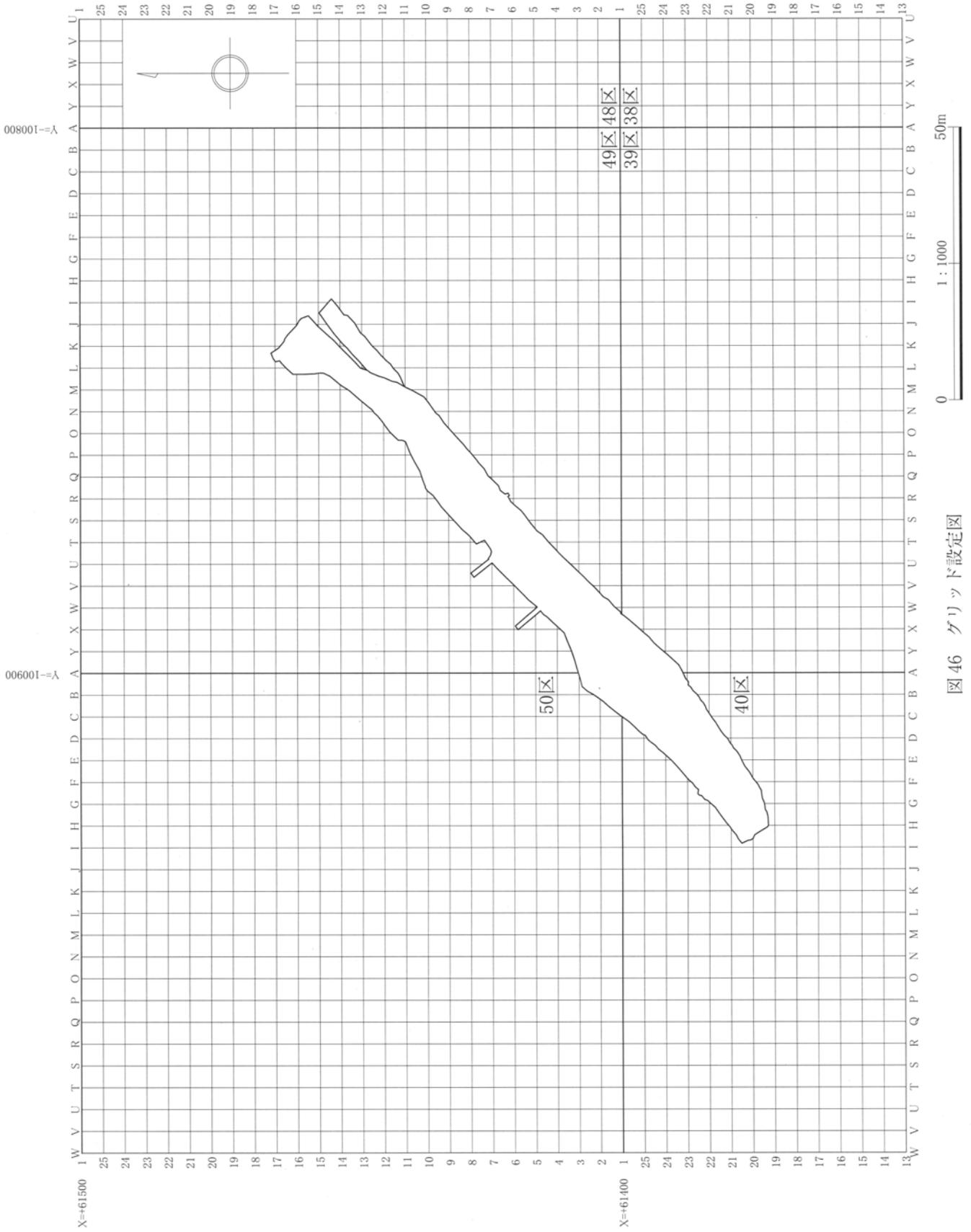


図46 グリッド設定図

第2節 西ノ上遺跡の基本土層

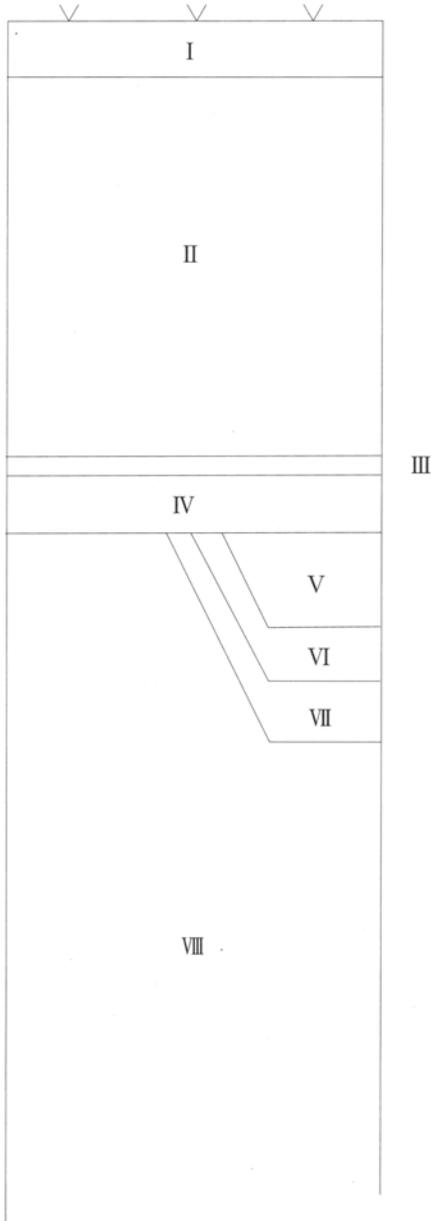


図47 基本土層図

I層 暗褐色土 表土層。砂質が強く、 ϕ 1～5 cmの円礫、亜角礫を多く含む。

II層 灰黒色砂礫層 天明泥流堆積物。 ϕ 5～100 cmの円礫をやや多く含む。厚さは場所により10～180 cm。南側が厚く、北側が薄い傾向にあった。

III層 白色軽石層 浅間降下A軽石 ϕ 1～5 mmを中心とし、最大で15 mmほどである。厚さは平均して0.5 cmであるが、サクの中では1 cm程を測る。

IV層 褐灰色土～灰褐色土 天明泥流下畑耕作土。やや砂質。 ϕ 1～5 cmの円礫を少量含む。調査区東側は ϕ 1～5 cm亜角礫を少量含む。地点により、水分の影響を多く受けており、グライ化したり、鉄分の沈着が著しい地点も見受けられる。層厚10～20 cm

V層 灰褐色土 やや砂質。炭化物をごく少量含む。礫をほとんど含まない。調査区北側（吾妻川寄り）にのみ見られる。層厚10～40 cm

VI層 黒褐色土 やや粘性あり。炭化物をやや多く含む。暗黄褐色土ブロックを少量含む。縄文土器片をごく少量包含する。調査区北側および南側で見られる。南側は次第に厚くなる傾向にあり、調査区外南側では縄文時代の遺構の存在も予想される。層厚5～15 cm

VII層 暗黄褐色土 やや砂質。 ϕ 5～50 cmの円礫を含むが、地点により含む量に差がある。層厚5～20 cm

VIII層 黄褐色土 砂質強い。 ϕ 5～50 cmの円礫を含むが、地点により含む量に差がある。層厚1 m以上

第3節 検出された遺構と遺物



図48 1～3号畑(1)・1～3号道

(1) 畑

1号畑

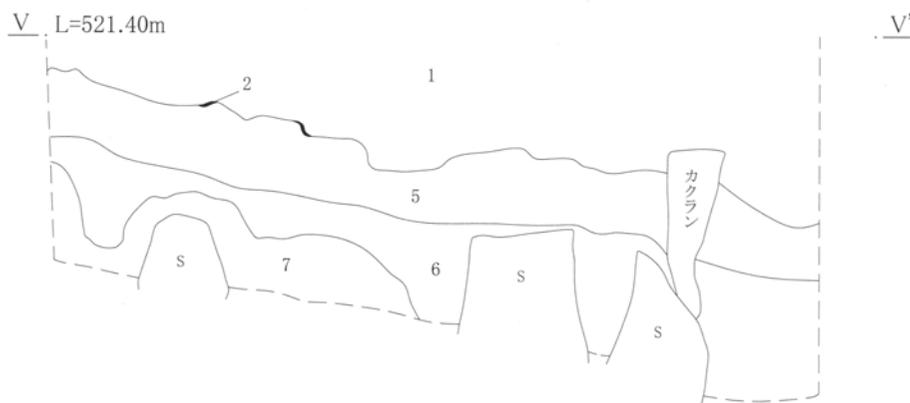
調査区の南西端に位置する。南東から北西に傾斜し、今回調査された畑の中では最も傾斜がきつい畑である。2号畑とは1号道によって区画される。ウネ、サクは確認されなかったが、As-A軽石下の土層は他の畑の耕作土と同質であり、表面に石が少ないことから畑であると考えた。しかし、泥流流下時には耕作は行われていなかったと思われる。泥流による攪乱が激しく、As-A軽石も確認できない部分が多いが、攪乱の少ない部分では0.5～1cmほどの厚さで面的に堆積している。

2号畑

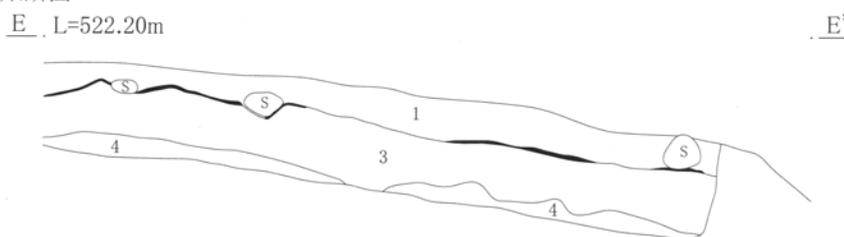
1号畑の北東に位置し、1号道と2号道によって区画される。北西に向かって傾斜している。1号畑と同様に泥流による攪乱が激しく、ウネ、サクははっきりしない。ただし、サク状のほんやりした凹みが調査時に観察されているので、泥流流下の以前に耕作されていた畑の痕跡が残存しているものと思われる。土層断面における3層と4層の境は明瞭であり、これは耕作の及んだ深さを示しているものと思われる。4層上面で耕作具の痕跡の検出を試みたが、確認できなかった。

第3章 西ノ上遺跡

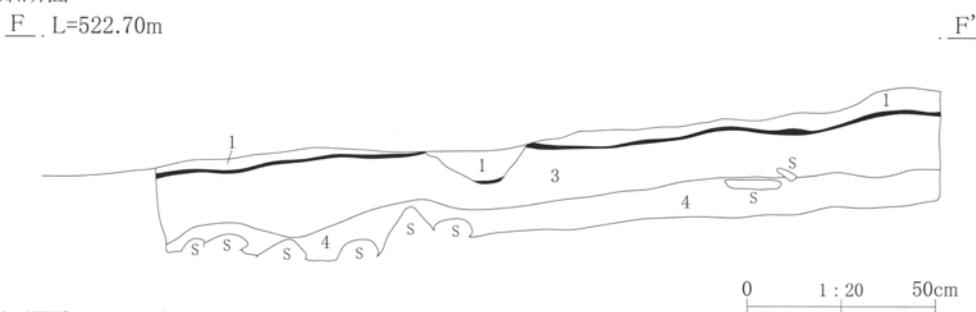
1号畑断面



2号畑断面



3号畑断面



- 1 As-A泥流 (層厚 70 ~ 90 cm)
- 2 As-A軽石 (ϕ 1 ~ 2 mm 白色軽石。久々戸、中棚遺跡などで検出された軽石に比べ粒径がやや小さい。)
- 3 灰褐色土 やや砂質。 ϕ 1 ~ 3 cmの円礫、角礫を少量含む。(畑耕作土)
- 4 暗黄褐色土 やや砂質。 ϕ 1 ~ 5 cmの円礫を少量含む。
- 5 灰褐色土 やや砂質。 ϕ 1 ~ 5 cmの亜角礫を少量含む。鉄分の沈着が若干見られる。
- 6 暗黄褐色土 砂質強い。 ϕ 3 ~ 20 cmの亜角礫を少量含む。炭化物を少量含む。
- 7 黄褐色土 砂質強い。 ϕ 20 ~ 39 cmの亜角礫をやや多く含む。

図49 1 ~ 3号畑 (2)

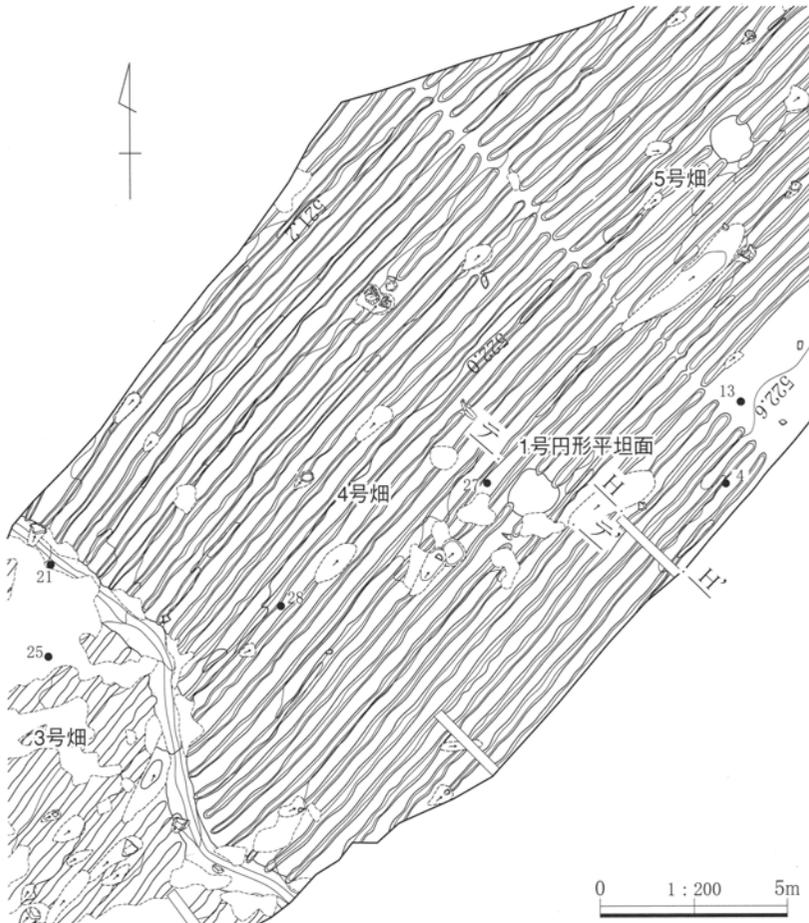
3号畑

2号畑の北東に位置し、2号道と3号道に区画される。北西に向かって傾斜している。ウネサクの走向方向は南西→北東であるので、傾斜に対して直行したウネサクである。他の畑に比べて、ウネサクの高低差が少なく、また、泥流流下時における泥流中の礫による攪乱が多く見られ、ウネサクは途切れがちである。厚さ0.5 ~ 1 cmほどのAs-A軽石が全面に、ほぼ均等に堆積している。

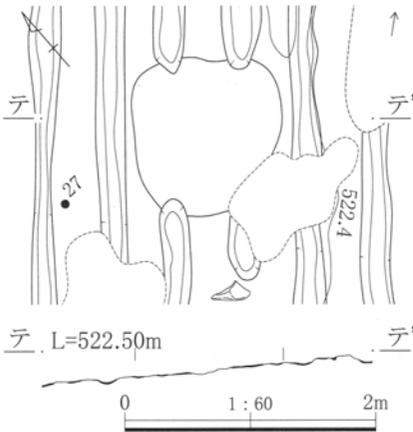
第3節 検出された遺構と遺物

4号畑

3号畑と5-1号畑、5-2号畑の間に位置する。3号畑とは3号道によって区画され、5-1、5-2号畑とはウネサクが途切れ、走向方向が若干ずれることから別の畑とした。畑面は北西に向かって約6度の斜度で傾斜し、ウネは傾斜に対して直行している。ウネ幅は平均的な幅を持ち、ウネとサクの高低が比較的是っきりしている。ウネ上のほぼ中央に凹み列（作物の植えられていた部分）があり、両側から土寄せがおこなわれたため、ウネの断面形状は2コブ状を呈している。サク内のAs-A軽石の堆積状況、ウネの断面観察（図50）から、この畑ではAs-A軽石降下前に1番サク、2番サク（関2003）ともに終了していたと思われる。



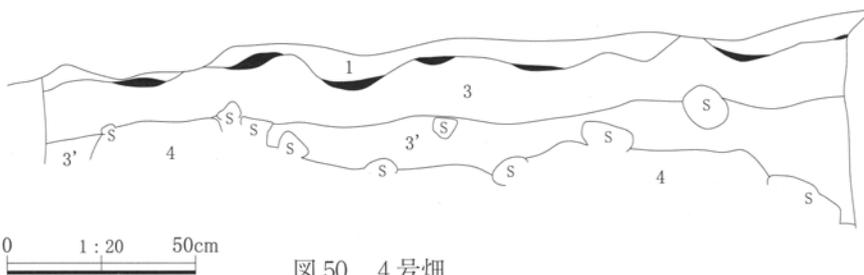
4号畑1号円形平坦面



4号畑断面

H, L=522.80m

H'



- 1 As-A泥流（層厚 80 cm）
- 2 As-A軽石
- 3 灰褐色土（断面Eと同じ）
- 3' 灰褐色土 3よりもしまり強い。畑による耕作の影響が少ない。
- 4 暗黄褐色土（々）

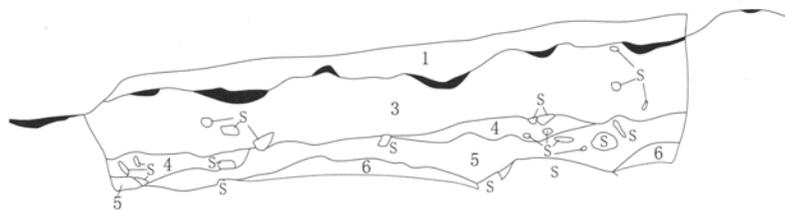
図50 4号畑



5号畑断面

J L=522.50m

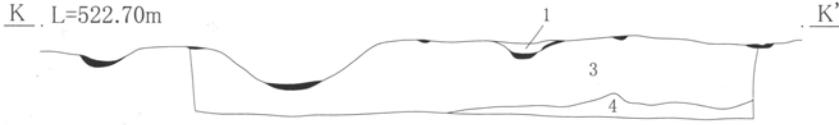
J'



- 1 As-A泥流 (層厚 70 cm)
- 2 As-A軽石
- 3 灰褐色土 φ 2~5 cmの円礫を少量含む。鉄分の沈着が著しい。(断面Iの3層よりは弱い。)
- 4 暗黄褐色土 φ 2~5 cmの円礫をやや多く含む。6と近似。
- 5 暗褐色土 φ 3~7 cmの円礫をやや多く含む。
- 6 暗黄褐色土 φ 3~30 cmの円礫を非常に多く含む。

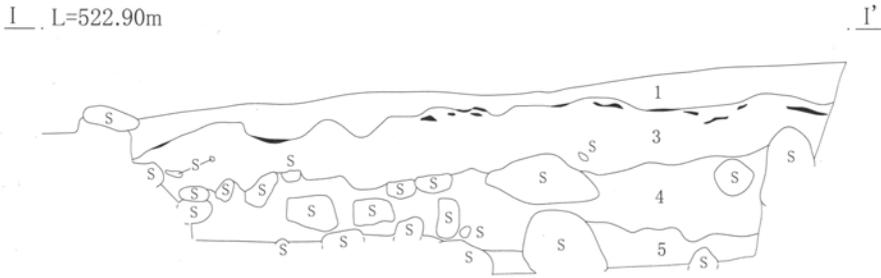
図51 5号畑(1)

5号畑断面



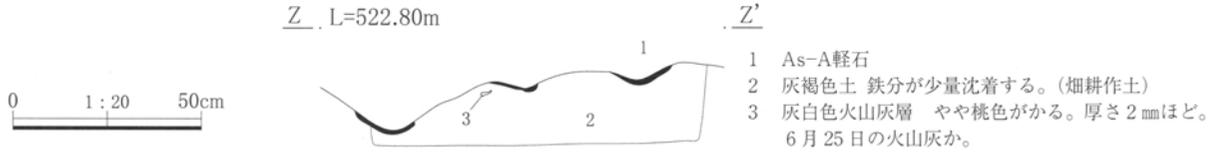
- 1 As-A泥流 (層厚 80 cm)
- 2 As-A軽石
- 3 灰褐色土 やや砂質。φ 1~2 cmの小礫を少量含む。部分的に鉄分がぬけ、灰色を呈し、その周囲に鉄分が板状に沈着している。
- 4 暗褐色土 暗黄褐色土ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。

5号畑断面



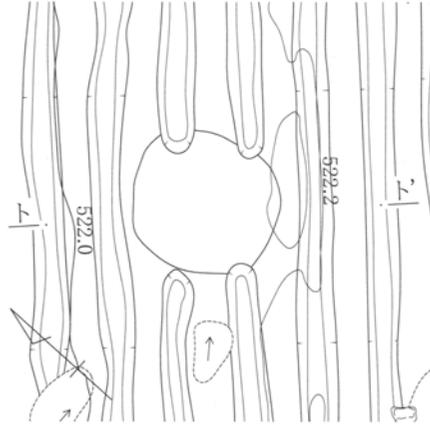
- 1 As-A泥流 (層厚 90 cm)
- 2 As-A軽石
- 3 暗灰色土 やや粘性あり。φ 1~3 cmの円礫を少量含む。鉄分の著しい沈着が板状に見られる。
- 4 灰褐色土 やや砂質。φ 3~30 cmの円礫を多く含む。
- 5 暗黄褐色土 やや砂質。φ 5~30 cmの円礫を非常に多く含む。

5号畑断面



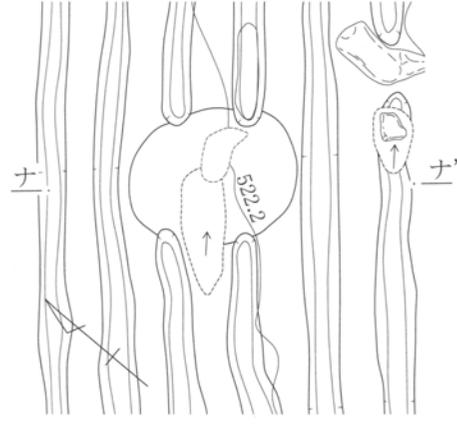
- 1 As-A軽石
- 2 灰褐色土 鉄分が少量沈着する。(畑耕作土)
- 3 灰白色火山灰層 やや桃色がかかる。厚さ2mmほど。6月25日の火山灰か。

5号畑1号円形平坦面



ト L=522.50m

5号畑2号円形平坦面



ナ L=522.40m



図52 5号畑(2)

5号畑

5号畑は調査区のほぼ中央に位置し、4号畑と6号畑にはさまれる。4号、6号ともにウネサクの断絶によって区画される。5号畑は、円形平坦面の位置、ウネサクのずれなどから、5-1～5-4号畑に細分される。

5-1、5-2号畑

5-1号畑と5-2号畑は明確な境界は存在せず、ウネサクもすべて連続しているが、それぞれに円形平坦面があること、5-3号畑と5-4号畑には境界が認められること、の2点から2つの畑に分けた。

5-1号畑

高低差のあるはっきりしたウネサクを持つ。ウネの走向方向はN-48°-Eであり、畑の傾斜方向に直行している。ウネの断面形状は、ウネの中央に凹み列(株)があり、両側に土が寄せられている。軽石降下前に1番サク、2番サクともに終了していたと思われる。

ウネサクの軽石を除去したところ、サク内に人為的と思われる凹凸が確認された。耕作具の痕跡と推定されたのだが、根拠に乏しく写真記録のみに留めた。

1号平坦面

5-1号畑では円形平坦面が1基検出されている。形状は直径約1.2mの不整円形で、面積は1.1m²を測る。平坦面のふちにサクがくいこむ状況を呈している。上面は波打つようになっており、平坦ではない。ただし、ウネサクとは異なるものである。As-A軽石の分布も面的に、薄く堆積していた。北側の縁が溝状に見えたが、明瞭でなく、図示できなかった。

5-2号畑

5-1号畑と同様に高低差のはっきりしたウネサクである。5-1号畑から連続したウネサクであるが、5-2号畑になってごくわずかであるが、走向方向を東寄りに変えている状況が観察できる。ウネの形状は5-1号畑と同様の状況を呈する。5-4号畑との境界は他と比べて幅のひろいサクによって区画される。

5-2号畑の北西側は今回の調査対象区域ではないのであるが、同様の傾斜の状況が連続しているため、将来の調査に備え、トレンチ調査を行ったところ、5-2号畑が北西側にも連続していることが確認できた。5-1号畑、4号畑も同様であると思われる。

2号平坦面

形状は長径1.3m、短径1.1mの楕円形で、面積は1.2m²である。5-1号畑の平坦面と同様にサクによって縁が切られている。泥流による攪乱を受けているため、上面の残存はよくない。

本遺跡では3基の円形平坦面が検出されているが、面積は1.1～1.2m²である。これは中棚Ⅱ遺跡、久々戸遺跡(関2003)で検出された円形平坦面の平均面積1.96～1.99m²と比べるとかなり小型であるといえる。

5-3号畑

4号畑の北東端で調査区の南東壁付近でウネサクの検出されない方形の区画が検出された。当初、作業小屋等の建物跡を想定して、柱穴等の検出を試みたが確認できなかった。その精査の過程でわずかにウネサクの痕跡が観察できたため、畑とした。4号畑との境界を5-1号畑と共有するため、5-1号畑と1連の畑であると考え、5-3号畑とした。

断面の観察によると、他の畑と異なり耕作土中にAs-A軽石が確認されている。これは、As-A軽石降下後に何らかの目的でウネサクをつぶしている状況が想定される。ただし、それも軽石を鋤込むような作業ではなく、ウネ頂部を崩して平にしていたような状況が推定される。

5-4号畑

傾斜、ウネサクの方向ともに、5-1号、5-2号畑と同様の状況を示している。5-4号畑はサクの中の南側(山側)斜面にのみAs-A軽石が確認されており、北側(川側)には無かった。これは軽石降下後に2番サクを行ったため、北側の軽石をウネ上に寄せたためと考えられる。ただし、これは平面の観察によるもので、断面では良好な資料を得られなかった。

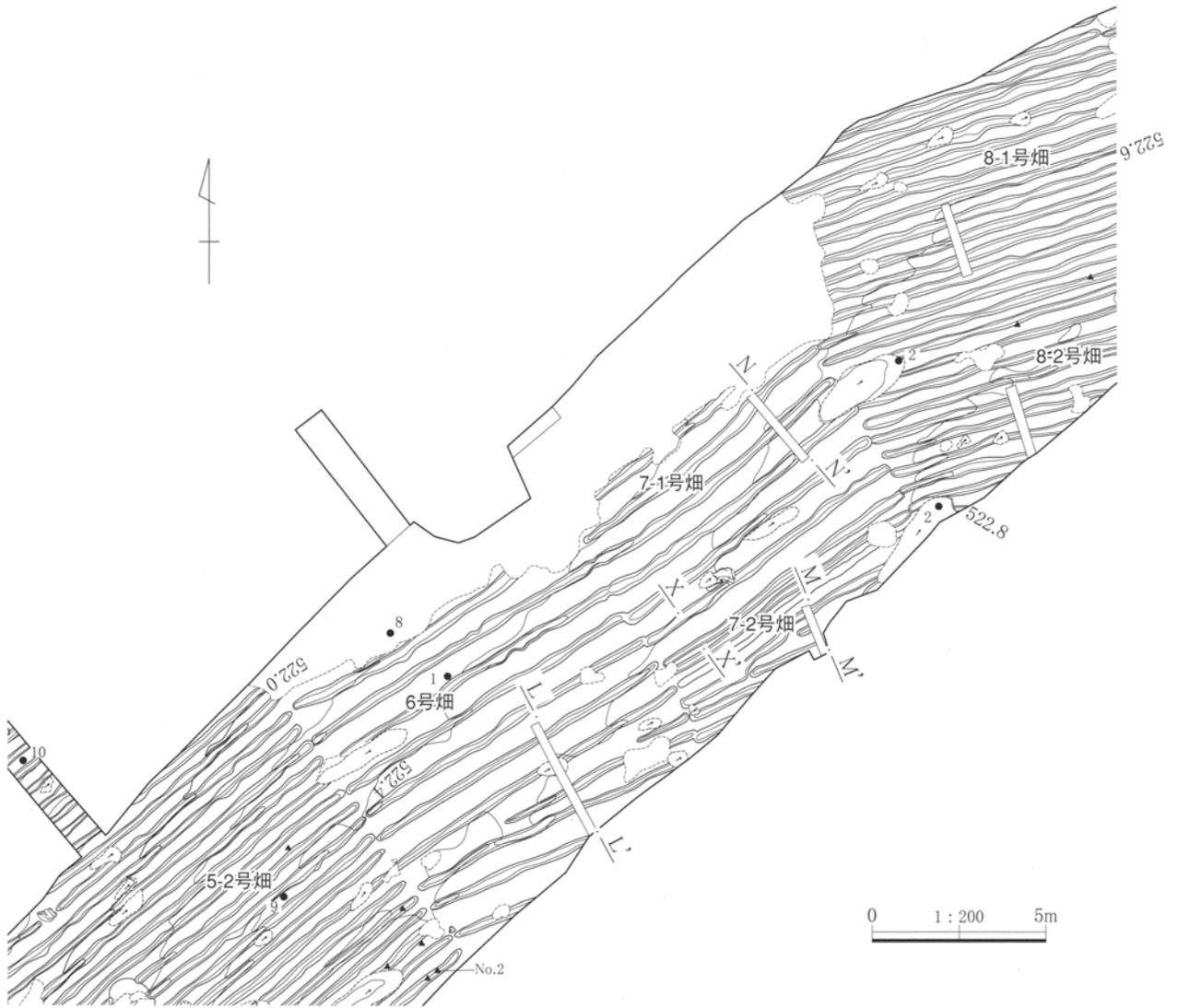


図53 6・7号畑(1)

6号畑

畑は調査区のほぼ中央に位置し、5-2号、5-4号畑と7-1号、7-2号畑にはさまれる。どちらも踏み分け道等の境界は存在せず、ウネサクの断絶によって区画される。吾妻川に向かって緩やかに傾斜し、ウネサクの走向方向は傾斜に対し直行する。山側の調査区際付近でやや方向のずれるウネがあるため、山側には別の区画の畑が広がっている可能性がある。これまでの畑と異なり、ウネ幅の平均が91.4cmと幅広のウネを持つ畑である。サク幅は20cm前後、深さは10cmほどを測る、しっかりしたものである。ウネの上部はわずかに凸凹しているが、

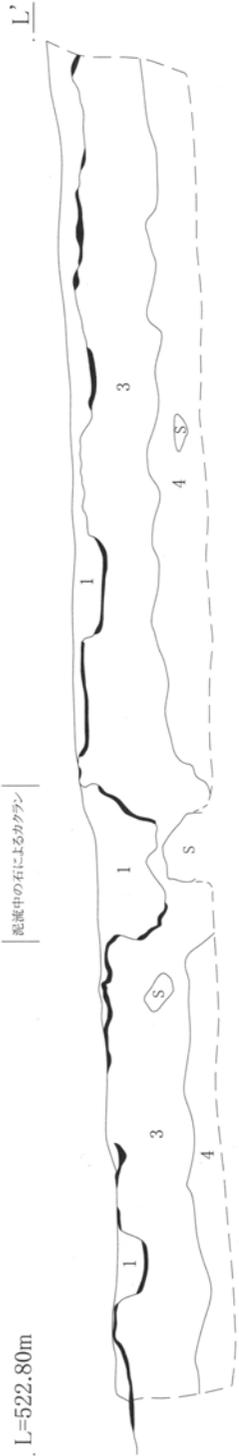
概ね平坦であり、ウネ中央の凹みもはっきりしない。

他の畑との畝幅の違いは、作られている作物の違いによるものと思われるが、作物に関する資料は得られなかった。中棚Ⅱ遺跡では、これに類似する幅広のウネから、イモと思われる形状の空洞が確認されている(関2003)が、この畑では確認できなかった。

5-2号畑と同様に、吾妻川寄りの調査区外にトレンチ調査を行ったが、攪乱が著しく、ウネサクは確認できなかった。

6号畑断面

L. L=522.80m



1 As-A泥流 (層厚 1.1 m)

2 As-A軽石

3 灰褐色土 やや砂質。φ 1~5 cmの円礫を少量含む。炭化物を少量含む。

4 暗黄褐色土 やや砂質。φ 5~30 cmの円礫を少量含む。

7-2号畑断面

M. L=523.00m



1 As-A泥流 (層厚 95 cm)

2 As-A軽石

3 灰褐色土 鉄分の沈着が多い。

4 暗灰褐色土 やや粘質。

5 灰褐色土 やや粘質。

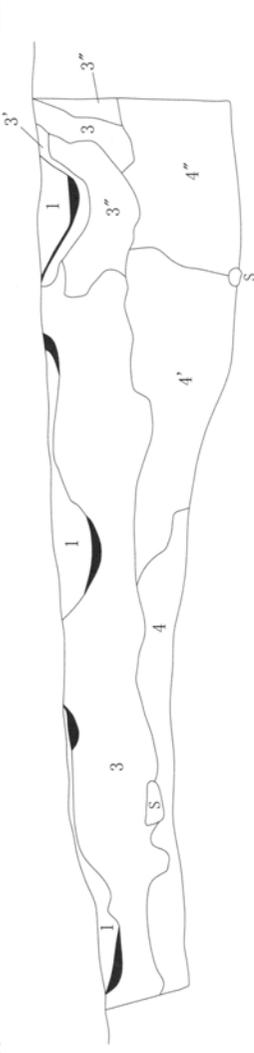
5' 5と同質と思われるが、5よりも均質。

6 暗黄褐色土 5と同質と思われるが、鉄分の沈着が多い。

堆積後の水分の影響と思われる。

7-1号畑断面

N. L=522.80m



1 As-A泥流 (層厚 70 cm)

2 As-A軽石

3 灰褐色土 鉄分が少量沈着する。

3' 赤褐色土 3と同質と思われるが、鉄分の沈着が著しく、非常に硬化している。

3'' 灰褐色土 これも3と同質と思われるが、これはややグライ化し、やや粘質。鉄分の沈着はほとんどない。

4 黄褐色土 やや砂質。断面Eの4層と同質。

4' 暗黄褐色土 4と同質と思われるが、灰褐色土を混入し、一部に鉄分の沈着が認められる。

4'' 淡褐色土 4と同質と思われるが、水分の影響のためかグライ化がすすみ、粘質。

図54 6・7号畑(2)

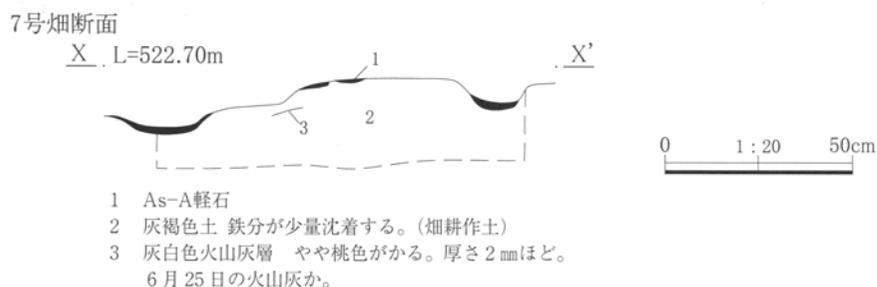


図 55 7号畑

7号畑

調査区のほぼ中央に位置する。8号畑とはウネ幅のちがいが、ウネサクの断絶によって区画される。北西（吾妻川）に向かって緩やかに傾斜し、ウネサクは傾斜に対して直行する。7-1号畑と7-2号畑は6号畑との境界を共有するため、1つの大きな畑と考えたが、7-1号畑と7-2号畑はウネ幅、ウネの走向方向が異なるため、枝番号を付した。7-1号畑と7-2号畑の境界は調査区壁付近に見られる蛇行したサクをもって境界としたが、その下部のサクが7-1号畑の中では幅が狭くなっているため、こちらが境界となる可能性も捨てきれない。ただし、5-2号畑と5-4号畑の境界、6号畑のウネサクの方向が変わる地点、そして、この蛇行したサクがほぼ直線上に並ぶため、この蛇行したサクを境界と考えたい。

7-1号畑

6号畑と同様の幅広のウネを持つが、6号畑に比べてサクが深く、またウネ上の株列があったと思われる凹みの部分の軽石の堆積も明瞭である。6号畑と同じく作物等の痕跡は確認できなかった。

また、本畑では図 55 の断面が確認された。この火山灰は7-1号畑のウネから作物の痕跡を確認するためのスライス調査中に確認されたものである。畑表面から4~5cm下位に面的に堆積していたと思われる。断面には図示できていないが、幅広のウネの、サクに向かう傾斜面にのみ、堆積していたと思われる。いわゆる天明の浅間噴火の1ヶ月ほど前の6月25日に降灰の記録を持つ小噴火（関 2003）の際の火山灰の可能性が考えられる。他の畑ではウネの平面的なスライス調査を行わなかったため、確認できなかったが、他の部分でも堆積していたと推定される。

7-2号畑

調査された面積が少ないため、得られた資料は少ないが、軽石降下前に1番サク、2番サクともに終わっていた畑と思われる。株はウネのほぼ中央に見られる。



図56 8～10号畑(1)

8号畑

調査区中央よりやや北東に位置する。7号畑と9号畑にはさまれ、それぞれ、ウネサクの断絶によって区画される。畑面は北に向かって緩く傾斜し、ウネサクは傾斜に対して直行している。8-1号畑と8-2号畑はやや幅の広がったサクを境界として枝番号を付した。

8-1号畑

ウネ上の作物があった位置が北側のサクに近く、

サク内の軽石は南側半分でやや厚く確認され、北側半分には見られない。これは1番サクを南側のサクから北側のウネに土を寄せ、その後軽石が降下し、軽石降下後に2番サクを、北側のサク内で「引きサク」を行ったものと思われる。

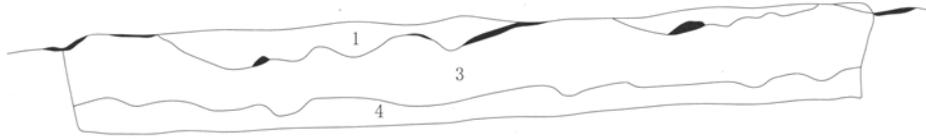
8-2号畑

ウネサクの形状は8-1号畑と同様であるが、8-2号畑ではウネ上の作物のあった位置に堆積した軽石が、8-1号畑に対して南側のサクに近い。これは8-1号畑とは1番サクの方向が逆であったためと考えられる。

8-1号畑断面

O L=522.80m

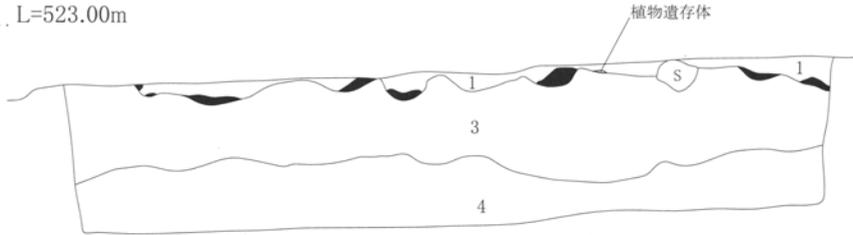
O'



8-2号畑断面

P L=523.00m

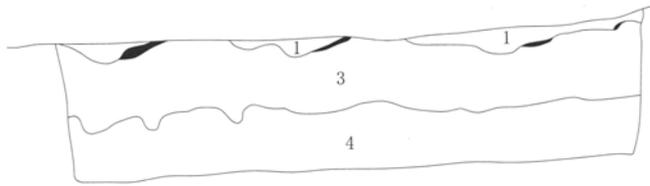
P'



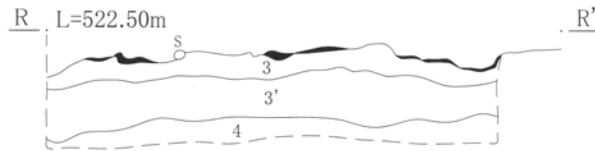
9号畑断面

Q L=522.90m

Q'



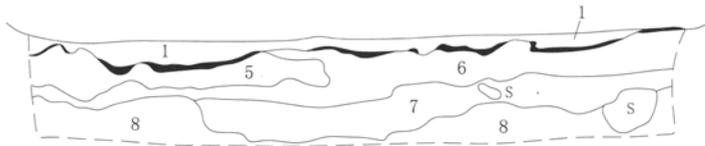
10号畑断面



10号畑断面

S L=522.30m

S'



- 1 As-A泥流 (層厚 80 ~ 115 cm)
- 2 As-A軽石
- 3 褐灰色土 やや砂質。部分によっては鉄分が沈着する。
- 3' 灰褐色土 やや砂質。φ 1 ~ 3 cmの亜角礫を少量含む。
3と3'は同一層であるが、水の影響等で変色したと思われる。
- 4 暗黄褐色土 やや砂質。φ 1 ~ 3 cmの亜角礫を少量含む。
- 5 明黄褐色土 やや砂質。灰褐色土ブロックを少量含む。不均質。
- 6 褐灰色土 やや砂質。明黄褐色土ブロックを多く含む。
- 7 褐灰色土 やや砂質。φ 5 cm程の亜角礫を少量含む。
- 8 明黄褐色土 やや砂質。φ 3 ~ 10 cmの亜角礫を少量含む。

0 1:20 50cm

図57 8 ~ 10号畑 (2)

9号畑

調査区の北東寄りに位置し、北西（吾妻川）に向かって緩やかに傾斜している。ウネサクは傾斜に対して直行している。8号畑、10号畑、11号畑と接し、8号、11号畑とはサクの断絶によって区画され、10号畑とはウネサクの方向が異なる。サク内の断面を観察すると（図57断面Q）サク内の北側半分くらいのところに、ごくわずかな角が見られる。これは、北側半分のAs-A軽石をウネ側に寄せたときに生じたものと思われる。

10号畑

調査区北東寄りの壁際に位置する。10-1号畑と10-2号畑はウネサクの方向が全く異なるため、別の畑番号を付すべきであるかもしれないが、6、7号畑と同様に幅広の畑であること、ウネサクの方向が他の畑とは異なること、などから1連の畑と考え、枝番号を付した。11号畑とはウネサクの断絶によって区画される。

10-1号畑

今回調査された畑の中では、唯一南北に走向を持つウネサクである。ほぼ傾斜に沿った方向である。ウネ幅は6、7号畑と同様に幅広であるが、断面形状はサクはあまり深くなく、ウネ上も比較的凸凹している。作物が植えられていた場所（株列）もあまり明瞭でない。

10-2号畑

畑の傾斜方向は、ほぼ北に向かっており、ウネサクの方向もほぼ傾斜に沿っている。10-1号畑と一連の畑と考えたが、境界に踏み分け道等はなく、サク同士が切り合っている。畑の断面形状は10-1号畑と同様に、6、7号畑に比べてサクが浅く、サクとウネの境が明瞭でない。ウネの幅は10-1号畑よりさらに広く、平均で1.2mを測る。ウネ上は凸凹しており、作物の位置も明瞭でない。他のウネ幅の狭い畑とは植えられていた作物が異なると思われるが、作物を推定できるような痕跡は確認できなかった。

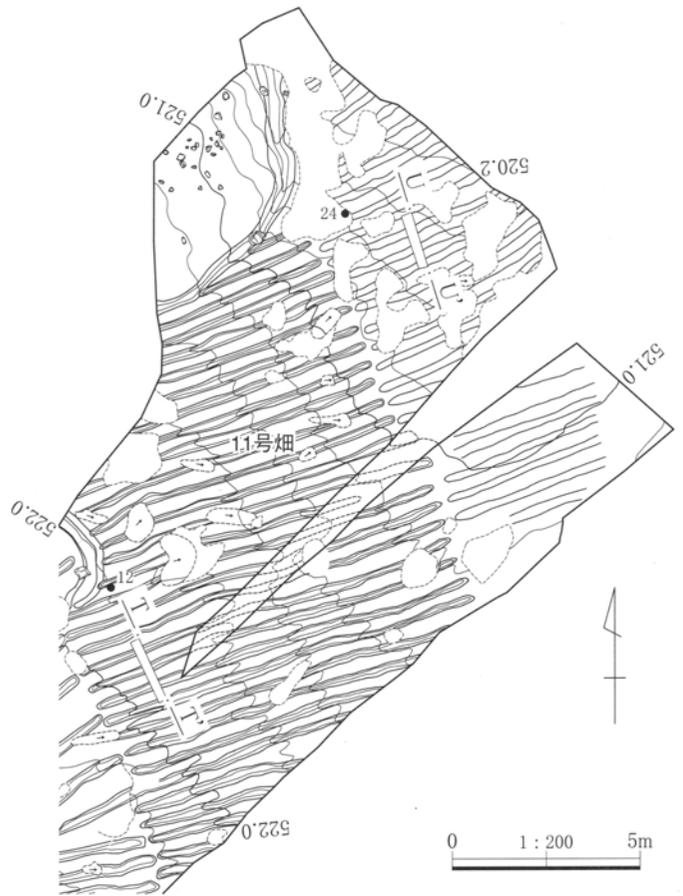


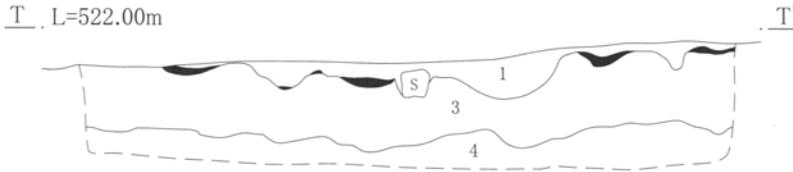
図58 11号畑（1）

11号畑

調査区の北東端近くに位置する。9、10、12号畑とはウネサクの断絶によって区画される。ただ、10号畑との境界には若干の段差があり、11号畑はその段差ののり面から始まっている。畑は北東に向かって傾斜し、ウネサクはほぼ傾斜に沿った走向方向である。今回の調査区は中央付近の標高が最も高く、全体とすると山側から吾妻川に向けての傾斜を持ちつつ、中央から北東に向かって傾斜している。11号畑では、北東に向けての傾斜がややきつくなる変換点付近にあたる。

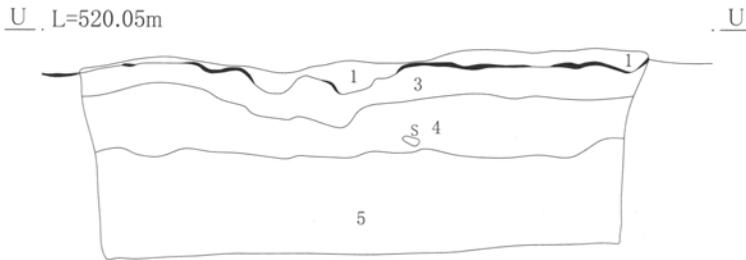
ウネサクの断面形状は、ウネ頂部の軽石だまり（株列）が南側に寄る形状を呈している。サク内の軽石はサク全体に堆積している。これは、1番サクを北側から南側に寄せて、軽石降下後は何もしていなかったことを示していると思われる。

11号畑断面



- 1 As-A泥流 (層厚1.3 m)
- 2 As-A軽石
- 3 褐灰色土 やや砂質。φ 1～3 cmの亜角礫を少量含む。鉄分の沈着が著しい。
- 4 暗黄褐色土 やや砂質。鉄分の沈着が著しい。

11号畑断面



- 1 As-A泥流 (層厚1.6 m)
- 2 As-A軽石
- 3 褐灰色土 やや砂質。鉄分の沈着が著しい。
- 4 灰褐色土 やや砂質。φ 1～2 cmの亜角礫を少量含む。
- 5 黒褐色土 φ 1～5 cmの亜角礫を少量含む。



図59 11号畑 (2)

本畑の北側に台状の、ウネサクの検出されなかった部分がある。根切り溝によって畑とは区画されているが、φ 5～10 cmの円礫が表面に多量に浮き出ており、耕作地としては機能していないと判断した。人為的に土を攪拌した状況は観察できなかったのでこれらの円礫は本来の土壤に含まれていたものと推定される。

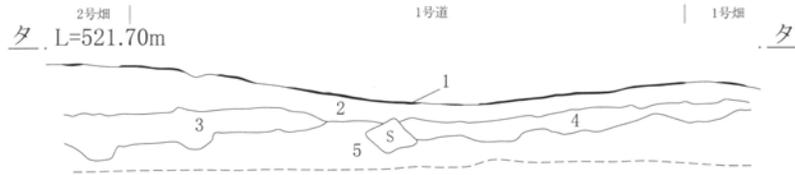
12号畑

調査区の北東端に位置する。11号畑と同様に北東に向かって傾斜しているが、その傾斜はさらにきつくなっている。12号畑と北東側の現地表面とは約3 mの標高差がある。(付図 断面ス) これは打越沢に向けての傾斜とともに国道145号線建設の際に盛土が行われたためと思われる。

畑は3号畑に似て、ウネサクの高低差のあまりない畑である。全面にうっすらとAs-A軽石の堆積が認められるため、軽石降下時には耕作が行われていなかったことも考えられる。

(2) 道

1号道断面



- 1 As-A軽石
- 2 灰褐色土 やや砂質。φ 1～2 cmの亜角礫を少量含む。
- 3 暗黄褐色土 やや砂質。灰褐色土ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。
- 4 灰褐色土 やや砂質。黄褐色土ブロックをやや多く含む。炭化物をやや多く含む。
- 5 黄褐色土 砂質強い。炭化物を少量含む。

2号道断面



- 1 As-A軽石
- 2 灰褐色土 やや砂質。φ 1～3 cmの円礫を少量含む。
- 3 灰褐色土 やや砂質。黄褐色土ブロックを少量含む。やや不均質。
- 4 暗黄褐色土 砂質強い。φ 5～10 cmの円礫を非常に多く含む。炭化物を少量含む。
- 5 黄褐色土 砂質強い。φ 5～20 cmの円礫を少量含む。

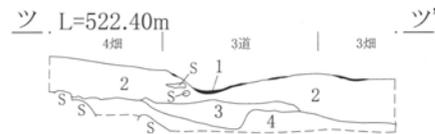
図60 1・2号道

2号道 (図48)

2号畑と3号畑の境界である。形状はほぼ直線で、調査された長さは約10.5 m、幅は約1.5 mを測る。底面は小さな凹みはあるが、大きな凹凸は見られない。1号道と同様に、特に硬化した面は確認できなかった。断面図でははっきりと表現されていないが、調査時の観察によると、道の東側部分で、1段深くなっている状況が確認できている。軽石の堆積は、東側の深い部分と西側の傾斜面に厚く堆積し、底面のフラットな面には少なかった。

3層は畑の耕作土に相当し、道の下、畑の下ともにほぼ同質である。道の下ではこの層の堆積がやや薄いことから、この道は旧地表面を削って作ったか、あるいは流水等によって削られたことが考えられる。

3号道断面



- 1 As-A軽石
- 2 褐灰色土 やや砂質。φ 2～5 cmの円礫、亜角礫を少量含む。(道に相当する部分の下位にはやや多い傾向が見られる。)
- 3 褐灰色土 やや砂質。黄褐色土ブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 砂質強い。φ 5～20 cmの円礫を多く含む。

図61 3号道

3号道 (図48)

3号畑と4号畑の境界である。ゆるやかに蛇行し、調査された長さは約12.5 m、幅は約1 mを測る。

1、2号道に比べ、幅が狭く、浅いV字状を呈している。底面の高さは不揃いで、若干流水によってえぐられたような様子がかがえる。特に硬化した面は確認できなかった。

(3) 植物痕跡

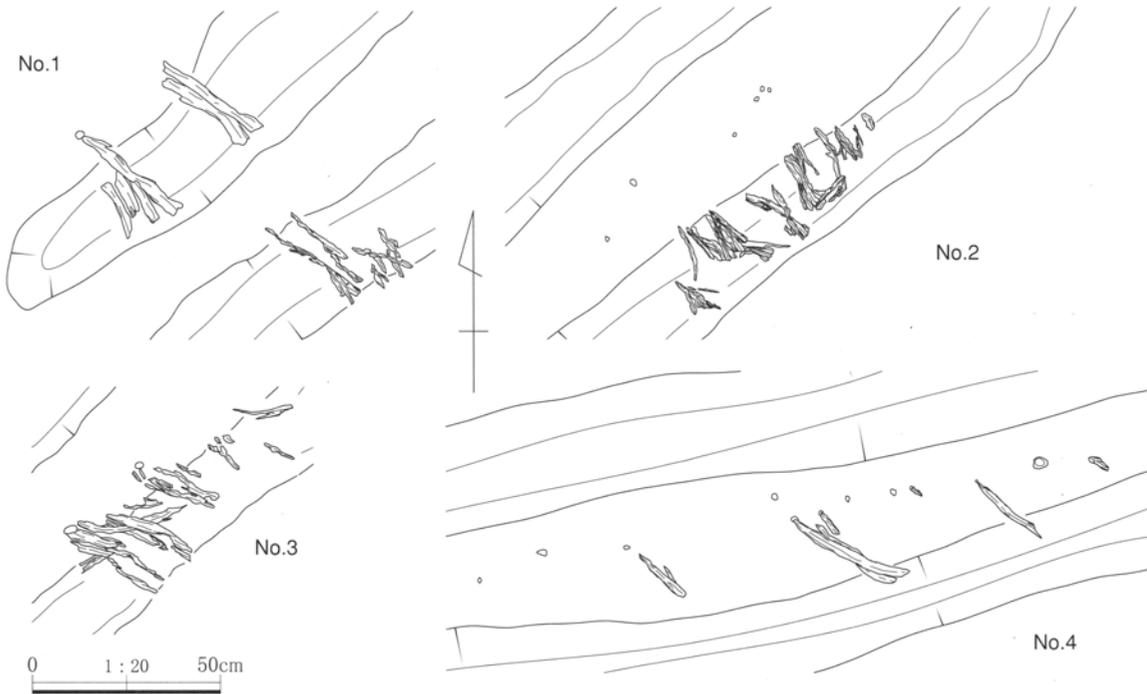


図 62 植物痕跡

5号畑より東の畑の表面で、畑の作物と思われる植物の痕跡が検出された。植物本体が遺存しているのではなく、酸化鉄が沈着した状態で作物の痕跡が確認できるものである。

検出の状況は、ウネ上に根株の痕跡と思われる穴を持つものと持たないものがあり、ウネ上では残存が良くない。サク内でAs-A軽石との間にわずかな間層を持って検出される例が多い。(右下写真参照) 図示したものを含め、約30個体が確認できているが、いずれも葉身は線形で茎は円形を呈している。葉の下部が茎をとりまいて鞘状になっている部分も確認できた。以上の特徴からイネ科の植物であると思われる。畑で栽培されているイネ科の植物とすると候補として、アワ、ヒエ、キビ、陸稲などが考えられる。泥流が流下した旧暦7月8日(新暦8月5日)時点での生育状況を考えるとキビは出穂している可能性が高いが、今回の調査では穂は確認できなかった。また、茎と葉の付き方からキビとは異なるように思われる。また今回調査された植物痕跡は点播きであり、また分蘖していないということが確認されているため、陸稲とも異なると思われる。しか

し、アワかヒエかを決定するまでには至っていない。残存の良いものを型どり保存しているため、今後形態等から作物の特定が可能ではないかと思われる。

これらの植物痕跡は、畑表面で倒れた状態で検出されているが、この倒れた方向はほぼ一定の方向を示している。30個体の内、根株痕からの方向が特定できる10個体を抽出して、倒れた方向を測定したところ、 $N-121^{\circ}-E$ から $N-131^{\circ}-E$ の間に収まった。方向でいうと、北西から南東方向へ倒れた、ということになる。調査の概要で述べたように、泥流直下の畑面は、泥流中の礫によって傷つけられている。この方向が泥流の流下した方向であると考



第3章 西ノ上遺跡

えられるが、今回の調査の中で、畑面の泥流による攪乱の方向を測定するとN-55° - E、ということになる。これは方向でいえば、南西から北東、ということになり、これは本遺跡の横での吾妻川の流下方向とほぼ一致するものである。泥流の流下する方向と植物痕跡の倒れた方向がこれだけ異なることは、この植物を倒した原因は泥流とは別に求めなければならないことになろう。

(4) 遺物

今回の調査では、図示（写真のみ掲載を含む）した遺物 27 点の他、陶磁器 20 点、軟質陶器 2 点、縄文土器 5 点、黒曜石剥片 3 点が出土している。いずれも小片のため図示しえなかった。

遺物の出土状況に関しては、平面的にも、層位的にも偏りは見られなかった。調査区の南側には急な斜面が存在しているため、そこからの流れ込みの遺物が多いものと思われる。

縄文土器は基本土層のVI層中からの出土であり、今回の調査では遺構は確認できなかった。

表18 遺物観察表

番号	種類	器種	残存部位	出土位置	出土標高	口径	器高	底径	台径	軸の特徴	胎土およびその他の特徴	生産地等	時期等
1	陶器	碗	口縁~胴部1/4	6号畑表面	522.37	(12.5)					陶胎染付	肥前	18前~中
2	磁器	碗	口縁部片	8号畑表面	522.67	(11.0)						肥前(波佐見)	18中~後
3	磁器	碗	口縁部片	5-2号畑表面	522.14							肥前(波佐見)	18中~後
4	陶器	碗	口縁部片	4号畑耕土中	522.55					透明(貫入)		関西系	18C
5	陶器	すり鉢	口縁部片	9号畑表面						焼き締め		丹波	18前~中
6	土器	焙烙?	口縁部片	4号畑下面トレンチ								在地系	江戸
7	陶器	すり鉢?	口縁部片	4号畑下面トレンチ						鉄軸系か	焼成不良?	不詳	江戸
8	軟質陶器	内耳鍋	底部片	6号畑表面	522.13							在地系	中世
9	磁器	碗	底部~胴部1/3	5-2号畑表面	522.41				(4.8)			肥前?	江戸
10	陶器	碗	高台部片	5-1号畑北トレンチ	521.33				(5.4)	鉛釉	高台脇から下無釉	瀬戸・美濃	18中~後
11	陶器	すり鉢	胴部片	5-3号畑表面	522.6							瀬戸・美濃	江戸
12	陶器	すり鉢	胴部片	11号畑耕土中	521.7					錆釉		瀬戸・美濃	江戸
13	陶器	碗	胴部片	5-3号畑表面	522.6					鉛釉		瀬戸・美濃	江戸
14	陶器	天目碗	胴部片	9号畑表面	522.7					鉄釉		瀬戸・美濃	江戸
15	磁器	不詳	胴部片	7号畑耕土中								肥前?	江戸
16	磁器	不明	完	5-1号畑北トレンチ		6.0	1.9	2.6		外面鉄釉 内面透明	外面に螺旋の沈線		近現代
17	陶器	碗	口縁部片	5-3号畑表面	522.62						陶胎染付	肥前	18C
18	陶器	碗	胴部片	3号畑表面	521.48					鉛釉		瀬戸・美濃	江戸
19	陶器	碗?	胴部片	7号畑耕土中						外面鉄釉 内面灰釉		瀬戸・美濃	18C
20	磁器	不詳	胴部片	3号道表面	521.25							肥前	江戸
21	磁器	袋物	胴部片	5-2号畑表面	521.87						一重網目文	肥前	江戸
22	磁器	碗	胴部片	5-2号畑耕土中								肥前	江戸
23	磁器	碗	胴部片	12号畑表面	520.55							肥前	18C
24	磁器	碗	胴部片	3号畑表面	521.58							肥前	江戸
25	石製品	火打ち石	完か	4号畑表面	522.22						使用痕有り		
26	銭	寛永通宝	完	4号畑表面	522.04								
27	金属製品	鉄砲玉	完	4号畑下面トレンチ		径12.3mm				重量9.4g			

第3節 検出された遺構と遺物

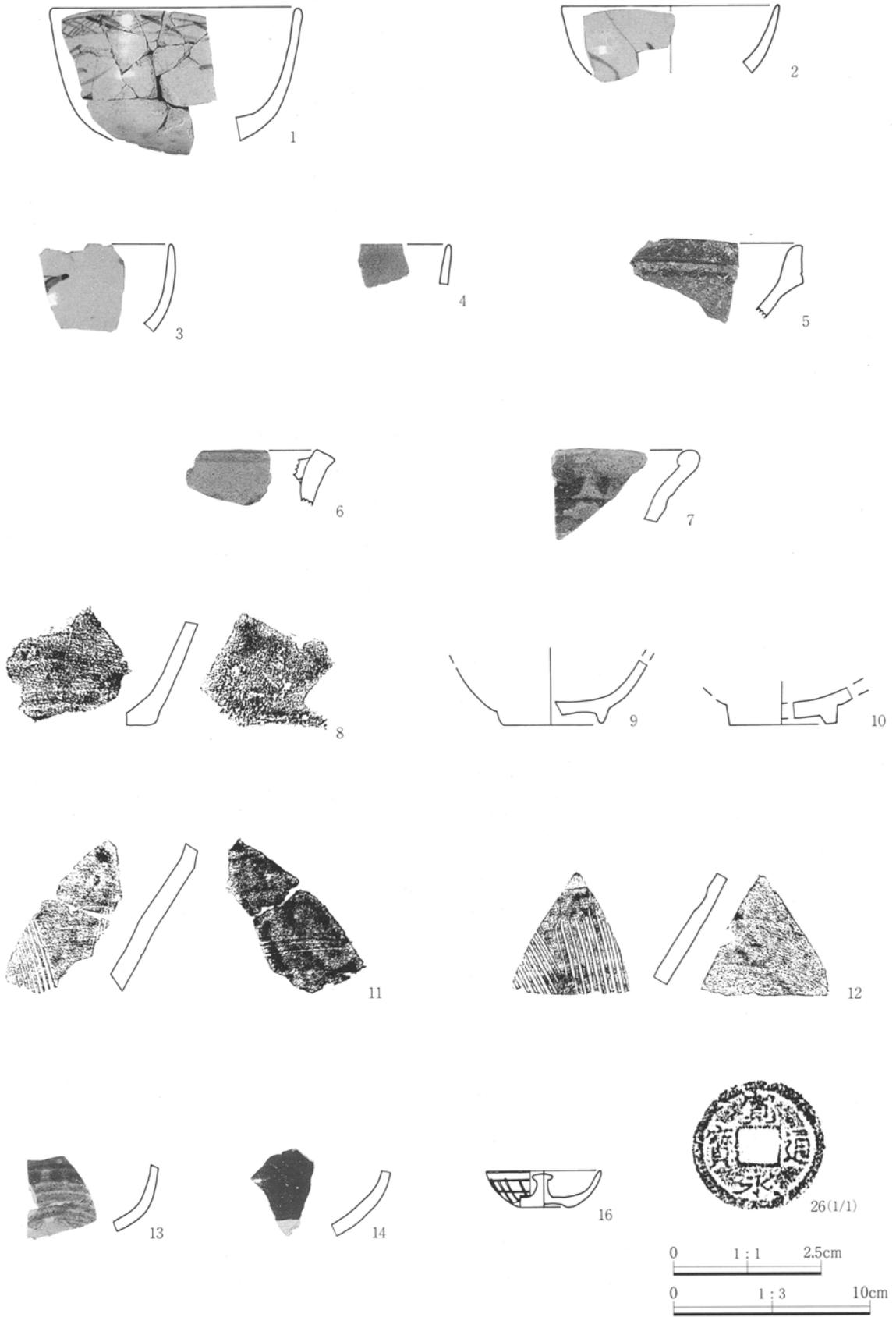


図63 出土遺物

第4章 上郷A遺跡

第1節 調査の概要

遺跡は吾妻川右岸、上位段丘西端に位置している。南に山が迫る緩傾斜地である。北側は、下位の段丘につながる急傾斜の崖となっている。

調査範囲は、幅約15m、長さ約50m、面積750m²を調査した。調査の結果、32基の土坑が検出された。土坑は、調査区に満遍なく広がり、偏りは見られない。遺物は、表採では、陶器破片が2片、縄文土器1片の計3点、土坑覆土からは、縄文土器が1点出土したのみである。遺物は皆無に近く、土坑だけの遺跡である。

土坑の性格については、第3・5節で繰り返し触れているが、全て陥し穴であると考えている。検出した状況や形態から判断したものである。検討した点については、まとめに記述した。

遺跡周辺は、イノシシやカモシカなど獣が良く出現する場所である。地元の方によると遺跡北側の上郷岡原遺跡付近の畑には、昭和初期までイノシシ除けの石垣「シシドテ」があったということである。また、調査区南側の山の際には、山を囲むように獣除けの電流柵が設置されている。調査中にもひょっこりカモシカが出現したこともあった。これらのことから調査地周辺では、よく獲物が捕れた場所であったのではないかと想像できる。

第2節 基本土層

上郷A遺跡における基本土層は以下の通りである。

I層 現表土である。黒褐色を呈し、締まり無い。
II層 黒色を呈し、山側から崩落したと思われる最大径約15cmの亜角礫を含む。締まりは無い。下位にAs-Kk（浅間粕川テフラ）が部分的に堆積している。角礫を含む層は、この層に限られている。土坑V・VI・VII・VIII類の覆土である。

III層 黒褐色を呈し、径0.5cm褐色土粒を含む。土

坑V類である23区11号土坑は、この層から掘り込まれていることが確認された。I類の22区1号土坑覆土である。

IV層 褐色を呈し、径1.5cm明黄褐色軽石を含む。粘質でやや締まっている。I類の23区1・10号土坑、22区14号土坑、土坑II・III・IV類の覆土である。

V層 黄褐色を呈し、径1.5cm浅黄褐色軽石を含む。粘質でやや締まっている。遺構の確認はこの層で行った。

VI層 明黄褐色を呈し、径0.5～1.5cmの浅黄褐色軽石を含む。砂質で締まっている。

VII層 明黄褐色を呈し、径0.5cmの浅黄褐色軽石を含む。灰白色砂質土が斜葉理状に堆積する。締まり無し。熱痕が観察され、泥流による2次堆積である可能性がある。

VIII層より下位は、As-YP（浅間板鼻黄色軽石）に関連する火山堆積物となる。

VIII層 黄褐色を呈する火山灰層で粘質を帯び締まっている。

IX層 橙色を呈する火山灰層で径0.2cmの粒子により構成されている。

X層 灰褐色、淡赤褐色、浅黄褐色を呈する火山灰が層を成して堆積する。

XI層 明黄褐色を呈する火山灰層で粘質を帯びている。

XII層 橙色を呈する火山灰層で締まりがある。

XIII層 浅黄褐色の軽石層である。層厚平均50cmに及んでいる。As-YPk（浅間草津黄色軽石）に相当すると考えられる。検出された土坑は、底面がこの層まで掘り込まれているものが殆どである。

XIV層 褐灰色を呈する火山灰層である。

XV層 黄褐色を呈する火山灰層である。径1.5cmの浅黄褐色軽石を含む。粘質を帯び、締まっている。



図64 遺跡位置図

第4章 上郷A遺跡

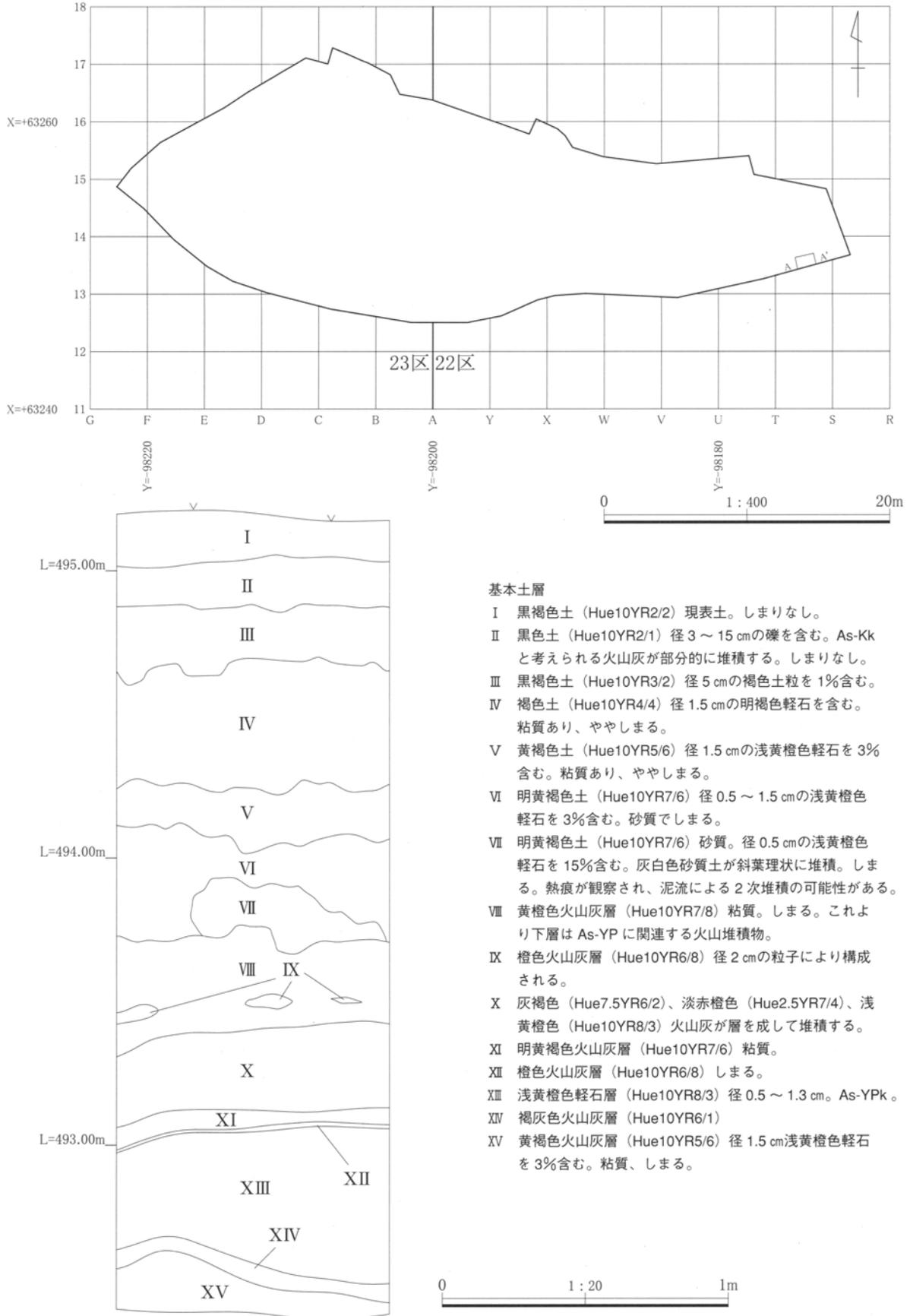


図 65 グリッド設定図、基本土層図

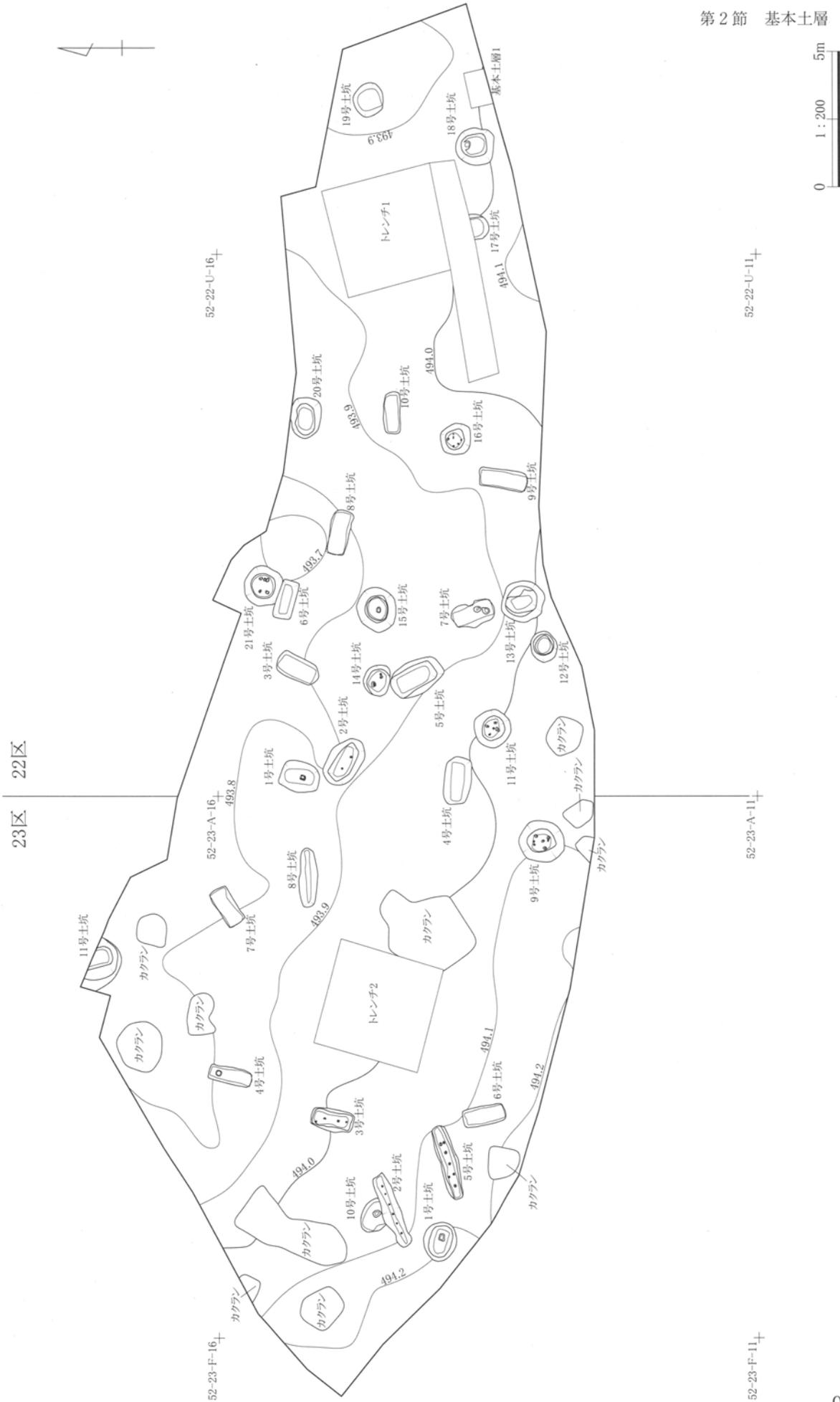


図 66 調査区全体図

第3節 検出された遺構と遺物

(1) 土坑

上郷A遺跡では、32基の土坑が検出された。検出された32基は、調査区全体に広がっている。遺物が出土しているものは、1基のみである。これらの土坑は、検出された状況やその形態から見て陥し穴であると考えられる。土坑の形態はバラエティーに富み、その規模や形態から8種に分けて考えることができる。

I類：底面形楕円形、底面にピットがある。

II類：底面形円形、複数のピットがあり、深い。

III類：底面形円形又は楕円形でピットが無く、深い。

IV類：底面形楕円形、底面にピットが無い。

V類：底面形隅丸長方形、非常に深い。

VI類：底面形溝状、複数のピットがある。

VII類：底面形溝状、ピットがない。

VIII類：底面形長方形、ピットがない。

尚、陥し穴の名称は下図に示した。また、陥し穴の番号は調査時に付した土坑番号を踏襲した。報告順は、分類順に掲載した。

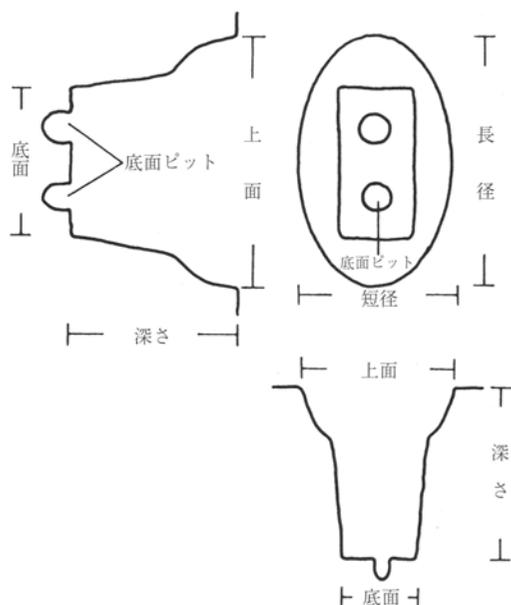


図67 土坑の名称

〔I類〕

23区1号土坑 (図68 P L 30)

E-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、144 cm×122 cmの楕円形、底面は89 cm×48 cmの楕円形を呈し、底面積約0.38 m²である。主軸方向はN-76°-W。確認面からの深さは72 cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で25 cm×20 cm、底面で16 cm×11 cm、深さ29 cmを測る。しかし、その形状は、4隅が張り出しているように見えるので、もともとは22区1号土坑のピットのように4個のピットから構成されていたものと推定できる。覆土は全体的にややしまっていて、基本土層のIV・V層が混入している。

23区10号土坑 (図68 P L 30)

D-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、推定113 cm×実寸95 cmの楕円形、底面は推定104 cm×実寸72 cmの楕円形を呈し、底面積推定約0.67 m²である。主軸方向はN-53°-W。確認面からの深さは56 cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で29 cm×22 cm、底面で18 cm×13 cm、深さ25 cmを測る。その平面形状は、隅丸の方形である。23区1号土坑のピットのように四隅が張り出してはいないので、もともと4個のピットであったかは明らかではない。覆土は全体的にややしまっていて、基本土層のIV・V層が混入している。

22区1号土坑 (図68 P L 30)

Y-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、143 cm×113 cmの隅丸長方形、底面は99 cm×55 cmの隅丸長方形を呈し、底面積約0.54 m²である。主軸方向はN-13°-E。確認面からの深さは57 cmであり、底面から1箇所に集中して4個のピットを検出した。P1は上面で7 cm×4 cm、底面で4 cm×2 cm、深さ30 cm、P2は上面で8 cm×5 cm、底面で3 cm×3 cm、深さ27 cm、P3は上面で10 cm×8 cm、底面で6 cm×4 cm、深さ31 cm、P4は上面で9 cm×6 cm、底面で5 cm×4 cm、深さ34 cmをそれぞれ測る。覆土は、全体的にしまっていて、基本土層IIIが混入している。

22区14号土坑(図69 P L 30)

X-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、114cm×97cmの楕円形、底面は75cm×58cmの楕円形を呈し、底面積約0.36m²である。主軸方向はN-11°-E。確認面からの深さは49cmを測る。底面から3つのピットを検出した。P1は上面で19cm×16cm、底面で5cm×3cm、深さ31cm、P2は上面で12cm×8cm、底面で5cm×3cm、深さ24cm、P3は上面で7cm×6cm、底面で3cm×3cm、深さ11cmをそれぞれ測る。ピットが不揃いな配置になっているのは、P1を基準にして、P1とP2、P1とP3という組み合わせで繰り返し使用したためと考えられる。覆土は、全体的にしまっていて基本土層IV層が混入している。

〔Ⅱ類〕

22区15号土坑(図69 P L 31)

X-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、155cm×150cmの円形、底面は69cm×65cmの円形を呈し、底面積約0.51m²である。主軸方向はN-4.5°-E。確認面からの深さは92cmを測る。底面から1つのピットを検出した。ピットの大きさは上面で21cm×15cm、底面で15cm×9.5cm、深さ20cmを測る。覆土は、全体的によくしまっていて基本土層IV層が混入している。

22区11号土坑(図70 P L 31)

Y-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、136cm×135cmの円形、底面は74cm×57cmの楕円形を呈し、底面積約0.31m²である。主軸方向はN-66°-W。確認面からの深さは109cmであり、底面からピット5個を検出した。P1は上面で17cm×12cm、底面で7cm×5cm、深さ10cm、P2は上面で7cm×6cm、底面で2.5cm×2.5cm、深さ13.5cm、P3は上面で13cm×8cm、底面で4cm×4cm、深さ16cm、P4は上面で12cm×8cm、底面で4cm×3.5cm、深さ18cm、P5は上面で9cm×6cm、底面で3cm×2.5cm、深さ14cm、を測る。この5つのピットは十字に位置し、同時に存在していたものと考えられる。覆土は全体的にややしまっていて、基本土層のIV層

が混入している。

23区9号土坑(図70 P L 31)

A-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、165cm×162cmの円形、底面は81cm×70cmの円形を呈し、底面積約0.36m²である。主軸方向はN-15°-W。確認面からの深さは97cmであり、底面からピット6個を検出した。P1は上面で10cm×10cm、底面で3.5cm×3cm、深さ24.5cm、P2は上面で11cm×8cm、底面で4cm×3cm、深さ24cm、P3は上面で7cm×4.5cm、底面で3.5cm×3.5cm、深さ15cm、P4は上面で11cm×10cm、底面で5cm×3cm、深さ13cm、P5は上面で12cm×9cm、底面で6cm×5cm、深さ25cm、P6は上面で7.5cm×6cm、底面で3cm×2cm、深さ9cm、P7は上面で7cm×6cm、底面で3cm×3cm、深さ11cmを測る。主要なピットはP1、P2、P3、P4、P5である。この5つのピットは、22区11号土坑と同様、十字に位置し、非常に良く似ている。P6、P7は作り替える以前のピットの痕跡であると考えれば、この土坑も繰り返し使用した可能性がある。覆土は全体的にややしまっていて、基本土層のIV層が混入している。形態、覆土などから22区11号土坑とこの23区9号土坑は同時期に同じ目的で設置された可能性が高い。

22区21号土坑(図71 P L 31)

X-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、147cm×134cmの円形、底面は80cm×80cmの円形を呈し、底面積約0.5m²である。主軸方向はN-72.5°-W。確認面からの深さは88cmであり、底面からピット5個を検出した。P1は上面で11.5cm×8cm、底面で7cm×3cm、深さ16cm、P2は上面で12cm×9cm、底面で10cm×7cm、深さ11cm、P3は上面で15cm×11cm、底面で13cm×10cm、深さ13cm、P4は上面で12cm×10cm、底面で11cm×10cm、深さ20cm、P5は上面で10cm×10cm、底面で7cm×6cm、深さ9cm、を測る。主要なしっかりとしたピットはP1、P2、P3、P4である。P5は他のピットより深さがないのでこれらと同時に存在していた可能性は低いと考えられる。他にもピットになりそ

第4章 上郷A遺跡

うなものが壁沿いに幾つかあったが、浅いのでピットとしては取り上げなかった。可能性として、P5を含むこれらの浅い窪みが壁を巡るように設置されていたことも考えられる。最下部の覆土4層がしっかりしまっていて、底面を整えていた可能性がある。4個のピットの時と、P5と壁を巡るようなピットの時に作り直して、繰り返し使用していた可能性が考えられる。覆土は全体的にややしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。

22区16号土坑(図71 P L 32)

V-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、124cm×109cmの円形、底面は49cm×47cmの円形を呈し、底面積約0.21m²である。主軸方向はN-53°-W。確認面からの深さは121cmであり、底面からピット7個を検出した。P1は上面で6cm×4cm、底面で1cm×1cm、深さ14cm、P2は上面で10cm×8cm、底面で4cm×3cm、深さ22cm、P3は上面で6cm×6cm、底面で3cm×3cm、深さ8.5cm、P4は上面で4cm×4cm、底面で1cm×1cm、深さ10cm、P5は上面で3.5cm×3.5cm、底面で1cm×1cm、深さ8cm、P6は上面で4cm×3cm、底面で1cm×1cm、深さ4.5cm、P7は上面で6cm×4cm、底面で1cm×1cm、深さ22cmを測る。ピットの位置や深さに規則性は見いだせず、繰り返し作り直して使用していた結果であると考えられる。覆土はしまっていて、基本土層Ⅳ・Ⅴ層が混入している。

〔Ⅲ類〕

22区12号土坑(図72 P L 32)

X-12グリッドにおいて検出された。上面の規模は、111cm×95cmの円形、底面は53cm×48cmの円形を呈し、底面積約0.21m²である。主軸方向はN-71.5°-E。確認面からの深さは98cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ層が混入している。逆茂木痕の有無の違いはあるが、形状は、22区16号土坑に似ている。

22区13号土坑(図72 P L 32)

X-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、169cm×152cmの円形、底面は75cm×46cmの楕

円形を呈し、底面積約0.31m²である。主軸方向はN-26°-W。確認面からの深さは125cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。

22区20号土坑(図72 P L 32)

V-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、151cm×111cmの楕円形、底面は77cm×56cmの楕円形を呈し、底面積約0.37m²である。主軸方向はN-76.5°-W。確認面からの深さは86cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。覆土・形状とも22区13号土坑とよく似ている。

〔Ⅳ類〕

22区17号土坑(図73 P L 33)

T-13グリッドにおいて検出された。試掘溝により北部分が欠損している。上面の規模は、残存61cm×93cmの推定楕円形、底面は残存43cm×64cmの推定楕円形を呈し、底面積残存約0.26m²である。主軸方向はN-13°-W。確認面からの深さは47cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。

22区18号土坑(図73 P L 33)

S-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、144cm×137cmの円形、底面は78cm×61cmの楕円形を呈し、底面積約0.4m²である。主軸方向はN-12°-W。確認面からの深さは84cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。

22区19号土坑(図73 P L 33)

S-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、116cm×112cmの円形、底面は84cm×76cmの円形を呈し、底面積約0.55m²である。主軸方向はN-19.5°-W。確認面からの深さは65cmである。覆土は全体的によくしまっていて、基本土層のⅣ・Ⅴ層が混入している。

〔Ⅴ類〕

22区2号土坑(図74 P L 33)

Y-14グリッドにおいて検出された。上面の規模

は、190cm×120cmの楕円形、底面は120cm×44cmの楕円形を呈し、底面積約0.47m²である。主軸方向はN-56°-W。確認面からの深さは170cmであり、底面からピット2個を検出した。P1は上面で7cm×5cm、底面で3.5cm×3cm、深さ12.5cm、P2は上面で10cm×6cm、底面で4.5cm×4cm、深さ16cmを測る。ピットは不規則に並び、また深さもしつかり深いわけではないので、逆茂木痕と断定することはできないが、その可能性だけを指摘しておきたい。確認面から約50cmのところ壁面がAs-YPk軽石にあたり、埋没時に大きく崩れている。覆土は全体的にしまりなく、上層に基本土層のⅡ層が混入している。

23区11号土坑 (図74 P L 34)

B-17グリッドにおいて検出された。北部分は、調査区外になる。上面の規模は、検出部分107cm×200cmの推定楕円形、底面は検出部分56cm×63cmの推定隅丸長方形を呈し、底面積検出部分約0.3m²である。主軸方向はN-14.5°-W。この土坑は唯一掘り込み面が確認できた土坑で、深さは198cmである。上面から約90cmのところ壁面がAs-YPk軽石にあたり、埋没時に大きく崩れている。覆土は全体的にしまりなく、上層に基本土層のⅡ・Ⅲ・Ⅳ層が混入している。また、基本土層のⅡ層が堆積し始める頃には、ほぼ埋まっっていて、そのわずかな窪みの中にAs-Kkが堆積している。

22区4号土坑 (図75 P L 34)

Y-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、174cm×98cmの隅丸長方形、底面は141cm×48cmの隅丸長方形を呈し、底面積約0.64m²である。主軸方向はN-85°-W。確認面からの深さは135cmである。確認面から60cmのところ壁面がAs-YPk軽石にあたり、埋没時に大きく崩れている。覆土は全体的にしまりなく、基本土層のⅡ・Ⅲ・Ⅳ層が混入している。

22区5号土坑 (図75 P L 34)

X-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、200cm×126cmの隅丸長方形、底面は129cm×

60cmの隅丸長方形を呈し、底面積約0.72m²である。主軸方向はN-25°-W。確認面からの深さは78cmである。覆土は全体的にしまりなく、基本土層のⅢ層が混入している。

〔Ⅵ類〕

23区2号土坑 (図76 P L 34)

D-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、280cm×62cmの溝状、底面は235cm×15cmの溝状を呈し、底面積約0.46m²である。主軸方向はN-70°-E。確認面からの深さは約100cmであり、底面からピット6個を検出した。P1は上面で7cm×6cm、底面で3cm×3cm、深さ7cm、P2は上面で6cm×5cm、底面で3.5cm×2cm、深さ16cm、P3は上面で7cm×6cm、底面で3cm×3cm、深さ19cm、P4は上面で6.5cm×5cm、底面で3cm×3cm、深さ20cm、P5は上面で5.5cm×4cm、底面で3cm×3cm、深さ19cm、P6上面で7cm×5cm、底面で3cm×2cm、深さ10cmを測る。ピットは規則的に並んでおり、同時に使用されたものである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層とAs-Kkアッシュ塊が混入している。

23区5号土坑 (図76 P L 35)

D-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、279cm×66cmの溝状、底面は253cm×25cmの溝状を呈し、底面積約0.71m²である。主軸方向はN-74°-E。確認面からの深さは約69cmであり、底面からピット7個を検出した。P1は上面で10.5cm×9cm、底面で4cm×3.5cm、深さ14cm、P2は上面で8cm×6.5cm、底面で3.5cm×3cm、深さ12.5cm、P3は上面で8cm×8cm、底面で5cm×4cm、深さ15cm、P4は上面で9cm×7.5cm、底面で4.5cm×4cm、深さ11cm、P5は上面で10.5cm×8cm、底面で5.5cm×4.5cm、深さ9cm、P6は上面で11.5cm×10cm、底面で7cm×6cm、深さ12cmを測る。ピットは規則的に並んでおり、同時に使用されたものである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。逆茂木痕の配置は違うものの23区2号土坑と23区5号土坑は形状が似ている

第4章 上郷A遺跡

点やその配置から同時に使用されていたものと考えられる。

〔Ⅶ類〕

23区8号土坑 (図76 P L 35)

A-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、217cm×69cmの溝状、底面は202cm×17cmの溝状を呈し、底面積約0.30m²である。主軸方向はN-89°-E。確認面からの深さは約110cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

〔Ⅷ類〕

22区3号土坑 (図77 P L 35)

X-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、164cm×83cmの隅丸長方形、底面は139cm×62cmの長方形を呈し、底面積約0.82m²である。主軸方向はN-28°-E。確認面からの深さは約87cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

22区9号土坑 (図77 P L 35)

W-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、179cm×70cmの長方形、底面は177cm×52cmの長方形を呈し、底面積約0.94m²である。主軸方向はN-8.5°-E。確認面からの深さは約77cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

22区7号土坑 (図77 P L 36)

X-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、158cm×78cmの長軸方向の立ち上がりか乱れている長方形、底面は150cm×60cmの長方形を呈し、底面積約0.87m²である。主軸方向はN-22°-W。確認面からの深さは約87cmである。底面からピットが2個検出され、P1は上面で27.5cm×21.5cm、底面で14.5cm×6.5cm、深さ15cm、P2は上面で24.5cm×24.5cm、底面で16.5cm×11cm、深さ20cmを測る。覆土は全体的にしまり無く、基本土層のⅡ・Ⅲ層が混入している。

22区8号土坑 (図77 P L 36)

W-14グリッドにおいて検出された。上面の規模

は、166cm×69cmの長方形、底面は158cm×57cmの長方形を呈し、底面積約0.94m²である。主軸方向はN-78°-W。確認面からの深さは約95cmである。底面の中央が盛り上がっている。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

22区6号土坑 (図78 P L 36)

X-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、145cm×67cmの長方形、底面は108cm×34cmの長方形を呈し、底面積約0.35m²である。主軸方向はN-72°-W。確認面からの深さは約117cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

22区10号土坑 (図78 P L 36)

V-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、154cm×62cmの長方形、底面は137cm×45cmの長方形を呈し、底面積約0.60m²である。主軸方向はN-87.5°-E。確認面からの深さは約89cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅢ層、2層中にⅡ層が混入している。人為的に埋められている。

23区3号土坑 (図78 P L 37)

C-14グリッドにおいて検出された。上面の規模は、157cm×82cmの長方形、底面は124cm×34cmの長方形を呈し、底面積約0.48m²である。主軸方向はN-10°-E。確認面からの深さは約95cmである。底面からピットが4個検出され、P1は上面で9cm×5.5cm、底面で4cm×2cm、深さ6cm、P2は上面で8cm×7cm、底面で4cm×4cm、深さ2cm、P3は上面で6.5cm×5cm、底面で3.5cm×3cm、深さ10cm、P4は上面で8cm×5cm、底面で5cm×2cm、深さ7cmを測る。確認面から35cm付近で地山のAs-YPk軽石層に当たり、埋没時に大きく崩れている。覆土は全体的にしまり無く、基本土層のⅡ・Ⅲ層が混入している。

23区4号土坑 (図78 P L 37)

C-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、160cm×51cmの長方形、底面は153cm×42cmの長方形を呈し、底面積約0.62m²である。主軸方向は

N-14.5°-W。確認面からの深さは約101cmである。底面からピットが1個検出され、P1は上面で21cm×20cm、底面で15cm×15cm、深さ14cmを測る。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

23区6号土坑（図79 P L 37）

C-13グリッドにおいて検出された。上面の規模は、160cm×71cmの長方形、底面は144cm×55cmの長方形を呈し、底面積約0.74m²である。主軸方向はN-11°-W。確認面からの深さは約72cmである。底面中央部が盛り上がっている。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層が混入している。

23区7号土坑（図79 P L 37）

B-15グリッドにおいて検出された。上面の規模は、151cm×68cmの長方形、底面は143cm×53cmの長方形を呈し、底面積約0.78m²である。主軸方向はN-57°-E。確認面からの深さは約75cmである。覆土は全体的にしまり無く、1層中に基本土層のⅡ層、2層中にⅢ層が混入している。

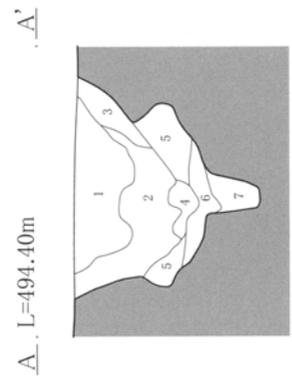
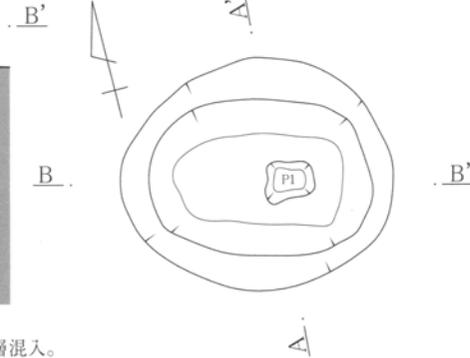
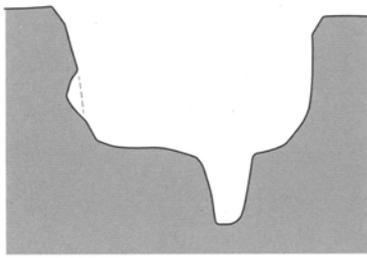
（2）遺物

遺構から出土した遺物は、縄文土器1点のみである。22区9号土坑覆土から出土した。出土した遺物は、縄文時代早期の押型文土器口縁部破片である。4.5cm×3.2cmの小片であるが、口縁から0.8cm下位より縦位に楕円文を密接に施文している様子が観察できる。遺物は、土坑埋没時の流れ込みと考えられる。

表採された他の遺物は、縄文土器と思われる破片1点（詳細不明）、陶器破片2点（碗口縁部、鉢口縁部）である。

〔I類〕

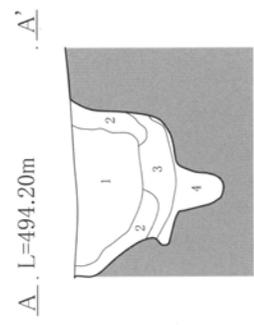
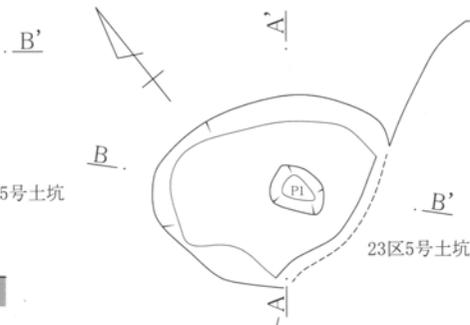
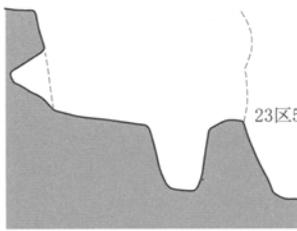
B L=494.40m



23区1号土坑

- 1 黒褐色土 径1cmローム粒少量含む。Ⅳ層混入。
- 2 褐色土 ローム塊少量含む。Ⅴ層混入。
- 3 褐色土 ローム塊非常に多く含む。しまりなし。
- 4 黒褐色土 ローム塊少量含む。ややしまる。
- 5 明黄褐色土 ローム塊非常に多く含む。しまりなし。
- 6 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)多く、ローム粒少量含む。
- 7 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)の径5cm塊を非常に多く含む。しまりなし。

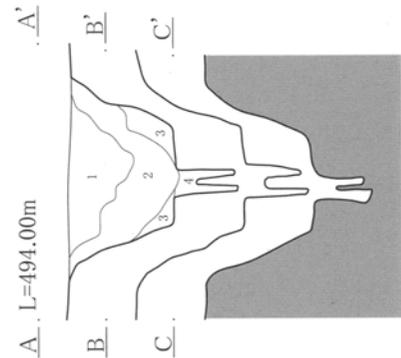
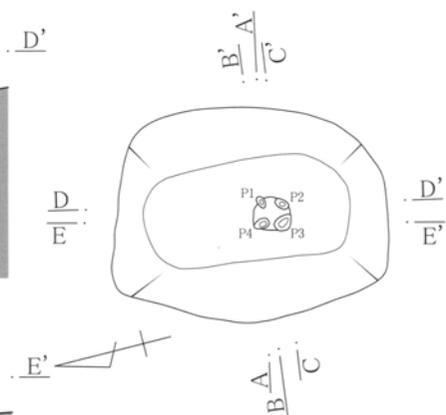
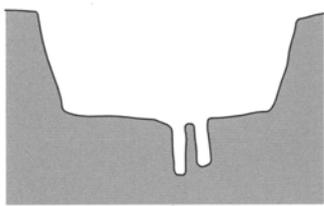
B L=494.20m



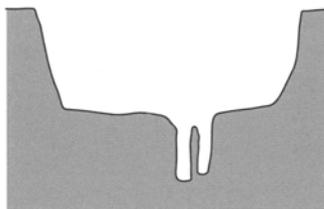
23区10号土坑

- 1 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量、ローム粒少量含む。ややしまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 径1.5cm浅黄橙色軽石、ローム粒少量含む。ややしまる。Ⅴ層混入。
- 3 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量含む。しまる。
- 4 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)多く含む。しまりなし。

D L=494.00m



E L=494.00m



22区1号土坑

- 1 黒褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量含む。ややしまる。Ⅲ層混入。
- 2 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量含む。ややしまる。Ⅲ層混入。
- 3 褐色土 径3cmローム塊少量含む。ややしまる。
- 4 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)の径5cm塊を非常に多く含む。しまりなし。

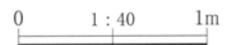
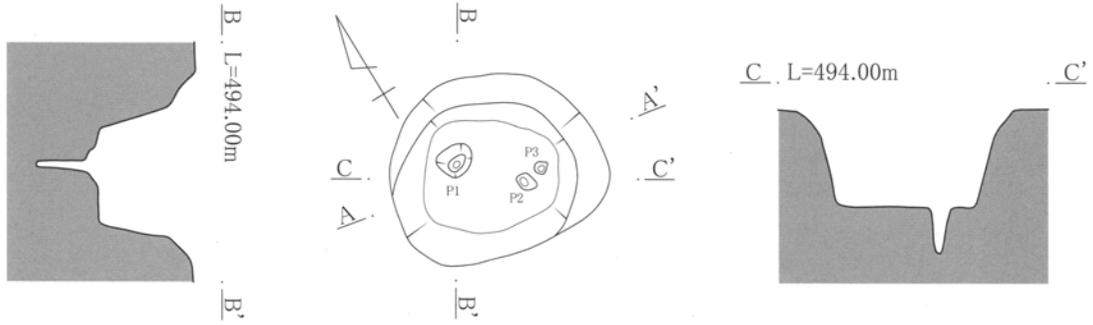
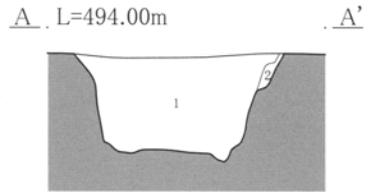


図68 23区1・10号、22区1号土坑



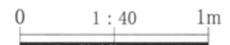
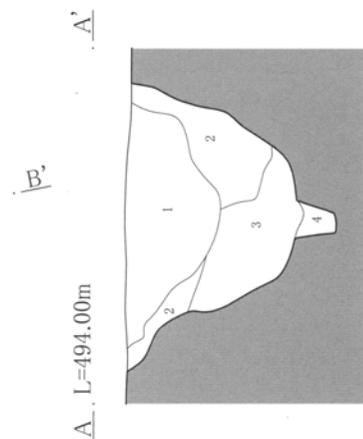
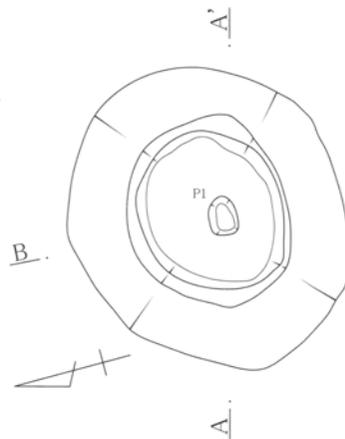
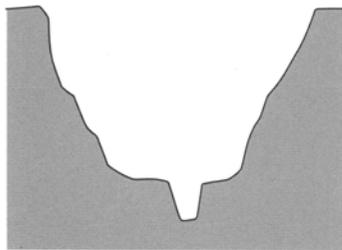
22区14号土坑

- 1 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量含む。ややしまる。IV層混入。
- 2 褐色土 径3cmローム塊含む。しまる。



〔Ⅱ類〕

B. L=494.00m



22区15号土坑

- 1 黒褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石、ローム粒少量含む。しまる。IV層混入。
- 2 褐色土 ローム塊非常に多く含む。しまる。
- 3 褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム粒少量含む。しまる。
- 4 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) の径5cm塊を非常に多く含む。しまりなし。

図69 22区14・15号土坑

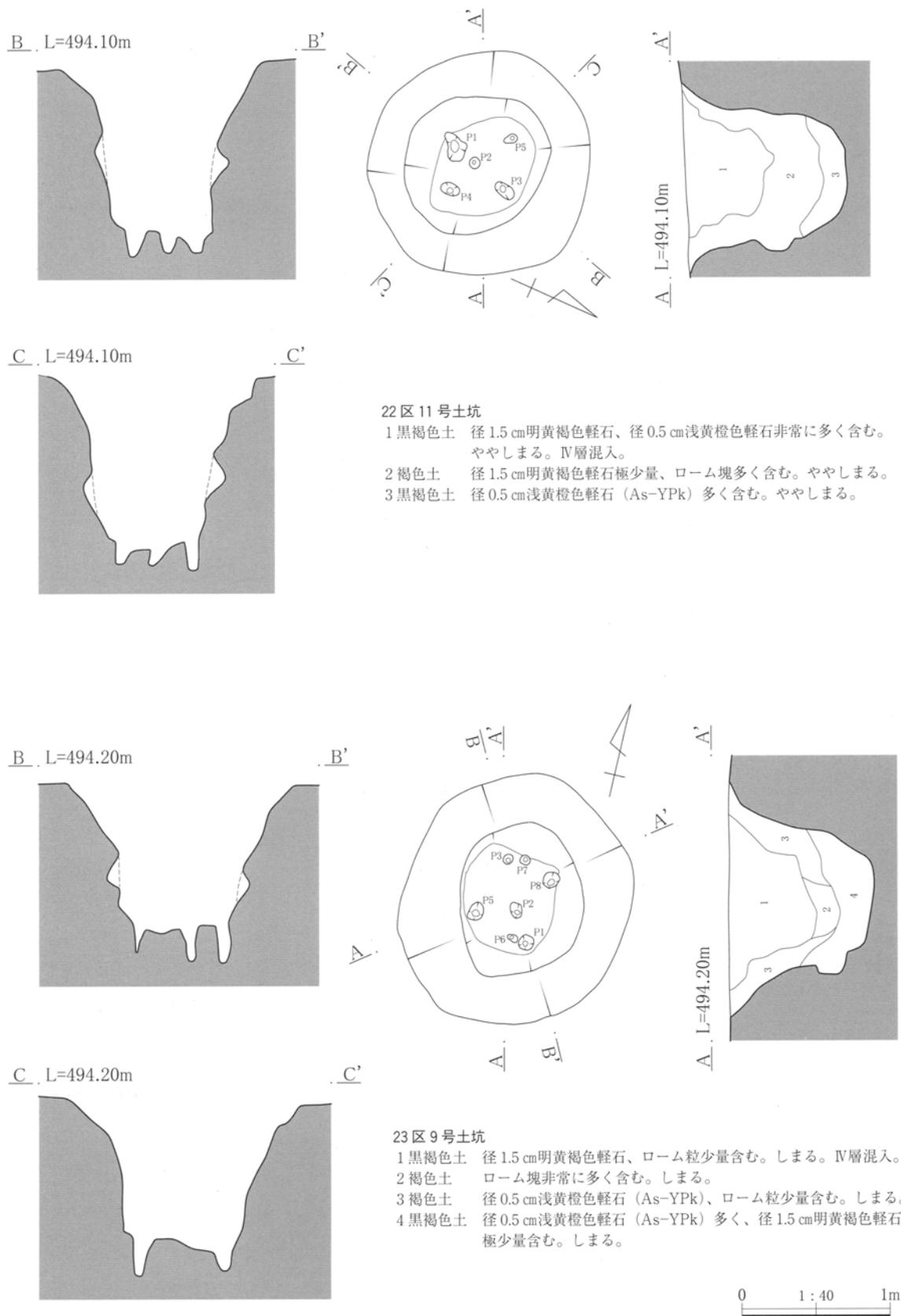


図70 22区11号、23区9号土坑

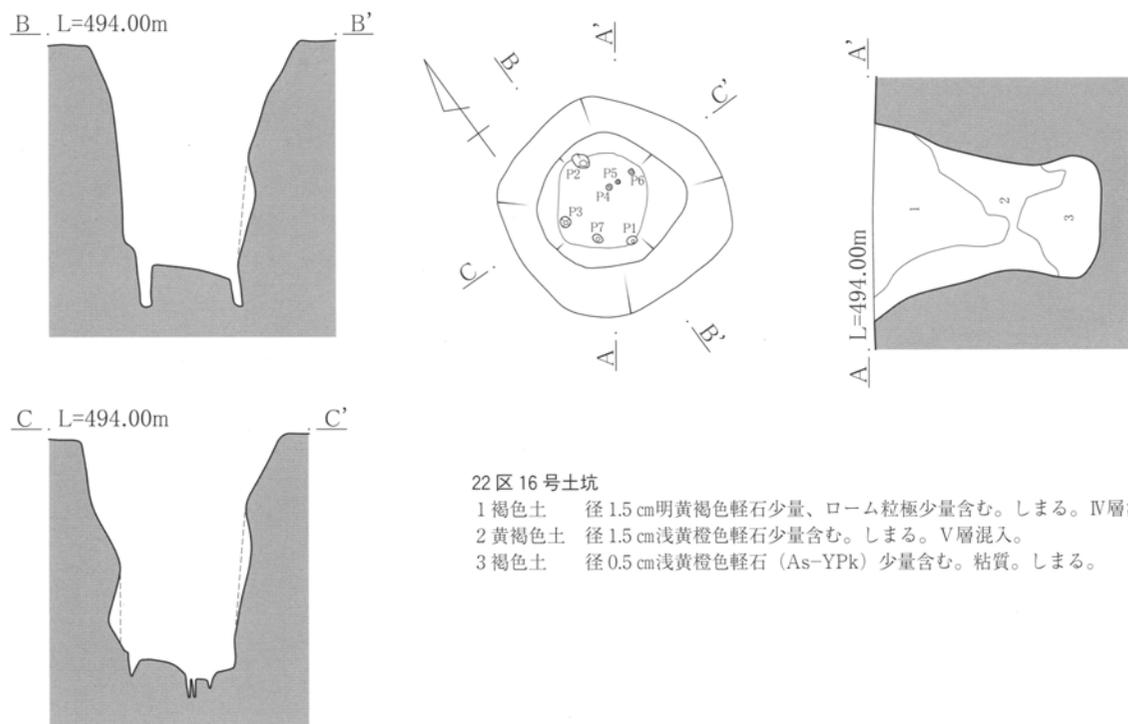
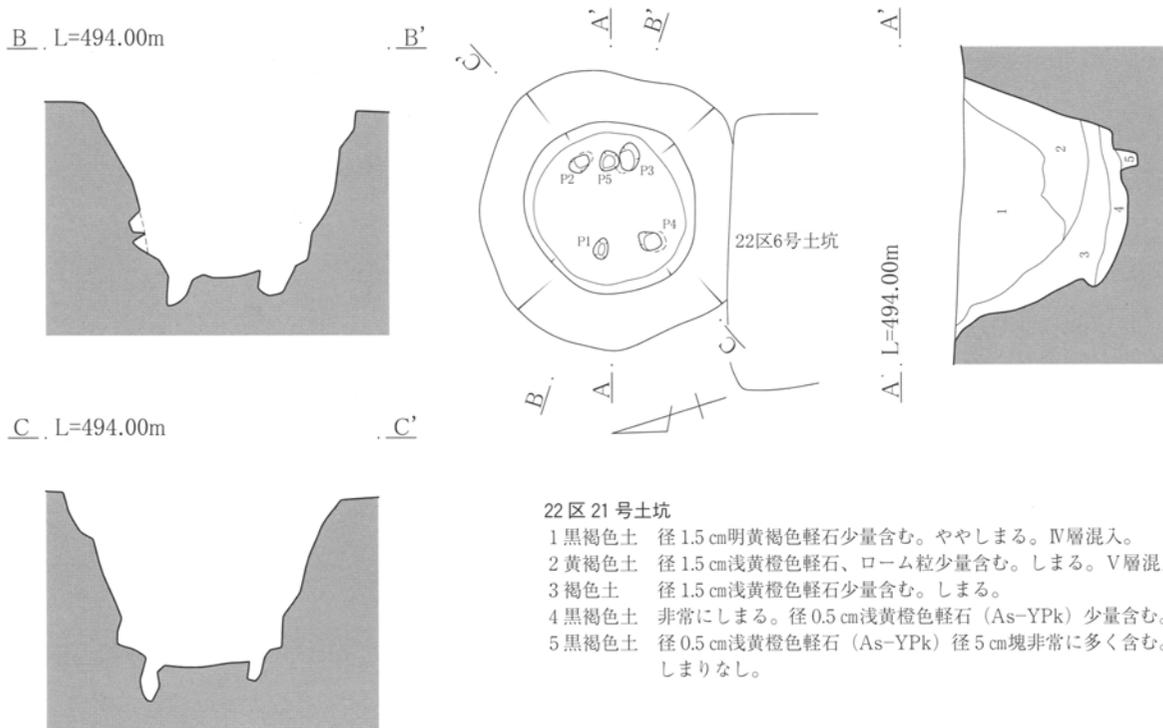


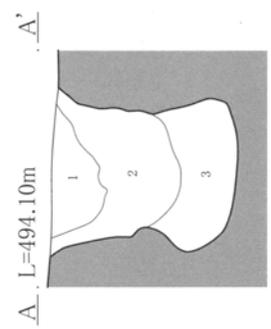
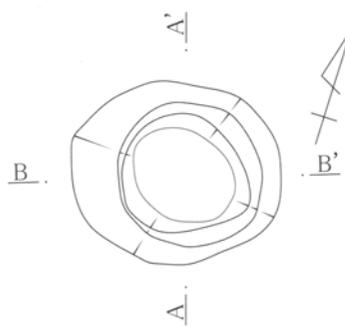
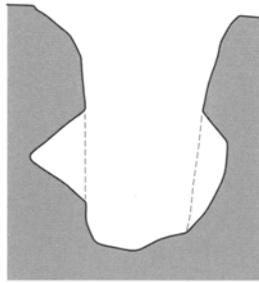
図71 22区21・16号土坑

第4章 上郷A遺跡

〔Ⅲ類〕

B. L=494.20m

B'

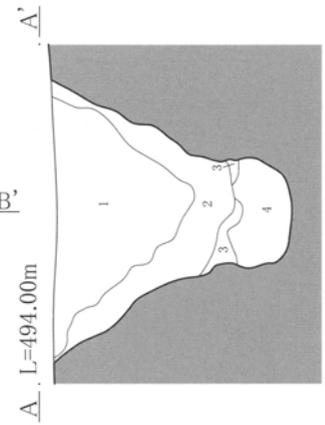
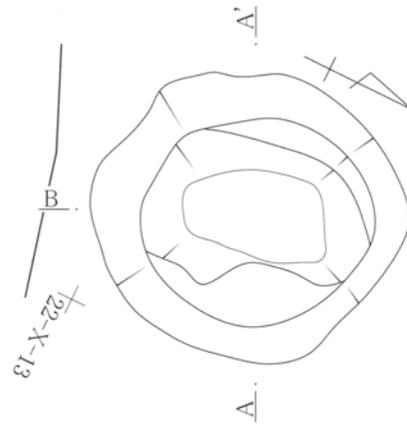
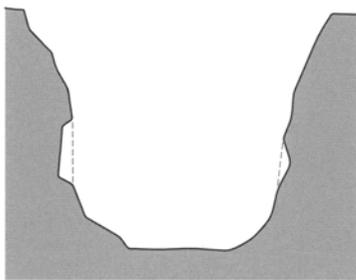


22区12号土坑

- 1 黒褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石、径0.5cm浅黄橙色軽石、ローム塊少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石、ローム粒少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 3 褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) 極少量含む。粘質でしまる。

B. L=494.00m

B'

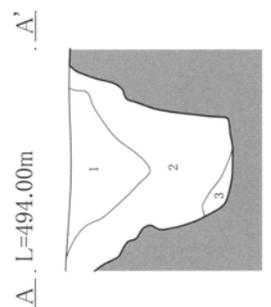
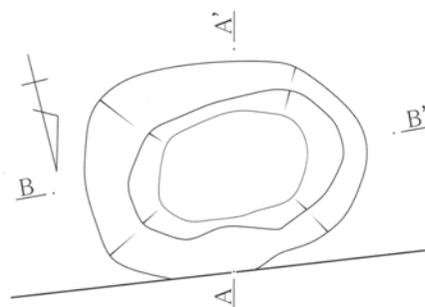
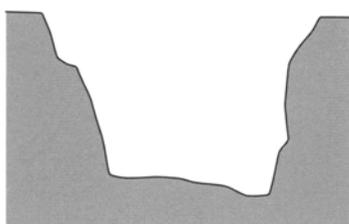


22区13号土坑

- 1 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石多く、ローム粒少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石極少量含む。しまる。Ⅴ層混入。
- 3 明黄褐色土 砂質。Ⅵ層混入。壁の崩れ。
- 4 黄褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム塊少量含む。しまりなし。

B. L=494.00m

B'



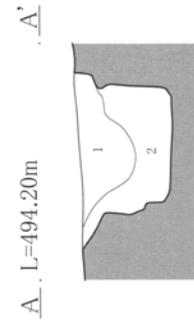
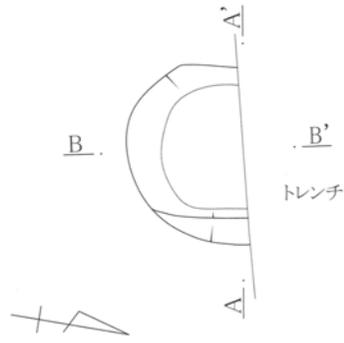
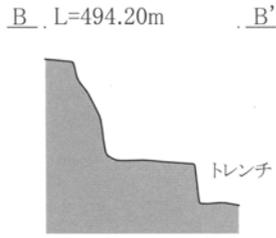
22区20号土坑

- 1 褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 径1.5cm浅黄橙色軽石少量含む。しまる。Ⅴ層混入。
- 3 黄橙色土 褐色土含む。しまりなし。Ⅵ層混入。

0 1:40 1m

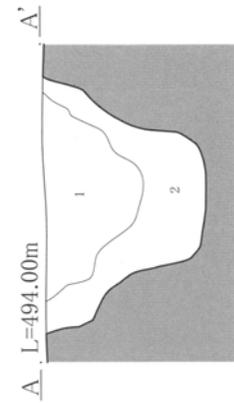
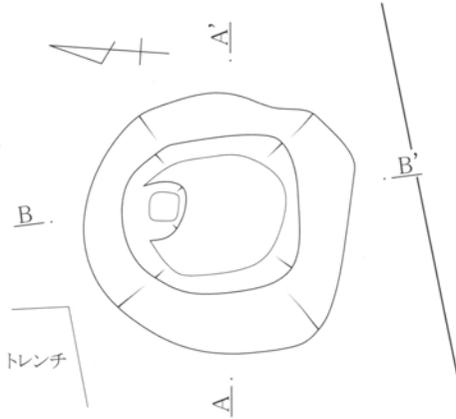
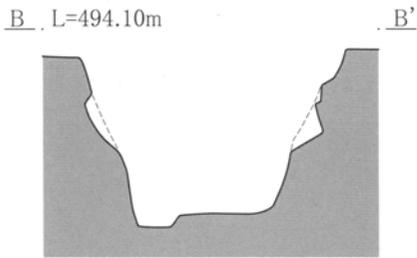
図72 22区12・13・20号土坑

〔Ⅳ類〕



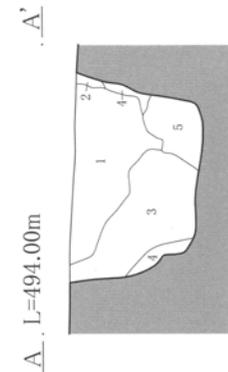
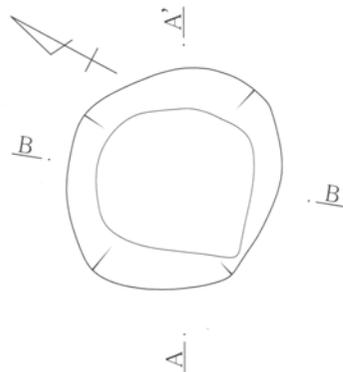
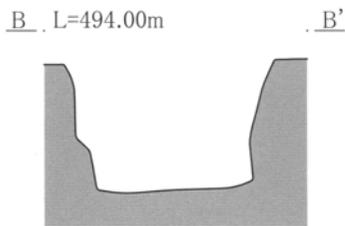
22区 17号土坑

- 1 褐色土 径 1.5 cm 明黄褐色軽石少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 径 1.5 cm 浅黄橙色軽石少量含む。しまる。Ⅴ層混入。



22区 18号土坑

- 1 褐色土 径 1.5 cm 明黄褐色軽石少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 径 1.5 cm 浅黄橙色軽石少量含む。しまる。Ⅴ層混入。



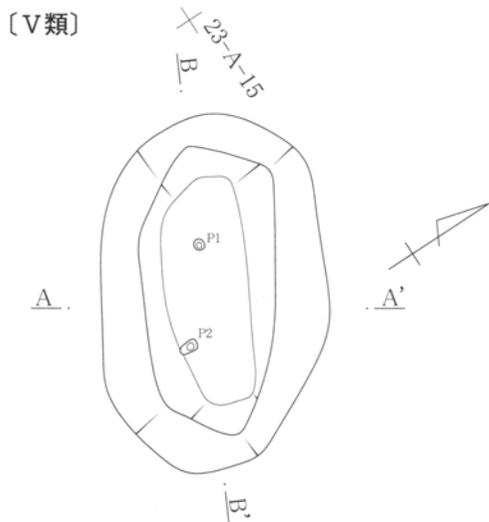
22区 19号土坑

- 1 褐色土 径 1.5 cm 明黄褐色軽石少量含む。しまる。Ⅳ層混入。
- 2 黄褐色土 ローム粒極少量含む。しまる。
- 3 黄褐色土 径 1.5 cm 浅黄橙色軽石少量含む。しまる。Ⅴ層混入。
- 4 黄橙色土 褐色土含む。しまりなし。Ⅷ層混入。
- 5 黄褐色土 しまる。

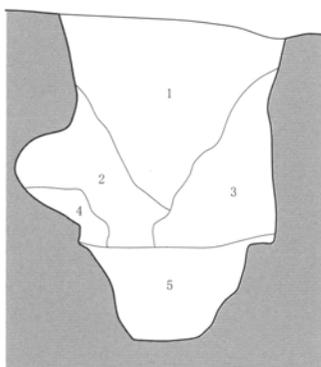


図 73 22区 17・18・19号土坑

[V類]



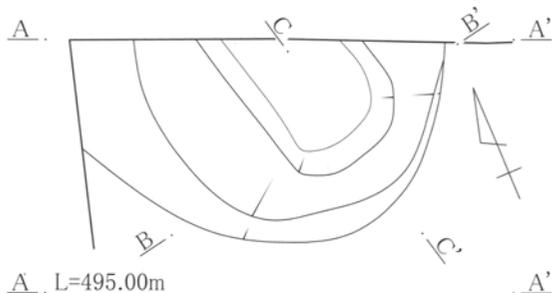
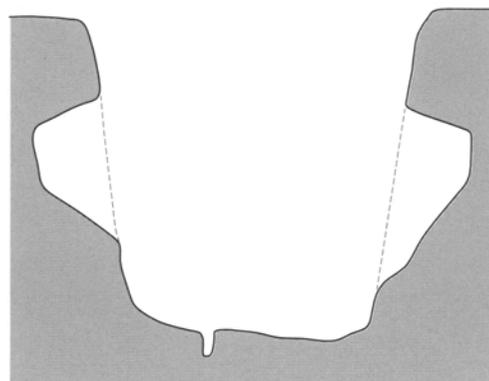
A L=494.00m



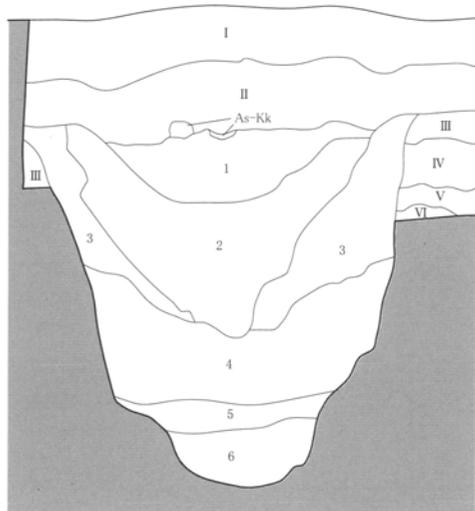
22区2号土坑

- | | |
|----------|--|
| 1 黒色土 | 径 0.5 cm 浅黄橙色軽石、ローム粒少量含む。しまりなし。II層混入。 |
| 2 黄橙色土 | 径 10 cm ローム塊主体。径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk)、黒褐色土含む。 |
| 3 黄橙色土 | 径 20 cm ローム塊主体。径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk) 径 10 cm 塊を少量、黒褐色土含む。 |
| 4 浅黄橙色軽石 | 径 0.5 cm のAs-YPk。 |
| 5 黒褐色土 | 径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム粒多く含む。ややしまる。 |

B L=494.00m



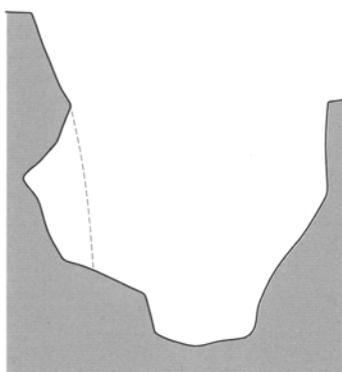
A L=495.00m



23区11号土坑

- | | |
|----------|--|
| 1 黒色土 | 径 1.5 cm 明黄褐色軽石少量含む。しまりなし。II、III層混入。 |
| 2 褐色土 | 径 1.5 cm 明黄褐色軽石多量に含む。III、IV層混入。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒極少量含む。しまりなし。III層主体に混入。 |
| 4 褐色土 | ローム塊非常に多く含む。しまりなし。 |
| 5 浅黄橙色軽石 | 径 0.5 cm のAs-YPk。褐色土含む。しまりなし。 |
| 6 褐色土 | 径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk) 非常に多く、黒褐色土、ローム塊極少量含む。しまりなし。 |

B L=494.30m



C L=494.00m

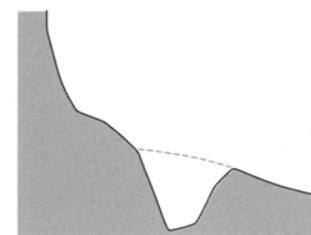
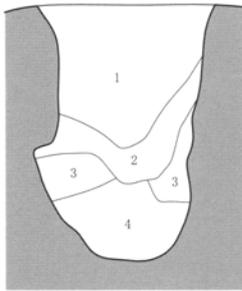
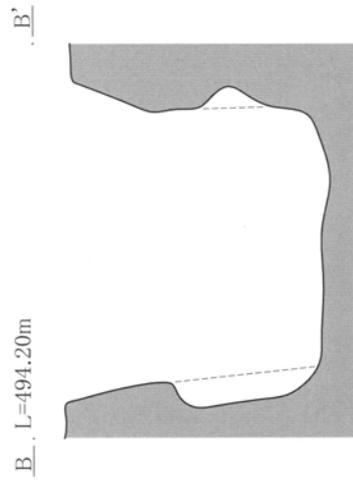
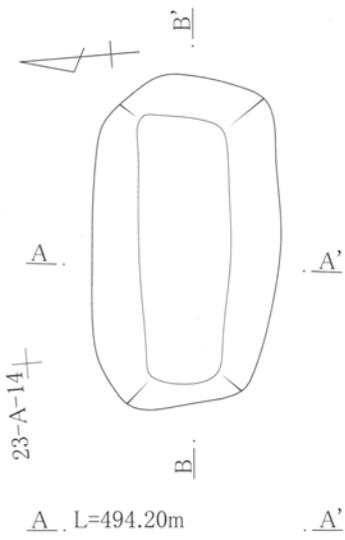


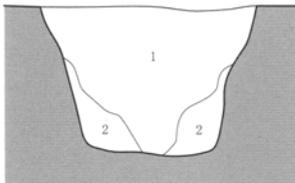
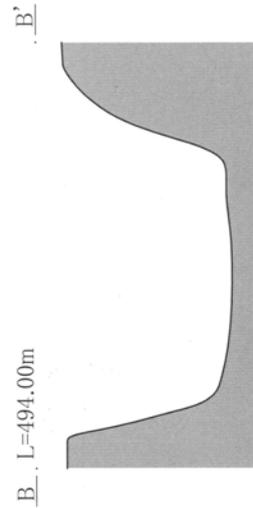
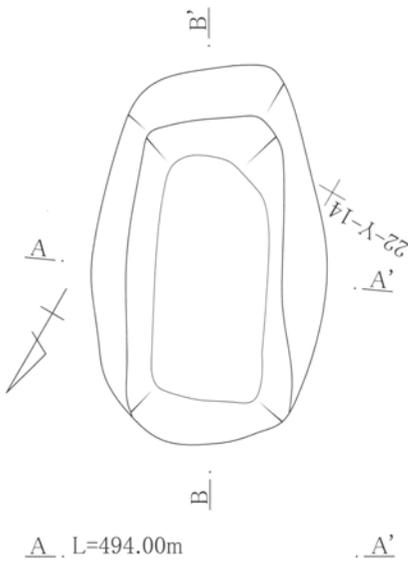
図74 22区2号、23区11号土坑

0 1:40 1m



22区4号土坑

- 1 黒色土 径1.5cm明黄褐色軽石、ローム粒少量含む。しまりなし。II層混入。
- 2 黒褐色土 ローム塊極少量含む。III、IV層含む。
- 3 黄橙色土 径5cmローム塊主体。黒褐色土含む。しまりなし。
- 4 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)多く、ローム粒極少量含む。しまりなし。



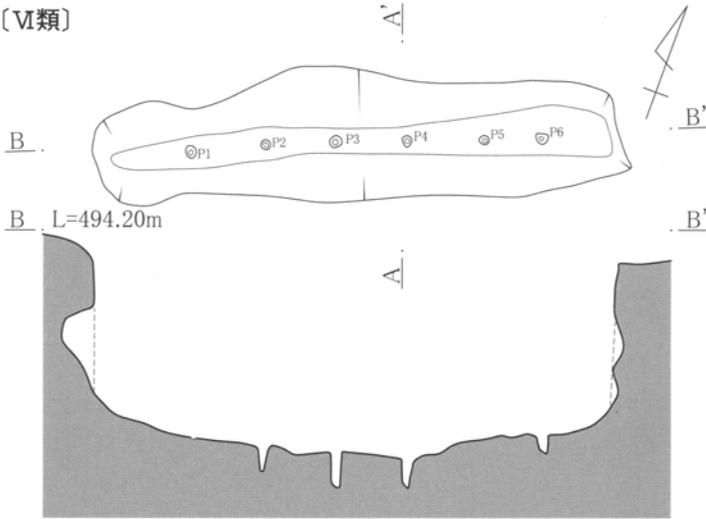
22区5号土坑

- 1 黒色土 径1.5cm明黄褐色軽石極少量、ローム粒多く、径5cm黒色土塊少量含む。III層混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒、径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)非常に多く含む。しまりなし。

0 1:40 1m

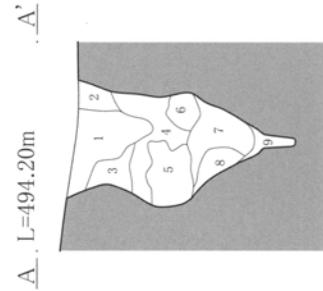
図75 22区4・5号土坑

〔Ⅵ類〕

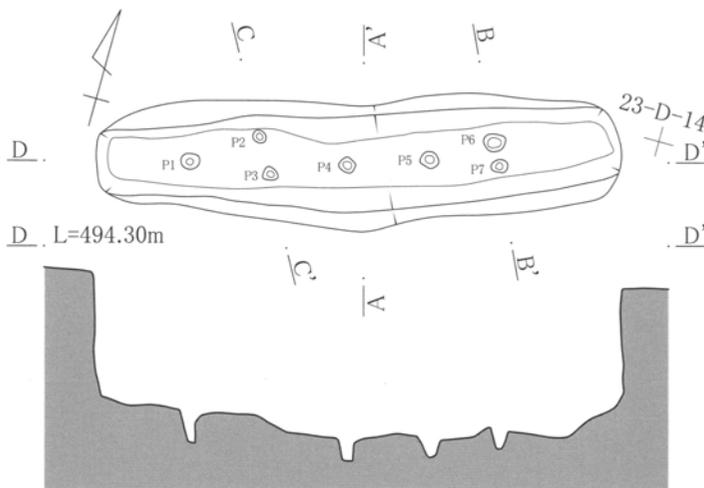


23区2号土坑

- 1 黒色土 灰色火山灰 (As-Kkか) を径 2 cm 塊状に含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 径 1.5 cm 明黄橙色軽石極少量含む。しまりなし。



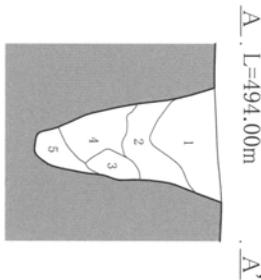
- 3 黒色土 ローム粒少量含む。しまりなし。
- 4 黒褐色土 径 1 cm ローム粒極少量含む。粘質。
- 5 黄橙色土 ローム塊主体。径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk) 含む。
- 6 黒色土 ローム粒少量含む。しまりなし。
- 7 黒褐色土 径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム粒多く含む。
- 8 浅黄橙色軽石 径 0.5 cm。(As-YPk) 黒褐色土塊多く含む。
- 9 黒褐色土 径 0.5 cm 浅黄橙色軽石 (As-YPk) 径 5 cm 塊非常に多く含む。しまりなし。



23区5号土坑

- 1 黒色土 径 1.5 cm 明黄褐色軽石、ローム粒極少量含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒非常に多く含む。しまりなし。
- 3 黄橙色土 ローム塊主体。Ⅴ層混入。

〔Ⅶ類〕



23区8号土坑

- 1 黒色土 径 10 cm ローム塊含む。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒多く含む。しまりなし。
- 3 黒色土 径 3 cm ローム塊極少量含む。Ⅱ層混入。
- 4 黒褐色土 ローム粒極少量含む。しまりなし。Ⅲ層混入。
- 5 浅黄橙色軽石 径 0.5 cm のAs-YPk。黒褐色土含む。

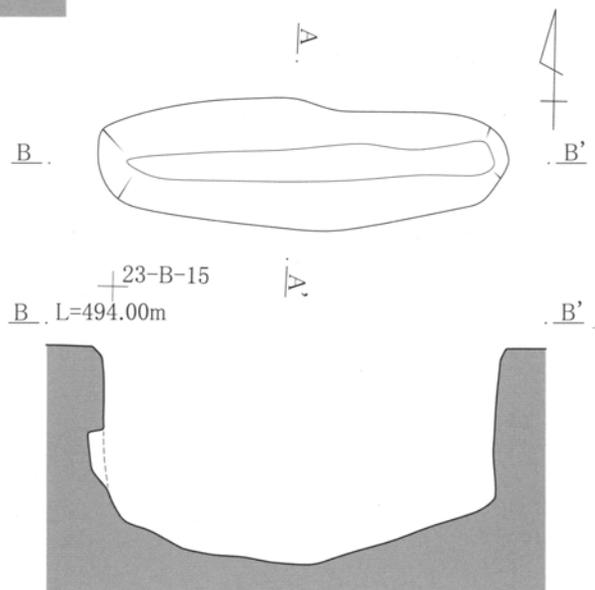
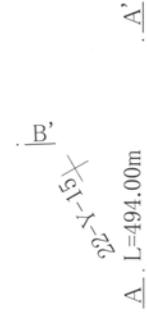
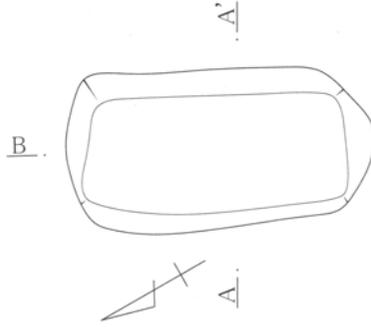
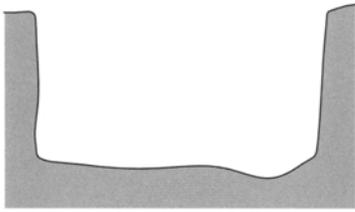


図76 23区2・5・8号土坑

〔Ⅷ類〕

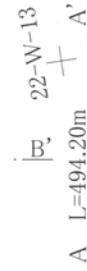
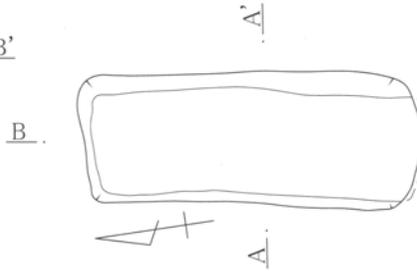
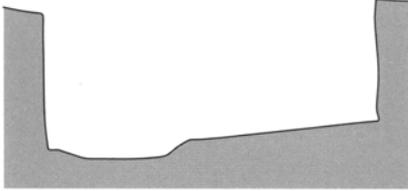
B. L=494.00m



22区3号土坑

- 1 黒色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム粒少量含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム塊少量含む。しまりなし。

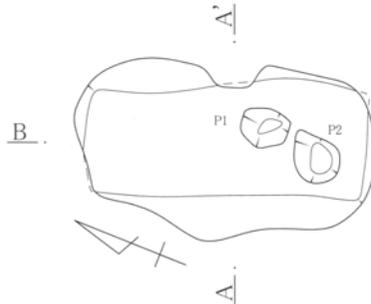
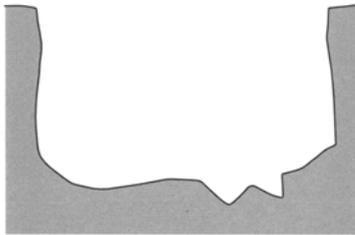
B. L=494.00m



22区9号土坑

- 1 黒色土 ローム粒少量、角礫2cm×15cm含む。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒多量に含む。しまりなし。

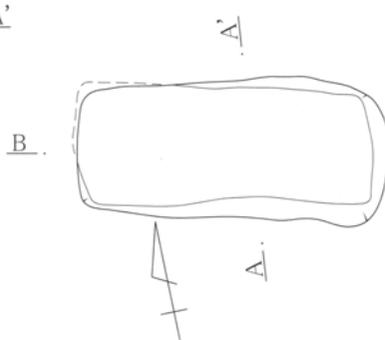
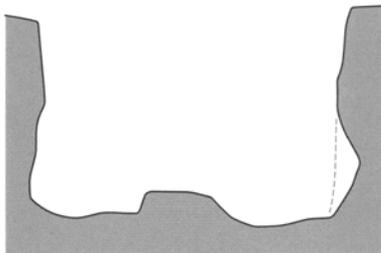
B. L=494.00m



22区7号土坑

- 1 黒色土 ローム粒極少量含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム塊極少量含む。しまりなし。Ⅲ層混入。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) 多く、ローム塊非常に多く含む。しまりなし。

A. L=494.00m



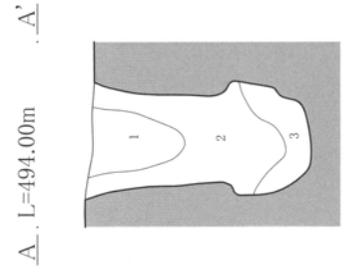
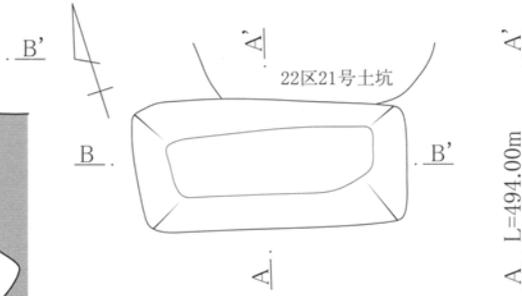
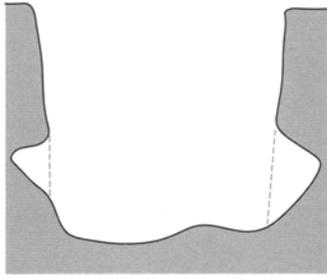
22区8号土坑

- 1 黒色土 ローム粒多く含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム塊多く含む。しまりなし。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk)、ローム粒少量含む。しまりなし。



図77 22区3・9・7・8号土坑

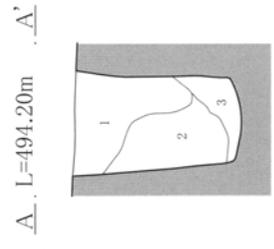
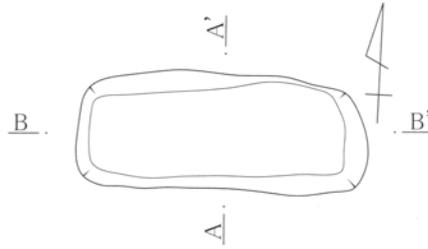
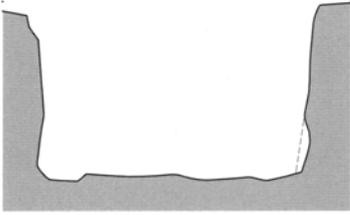
B. L=494.00m



22区6号土坑

- 1 黒色土 しまりなし。II層自然堆積。
- 2 黒褐色土 ローム塊極少量含む。しまりなし。
- 3 暗褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)多く含む。しまりなし。

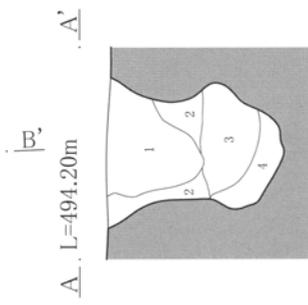
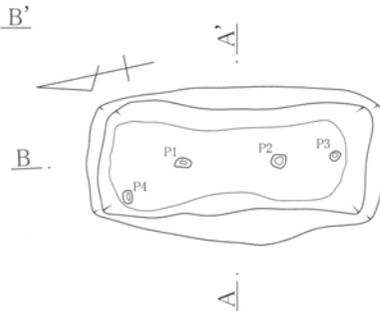
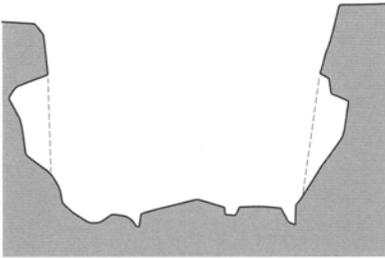
B. L=494.00m



22区10号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒多量に含む。しまりなし。III層混入。
- 2 黒色土 しまりなし。II層混入。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)、ローム塊多く含む。しまりなし。

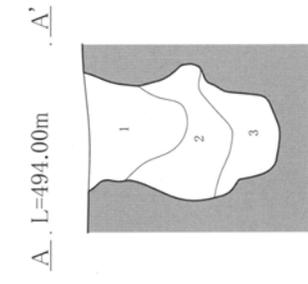
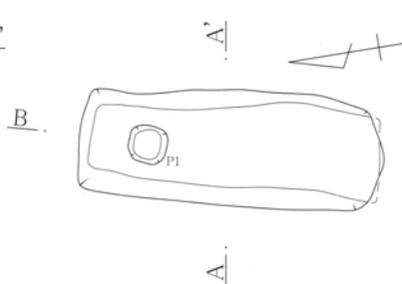
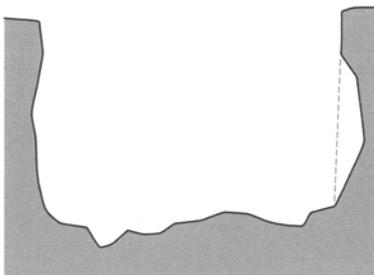
B. L=494.20m



23区3号土坑

- 1 黒褐色土 径1.5cm明黄褐色軽石、ローム粒極少量含む。しまりなし。II、III層混入。
- 2 褐色土 ローム塊多く含む。しまりなし。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)極少量、ローム粒多く含む。粘質。
- 4 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)を塊状に少量含む。しまりなし。

B. L=494.00m

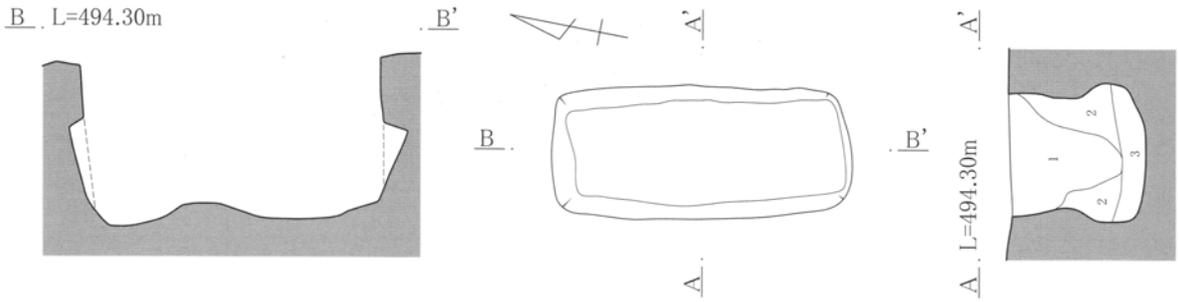


23区4号土坑

- 1 黒色土 径1.5cm明黄褐色軽石極少量含む。しまりなし。
- 2 黒褐色土 ローム粒多く含む。しまりなし。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石(As-YPk)、ローム粒多く含む。しまりなし。

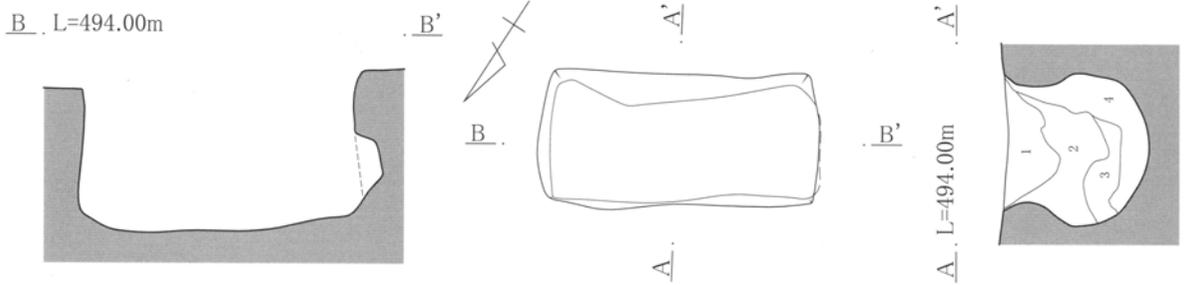
0 1:40 1m

図78 22区6・10号、23区3・4号土坑



23区6号土坑

- 1 黒色土 径1.5cm明黄褐色軽石極少量含む。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム塊少量含む。
- 3 黒褐色土 径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) 少量含む。粘質。



23区7号土坑

- 1 黒色土 径1.5cm明黄褐色軽石、ローム粒極少量含む。しまりなし。Ⅱ層混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまりなし。Ⅲ層混入。
- 3 黒褐色土 ローム塊非常に多く含む。径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) 多く含む。
- 4 褐色土 ローム塊、径0.5cm浅黄橙色軽石 (As-YPk) 多く含む。

図79 23区6・7号土坑

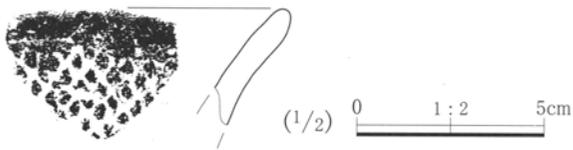


図80 22区9号土坑出土遺物

表19 出土遺物観察表

番号	種類	器形	残存部位	特徴・その他	時期等
1	縄文	尖底深鉢	口縁部破片	楕円押型文を縦位密接に施文。	早期
2	縄文	不明	胴部破片	無文	不明
3	陶器	鉢	口縁部破片	瀬戸・美濃	17～18世紀中頃
4	陶器	碗	口縁部破片	製作地不詳	江戸時代

第4章 上郷A遺跡

表20 遺構一覧表

番号	位置	類型	上面形態 規模(長径×短径)m	底面形態 規模(長径×短径)m	深さ(m)	底面積(m ²)	主軸方位	主軸の傾斜に 対する傾き	挿図	PL
22区1	22-Y-15	I	隅丸長方形 1.43×1.13	隅丸長方形 0.99×0.55	0.57	0.54	N-13°-E	右3°	68	30
22区2	22-Y-14	V	楕円形 1.9×1.2	楕円形 1.2×0.44	1.7	0.47	N-56°-W	右82°	74	33
22区3	22-X-5	VIII	隅丸長方形 1.64×0.83	長方形 1.39×0.62	0.87	0.82	N-28°-E	左6.5°	77	35
22区4	22-Y-13	V	隅丸長方形 1.74×0.98	隅丸長方形 1.41×0.48	1.35	0.64	N-85°-W	左76.5°	75	34
22区5	22-X-14	V	隅丸長方形 2.0×1.26	隅丸長方形 1.29×0.6	0.78	0.72	N-25°-W	左82°	75	34
22区6	22-X-15	VIII	長方形 1.45×0.67	長方形 1.08×0.34	1.17	0.35	N-72°-W	左60.5°	78	36
22区7	22-X-13	VIII	不定形 1.58×0.78	長方形 1.5×0.6	0.87	0.87	N-22°-W	左50°	77	36
22区8	22-W-14	VIII	長方形 1.66×0.69	長方形 1.58×0.57	0.95	0.94	N-78°-W	左55°	77	36
22区9	22-W-13	VIII	長方形 1.79×0.7	長方形 1.77×0.52	0.77	0.94	N-8.5°-E	右65°	77	35
22区10	22-V-14	VIII	長方形 1.54×0.62	長方形 1.37×0.45	0.89	0.6	N-87.5°-E	左44°	78	36
22区11	22-Y-13	II	円形 1.36×1.35	楕円形 0.74×0.57	1.09	0.31	N-66°-E	右85°	70	31
22区12	22-X-12	III	円形 1.11×0.95	円形 0.53×0.48	0.98	0.21	N-71.5°-E	測定不能	72	32
22区13	22-X-13	III	円形 1.69×1.52	楕円形 0.75×0.46	1.25	0.31	N-26°-W	左27.5°	72	32
22区14	22-X-14	I	楕円形 1.14×0.97	楕円形 0.75×0.58	0.49	0.36	N-11°-E	右86°	69	30
22区15	22-X-14	II	円形 1.55×1.5	円形 0.69×0.65	0.92	0.51	N-4.5°-E	測定不能	69	31
22区16	22-V-13	II	円形 1.24×1.09	円形 0.49×0.47	1.21	0.21	N-53°-W	測定不能	71	32
22区17	22-T-13	IV	(楕円形) 0.93×〈0.61〉	(楕円形) 0.64×〈0.43〉	0.47	0.26	N-13°-W	〈左45°〉	73	33
22区18	22-S-13	IV	円形 1.44×1.37	楕円形 0.78×0.61	0.84	0.4	N-12°-W	左2.5°	73	33
22区19	22-S-14	IV	円形 1.16×1.12	楕円形 0.84×0.76	0.65	0.55	N-19.5°-W	測定不能	73	33
22区20	22-V-15	III	楕円形 1.51×1.11	楕円形 0.77×0.56	0.86	0.37	N-76.5°-W	左65°	72	32
22区21	22-X-15	II	円形 1.47×1.34	円形 0.8×0.8	0.88	0.5	N-72.5°-W	測定不能	71	31
23区1	23-E-13	I	楕円形 1.44×1.22	楕円形 0.89×0.48	0.72	0.38	N-76°-W	右85°	68	30
23区2	23-D-14	VI	溝状 2.8×0.62	溝状 2.35×0.15	1	0.46	N-70°-E	右2.5°	76	34
23区3	23-C-14	VIII	長方形 1.57×0.82	長方形 1.24×0.34	0.95	0.48	N-10°-E	右3°	78	37
23区4	23-C-15	VIII	長方形 1.6×0.51	長方形 1.53×0.42	1.01	0.62	N-14.5°-E	右14°	78	37
23区5	23-D-13	VI	溝状 2.79×0.66	溝状 2.53×0.25	0.69	0.71	N-74°-E	右5°	76	35
23区6	23-C-13	VIII	長方形 1.6×0.71	長方形 1.44×0.55	0.72	0.74	N-11°-W	左52°	79	37
23区7	23-B-15	VIII	長方形 1.51×0.68	長方形 1.43×0.53	0.75	0.78	N-57°-E	左2°	79	37
23区8	23-A-5	VII	溝状 2.17×0.69	溝状 2.02×0.17	1.1	0.3	N-89°-E	右71°	76	35
23区9	22-A-13	II	円形 1.65×1.62	円形 0.7×0.81	0.97	0.36	N-15°-W	測定不能	70	31
23区10	23-D-14	I	楕円形 〈1.13〉×0.95	楕円形 〈1.04〉×0.72	0.56	〈0.62〉	N-53°-W	右66°	68	30
23区11	23-B-17	V	楕円形 〈1.07〉×2.0	隅丸長方形 〈0.56〉×0.63	1.98	〈0.3〉	N-14.5°-W	左72°	74	34

第4節 自然科学分析

上郷A遺跡における火山灰分析について

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された吾妻町上郷A遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラとの同定を行い、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった遺構は、第1基本土層断面、22区11号土坑、22区10号土坑の3地点である。

2. 土層の層序

(1) 第1基本土層断面

第1基本土層断面では、下位より黄白色軽石混じり褐色土（層厚2cm以上、軽石の最大径15mm）、成層したテフラ層（層厚）、黄褐色土（層厚15cm）、円磨された軽石に富み層理が発達した黄灰色砂層（層厚18cm、軽石の最大径11mm）、黄色軽石を多く含む黄褐色土（層厚11mm）、黄褐色軽石混じり灰褐色土（層厚15cm、軽石の最大径12mm）、黄色軽石を少量含む褐色土（層厚39cm、軽石の最大径12mm）、暗灰褐色土（層厚21cm）、黒灰褐色土（層厚12cm）、暗灰褐色土（層厚17cm）が認められる（図81）。

このうち、成層したテフラ層は、下位より黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚4cm）、黄色細粒軽石層（層厚51cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径3mm）、桃色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黄褐色砂質細粒火山灰層（層厚7cm）、灰褐色細粒火山灰層（層厚7cm）、橙褐色粗粒火山灰層（層厚4cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚21cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚7cm）からなる。このテフラ層は、層相から約1.3～1.4万年前*1の浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）と、ほぼ連続して噴出したと考えられている浅間草津黄色軽石（As-YPk, 新井, 1962）に同定される可能性が高い。とくに厚い黄色細粒軽石層については、層相からAs-YPkに同定される。

なお黄褐色砂質細粒火山灰層については、層相から埋没土壌の可能性も完全には否定できない。この噴火の前後の詳細についてはまだ不明な点が多いことから、植物珪酸体分析などにより、土壌か否かについての分析が行われると良い。

(2) 22区11号土坑

陥し穴と推定されている22区11号土坑の覆土は、下位より黄色軽石混じり暗灰褐色土（層厚12cm、軽石の最大径9mm）、黄色軽石を少量含む褐色土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚39cm、軽石の最大径8mm）、黄色軽石に富む暗灰褐色土（層厚12cm、軽石の最大径12mm）からなる（図81）。

(3) 22区10号土坑

陥し穴と推定されている22区10号土坑の覆土は、下位より暗灰褐色土(層厚11cm)、黒灰褐色土(層厚51cm)、暗灰褐色土(層厚27cm)からなる(図81)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、上述3地点において基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきを中心とした33点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第1表に示す。第1基本土層断面では、試料26から試料18にかけてと試料12に黄色軽石(最大径5.1mm)が含まれている。これらのうち、試料26に含まれる軽石は水磨されている。試料8には灰白色軽石(最大径3.0mm)、また試料6には灰色軽石(最大径2.0mm)が少量含まれている。試料4には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径1.8mm)が比較的多く含まれている。さらに試料2には、比較的良く発泡した淡褐色軽石(最大径14.8mm)が少量含まれている。火山ガラスとしては、試料30から試料14にかけて、無色透明や白色の軽石型ガラスが含まれている。とくに試料16や試料14で、平板状のいわゆるバブル型ガラスが比較的目立つ傾向にある。それより上位では、軽石の細粒物が比較的多く含まれている。

22区11号土坑では、いずれの試料からも黄白色軽石が検出された。とくに試料8より上位で軽石は増加し、試料2に多く含まれているように見える(最大径7.1mm)。いずれの試料にも、無色透明や白色の火山ガラスが比較的多く含まれている。さらに試料12は、無色透明のバブル型ガラスが認められる。

22区10号土坑では、ほとんどの試料から黄白色軽石(最大径6.8mm)や灰白色軽石(最大径2.2mm)が含まれている。また試料3には、ごく少量ながら淡褐色軽石(最大径3.0mm)が認められる。火山ガラスとしては、白色や無色透明の軽石型ガラスなどが検出される。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ粒子の起源を明らかにするために、第1基本土層断面の軽石(試料24、試料18')、22区11号土坑覆土中の軽石(試料2')の3点について、温度一定型屈折率測定法(新井,1972,1993)により屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第2表に示す。第1基本土層断面の試料24の軽石の火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.504である。班晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.708-1.711である。また、第1基本土層断面の試料18'の軽石に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.504である。班晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.708-1.711である。22区11

号土坑の試料2'の軽石に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501–1.505である。斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.708–1.711である。

5. 考察

第1基本土層断面の試料24の軽石は、火山ガラスの屈折率、重鉍物の組合せ、斜方輝石の屈折率、さらに黄褐色土中に層位があることなどから、As-YPkまたは約1.1万年前*1に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1996)など、浅間火山軽石流期のテフラに由来する可能性が高い。本試料が採取された堆積物は、水成層であることから、従来の関東平野北西部における研究成果と比較すると、利根川扇状地のうちの井野川低地帯に分布する井野川泥流堆積物(早田, 1990, 2000)に対比される可能性も考えられよう。また試料18'の軽石については、その特徴からAs-Sjに同定される可能性がある。

さらに、22区11号土坑覆土中の軽石(試料2')についても、その特徴からAs-Sjに同定される可能性がある。ただし、従来のテフラに関する特徴記載の中には、4,000～5,000年前頃*1に浅間火山から噴出したとされる浅間D軽石(As-D: 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992, 早田, 1996)の下部のD-2軽石について、斜方輝石の屈折率(γ)が1.707–1.711との報告がある(新井, 1979)。現在のところ、縄文時代の浅間火山起源のテフラについては、層序や岩石記載学的特徴の把握で不十分であることから、今後の研究をまっ各テフラの起源について詳細に考えてみたい。

なお、第1基本土層断面の試料16や試料14に比較的多く含まれるバブル型ガラスについては、その形態から約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に由来する可能性が期待された。しかしながら検鏡の際には、K-Ahに特徴的な褐色のバブル型ガラスは認められなかった。これらの試料について、屈折率測定やEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析などが行われると良い。22区11号土坑や22区10号土坑で検出された黄白色軽石については、その岩相からAs-YPkに由来すると考えられる。

比較的上位にある軽石のうち、第1基本土層断面の試料4付近に降灰層準があると考えられ、22区10号土坑のほとんどの試料から検出される灰白色軽石については、その特徴から3世紀終末～4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。また第1基本土層断面の試料2や、18号土坑の試料3に含まれる淡褐色軽石については、その岩相から、浅間Bテフラ(As-B, 1108年, 新井, 1979)あるいは浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年, 早田, 1991, 1995)などに由来すると考えられる。以上のことから、22区10号土坑については、As-Cより上位で、少なくともAs-Kkより下位にあると考えられる。

6. まとめ

上郷A遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、おもに浅間草津黄色軽石(As-YPk, 約1.3～1.4万年前*1)からなる浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前*1)や、浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前*1)、さらに浅間D-2軽石(As-D2, 約4,000～5,000年前*1)に由来する可能性がある軽石などが検出された。22区11号土坑についてはAs-D2より下位、22区10号土坑についてはAs-Cより上位で、少なくともAs-Kkより下位にある可能性が考えられる。

第4章 上郷A遺跡

*1 放射性炭素（ ^{14}C ）年代.

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 早田 勉（1990）群馬の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.39-129.
- 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉（1995）テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌自然編, p.22-43.
- 早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラ について—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉（2000）火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形. 貝塚爽平ほか編「日本の地形4 関東・伊豆小笠原」, 東京大学出版会, p.191-194.
- 友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第1基本土層断面	2	+	淡褐	14.8	+	pm	淡褐
	4	++	灰白	1.8	+	pm	灰白
	6	+	灰	2.0	+	pm	灰白, 白
	8	+	灰白	3.0	+	pm	灰白, 白, 透明
	10	-	-	-	+	pm	白, 透明
	12	+	黄	3.0	+	pm	白, 透明
	14	-	-	-	++	pm>bw	透明, 白
	16	-	-	-	++	pm>bw	透明, 白
	18	+	黄	2.9	++	pm	透明, 白
	20	++	黄	2.4	++	pm	透明, 白
	22	++	黄	2.9	++	pm	透明, 白
	26	+++	黄	5.1	+	pm	透明, 白
	28	-	-	-	++	pm	透明, 白
	30	-	-	-	++	pm	透明, 白
22区11号土坑	2	+++	黄白	7.1	+++	pm	白, 透明
	4	++	黄白	8.2	+++	pm	白, 透明
	6	++	黄白	5.1	+++	pm	白, 透明
	8	++	黄白	5.5	+++	pm	白, 透明
	10	+	黄白	2.5	++	pm	透明, 白
	12	+	黄白	2.2	++	pm>bw	透明, 白
	14	+	黄白	3.3	++	pm	白, 透明
	16	+	黄白	5.7	++	pm	白, 透明
	18	+	黄白	9.3	++	pm	白, 透明
	20	+	黄白	8.1	+++	pm	白, 透明
22区10号土坑	1	++	黄白	4.1	+	pm	白, 透明
	3	+	灰白, 黄白, 淡褐	2.2, 3.7, 3.0	+	pm	白, 透明, 淡褐
	5	+	黄白	2.8	+	pm	白, 透明
	7	+	灰白, 黄白	1.8, 5.7	+	pm	白, 透明
	9	+	灰白, 黄白	1.5, 3.2	+	pm	白, 透明
	11	+	灰白	3.1	+	pm	白, 透明
	13	+	黄白	2.9	+	pm	白, 透明
	15	+	黄白>灰白	6.8, 1.3	+	pm	白, 透明
	17	+	黄白>灰白	4.2	++	pm	白, 透明

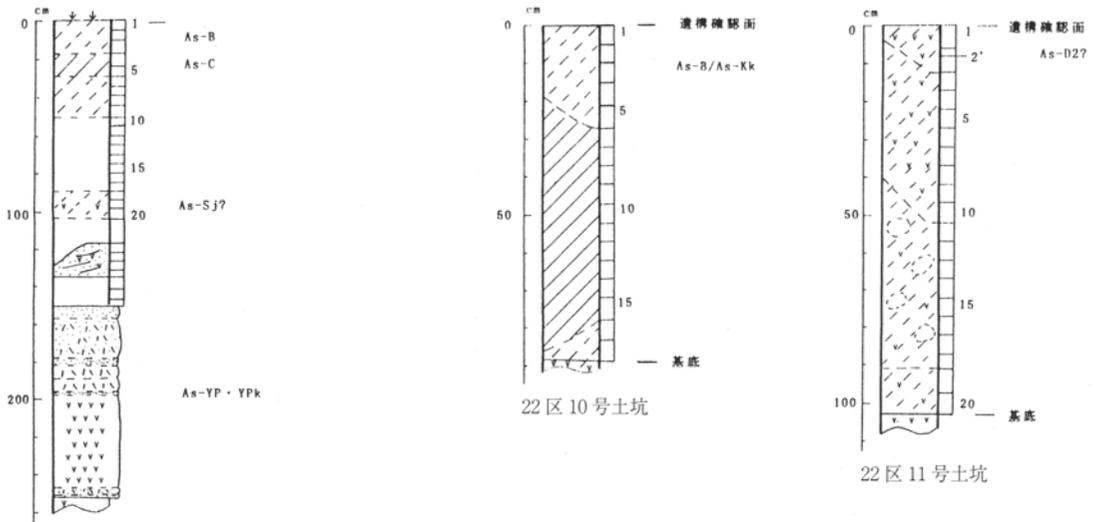
++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm. bw: パブル型, pm: 軽石型.

第1表 テフラ検出分析結果

地点	試料	火山ガラス (n)	組成	斜方輝石 (γ)
第1基本土層断面	18'	1.501-1.504	opx>cpx	1.708-1.711
第1基本土層断面	24	1.501-1.504	opx>cpx	1.708-1.711
22区11号土坑	2'	1.501-1.505	opx>cpx	1.708-1.711

屈折率の測定は、温度一定型測定法（新井，1972，1993）による。opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石。

第2表 屈折率測定結果



数字はテフラ分析の試料番号

図81 第1基本土層、22区10・11号土坑土層柱状図

第5節 まとめ

上郷A遺跡では、幅約15 m、長さ約50 m、面積750 m²の範囲から32基の土坑が検出されている。その形状、平面形、断面形、深さ、底面の逆茂木痕であるピットの存在から、土坑は「陥し穴」であると考えられる。特にⅧ類は、きっちり角張った長方形をしており一見「近世以降のイモ穴」に似ているように見えるが、覆土が古いものであること、土坑の構築された時期の畠が検出されていないことから「古いイモ穴」である可能性も低いこと、掘り込み面から考えると深さも十分であることから「陥し穴」であると判断した。

1. 分類について

32基は、下記のように8種類に分類される。

I類は、底面形楕円形、底面にピットがある。平均規模は、底面長径0.92 m、短径0.58 m、深さ0.59 m、底面積0.43 m²である。

II類は、底面形円形、複数のピットがあり、深い。平均規模は、底面長径0.68 m、短径0.66 m、深さ1.01 m、底面積0.38 m²である。底面規模の大きいものと小さいものに細分できる。

III類は、底面形円形又は楕円形でピットが無く、深い。平均規模は、底面長径0.68 m、短径0.5 m、深さ1.03 m、底面積0.3 m²である。底面規模の大きいものと小さいものに細分できる。

IV類は、底面形楕円形、底面にピットが無い。平均規模は、底面長径0.75 m、短径0.69 m、深さ0.65 m、底面積0.4 m²である。

V類は、底面形隅丸長方形、非常に深い。平均規模は、底面長径1.3 m、短径0.54 m、深さ1.45 m、底面積0.61 m²である。

VI類は、底面形溝状、複数のピットがある。平均規模は、底面長径2.44 m、短径0.2 m、深さ0.85 m、底面積0.59 m²である。

VII類は、底面形溝状、ピットがない。平均規模は、底面長径2.02 m、短径0.17 m、深さ1.1 m、底面積0.3

m²である。

Ⅷ類は、底面形長方形、ピットがない。平均規模は、底面長径1.43 m、短径0.49 m、深さ0.9 m、底面積0.71 m²である。

2. 時期について

【時期を特定できたもの】

Ⅷ類 22区 10号土坑

As-Cより上位で、As-Kkより下位にあるとテフラ分析により判明した。つまり、4世紀初頭から13世紀初頭の間である。さらに軽石が検出された1層は深く底面近くまで及んでおり、軽石降下時にはそれほど埋没していなかったと判断される。

II類 22区 11号土坑

また同じくテフラ分析によりAs-D2より下位であると判明した。つまり、4,000～5,000年前、縄文中期より以前に設置されたものであると分析された。

V類 23区 11号土坑

ほぼ埋まりきった状態の時に窪みにAs-Kkの堆積が確認されている。掘り込み面は、III層の上面である。

VI類 23区 2号土坑

断面1層中にAs-Kk塊の堆積が確認されている。V類 23区 11号土坑よりも埋没していない時点で軽石が降下しているようである。

【切り合いについて】

I類 23区 10号土坑がVI類 23区 2号土坑に切られている。

II類 22区 21号土坑がⅧ類 22区 6号土坑に切られている。

これらの2箇所が確認されたのみである。

【覆土の観察による時期差】

覆土の観察をすると、大きく2つに分けられる。

I・II・III・IV類は、締まった覆土であり、褐色を帯びた土に径1.5 cm明黄褐色軽石や径0.5 cm浅黄橙軽石を混入しているものが多い。主に基本土層

IV・V層が混入している。

I・II・III・IV類の覆土の違いは観察では区別することはできず、同時期に同じように埋没したと考えられる。新旧を判断することができない。II類である22区11号土坑が、As-D2より下位であるとテフラ分析により判明していることから他のものも同じ時期といって差し支えないと考える。

V・VI・VII・VIII類は、覆土の締まりが無くフサフサとしている。黒みを帯びた土にローム塊や軽石が混入しているものが多い。主に基本土層II層が混入している。

II層の中に堆積するAs-Kkの位置を考えると、V類は、ほぼ埋没しきる時点で降灰している。VI類は、As-Kkまたはそれを包含する可能性のある基本土層II層が断面の上位1層に堆積している。VII類も基本土層II層相当の土が同じように上位に堆積している。VIII類は、基本土層II層を混入する1層目がVI・VIIよりも底面に近い位置に堆積している。これらを考え合わせると、古いほうから**V類**、**VI・VII類**、**VIII類**ということになる。

覆土の締まり具合や混入する覆土の種類から、**I・II・III・IV類**が古く、**V・VI・VII・VIII類**が新しい時期に相当すると判断できる。

【上郷A遺跡における陥し穴の編年】

これらを考え合わせると、**I・II・III・IV類**が古く、次いで**V類**、**VI・VII類**、そして最も新しいものが**VIII類**であることがいえる。

具体的には、**I・II・III・IV類**が縄文中期以前の陥し穴、**V類**、**VI・VII類**、**VIII類**は平安時代以前の陥し穴で、特にVIII類はAs-C降灰以降であることがいえる。

3. 分布について

それぞれ類別ごとに第82・83図に分布図を作成した。それらを傾斜や長軸の方向を含めて検証してみると、

【I類】

23区1・10号土坑が位置も近く、傾斜方向に対する傾きを同じく設定してあることから、並べて同時に設置したと考えられる。その他には分布の傾向は見られない。長軸は、傾斜に対しては直交する方向、等高線に対し平行にするものが多い。

【II類】

大きさが小さい22区16号土坑が離れた位置にあり、他4陥し穴は傾斜方向に対し弧状に並んでいる。この列を意識して設置されたと考えられる。22区15号土坑の底面のピットの構造が異なることが気になるが、同時に設置されたものと考ええる。

【III類】

設置場所に偏りはあるが、企画性は判断できない。傾斜に対する傾きも特に共通性がない。

【IV類】

設置場所に偏りはあるが、判断できない。傾斜に対する傾きは判断することができない。

【V類】

設置場所は中央から北東方向に伸びているように見える。設置した間隔が不統一で、同時存在していた可能性は低い。傾斜に対する傾きは、傾斜に対し直交する、等高線に対し平行する傾向が認められる。

【VI類】

2基が傾き同じく平行に設置されていて、2基間隔を延長した線上に陥し穴は存在しないので、2基のみで設置された可能性が高い。傾斜に対し平行、等高線に対し直交する傾向がある。

【VII類】

調査区内では単独である。傾斜に対し直交、等高線に対し平行に設置されている。

【VIII類】

同類の中でも細分類できるようである。各々2基ずつくらの組み合わせになるように思われるが、ここでは確実性がないので細分は避けた。たとえば23区3・4・6号土坑は列を成しているように見えるが、3・4号は断面・底面の状況が良く似ていても6号土坑は同じとはいえない、というように全体

で列を成すというような規則性は認められない。傾斜に対する傾きもばらつきがあり傾向は認められない。

4. 最後に

本遺跡では、バラエティーに富む陥し穴が検出された。古い段階では、円形や楕円形のものが多く、時代が新しくなると溝状や長方形のものが出現してくるということが分かった。また、列を成して並ぶものは少なく、単独もしくは2基ずつ設置されていた可能性が高いようである。

しかし、調査面積があまりにも限られているため分布について断定することは避けたい。今後の調査に期待したい。

また、底面のピットの調査について、ほとんどの土坑がAs-YPk軽石まで掘削されており、底面ピットにとっては残存しにくい環境にあったため詳細に調査することができなかった。今後の調査に当たっては、スライス調査にさらに工夫を加えていかなければならないと考える。

参考文献

- ・『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 1973
- ・今村啓爾「陥穴（おとし穴）」縄文時代の研究 2
- ・花畑遺跡 八ッ場ダム発掘調査集成（1）2002 群埋文
- ・『十二原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- ・菊池実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題—大原(監)遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から—」研究紀要 4 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- ・『大原(監)遺跡・村主遺跡』群埋文 1986
- ・『下触牛伏遺跡』群埋文 1986
- ・『飯土井中央遺跡』群埋文 1991
- ・『飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡』群埋文 1991
- ・『登谷遺跡』栃木県埋蔵文化財調査事業団

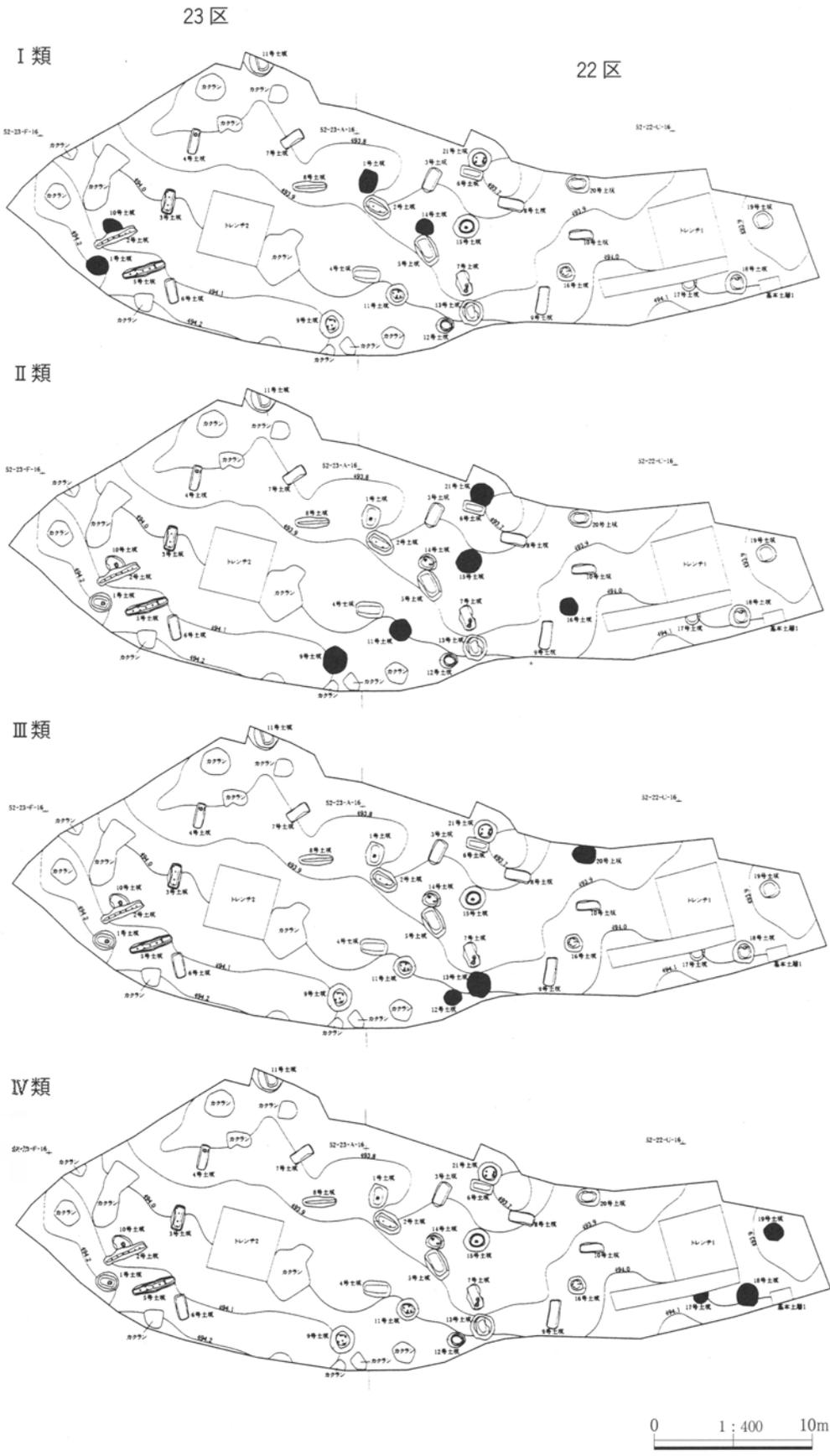


図82 I・II・III・IV類土坑分布図

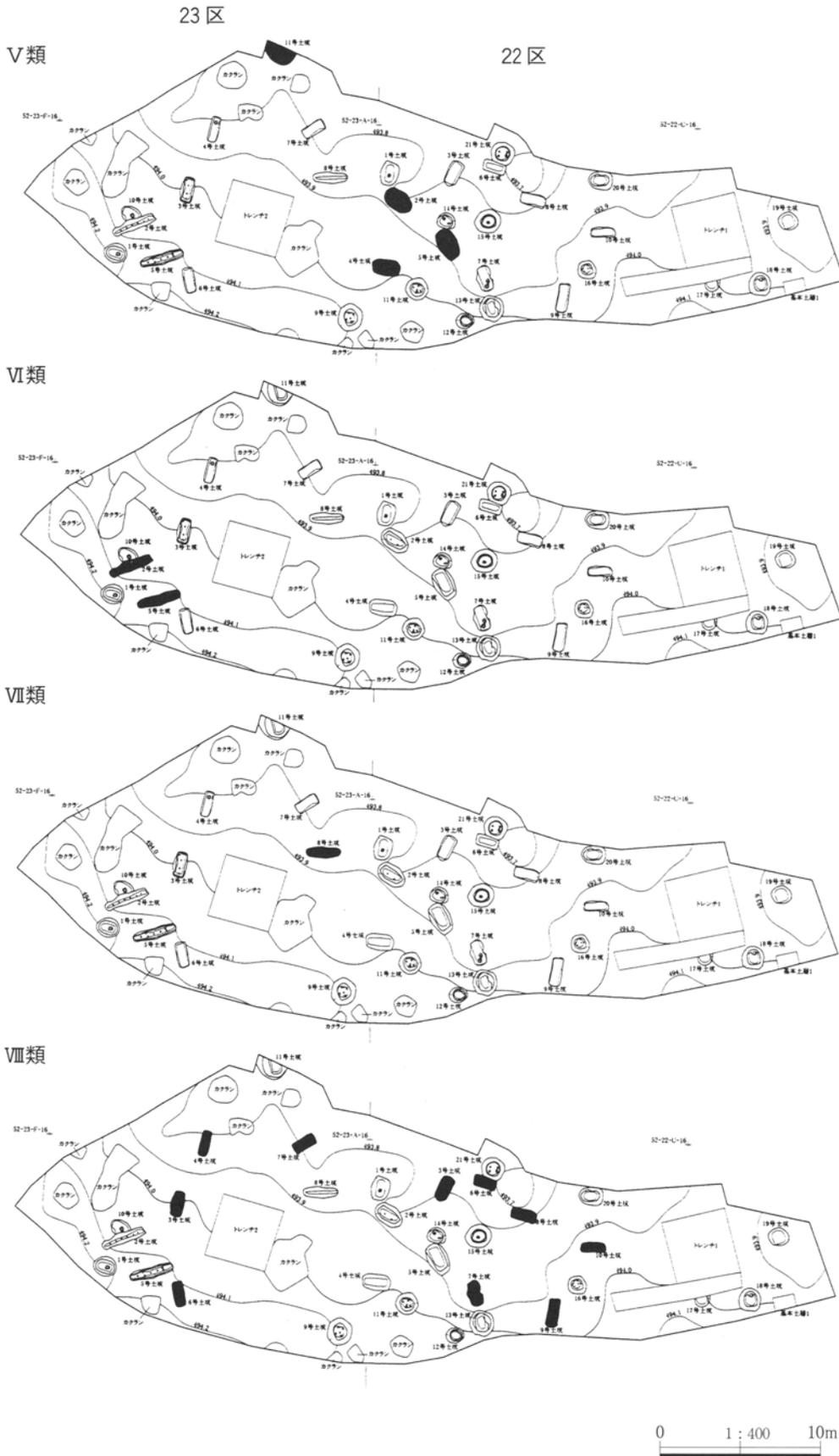


図 83 V・VI・VII・VIII類土坑分布図

写 真 图 版



1. 遺跡遠景 (東から)



2. 遺跡遠景 (北東から)

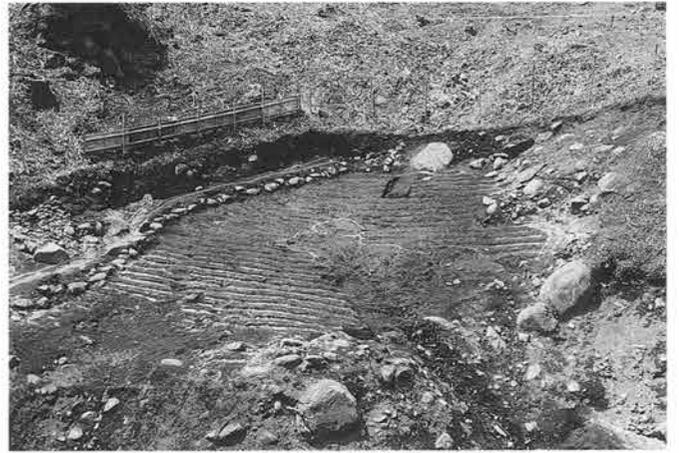
PL2 久々戸遺跡



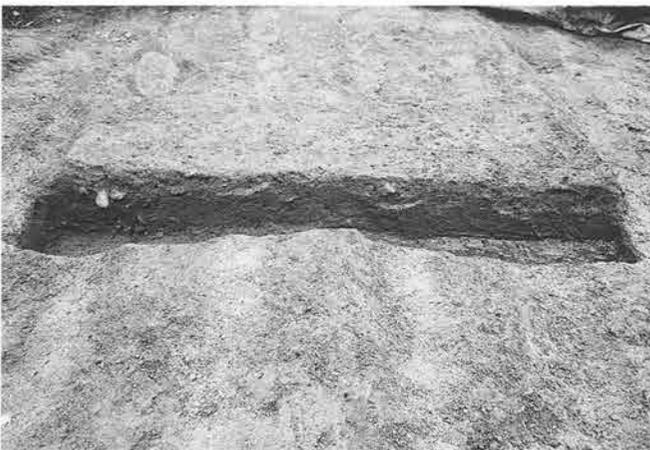
1. IXA区全景 (垂直)



2. IXA区南半全景 (東から)



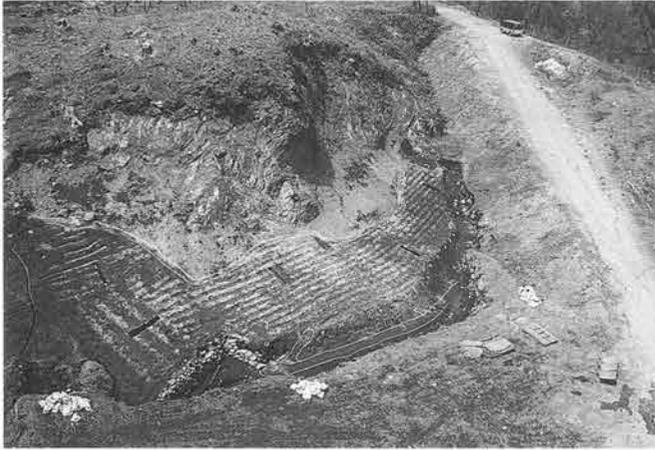
3. IXA区K19号畑全景 (東から)



4. IXA区K19号畑畝断面 a-a' (南から)



5. IXA区K19-1号円形平坦面 (東から)



1. IX A区北半全景 (東から)



2. IX A区K21号畑全景 (東から)



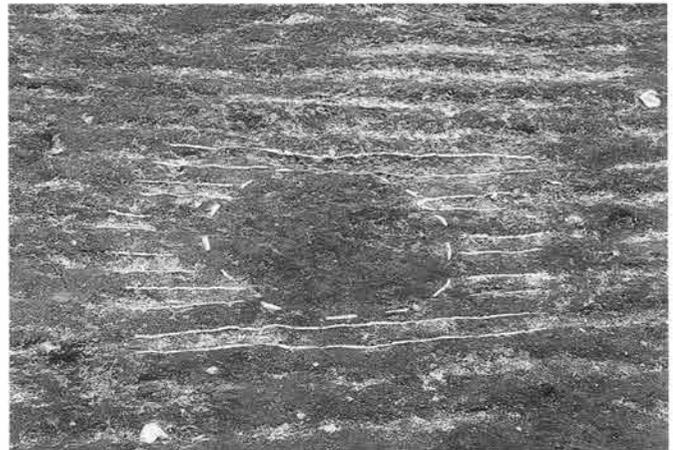
3. IX A区K22号畑全景 (東から)



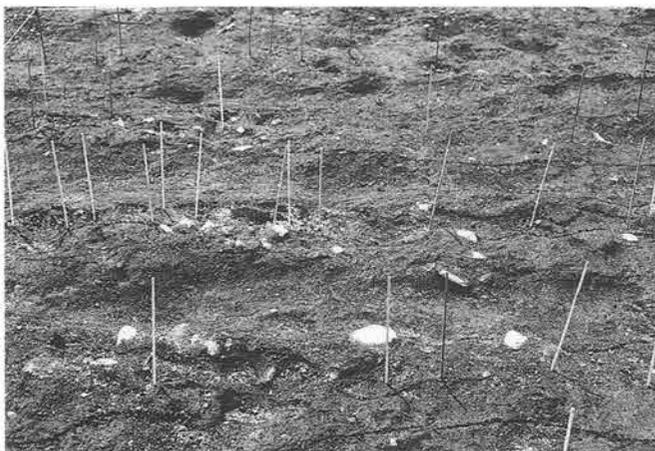
4. IX A区K23号畑全景 (東から)



5. IX A区K23-1号円形平坦面 (北東から)



6. IX A区K23-2号円形平坦面 (北東から)



7. IX A区K23号畑作物痕検出状況 (北東から)



8. IX A区K23号畑作物痕断面近接 (南西から)

PL 4 久々戸遺跡



1. IXA区K23号畑遺物出土状況(北から)



2. IXA区K23号畑獣骨出土状況(北西から)



3. IXB区全景(南から)



4. IXB区K24号畑全景(南から)



5. IXB区K24号畑畝断面 a-a'(南から)



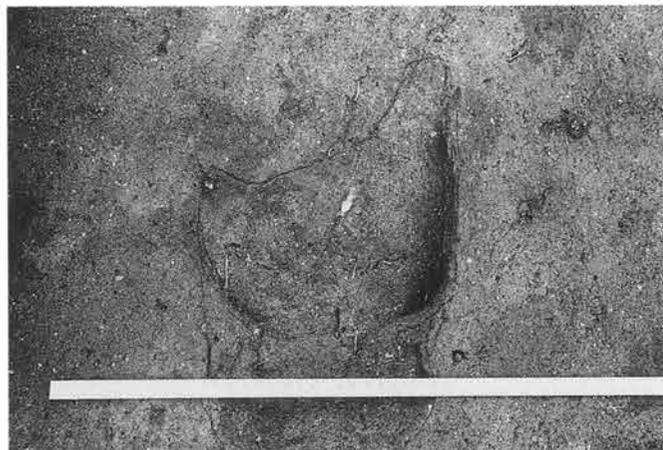
6. IXB区K25号畑全景(南から)



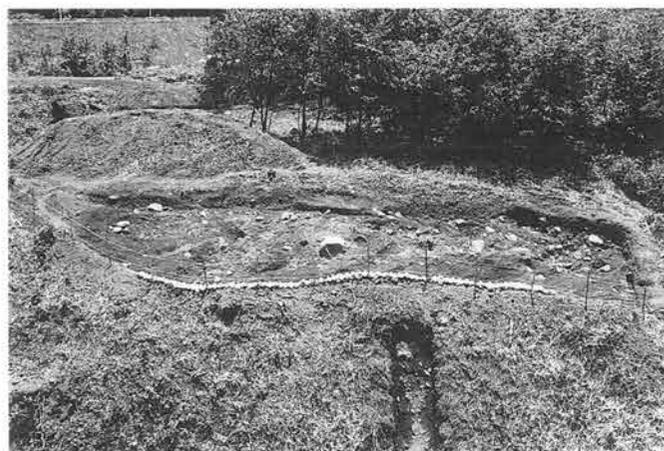
7. IXB区K25号畑畝断面 a-a'(東から)



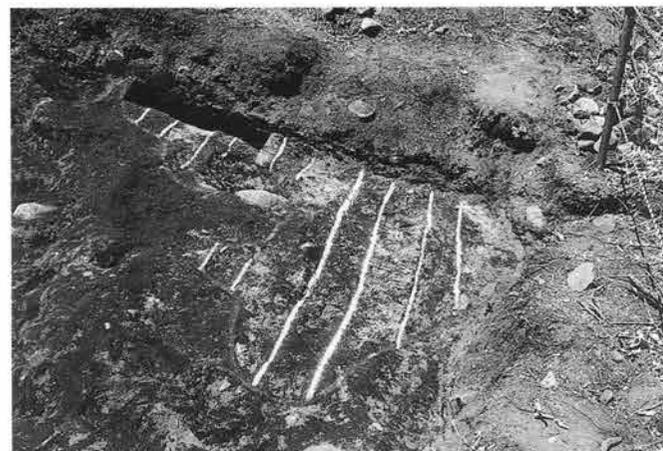
1. IX B区 K25号畑耕具痕検出状況 (南から)



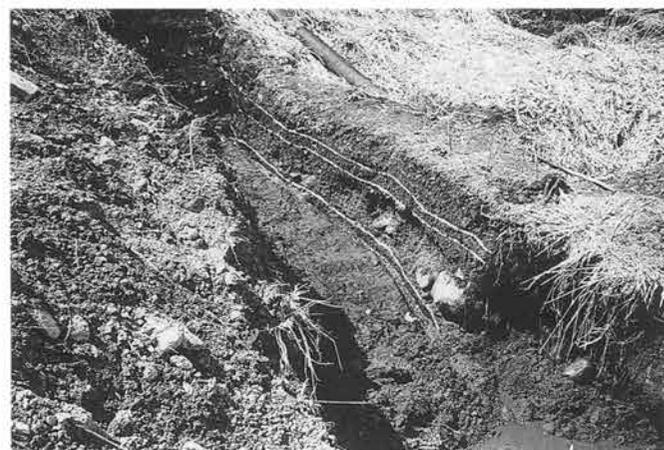
2. IX B区 K25号畑耕具痕近接 (南から)



3. IX C区全景 (北から)



4. IX C区 K26号畑全景 (南東から)



5. 1号トレンチ K27号畑断面 (東から)



6. 1号トレンチ K27号畑断面近接 (東から)



7. 盛土下畑断面 (北東から)

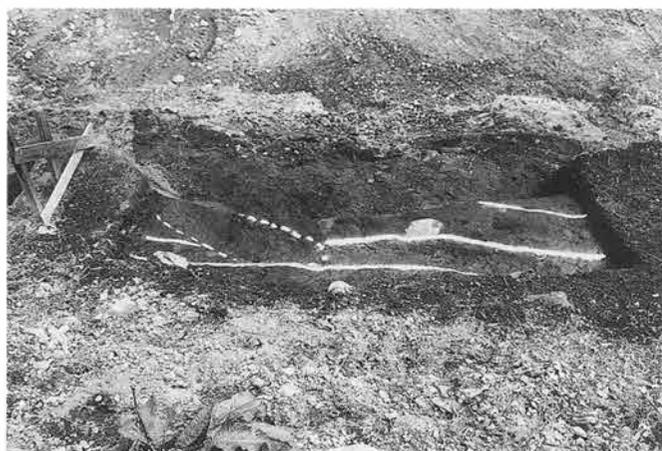


8. 盛土下 K28号畑全景 (北西から)

PL6 久々戸遺跡



1. 盛土下K28号畑全景（北西から）



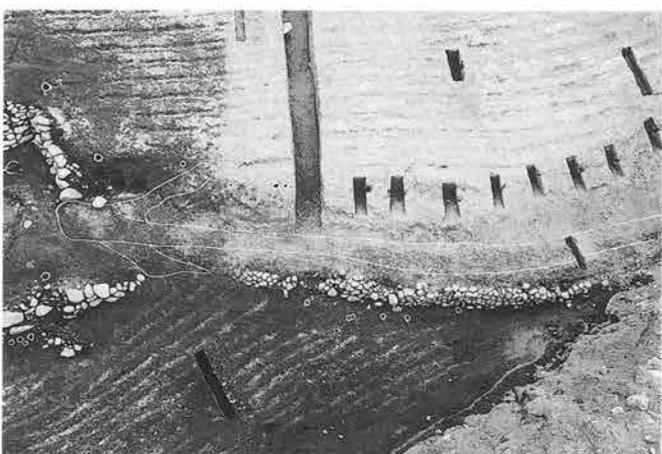
2. 盛土下K29号畑全景（南西から）



3. IXA区1号道全景（北東から）



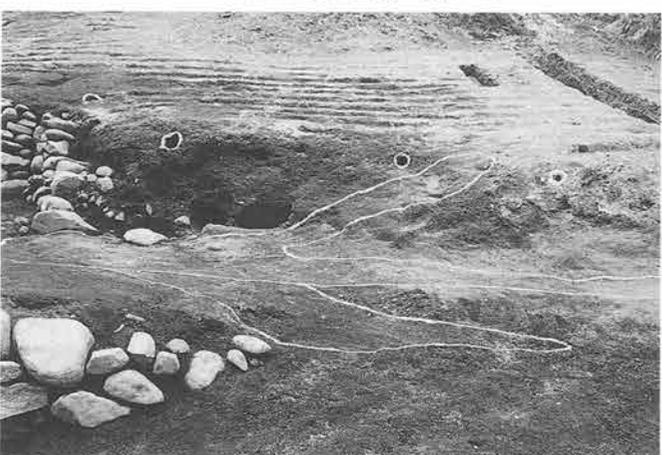
4. IXA区1号道全景（北東から）



5. IXA区3号道全景（東から）



6. IXA区3号道全景（北から）



7. IXA区3号道分岐点（東から）



8. IXB区4号道全景（東から）



1. IX A区 28号ヤックラ全景 (南東から)



2. IX A区 29号ヤックラ全景 (南東から)



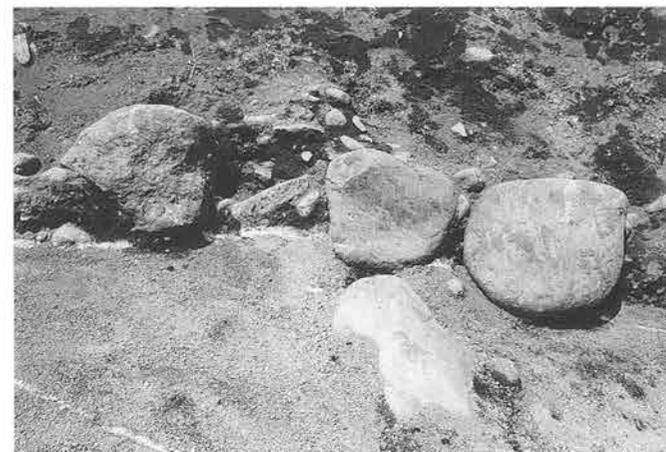
3. IX A区 30号ヤックラ全景 (北から)



4. IX A区 31号ヤックラ全景 (北から)



5. IX A区 31号ヤックラ根石全景 (北東から)



6. IX A区 32号ヤックラ全景 (東から)



7. IX A区 1号掘立柱建物断面A (柱穴2) (南東から)



8. IX A区 1号掘立柱建物断面B (南東から)



1. IX A区2号掘立柱建物全景（北東から）



2. IX A区2号掘立柱建物柱穴1全景（北東から）



3. IX A区2号掘立柱建物柱穴2全景（南東から）



4. IX A区2号掘立柱建物柱穴2断面（東から）



5. IX A区2号掘立柱建物柱穴6断面（南東から）



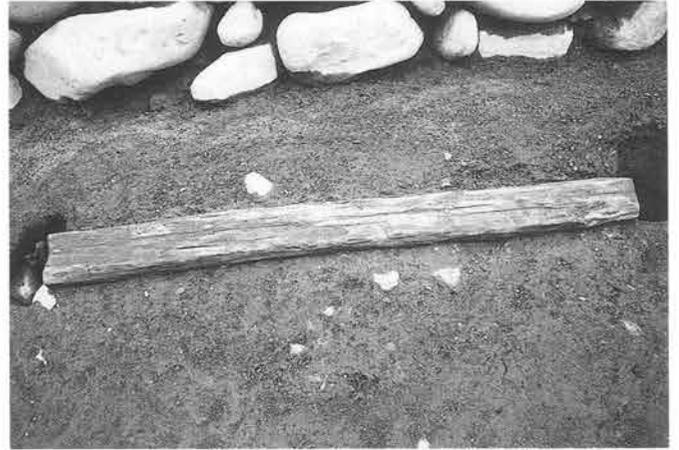
1. IX A区2号掘立柱建物焼土炭化物範囲（南西から）



2. IX A区2号掘立柱建物焼土範囲（南西から）



3. IX A区2号掘立柱建物 - 1 出土状況（北東から）



4. IX A区2号掘立柱建物 - 2 出土状況（東から）



5. IX A区2号掘立柱建物 - 3 出土状況（南西から）



6. IX A区2号掘立柱建物 - 4 出土状況（北東から）



7. IX A区2号掘立柱建物 - 5 出土状況（北東から）

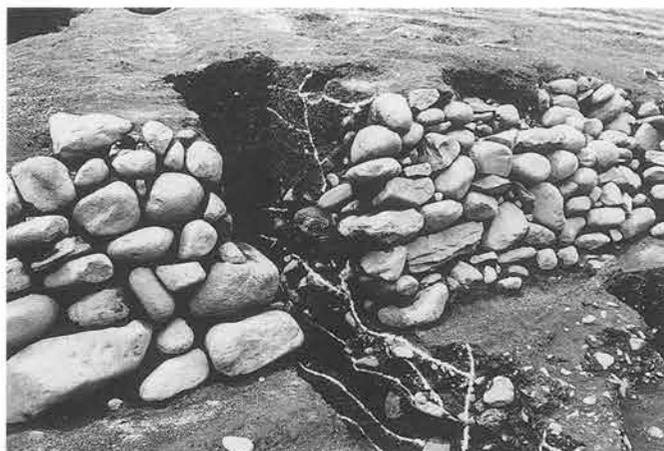


8. IX A区2号掘立柱建物 - 6 出土状況（北東から）

PL10 久々戸遺跡



1. IXA区5号石垣全景（北東から）



2. IXA区5号石垣断面（東から）



3. IXA区6号石垣全景（北東から）



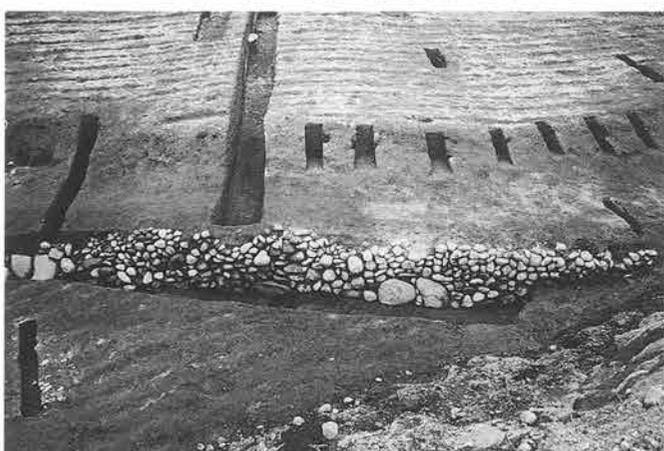
4. IXA区6号石垣全景（北東から）



5. IXA区6号石垣断面（東から）



6. IXA区7号石垣その1全景（東から）



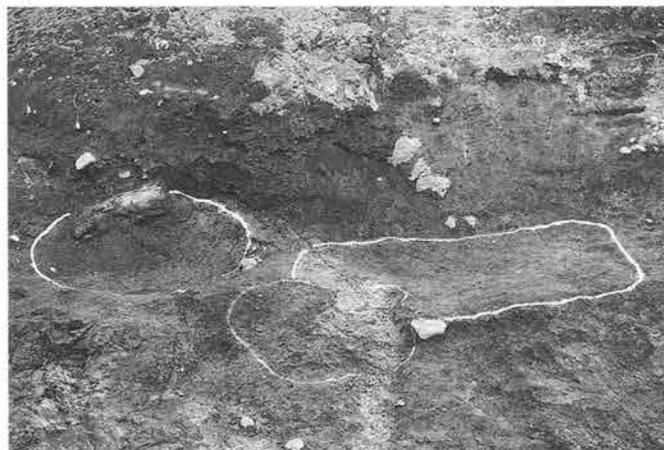
7. IXA区7号石垣その2全景（東から）



8. IXA区7号石垣その2南端部（北東から）



1. IX A区7号石垣断面 (南東から)



2. IX A区1・2号遺構全景 (北東から)



3. IX A区境木43全景 (北東から)



4. IX A区境木43断面 (北西から)



5. IX A区境木46検出状況 (南から)



6. IX A区境木46断面 (南東から)



7. IX B区泥流中の石による攪乱1全景 (西から)



8. IX B区泥流中の石による攪乱2全景 (南から)

PL12 久々戸遺跡



1. IX A区泥流堆積状況（南から）



2. IX区泥流中の石（北から）



3. IX B区1号自然流路全景（南から）



4. IX B区1号自然流路全景（南東から）



5. IX B区10～14号トレンチ全景（南から）



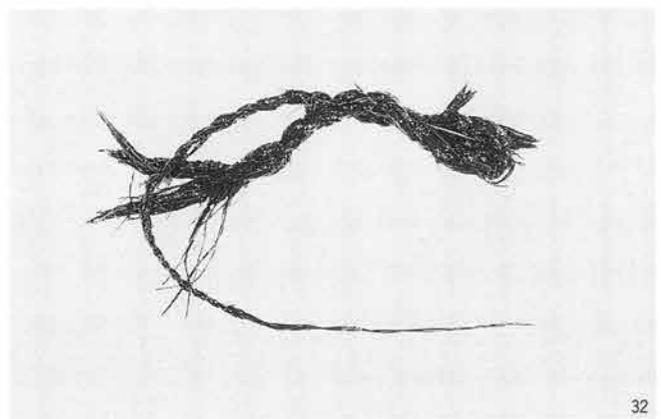
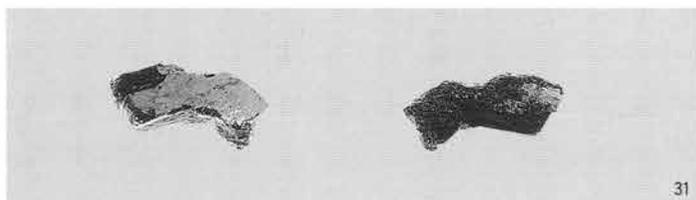
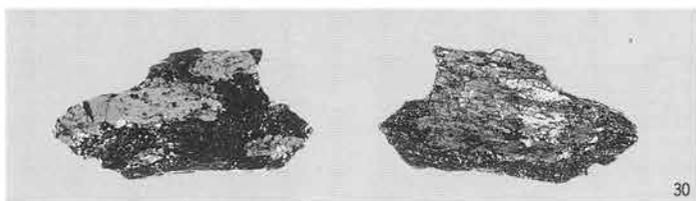
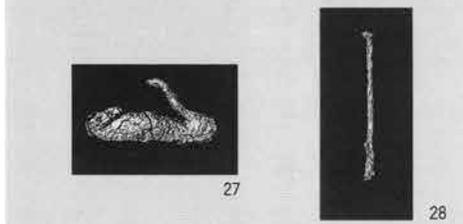
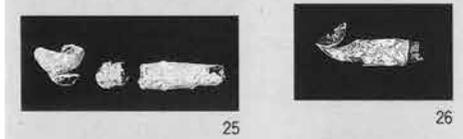
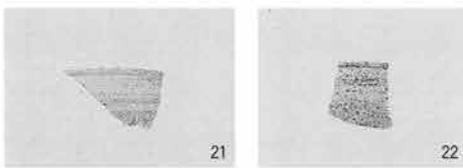
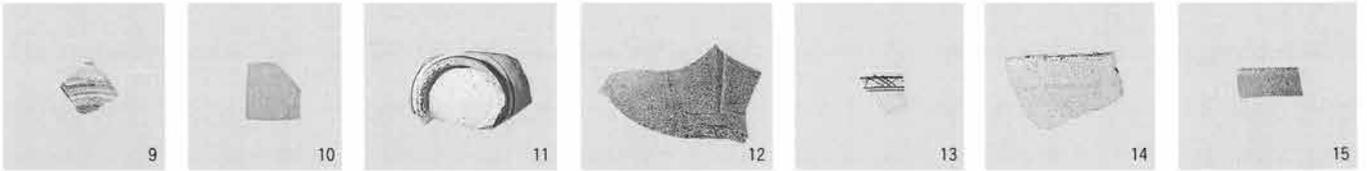
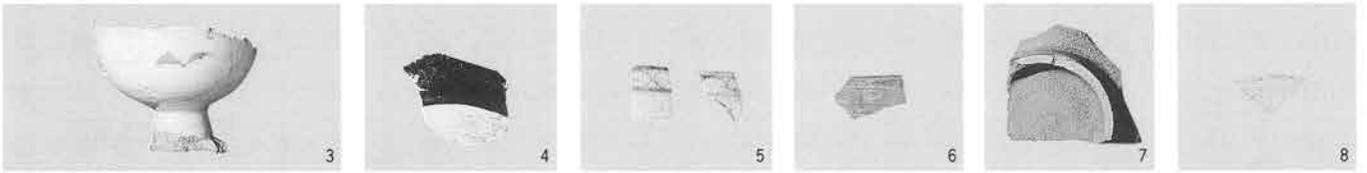
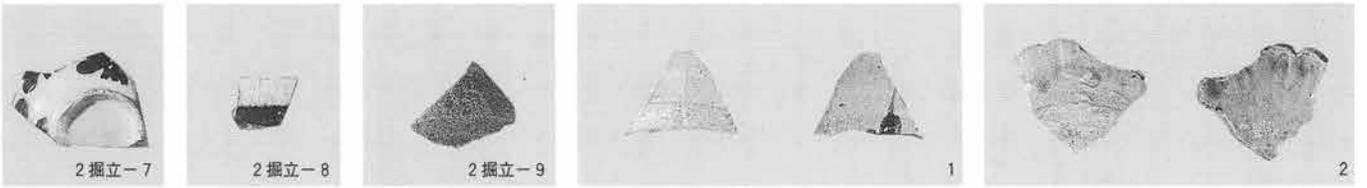
6. IX B区表土掘削風景（東から）



7. IX A区K19号畑調査風景（東から）



8. 調査後の工事風景（南東から）





2 掘立一柱 1



2 掘立一柱 2



2 掘立一柱 6



2 掘立一柱 2



2 掘立一柱 4



2 掘立一柱 6



2 掘立一柱 9



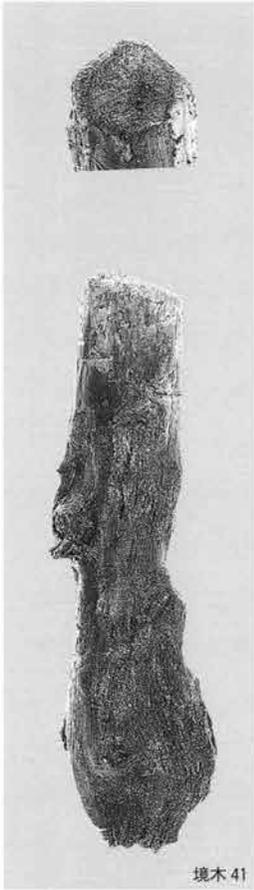
2 掘立一柱 3



2 掘立一柱 5



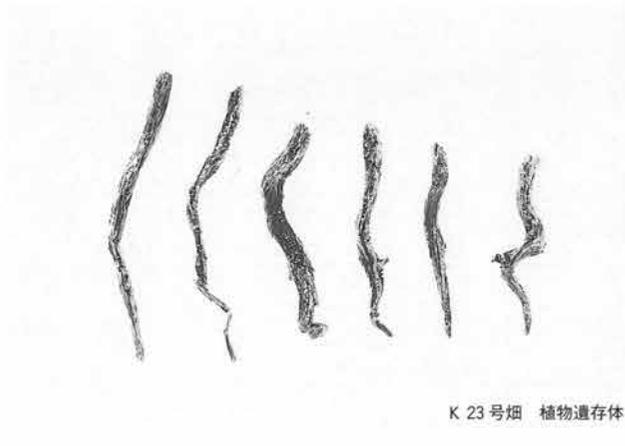
2 掘立一柱 8



境木 41



境木 43



K 23 号畑 植物遺存体



境木 44 根圧痕



境木 45 根圧痕



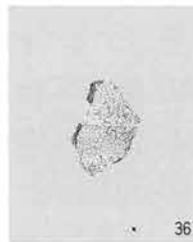
現生麻の根



34



35



36



37



38



39



40



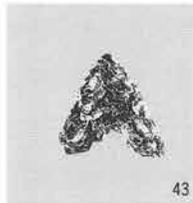
41



33



42



43



46



44



45



49



47

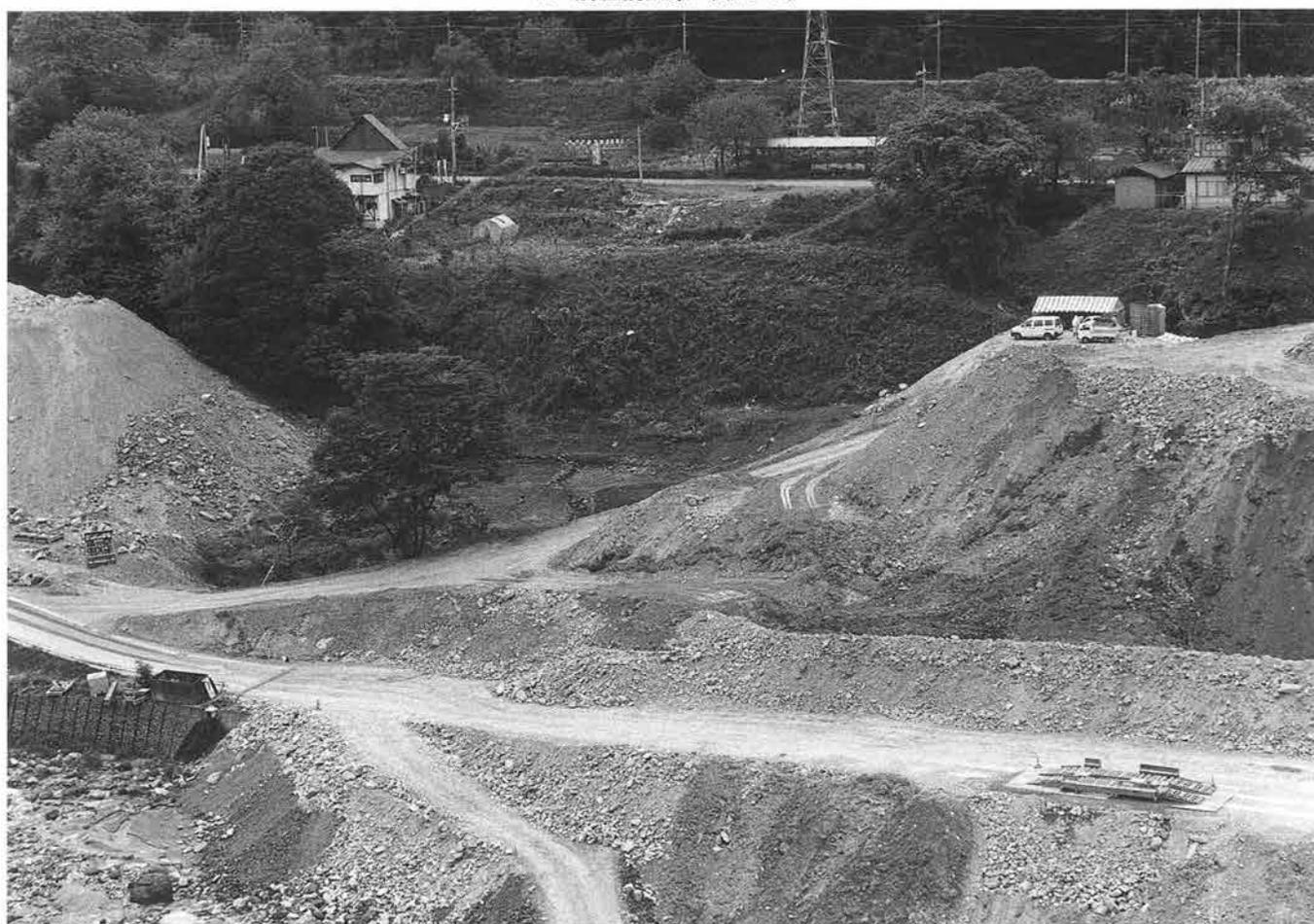


48

PL16 中棚Ⅱ遺跡



1. 調査前風景（東から）



2. 調査区遠景（吾妻川対岸から）

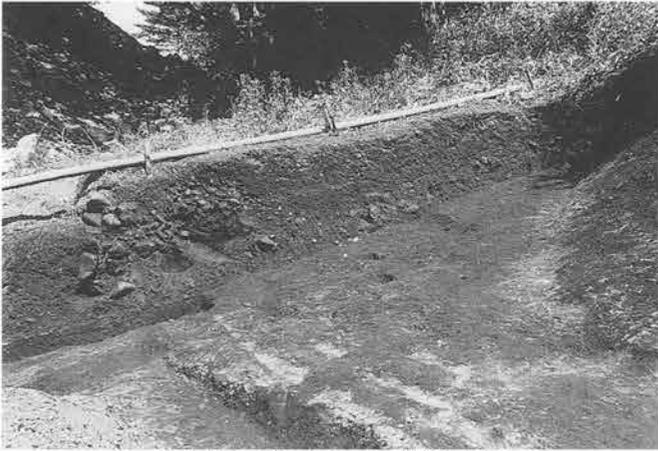


1. N26・39 畑全景 (東から)



2. N26・39 畑全景 軽石除去後 (西から)

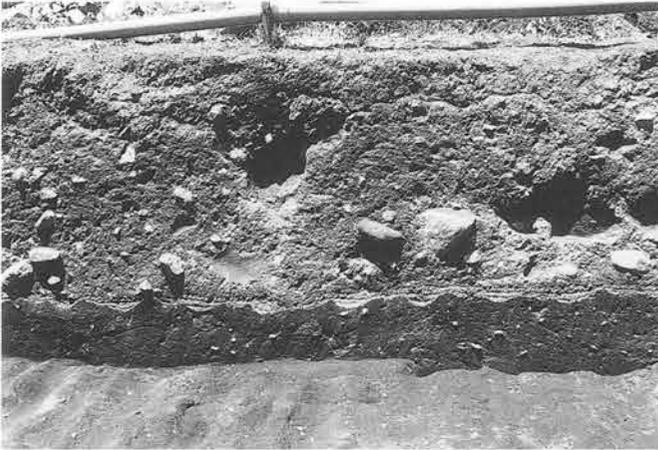
PL18 中棚Ⅱ遺跡



1. N26 畑西壁セクション北側（東から）



2. N26 畑西壁セクション南側（北東から）



3. N26 畑西壁セクション近景（東から）



4. N26 畑南端部崩落状況（南から）



5. N26 畑南端部崩落状況（東から）



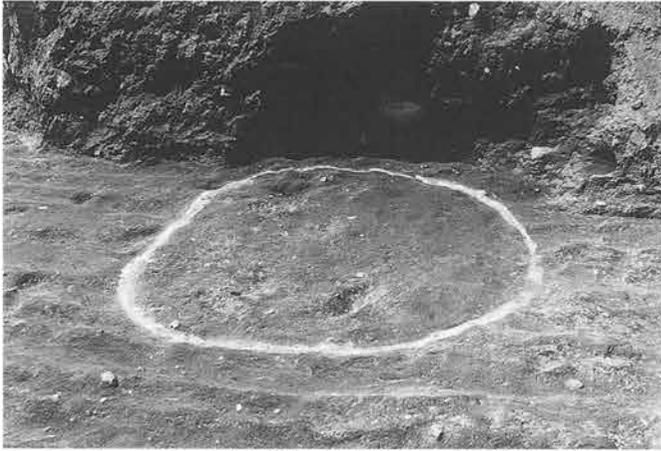
6. N26 畑南端崩落部セクション 近撮



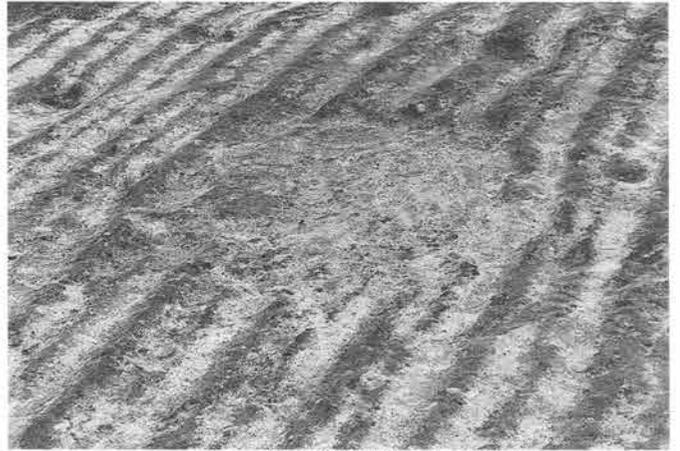
7. N26-15 円形平坦面（西から）



8. N26-17 円形平坦面（南から）



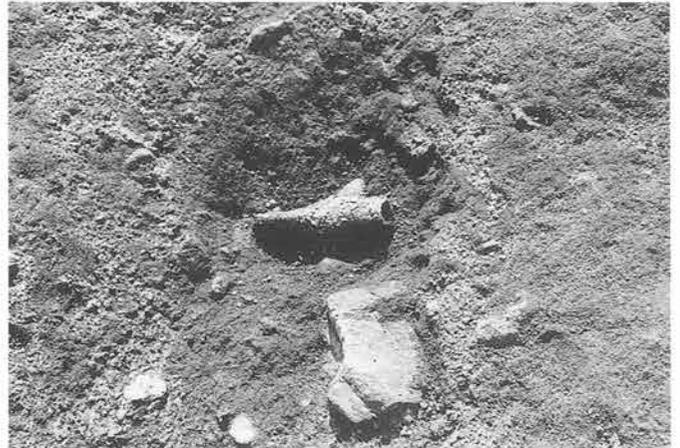
1. N26-17 円形平坦面軽石除去後（南から）



2. N26-18 円形平坦面（東から）



3. N26-16 畑北側延長部（南から）

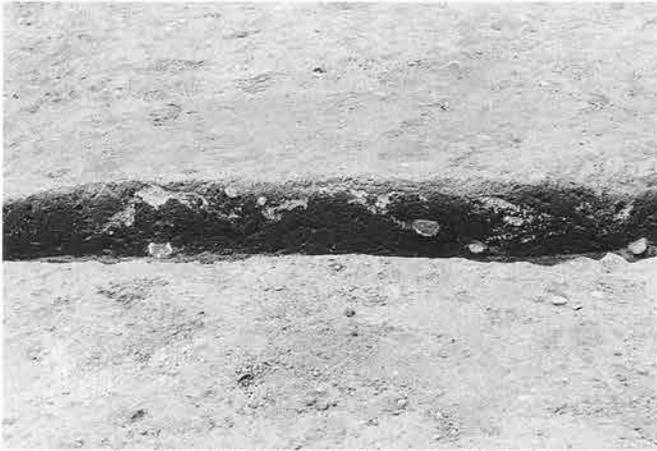


4. N26 畑遺物出土状況



5. N39 畑全景（西から）

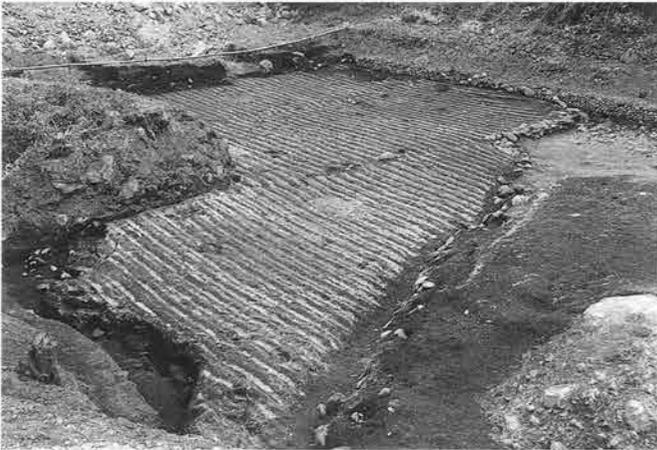
PL20 中棚Ⅱ遺跡



1. N39 畑断ち割りセクション (南から)



2. N39 畑軽石集積部分セクション (北から)



3. N 26-18 畑および10号道 (南から)



4. 10号道セクション (南から)



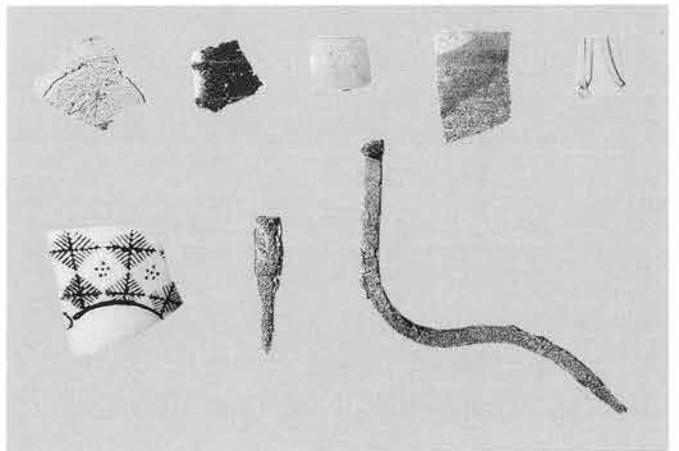
5. N40・41 畑全景 (東から)



6. N40・41 畑全景 (南から)



7. 70号ヤックラ断ち割りセクション (南から)



8. 出土遺物



1. 調査区全景 (南上空から)



2. 調査区東半部 (南上空から)

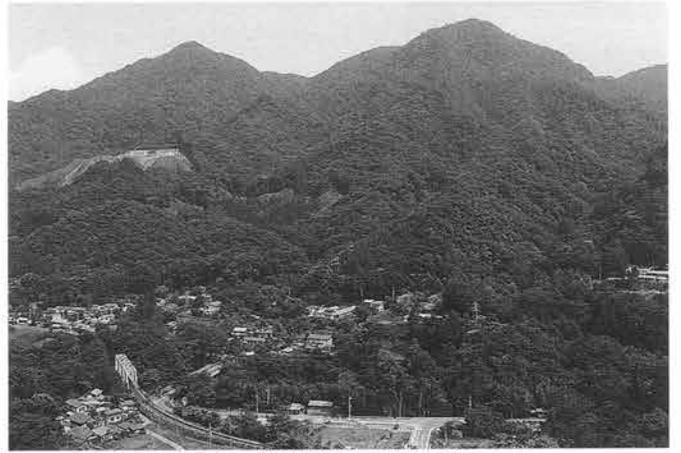
PL22 西ノ上遺跡



1. 調査区西半部（南上空から）



2. 調査区全景（西上空から）



3. 遺跡遠景（北から）



4. 遺跡遠景（北東から）



5. 畑検出作業風景（南西から）



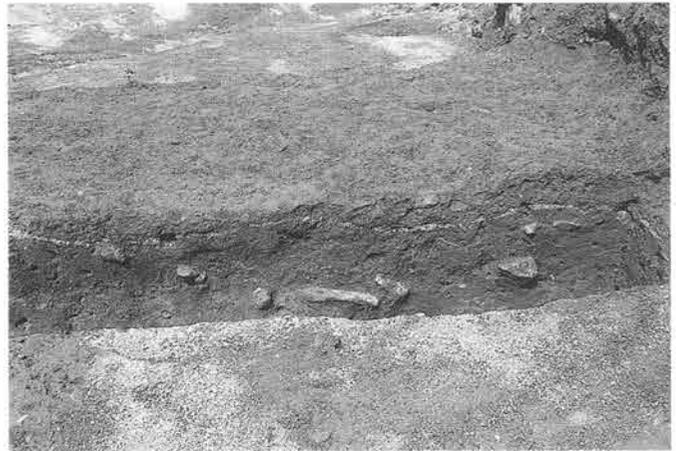
1. 1号畑全景 (西から)



2. 2号畑全景 (北から)



3. 3号畑全景 (北から)



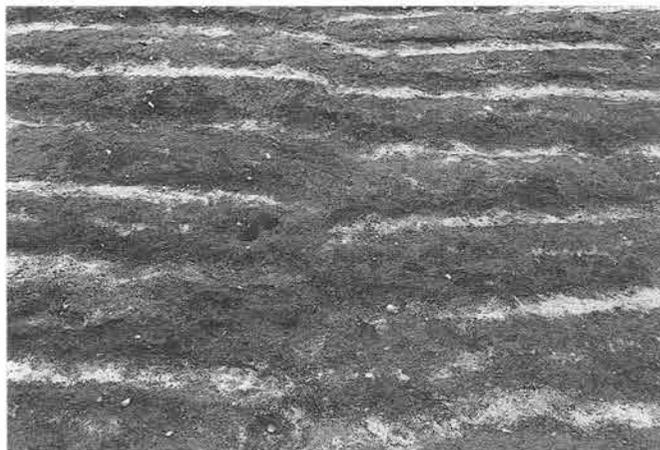
4. 3号畑断面F (西から)



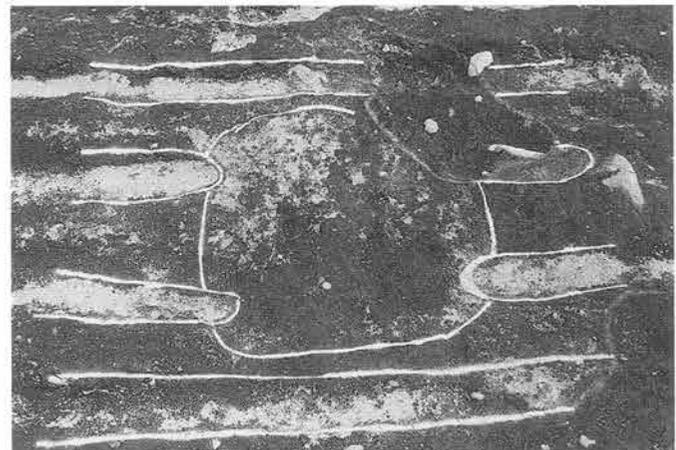
5. 3号畑、3号道、4号畑検出状況 (西から)



6. 4、5、6号畑全景 (東から)



7. 4号畑と5号畑の境界 (北から)



8. 4号畑1号円形平坦面全景 (北から)

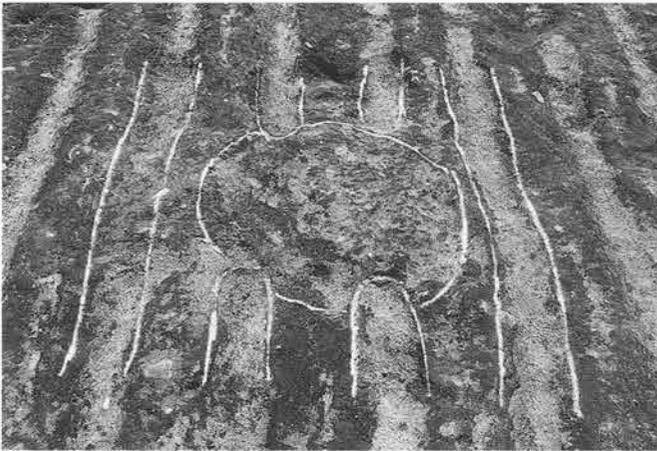
PL24 西ノ上遺跡



1. 5-1号畑ウネサク近撮 (西から)



2. 5-1号畑軽石除去後の耕作具痕跡 (東から)



3. 5号畑1号円形平坦面全景 (東から)



4. 5-1号畑断面J (西から)



5. 5号畑2号円形平坦面 (東から)



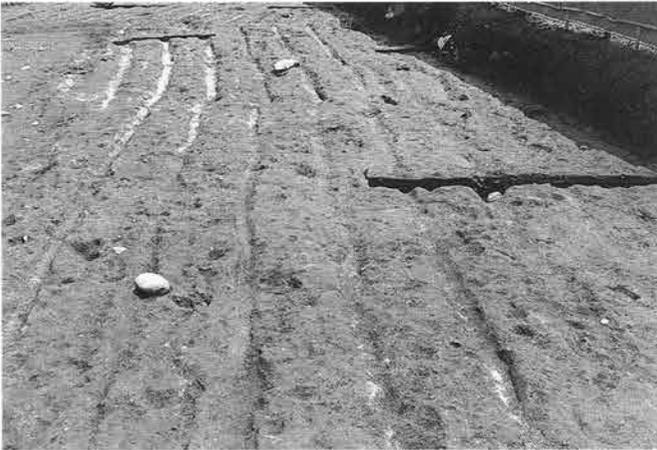
6. 5-2号畑と5-4号畑の境界 (東から)



7. 5-3号畑全景 (西から)



8. 5-1号畑北側トレンチ (南から)



1. 6号畑全景 (西から)



2. 6号畑と7号畑の境界 (西から)



3. 7-1号畑ウネサク近撮 (西から)



4. 7号畑と8号畑の境界 (北から)



5. 7号畑ウネ中の火山灰 (西から)



6. 8-1号畑と8-2号畑の境界 (西から)



7. 8号畑断面O (西から)

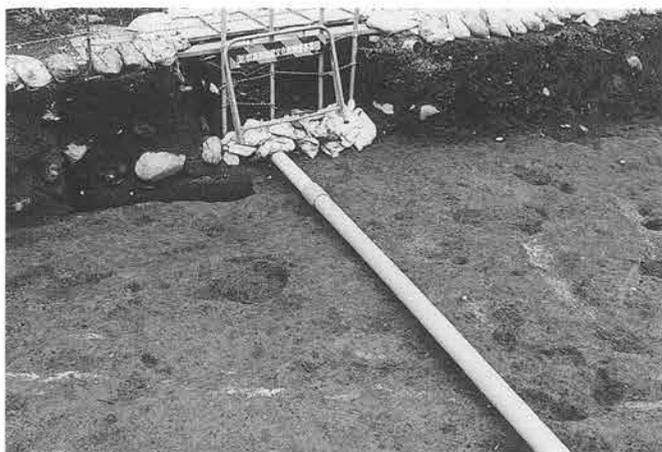


8. 8号畑と9号畑の境界 (西から)

PL26 西ノ上遺跡



1. 9号畑全景（西から）



2. 10-1号畑全景（南から）



3. 10-2号畑全景（西から）



4. 10号畑と11号畑の境界（北から）



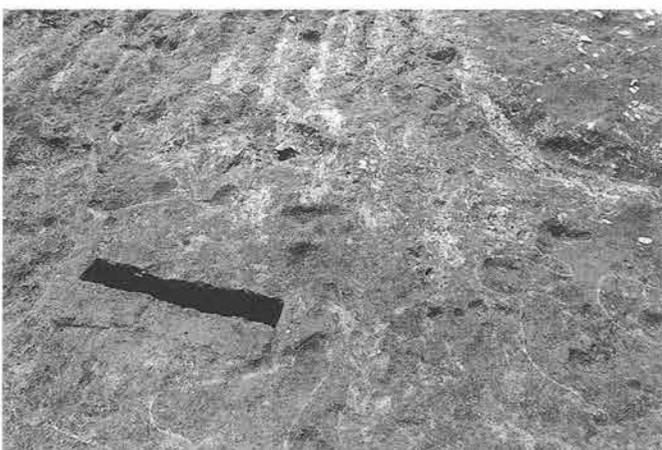
5. 11、12号畑全景（東から）



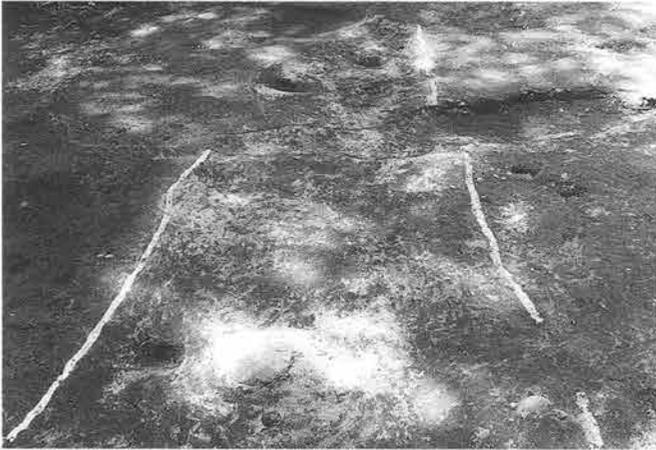
6. 11号畑全景（西から）



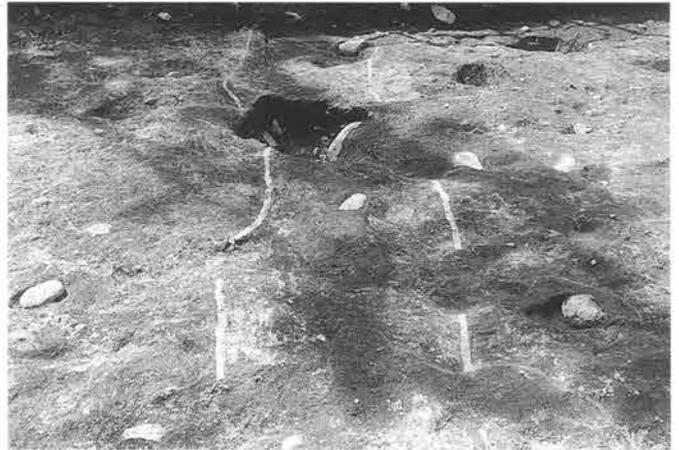
7. 11号畑北側の非耕作部（東から）



8. 12号畑全景（東から）



1. 1号道全景 (南から)



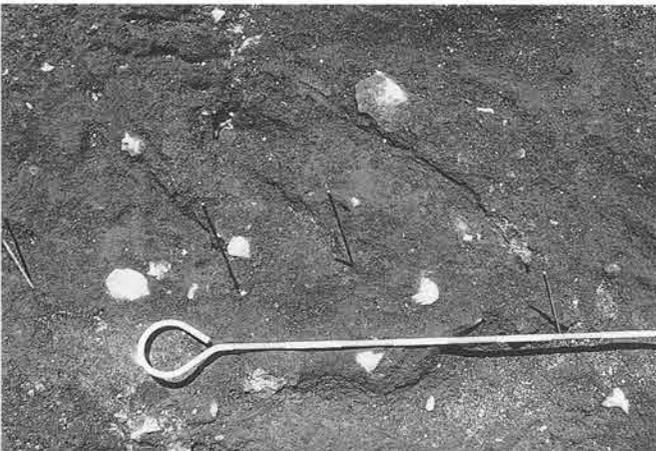
2. 2号道全景 (南から)



3. 3号道全景 (北から)



4. 3号道近撮 (北から)



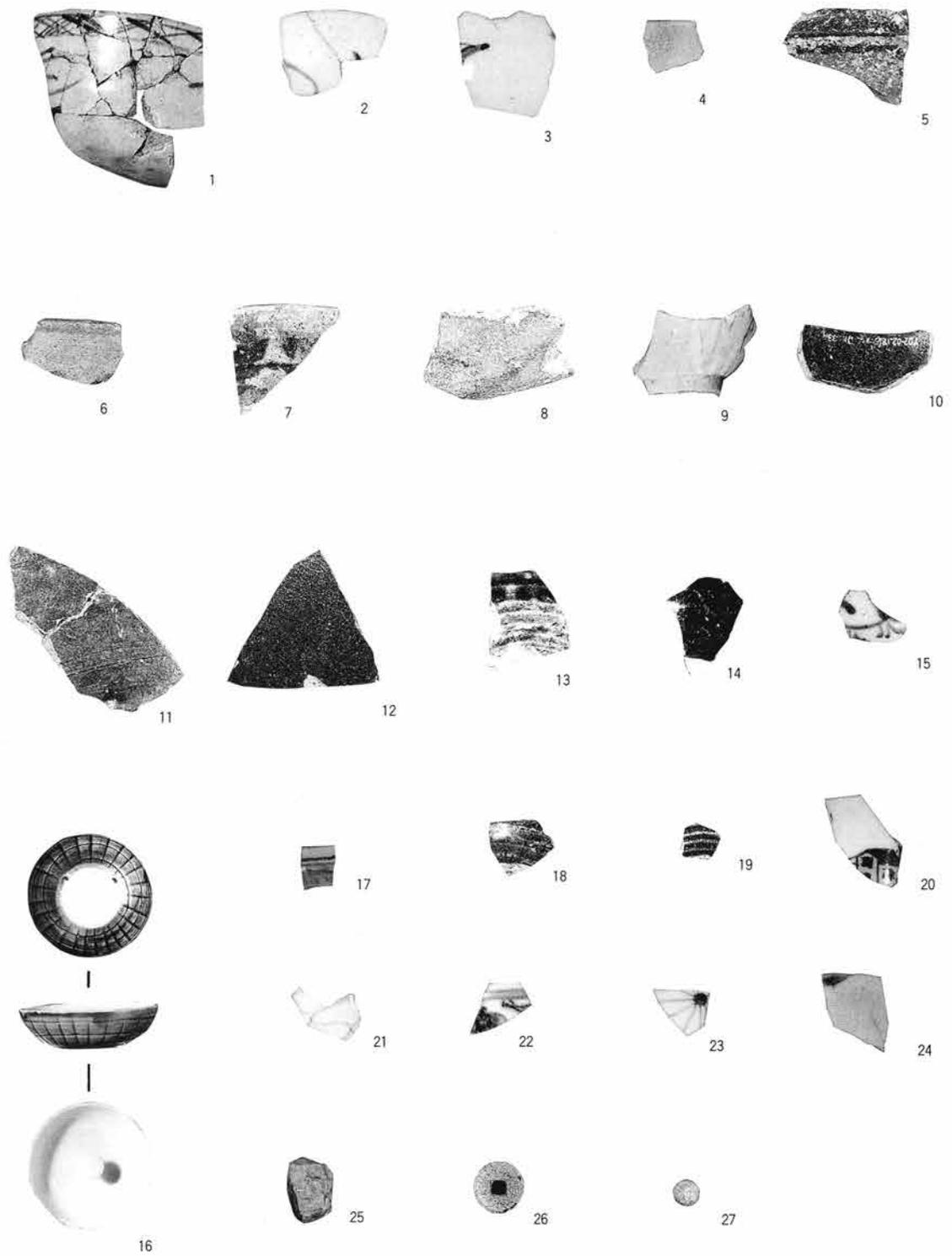
5. 植物痕跡近撮 (西から)



6. 植物痕跡近撮 (北から)

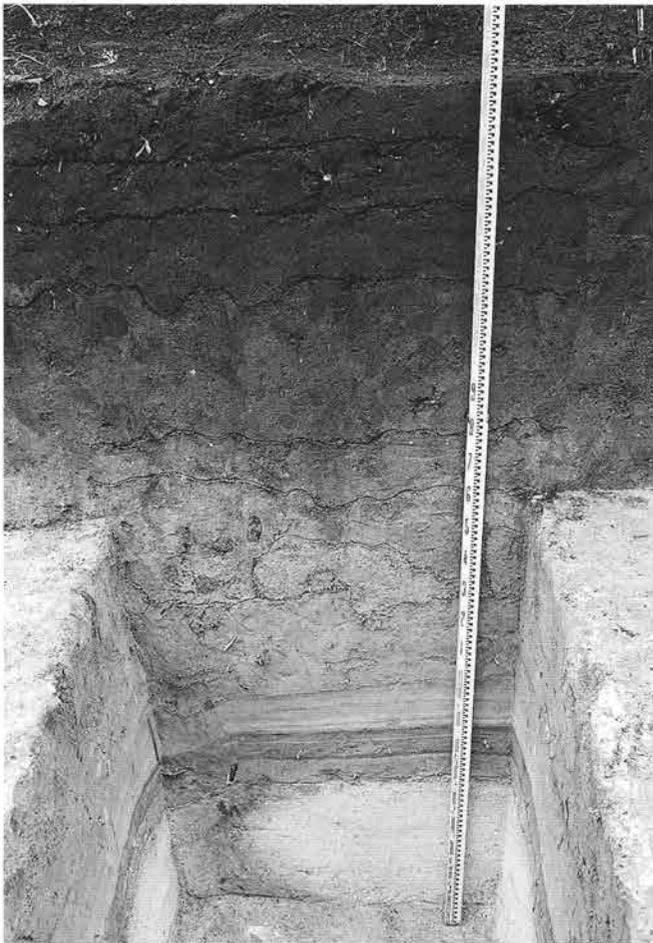


7. 追加調査区全景 (西から)





1. 調査区全景 (西から)



2. 基本土層1 (北から)



3. トレンチ1 (南から)

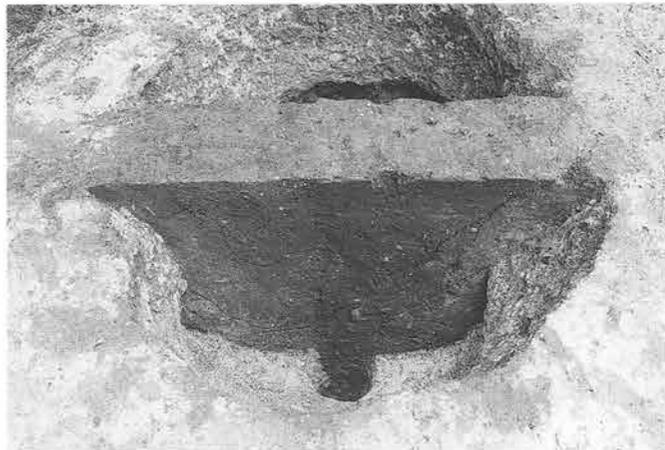


4. トレンチ2 (南から)

PL30 上郷A遺跡



1. 23区1号土坑 (南から)



2. 23区1号土坑セクション (東から)



3. 23区10号土坑 (北東から)



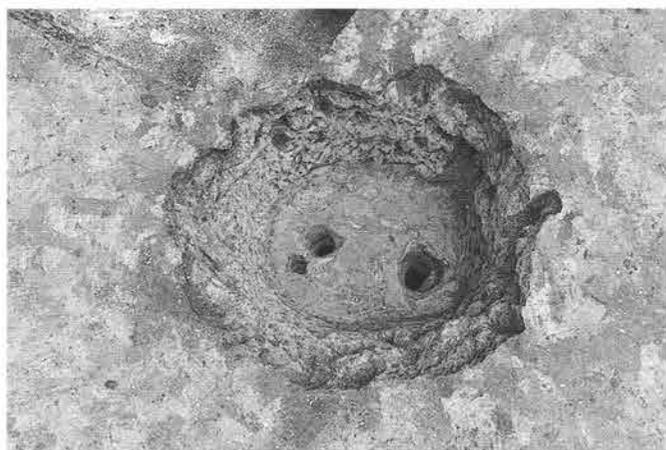
4. 23区10号土坑セクション (南東から)



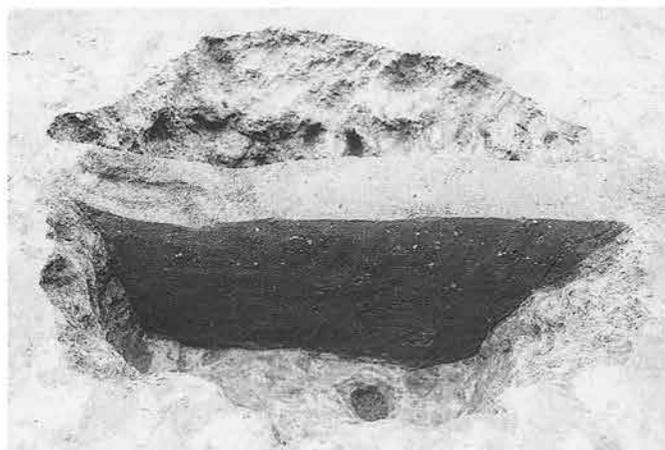
5. 22区1号土坑 (西から)



6. 22区1号土坑セクション (南から)



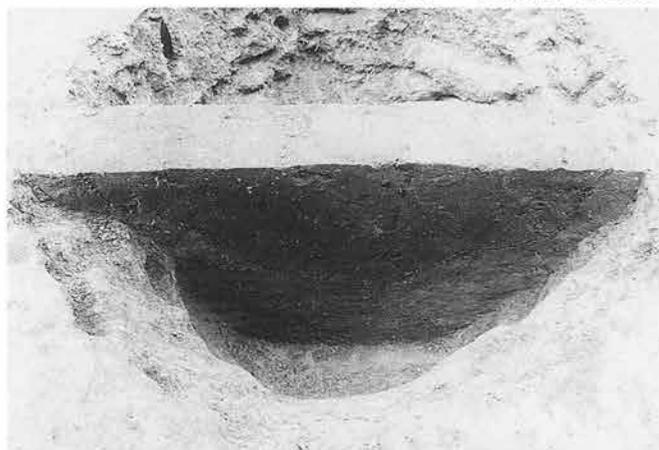
7. 22区14号土坑 (北東から)



8. 22区14号土坑セクション (南から)



1. 22区15号土坑(南から)



2. 22区15号土坑セクション(南から)



3. 22区11号土坑(南から)



4. 22区11号土坑セクション(北西から)



5. 23区9号土坑(南から)



6. 23区9号土坑セクション(東から)



7. 22区21号土坑(西から)

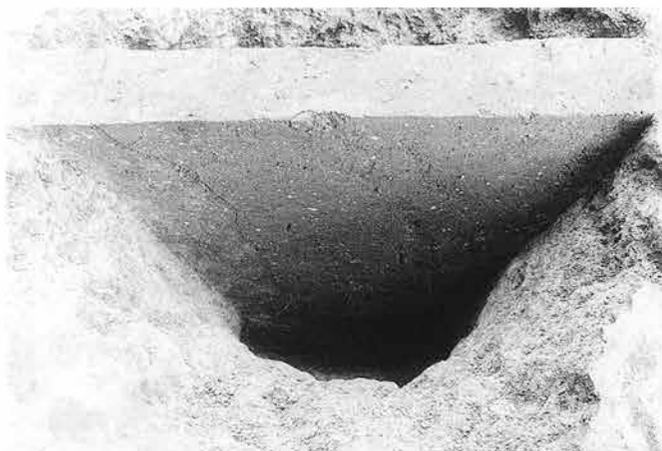


8. 22区21号土坑セクション(南から)

PL32 上郷A遺跡



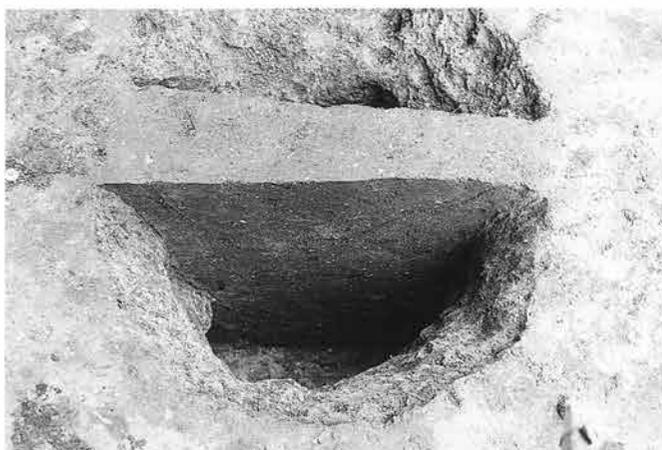
1. 22区16号土坑(南から)



2. 22区16号土坑セクション(南東から)



3. 22区12号土坑(南から)



4. 22区12号土坑セクション(東から)



5. 22区13号土坑(東から)



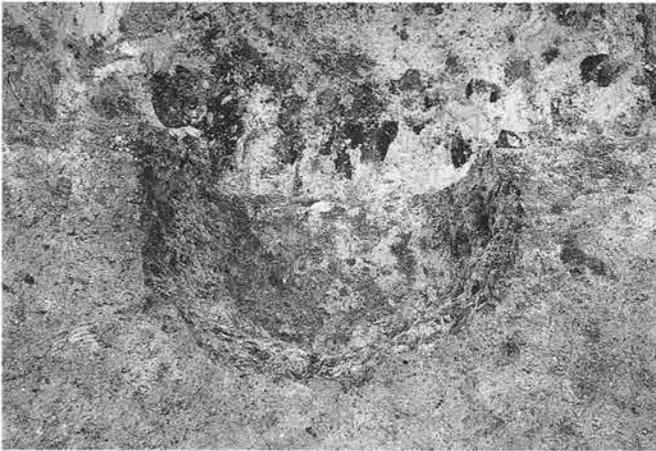
6. 22区13号土坑セクション(北西から)



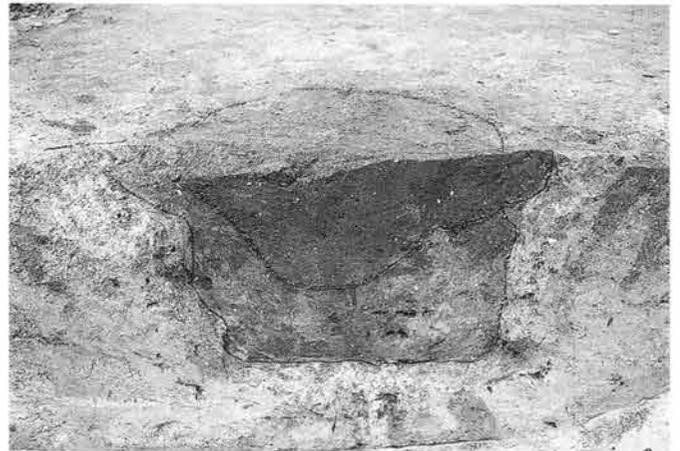
7. 22区20号土坑(南から)



8. 22区20号土坑セクション(西から)



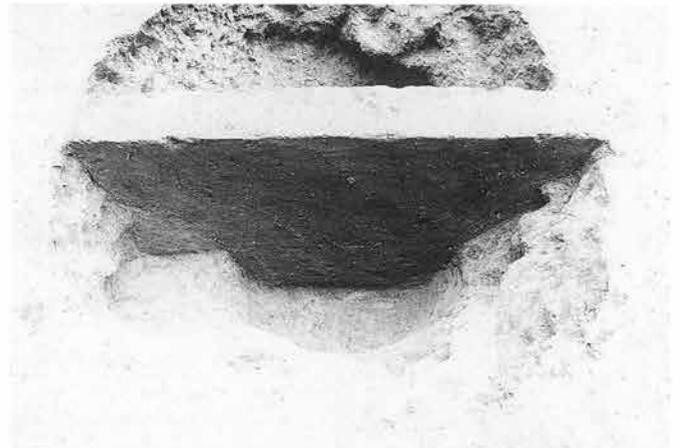
1. 22区17号土坑(南から)



2. 22区17号土坑セクション(北から)



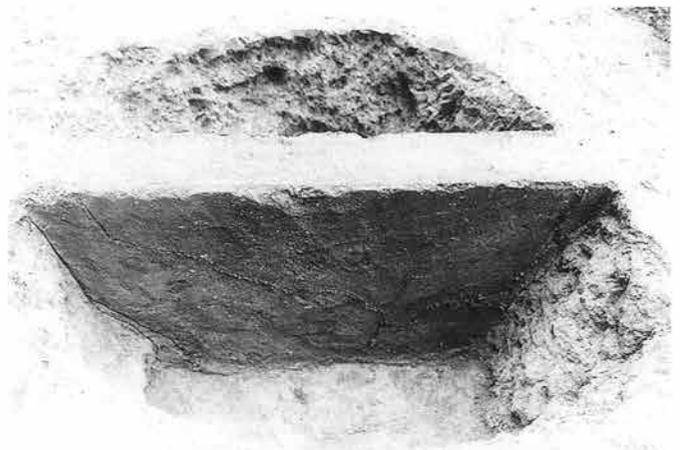
3. 22区18号土坑(南から)



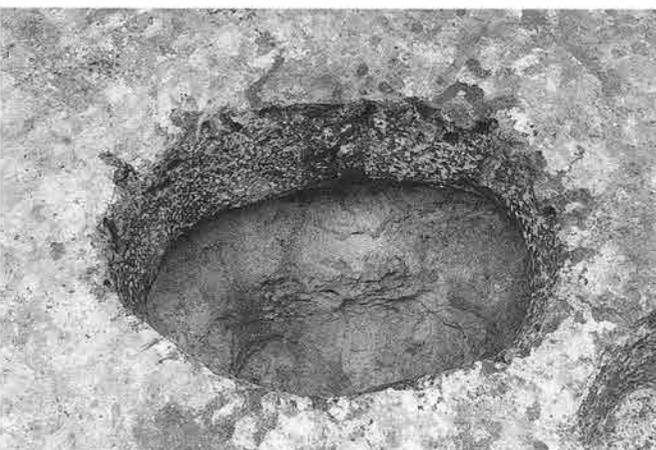
4. 22区18号土坑セクション(南から)



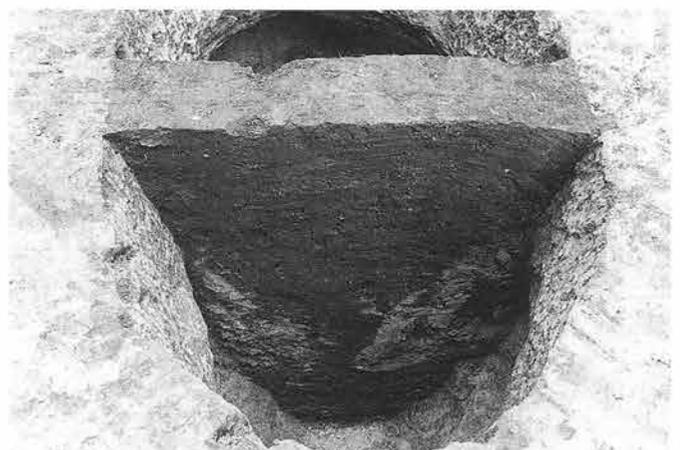
5. 22区19号土坑(南から)



6. 22区19号土坑セクション(南から)



7. 22区2号土坑(北東から)



8. 22区2号土坑セクション(南東から)

PL34 上郷A遺跡



1. 23区11号土坑 (南から)



2. 23区11号土坑セクション (南西から)



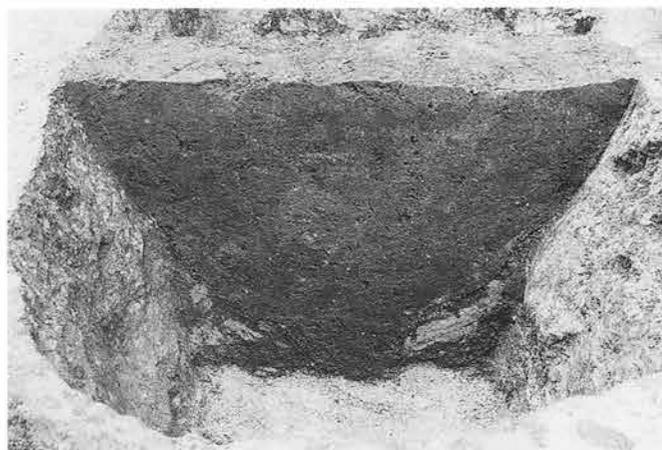
3. 22区4号土坑 (南から)



4. 22区4号土坑セクション (西から)



5. 22区5号土坑 (西から)



6. 22区5号土坑セクション (北西から)



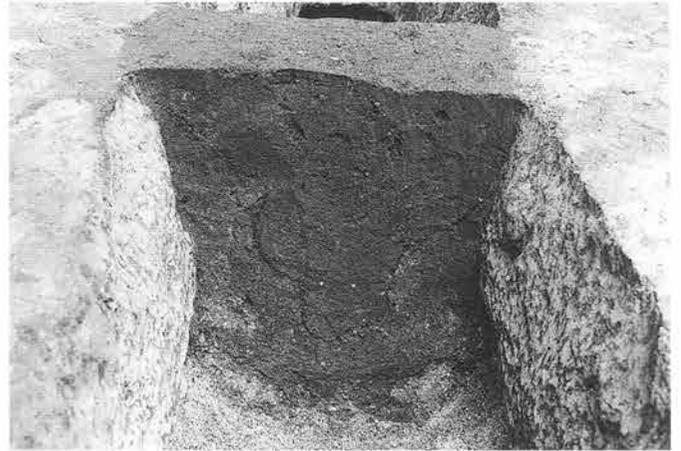
7. 23区2号土坑 (北西から)



8. 23区2号土坑セクション (北東から)



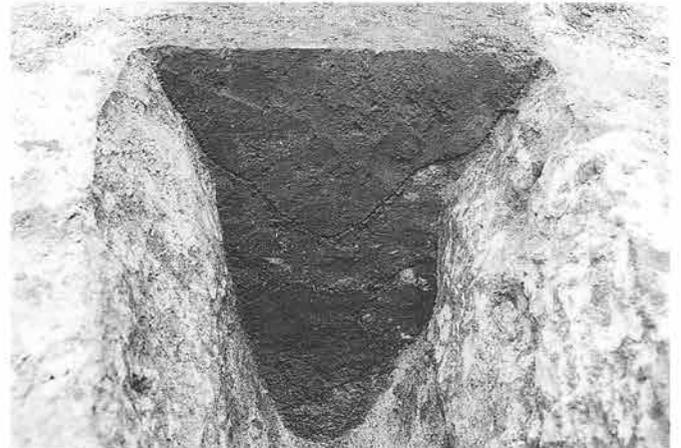
1. 23区5号土坑 (北西から)



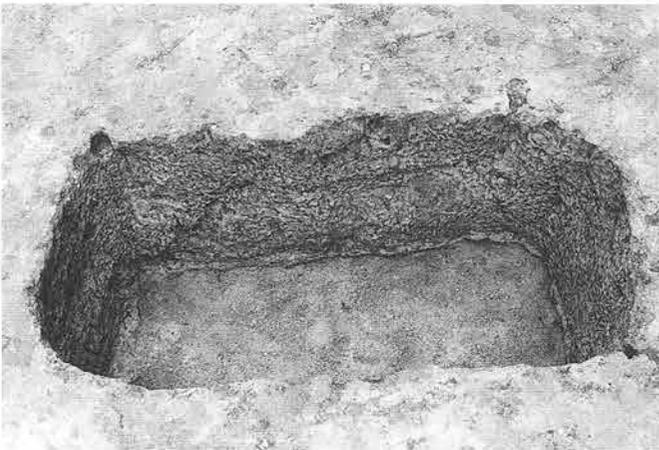
2. 23区5号土坑セクション (北東から)



3. 23区8号土坑 (南から)



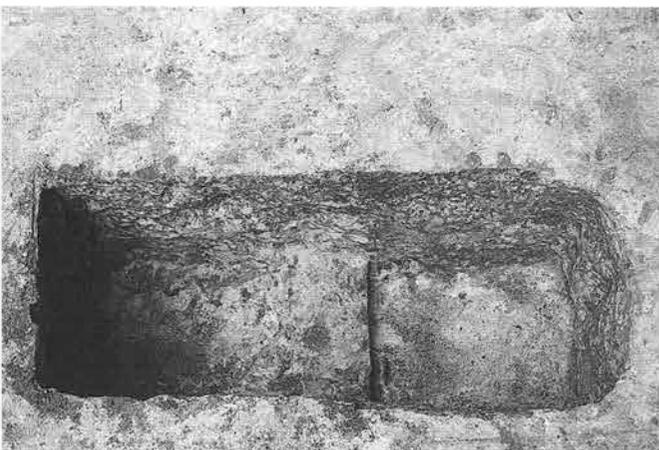
4. 23区8号土坑セクション (西から)



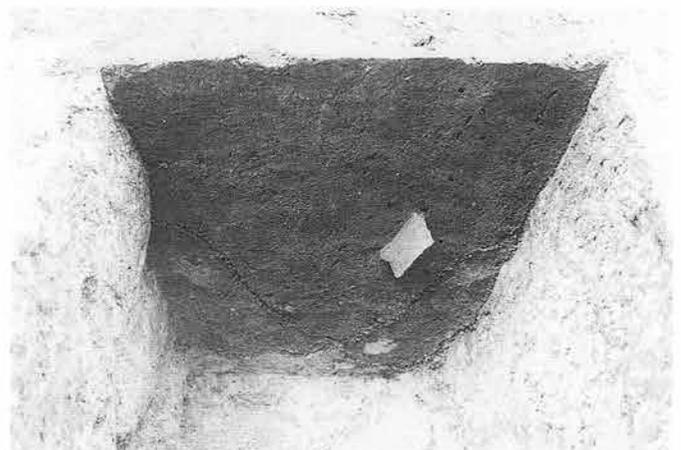
5. 22区3号土坑 (西から)



6. 22区3号土坑セクション (南から)

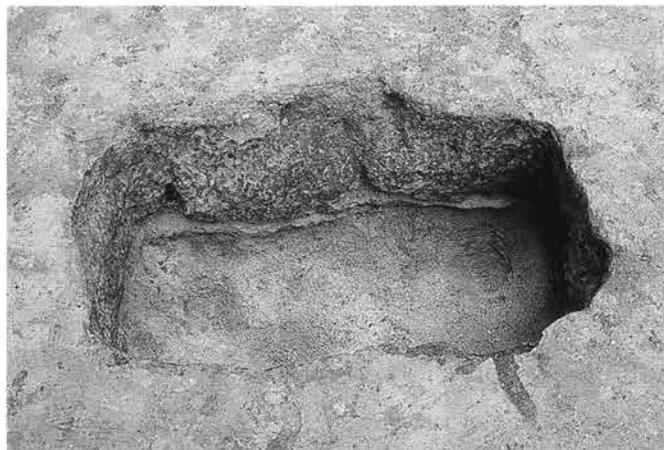


7. 22区9号土坑 (西から)



8. 22区9号土坑セクション (南から)

PL36 上郷A遺跡



1. 22区7号土坑 (南西から)



2. 22区7号土坑セクション (南東から)



3. 22区8号土坑 (南西から)



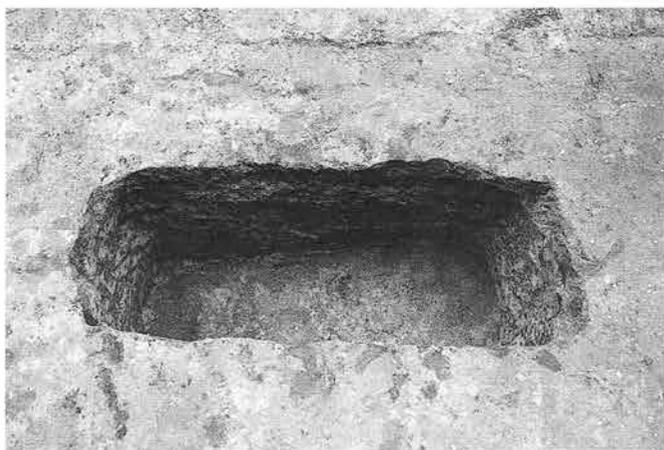
4. 22区8号土坑セクション (東から)



5. 22区6号土坑 (南西から)



6. 22区6号土坑セクション (南東から)



7. 22区10号土坑 (南から)



8. 22区10号土坑セクション (東から)



1. 23区3号土坑 (西から)



2. 23区3号土坑セクション (南から)



3. 23区4号土坑 (西から)



4. 23区4号土坑セクション (南から)



5. 23区6号土坑 (西から)



6. 23区6号土坑セクション (南から)

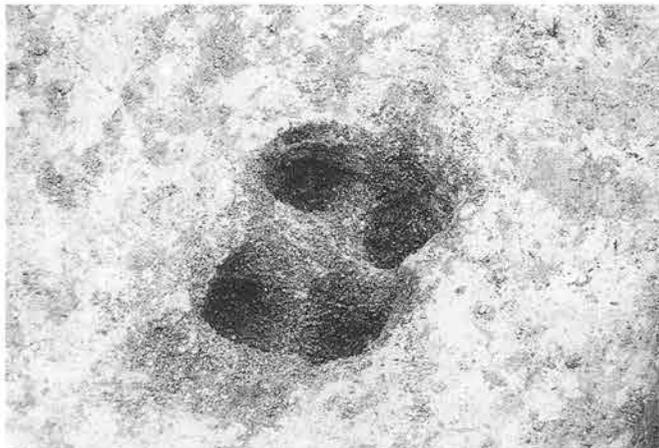


7. 23区7号土坑 (南東から)



8. 23区7号土坑セクション (南西から)

PL38 上郷A遺跡



1. 22区1号土坑逆茂木痕（北から）



2. 22区11号土坑逆茂木痕（南から）



3. 23区9号土坑逆茂木痕（南から）



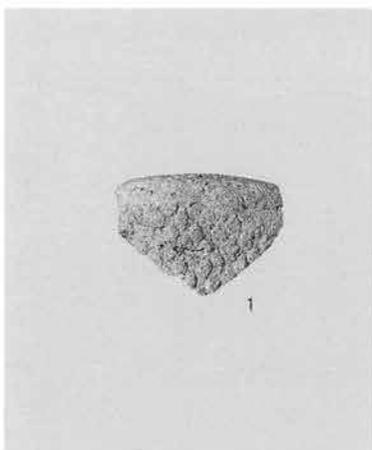
4. 22区16号土坑逆茂木痕（南から）



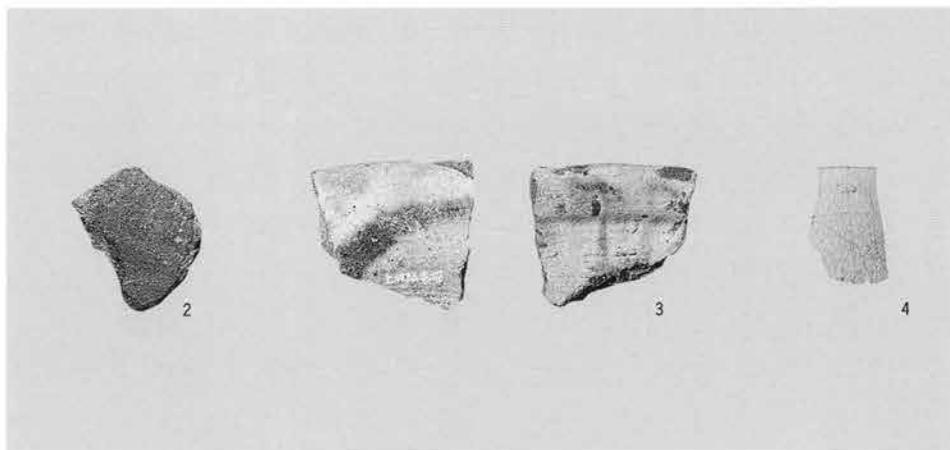
5. 22区9号土坑遺物出土状況（北から）



6. 調査区南側の電流柵（東から）



7. 22区9号土坑出土遺物



8. 遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	くぐどいせきかつこに・なかだなにいせきかつこに・にしのうえいせき・かみごうえーいせき						
書名	久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡						
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第4集						
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書						
シリーズ番号	第349集						
編集者	小野和之 池田政志 石川雅俊 石田真						
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511						
発行年月日	2005年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	事業コード				
くぐどいせき 久々戸遺跡	群馬県吾妻郡長 野原町長野原	10424		36° 32' 28" 138° 39' 14"	20030401～ 20030610	6330㎡	長野原(久々戸)地区護岸工事
なかだな いせき 中棚Ⅱ遺跡	群馬県吾妻郡長 野原町林	10424		36° 32' 21" 138° 40' 12"	20030512～ 20030610	920㎡	下田残土置場整備工事
にしのうえいせき 西ノ上遺跡	群馬県吾妻郡長 野原町川原湯	10424		36° 32' 54" 138° 42' 24"	20020603～ 20020830	1430㎡	千歳橋(仮称)下部(その2)工事
かみごう いせき 上郷A遺跡	群馬県吾妻郡吾 妻町三島	10423		36° 33' 54" 138° 44' 10"	20030607～ 20030630	750㎡	JR吾妻線付け替えに係るハツ場 トンネル土運搬路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
久々戸遺跡	生産	江戸	畑・掘立柱建物・ やっくら・石垣・道	陶磁器・キセル・漆器・建築 部材		天明3年(1783)、浅間山噴火に伴う泥流に よって埋没した畑地景観	
中棚Ⅱ遺跡	生産	江戸	畑・道・ヤックラ	陶磁器・鉄製品・銅製品・須 恵器		天明3年(1783)、浅間山噴火に伴う泥流に よって埋没した畑地景観	
西ノ上遺跡	生産	江戸	畑・道	陶磁器・古銭		天明3年(1783)、浅間山噴火に伴う泥流に よって埋没した畑地景観	
上郷A遺跡	狩猟	縄文～平 安	陥し穴	縄文土器・陶磁器		多様な形状を持つ陥し穴群	

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第349集

久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

平成17年3月24日 印刷

平成17年3月31日 発行

発行／編集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話 0279-52-2511(代表)

URL <http://www.gunmaibun.org>

印刷 松本印刷工業株式会社



ア L=524.00m

イ L=524.00m

ウ L=524.00m

エ L=524.00m

オ L=524.00m

カ L=524.00m

キ L=524.00m

ク L=524.00m

ケ L=524.00m

コ L=524.00m

カ L=524.00m

シ L=524.00m

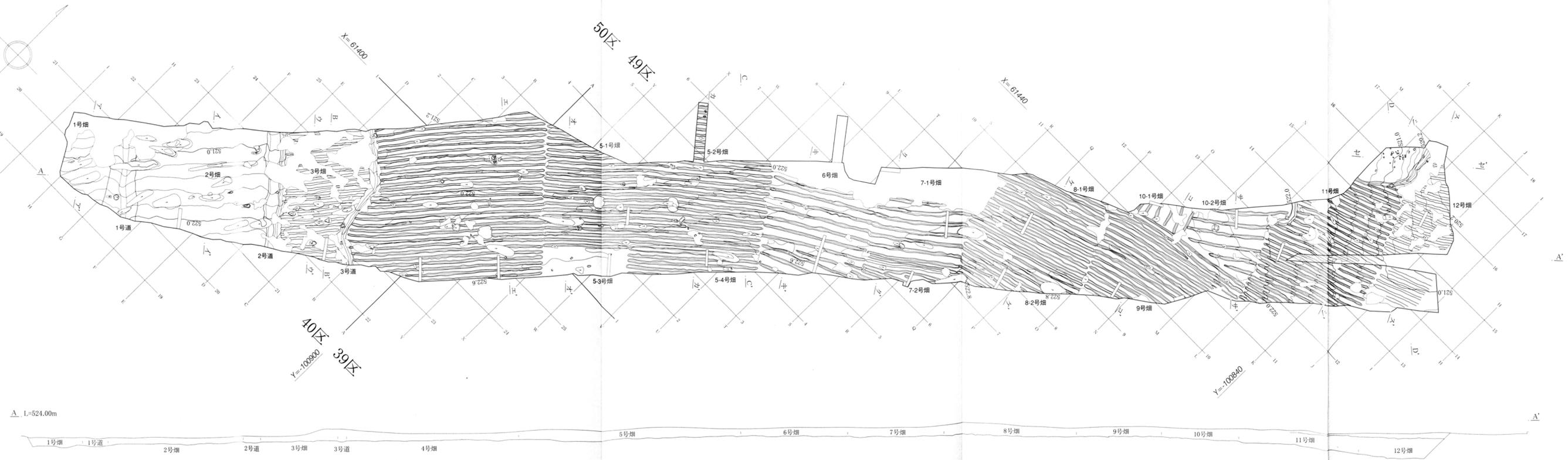
ス L=524.00m

セ L=524.00m

B L=524.00m

C L=524.00m

D L=523.00m



A L=524.00m

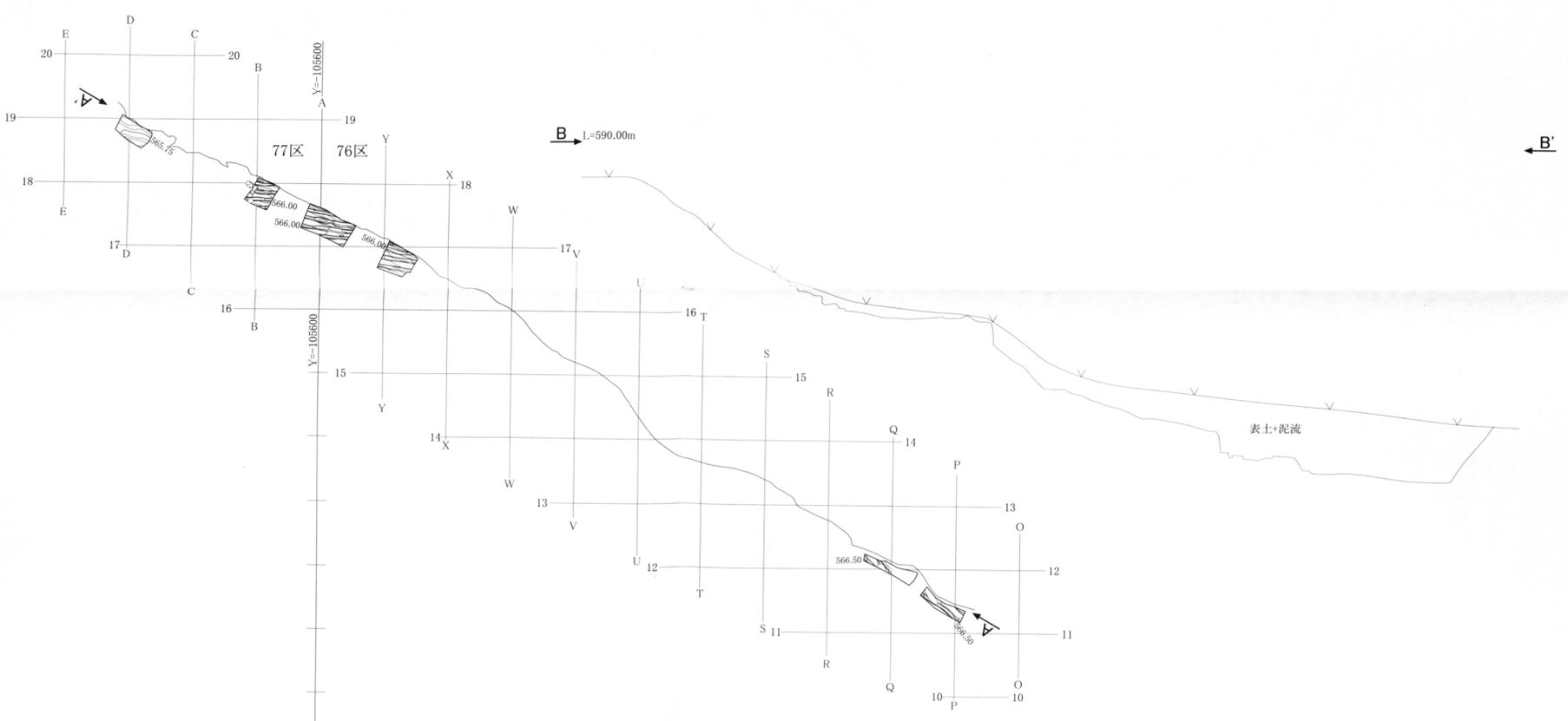
西ノ上遺跡
 (34地区)

0 1:200 10m



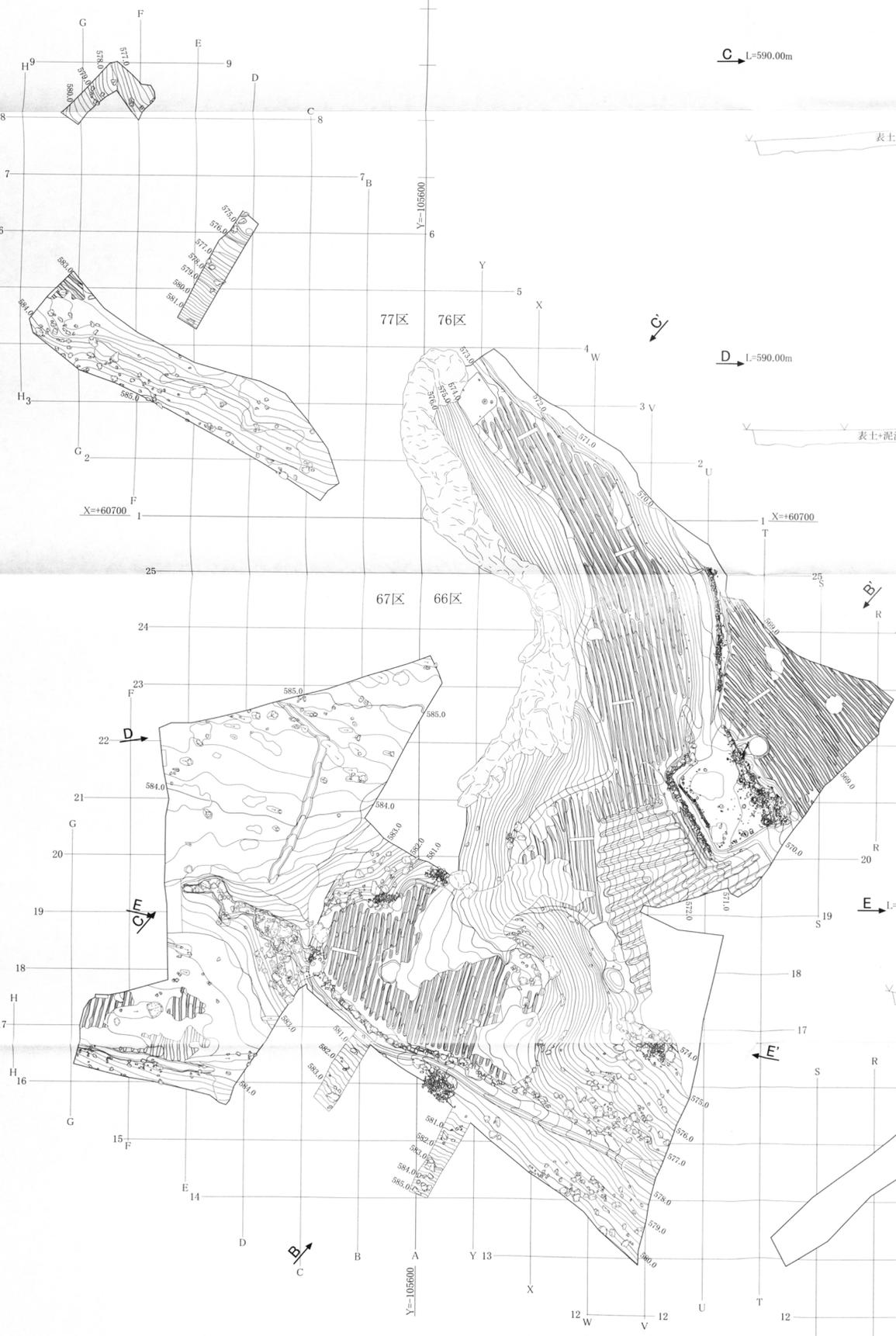
A → L=570.00m

← A'



C → L=590.00m

← C'



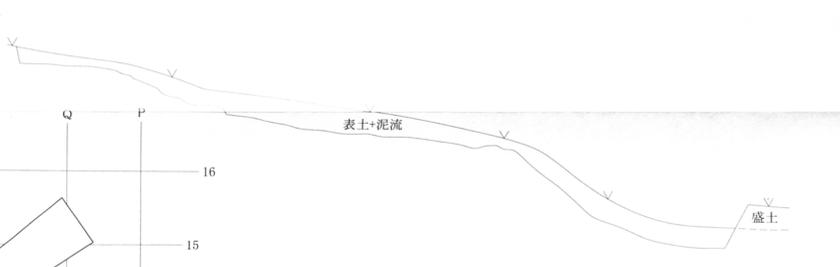
D → L=590.00m

← D'

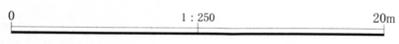


E → L=590.00m

← E'



久々戸遺跡 泥流面



(29地区)

